

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言研究法の探索

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001349

国立国語研究所報告 93

方言研究法の探索

QUERYING DIALECT SURVEY METHODS

1988

国立国語研究所

The National Language Research Institute

刊行のことば

言語変化研究部第一研究室では、昭和56年度（実質的には昭和52年度）以降、「方言研究法に関する基礎的研究」の題目の下に、毎年度テーマを変えて、小規模な実験的調査研究を実施してきました。この研究は、方言調査法、及び、調査結果の処理・分析法に関する基礎的な調査研究を行い、また、今後に発展させるべき研究計画についての小規模な実験的調査研究を実施することを目的としたものです。昭和61年度までの10年間に11のテーマについての調査研究を行いましたが、本書に収めた5篇の論文は、その成果の一部について述べたものです。

それぞれの論文は独立した内容をもっていますが、一連の研究で得られた知見は、いずれも、今後当研究所が行うであろう方言に関する本格的な調査研究に寄与するものと考えられます。

調査には当研究所の7人のほか、加藤和夫氏（当時東京都立大学人文学部助手、現在和洋女子短期大学講師）、渋谷勝己氏（当時大阪大学文学部大学院生、現在同学部助手）、山口幸洋氏（国立国語研究所地方研究員）の3人が参加しました。また、調査に際しては、各地の教育委員会、市役所、役場、公民館、学校、ならびに話者の方がた、そのほか、本文中に記した多くの方があなたのご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

なお、この報告書の執筆には、目次に掲げた5人が当たり、また、概要の英訳には、当研究所非常勤研究員のW. A. グロータース神父の協力を得ました。

昭和63年1月

国立国語研究所長

野元菊雄

目 次

刊行のことば

研 究 の 概 要(佐藤亮一)..... 7

『日本言語地図』の語形の数量的性質(沢木幹栄)..... 15

1. はじめに 15

2. 方 法 15

 2.1 データの入力 16

 2.2 データの誤りの修正 19

 2.3 プログラムの作成とコンピューターによる処理 20

 2.4 パーソナルコンピューターへのデータ・プログラムの移植 21

3. 語形の統計的分布 23

 3.1 孤例と地点数の関係 23

 3.2 孤例を多く産出する地点 28

 3.3 琉球地域の特異性 32

 3.4 問題点 35

4. 今後の見通し 39

5. 研究の分担と謝辞 39

方言意識と方言使用の動態 —中京圏における—

.....(真田信治)..... 41

1. はじめに—研究の目的 41

2. 調査について 42

3. 方言意識の様相 43

 3.1 所属意識(「東」か「西」か) 43

目 次 3

3.2 土地ことばについての意識.....	45
3.3 ことばの変化についての意識.....	46
3.4 各地方言のイメージ.....	46
4. 方言変容の状況	51
5. まとめ.....	79
特殊方言音の地域差・年齢差(飯豊毅一).....81	
1. はじめに	81
2. 調査の概要.....	84
2.1 調査の目的	84
2.2 調査法.....	84
2.2.1 準備調査	84
2.2.2 調査の規模	88
2.2.3 調査項目.....	89
3. 結果	91
3.1 /ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/ と語の種類	91
3.1.1 現れにくい語	91
3.1.2 現れやすい語	96
3.1.3 まとめ	97
3.2 /ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/ と地域差	98
3.3 /ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/ と年代差	104
3.4 /ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/ と個人差	108
3.5 調査員による差	116
4. まとめ	120
福井市およびその周辺地域におけるアクセントの 年齢差、個人差、調査法による差(佐藤亮一).... 123	
1. 調査の目的・方法	123
1.1 調査の動機と目的.....	123
1.2 調査の内容 (第1回調査について)	125

1.3 調査結果の数量化	134
2. 福井市周辺のアクセント	146
2.1 三国町の高年層のアクセント	146
2.2 松岡町の高年層のアクセント	156
2.3 坂井町の高年層のアクセント	161
3. 福井市のアクセント（第1回調査について）	168
3.1 高年層のアクセント	168
3.2 中年層のアクセント	182
3.3 若年層のアクセント	188
4. 福井市のアクセント（第2回調査について）	202
4.1 調査の内容	202
4.2 「単語言い切り」におけるアクセント	204
4.3 文節および3拍名詞のアクセント	211
5. 結章	212
5.1 結論	212
5.2 今後の課題	215

通信調査法の再評価	(小林 隆)	221
1. 目的	221	
2. 津山調査	222	
2.1 津山通信調査の概要	222	
2.1.1 目的	222	
2.1.2 調査方式の種類	223	
2.1.3 調査票・依頼状	224	
2.1.4 調査地域	229	
2.1.5 回答者	230	
2.1.6 調査時期	230	
2.1.7 調査項目	231	
2.2 津山面接調査の概要	234	

目 次 5

2.2.1 目 的	234
2.2.2 インフォーマント・調査地域	235
2.2.3 調査時期・調査員	235
2.2.4 調査項目	236
2.2.5 調査方式	236
2.3 結果と考察	237
2.3.1 回収率	237
2.3.2 回答率	240
2.3.3 俚言形の回答率	244
2.3.4 項目別考察	252
2.4 まとめ	279
3. 岡山県調査	280
3.1 岡山県通信調査の概要	280
3.1.1 目的	280
3.1.2 調査方式	280
3.1.3 回答者の条件・調査地域・調査時期	283
3.2 結果と考察	284
3.2.1 回収率	284
3.2.2 実際の回答者	285
3.2.3 回答地点の分布	288
3.2.4 方言分布	289
3.3 まとめ	292
4. むすび	293
付1. 方言分布図	298
付2. 調査票	322
英文要旨	341
図表目次	345

CONTENTS

Introduction

1.	The Quantitative Nature of the Forms in the Linguistic Atlas of Japan	15
2.	Dialect Changes and Value Judgment: Nagoya City between East and West Japan	41
3.	The Influence of Age and Locality on Dialectal Phonetics (South Yamagata)	81
4.	The Accent System of Fukui City and its Suburbs—With Special Reference to the Survey Methods, Age and Individual Differences	123
5.	A Re-assessment of the Correspondence Method	221
	Summary	341
	Figures	345

研究の概要

言語変化研究部第一研究室では、昭和52年度および、同53年度に、当研究室の主要なテーマである「方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究」の中で、「実験的調査」と称する小調査を実施した。これは、上記の研究に関連させて小規模な検証的調査を行い、あわせて、将来発展させるべき研究課題の芽を見出そうとするものであった。昭和54年度からは、上記の研究テーマの中の柱の一つとして「方言研究法に関する基礎的研究」を立て、「方言調査法および調査結果の処理・分析法に関する基礎的な調査研究を行う」ことが目的であることをうたった。さらに、昭和56年度からはこの研究題目が独立し、「方言調査法、及び、調査結果の処理・分析法に関する基礎的な調査研究を行い、また、今後に発展させるべき研究研画についての小規模な実験的調査研究を実施する」ことを目的とした。

すなわち、この研究は、将来の主要なテーマとして独立させうる研究の方向を模索するとともに、その際に用いるべき新たな調査法ならびに結果の処理・分析法を開発しようとするものである。

なお、本研究は毎年テーマを変えて行ったが、そのテーマごとに主たる担当者が研究を企画し、室員が共同で調査を実施するという方法を採った。

昭和52年度以降の研究の概要を以下に記す。

昭和52年度：八丈島における方言の地域差・世代差・場面差（沢木幹栄担当）

現代の八丈島（東京都八丈町）において、標準語と方言が場面（対者）によってどのように使い分けられているか、その実態を世代別、あるいは、地区別に見ることを目的としたものである。三根・大賀郷・樅立・中之郷・末吉の各地区で、祖父・父・息子の3世代が健在な家族、各地区あたり5家族15人（八丈島全体で計75人）を話者に選び、音韻・語彙・および文法を中心とする計60項目のそれぞれについて、「祖父」「父」「息子」「孫」（のうちのい

ずれか2者), および, 「島出身の先生」「東京(都区内)から来た初対面の人」と話すときに使用する語形・表現についてたずねた(この結果は『方言の諸相』1985の中で報告した)。

昭和53年度：散村地域における言語地理学的研究（真田信治担当）

富山県砺波市周辺の平野部（個々の「家」が、集落を構成せず、平野部一帯に点在している、いわゆる散村地域）における言語分布の様相を把握することを目的として、文法項目を含む65項目について言語地理学的調査を行ったものである。調査した地点は60の小字である。また、この地域内の砺波市油田地区を限定して、この地区内に存在する「家」ごとに、ことばがどう使い分けられているか（いたか）を、主として親族名称を対象として調査した。調査したのは約150世帯（通信調査分も含む）である。

昭和54年度：方言音韻の録音資料を作成するための基礎的研究（佐藤亮一担当）

衰退しつつある各地の方言音韻の特色を録音資料として保存するための方法論に関する基礎的研究である。調査地区として、新潟県佐渡島の畠野町宮川および同町小倉、ならびに同県長岡市栖吉町の計3地点を選び、オ段長音の開合の区別についての実験的調査および録音を行った。3地点計49名の話者について予備的調査を行ったうえで、畠野町小倉・長岡市栖吉町の2地区から各2名の話者を選んで、種々の音韻的環境における開合の区別にかかる単語（約170語）を、「なぞなぞ式」「カード読み上げ式」その他の方法によって発音してもらい、録音した。また、その一部を8ミリ映画（同時録音）およびスティール写真に記録した。

昭和55年度：本年度は次の二つのテーマについて調査研究を行った。

- (1) 方言資料の電算機処理に関する基礎的研究（沢木幹栄担当）
- (2) 音韻的特徴の地域差・年齢差・場面差——山形県鼠ヶ関地区におけるカ行子音を中心として——（飯豊毅一担当）

(1)は言語地図の自動作図と計量的分析を目標とする基礎的研究である。本年度はその準備的研究として、『日本言語地図』の資料（「とさか」「まぶしい」の2項目、それぞれ2,400地点分）および「方言における音韻・文法の諸特徴

についての全国的調査研究」の準備調査による資料（6項目，75地点分）をパンチカード化した。この研究は、その後、文部省科学研究費補助金による研究（研究題目は同じ）に発展した。これらの研究の成果は本書に収録したほか、科学研究費報告書にもその一部を発表した。

（2）の結果も本書に収録した（その概要は後述）。

昭和56年度：地域社会における都市言語の評価意識の研究——名古屋圏の周辺を対象として——（真田信治担当）

調査結果の報告を本書に収録した（概要は後述）。

昭和57年度：無型アクセント地域におけるアクセントの年齢差——福井市、及びその周辺地域を対象として——（佐藤亮一担当）

調査結果の報告を本書に収録した（概要は後述）。

昭和58年度：文法的カテゴリーに関する全数調査（沢木幹栄担当）

この研究は、特定の文法的カテゴリーを保持しているかいないかということに関する個人差を見ることを主眼としたものである。具体的には、津軽方言の領域である青森県五所川原市飯詰地区を選び、高校生以上の全成員を対象とする調査を行った（実際には65名を調査することができた）。調査項目は疑問詞疑問と単純疑問に関するものが30項目、能力可能と状況可能に関するものが19項目である。その内容（ねらい）は、津軽方言で行われている疑問詞疑問（文中に疑問詞を持つ疑問表現）と単純疑問（単純に yes か no かだけをたずねる疑問表現）の区別、及び、能力可能と状況可能の区別が個人個人でどのように行われているかを見るものであった。

昭和59年度：通信調査法の有効性と限界（小林隆担当）

調査結果の報告を本書に収録した（概要は後述）。

昭和60年度：方言アクセントの社会言語地理学的研究（佐藤亮一担当）

この研究のねらいは、語アクセントの地理的分布に大きな差違が認められる地域において、各年齢層を対象としたアクセント調査を実施し、アクセントの地理的变化と時代的变化の運動して現れる様相を明らかにすることにある。調査地域として、新潟県佐渡郡（佐渡島）の相川町から佐和田町を経て金井町に至る直線上の20地点を対象とし、各地点とも、中学生、18歳～25

歳、30歳台、40歳台、50歳台、60～79歳の各年齢層の者一人ずつをインフォーマントとすることを目標として調査を行った（実際に調査することができたのは、20地点合計119名であった）。調査語は、1拍～3拍名詞、2拍～4拍動詞、3拍形容詞を中心とし、準備調査では約600、本調査では約200の単語について調査した。

昭和61年度：方言談話の研究（沢木幹栄担当）

国立国語研究所で刊行した『方言談話資料』（既刊分全8巻）を用い、方言談話の構成の地域差等に関する研究を行ったものである。

以上に記したように、昭和52年度以降、合計11のテーマについて実験的調査を行い、そのうちの1つについてはすでに報告を行った（そのほか、昭和55年度の(1)、同57年度、同59年度のテーマに関しては中間報告を行っている）。本書は上記のテーマのうちの5つについての報告である。

以下に、本書に収録した5篇の論文の概要を述べる。

沢木幹栄「『日本言語地図』の語形の数量的性質」（昭和55年度のテーマについての報告）は、コンピューターに入力した『日本言語地図』45項目のデータを用い、言語地図に見られる語形（見出し語形）の出現地点数の分布について統計的な考察を行ったものである。先行研究としては、徳川宗賢「言語地図における孤例」（『ことばの研究』4、1974）があるが、沢木の研究はより多くの項目について、コンピュータを用いて精密な分析を行ったところに意味がある。結果として、1) 使用地点数と語形数との間に一定の関係があること、2) 孤例を地点や地域の特性を知る手がかりにし得ること、の二点が明らかになった。

真田信治「方言意識と方言使用の動態——中京圏における——」（昭和56年度のテーマについての報告）は、方言変容の将来の姿を予測するための方法として、方言意識の研究を実験的に行なったものである。具体的には、東西両方言の境界地帯に位置する中京地区から三重県桑名市、三重県桑名郡長島町、名古屋市、愛知県知立市の4地区を選び、各地区とも、高年層男女8名、若年層（中学生）男女8名を対象として、語彙、音声、アクセント、方言意識に関する51の項目について調査を行なった。結果として、1) この地方では、

東日本のことば（具体的には東京のことば）に対する評価が極めて高い。2) 東京語はまず、この地方の中心都市名古屋にくいこみ、名古屋市をセンターとして周辺部、特に西方へ勢力をひろげつつある。3) 東西方言の境界線がしだいに西の方へ移行している、などの状況が明らかになった。

飯豊毅一「特殊方言音の地域差・年齢差」（昭和55年度のテーマについての報告）は、山形県鼠が関地区に見られる方言音韻の特徴に関して、地域差と年齢差、さらに、場面差、調査法による差、調査者による差などの実態を明らかにするための実験的調査を行ったものである。具体的には、山形県西田川郡温海町の戸沢・温海・鼠が関の3地区で、各地区とも、70歳台男女10名、40歳台男女10名、10歳台男女4名を対象に、70の項目について調査を行った。その結果、この方言音は大勢としてはしだいに衰微しつつあり、また、新語や外来語には現れないが、戸沢地区では逆に拡大の傾向が認められ、新語の中にも現れる場合があることなどが明らかになった。

佐藤亮一「福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差、個人差、調査法による差」（昭和57年度のテーマについての報告）は、これまでに無型アクセントと言われてきた福井市内において、高年層は多型ア、中年層は無型ア、若年層は東京ア化というアクセントの年齢差が存在するのではないかという仮説の下に調査を行い、あわせて福井市周辺の数地域における高年層のアクセントについても調査を行ったものである。具体的には、福井市内では中学生20名、その親の世代16名、中学生の祖父母の世代26名、福井市周辺地域では、坂井郡三国町、同郡坂井町、吉田郡松岡町などの高年層話者数名を対象に、種々の調査方式（「単語言い切り」「標準語文読み上げ」「比較発音」「なぞなぞ式」「方言的発話」など）による調査を試みた。その結果、1) 福井市内の高年層話者の中には、無型アの者、三国式アの者、その中間的な姿を示す者などさまざまの段階の者が存在し、個人差が著しい。また、同一の話者が調査方式を変えることによって無型ア的な姿を示したり、多型ア的な姿を示したりする。2) 福井市内の中年層話者の大部分は無型アである。3) 福井市内の若年層の話者の中には、無型アの者と、東京ア的な姿を示す者とが存在する。また、東京アの傾向を示した者は、（調査したかぎりでは）すべ

て女性であり、男女差が著しい。4)これまで無型ア地域とされていた松岡町の高年層話者の中にも三国式アクセントを持つ者が存在する。5)調査方式による違いについては、全体的に見て、「短文」(標準語文)の形で調査したときよりも、「単語言い切り」の形で調査したときの方が、より多型ア(三国式ア)的な姿を示すこと、「比較発音」は他の方式に比べて型の区別を引き出しがちのこと、調査語の配列に関しては、「異類混合配列」の方が「同音連続配列」よりも音相が安定し、より明瞭な型の対立を示すこと、などの事実が明らかにされた。

小林隆「通信調査法の再評価」(昭和59年度のテーマについての報告)は、俚言の衰退が急速に進む今日、方言の史的変遷を明らかにするという伝統的な方言地理学的研究を継続していくために、全国的に緊急、かつ大規模な調査が必要であり、そのためには、従来面接調査に比べて信頼性が低いものとみなされてきた通信調査法の利点(広い領域を短期間に、しかも少ない費用で調査できるという利点)を見直すべきであるという認識の下に、通信調査法の有効性と限界を検証したものである。具体的には、1)岡山県津山市の高年層664人を対象とする、質問法の異なる種々の調査票と複数の郵便形式(封書・葉書)を用いた通信調査、2)岡山県全域の市町村役場、中学校、郵便局、合計373機関を対象とする通信調査、3)津山市の通信調査で回答を寄せた人々の中から抽出した70人を対象とする面接調査を行い、それぞれの回答率、回答内容に検討を加えた。その結果、1)従来の常識どおり、通信調査法は、試みにいざれの方式によっても面接調査に及ばないが、それも程度の問題であって、当初の予想に反して、俚言の把握は通信調査法でもかなりの程度可能であること。2)調査の1)からは、各種の通信調査票の中で、冊子形式をとり、謎々で尋ね、参考語形を挙げる方式が、回収率や俚言の回答率などからみて最も有効であること。3)調査の2)に関しては、協力機関の種類によって多少の差があるが、ほぼ6割から7割の回収率を得、回収率に関しては良好な成績をあげうる見通しを得たこと、4)協力機関の職場内部から求めた回答者は俚言の採集にとってはやや年齢が若すぎるが、職場外に高齢の回答者を探してもらった場合には、ほぼ条件に合う適当な回答者が得られるこ

と、5)通信調査法によって把握した方言分布にはいくつかの問題も存在するものの、概して面接調査によるものとよく一致すること、などの点が明らかになった。

以上、研究の概要を述べたが、これらの調査研究によって得た知見は、今後当研究所が行うであろう方言に関する大規模な調査研究の中に生かしていくたい。本書にとりあげなかった諸テーマに関しては、別の機会に報告する予定である。

なお、「方言研究法に関する基礎的研究」は、昭和61年度をもって終了させることにした。これまで行つたいくつの探索的研究を通じて、今後の研究課題やその方法についての一応の見通しが得られたと考えたからである。

62年度からは新たな研究課題「方言分布の歴史的解釈に関する研究」がスタートしたが、この中では、先の研究に基づいた通信調査法が、俚言収集の主要な手段として用いられる。

本書の執筆者は次のとおりである（掲載順）

沢木 幹栄（言語変化研究部第一研究室主任研究官）

真田 信治（大阪大学文学部助教授。元言語変化研究部第一研究室研究員）

飯豊 育一（昭和女子大学教授。元言語変化研究部長）

佐藤 亮一（言語変化研究部第一研究室長）

小林 隆（言語変化研究所部第一研究室研究員）

なお、調査を担当した者は、上記のほか、下記の5名である。

加藤 和夫（和洋女子短期大学講師。調査当時東京都立大学人文学部助手）

渋谷 勝己（大阪大学文学部助手。調査当時同学部大学院生）

白沢 宏枝（言語変化研究部第一研究室研究員）

高田 正治（言語行動研究部第三研究室主任研究官）

山口 幸洋（国立国語研究所地方研究員）

調査結果の整理については、白沢宏枝のほか、アルバイターとして河西秀早子の助力を得た。

なお、本書の執筆に際して、昭和62年3月に原稿読み合わせ会を開き、内容についての検討を行った。

調査に際しては各地の教育委員会、市役所、役場、公民館、学校、ならびに話者の方がた、そのほか、本文中に記した多くの方がたの協力を得た。厚く御礼申し上げる次第である。

(佐藤亮一執筆)

『日本言語地図』の語形の数量的性質

沢木幹栄

1. はじめに

言語地図はいうまでもなく、方言語形の地理的分布を知るためのものである。しかし、言語地図に現れた方言語形を統計的な量として測ることができれば、その統計的な性質には興味深いものがあろう。統計的側面からの研究にはそれ自体の価値もあるし、また、統計的な性質が分かることによって、地理的分布について我々が今まで知らなかったことが分かるようになる可能性もある。文献1、2の徳川宗賢の孤例の研究は、主題は「言語地図における孤例」だったが、孤例を支えるものとして語形の出現地点数と語形数の関係にふれるなど、語形の統計的性質について大きく踏み込んだものだった。以後、10年以上にわたって追隨する研究は現れていない。文献2で問題点が全くされていると考えられたからだろうか。実際には、言語地図の語形の統計的性質についてはまだ分かっていないことが多い、新たな展開の余地は大きい。

科学研究費「電子計算機による方言研究資料の作成及び分析」による研究の一環としてこの分野の研究を行うことは十分に意味のあることと考えられた。元来、数えることはコンピューターの最も得意とするところである。

2. 方 法

この章では、データをコンピューターで処理するために、どのような作業を行なったか、その詳細について述べたい。また、最近になって同じデータ

をパーソナルコンピューターで処理できる見通しがついてきたのでそのことについてもふれたい。

新しい方法や研究分野について述べるという本報告書の性格からも、このような具体的な方法、悪く言えば研究の泥臭い部分についての報告は意味のあることと考える。また、日本では未開拓の分野である言語地図の計量的研究を目指す人々を益することにもなる。もちろん、結果だけが分かればいいという読者の方はこの1節は読み飛ばして下さっても結構である。

2.1 データの入力

まず、『日本言語地図』(以下、LAJと略して呼ぶ)の第3巻のすべての項目をデータとして入力することを計画した。第3巻を選んだのは、1つの調査項目を2枚の地図に分割したものや、意味の地図が少ないと、第1巻や、第2巻と違って語彙項目だけで占められているなどの理由による。

現在、実際に利用できるのは45項目分である。

以下に内訳を示す。○の意味は後述するが、数字はLAJの地図番号である。

- 101. あたま (頭)
- 102. つむじ (旋毛)
- 103. はげあたま (禿げ頭)
- 104. はげる (禿げる)
- 105. ふけ (雲脂)
- 106. かお (顔)
- 107. ほほ (頬)
- 108. あご (顎) 一とがった部分
- 109. あご (顎) 一全体
- 110. め (目)
- 111. まゆげ (眉毛)
- 112. ものもらい (麦粒腫)
- 113. はな (鼻)
- 114. みみ (耳)

115. くち (口)
- 116. くちびる (唇)
- 117. した (舌)
- 118. つば (唾)
- 119. よだれ (涎)
- 121. おやゆび (親指)
- 122. ひとさしゆび (人指し指)
- 123. なかゆび (中指)
- 124. くすりゆび (薬指)
- 125. こゆび (小指)
- 127. しもやけ (凍傷)
128. くるぶし (踝)
- 129. かかと (踵)
130. みずおち (鳩尾)
131. あか (垢)
132. あざ (痣)
- 133. ほくろ (黒子) ー小さいもの
134. ほくろ (黒子) ー大きいもの
136. おとこ (男)
- 137. おんな (女)
138. おんな (女) ー卑称
139. ひまご (曾孫)
140. やしゃご (玄孫)
141. おじいさん (祖父)
142. ひいおじいさん (曾祖父)
- 143. たこ (廻)
- 144. たけうま (竹馬)
- 145. おてだま (お手玉)
- 147. おにごっこ (鬼ごっこ)

○148. かくれんぼ（隠れん坊）

○149.150. かたぐるま（肩車） （2枚の地図をあわせて、1項目として扱った）

第3巻は全部で50枚の地図があるがそのうちの何枚かは、総合図であったりするから、ほとんどすべてと言っていいと思う。

次にコード入力の具体的手順について述べる。

LAJのもとになっているカードには地点番号と、その地点での回答語形および語形に関する情報が記されている。入力に際しては、このカードをもとに、語形と情報をコード化することにした。語形コードは地図の見出し語形と一致している。すなわち、地図上で同じ記号を与えられた語形はコンピューターのデータでも同じコードを与えられている。簡単に言えば、コードを与えるのに際して全く新たに分類しなおしたりはしなかった。例外は地図で「その他」に分類された語形で、この場合は入力のときに原カードを参照して、違う語形には違うコードを与えることにした。また、地図に記載されなかつた語形も復活させている。LAJでは共通語形と方言語形の併用の地点で、共通語形に「新しい」「上品」「共通語」「稀」などの注があったとき、方言語形のみを記載する（併用処理）ようになっているが、共通語形も回答語形であることには変わらないので、データとして探っておくことにしたのである。このようにするとコンピューターで文献3のような研究をすることも可能になる。文献3では併用処理された語形を考慮にいれていないので、それよりはより正確な数字が得されることになる。

1地点の2項目分の情報は1レコード（コンピューターでデータを扱うときの最小単位）に収めることにした。ここでは1レコードは80ヶタに設定してある。このなかに、地点番号も、調査項目を表すコードも書き込むことにした。

語形・情報コードについてもう少し補足する。語形コードは3ヶタでできている。最初の1ヶタは語形のグループ分けを示す。たとえば、「しもやけ」の地図を例にとると、シモヤケの類の記号は青で、ユキヤケの類は赤で描かれている。語形コードの最初の1ヶタはこのような色で示されるグループに

対応する。次の2ケタはそのグループのなかの何番目かということを示すわけだ。

また、語形に関して、古い、新しい、丁寧、ぞんざいなどの情報が原カードに記入されていることがある。これらの情報は言語地図上に表されていないことが多いが、あととの利用も考えて、コード化しておくことにした。コード化は「古い」をO、「少ない」をMのように1つの情報を1文字で表すことを原則とした。語形情報のためにとてあるのは4ケタであるので、4種類の情報を同時に持つことができるうことになる。語形・情報コードをあわせると1つの語形に対して7ケタが割り当てられるが、1項目分の情報を35ケタで表すことにしたので、5併用までは1つのレコードに収まることになる。

レコードのなかではケタの位置が大きな意味を持っており、語形コード、地点番号などが始まるケタの位置はすべて決まっている。たとえば、第1答の語形コードは1ケタ目から始まるが、第2答は8ケタ目という具合である。このようにすると、修正をしやすいなどの利点がある。

なお、以下に述べる結果は、特に断らない場合は45項目すべてではなく、そのなかの27項目から得られたものである。LAJの第1巻で述べられている通り、LAJでは項目によって地点数にばらつきがある。逆に言うと、45項目すべてを調査した地点もあれば、27項目しかない地点もある。45項目のデータで地点ごとの孤例の数を調べると、調査項目の多い地点のほうが孤例が出やすいということになる。すべての地点の条件を同じにするために、45項目のなかから、総地点数である2,400に近い地点数のものをえらんだ結果、27項目が残ったというわけだ。コード入力をした項目のリストのなかで左側に○がついているものがそれである。

データの総量は45項目で5Mバイト、28項目で3.8Mバイトだった。

2.2 データの誤りの修正

入力したデータには誤りがあるのが普通である。誤りは多くの場合、人間の関与しているところで発生する。今回の場合は、1. アルバイターのコーディングシートへの記入の際のミス。2. パンチャーのパンチミスの2つが

考えられる。このどちらの場合も、誤りを完全にチェックするには原資料となつたLAJのカードにさかのばってパンチされたデータとの照合を行うほかないのだが、それは時間や費用の点で不可能なので、いわゆる「文法チェック」を行うことにした。これは、コーディングの規則に外れたものをコンピューターを使って発見するものである。たとえば、数字しか期待されないケタで数字以外の文字が使われていればなんらかのミスであると考えられるし、語形コードの1ケタ目と3ケタ目に字が入っているのに、2ケタ目が空白であれば、これもおかしいことになる。1つのレコードのなかで、どのケタを何に割り当てるか決めておいたことが、このような形で役に立っている。

また、地点番号として全データのなかで一回しか出てこないものがあれば、これも何らかのミスということになろう。

この「文法チェック」にひっかかるミスが全体のうちどれくらいの比率を占めるのかは、よくわからない。ミスのなかには、A 0 1をA 0 2と書き誤ったというような完全にコーディングの規則に適合しているものもあり、それはこのチェックでは見つからないのである。非常におおざっぱに言って、1項目について1箇所はこのようなミスがあると考えたほうが安全であろう。理想を言えば、データに誤りがあってはいけないのだが、この程度の数であれば、第3節で述べる結果に大きく影響を及ぼすことはないだろう。

データの修正は1年次はPLIで組んだプログラムで行い、計算機の入れ替えが行われた2年次はLANFILEを用いて行なった。このLANFILEは国語研究所の大型計算機であるACOS 550の端末に付属したソフトウェアで、フロッピー上のデータを修正するのに便利な機能を持っている。修正の際にはハードディスク上のデータをフロッピーに移し、修正後にフロッピーからハードディスクに戻すという手間をかけた。

2.3 プログラムの作成とコンピューターによる処理

データの分析のためのプログラムは、前述のACOS 550で動く。プログラムの言語はPLIで、プログラムの総数は数十にものぼるが、それぞれのアルゴリズムなどについて特に述べることはない。プログラムの実行時間（ユー

ザーの待ち時間)は長いものでコンパイル・リンクの時間を含めて5分程度である。TSS(1台の計算機を多数の端末から同時に使うシステム)なのでセンターの混み具合によってこれより速くなったり、遅くなったりすることはあるが、実行時間のことでの不満を感じたことはない。

2.4 パーソナルコンピューターへのデータ・プログラムの移植

大型計算機でデータを扱うのは快適であるが、ときとして不便を感じないこともない。また、研究者のなかには大型を使う機会に恵まれない人もいる。最近ではパーソナルコンピューターが普及してきたので、これを大型の代わりに使うことができれば好都合だ。

パーソナルコンピューター、略してパソコンと大型計算機の一番大きな違いは扱えるデータの大きさである。研究所のACOS 550ではハードディスクが接続してあって、これには7G(ギガと読む。MはKの1,000倍。Gは更にその1,000倍)バイトの容量がある。今回のデータは数M程度の大きさだが、これをもし、フロッピーディスクで持つと数枚分になる。これは、プログラムの実行中に何度もフロッピーの差しかえをしなくてはならないということを意味する。もちろん、パソコンでハードディスクが使えば数M程度のデータでもそのまま収容することができるのだが、現状ではハードディスクを持っていない人のほうが一般的である。そこで、すこしでも扱いを容易にするためにデータの圧縮をし、IBMフォーマット(大型計算機のデータは普通このフォーマット)からパソコンのMSDOSフォーマットに移すこととした。

データの圧縮・変換には次のような方法をとった。

- a. 空白が連続している部分が多いので、それを2バイトで表す。すなわち、空白を表すコードと空白の数を表すコードである。
- b. EBCDICとJISでは、コードの体系がまったく異なる。そこで、語形および、情報はJISコードに変換した。
- c. 地点番号のために6バイト使っているが、実際には地点番号は2,400種類しかないため、地点番号のために別に表を用意しておけば、2バイトですむことになる。

- d. 1つのレコードに2つの項目のデータが入っていたのを改めて、1つのレコードにはひとつの項目のデータしかいれないことにする。また、ある項目のデータが全地点分出たあとで、新たな項目が始まるようにデータをきれいに分離する。
- e. このようにすると、今まで固定長だったレコードが、可変長になるが、このような場合、MSDOSでは、レコードの終わりに「改行」「復帰」コードをつけることになっているので、そのようにした。
- f. ファイルの終わりを示すコードをファイルの最後に付けた。
- g. 以上の操作を行ったデータをIBMフロッピーに書き込みそれを市販のデータ変換ソフトを用いてMSDOSのフロッピーに移した。

このようにして圧縮を行った結果、3.8Mのファイルは0.7Mにまで小さくなった。MSDOSではフロッピー1枚の容量は1.2M(3.5インチHDの場合)があるので、これは27項目分のデータが樂々1枚に収まるということを意味している。また、データの大きさが5分の1になったことで、フロッピーを読む時間が激減することも期待できる。

もうひとつ心配だったのは処理速度の差である。まず、パソコンのフロッピーを読む速度は大型計算機がハードディスクからデータを読むのに比べてずっと遅い。また、圧縮したデータを使うときは必ず圧縮前の状態に戻さなくてはならない。しかもこの作業をレコードを1つ読むたびにするのである。この、圧縮したデータをもとに戻すような作業—いわゆる内部処理—の速度においてもパソコンはACOSに比べずっと遅い。

そこで、大型計算機のプログラムをパソコンに移しかえて、実行時間ToStringにした。使用したプログラムは、3節で述べる「孤例を多く産出する地点」を捜すためのものである。原形となったプログラムはPLIで書いたものだが、パソコンではPASCALに書きかえた。実行に數十分はかかるだろうと予測したのだが、驚いたことに、4分45秒(機種PC98LT、使用言語TURBO PASCAL、BUFFERS=99)で終了した。この数字は大型計算機をTSSで使用したときに比べてもまあまあ我慢できる程度のものである。この程度の大きさのファイルを順次読んでいくような処理であれば、パソコンでも十分使

いものになることを証明できたと思う。もちろん、このように圧縮したデータは可変長であるためランダムアクセスがきかないし、修正も面倒である。しかし、このような限界を承知してさえいれば、つねに研究者のそばにあるというパソコンの長所は何物にも代えがたいと思うのである。

3. 語形の統計的分布

以下に、コンピューターを使った分析の結果を述べる。

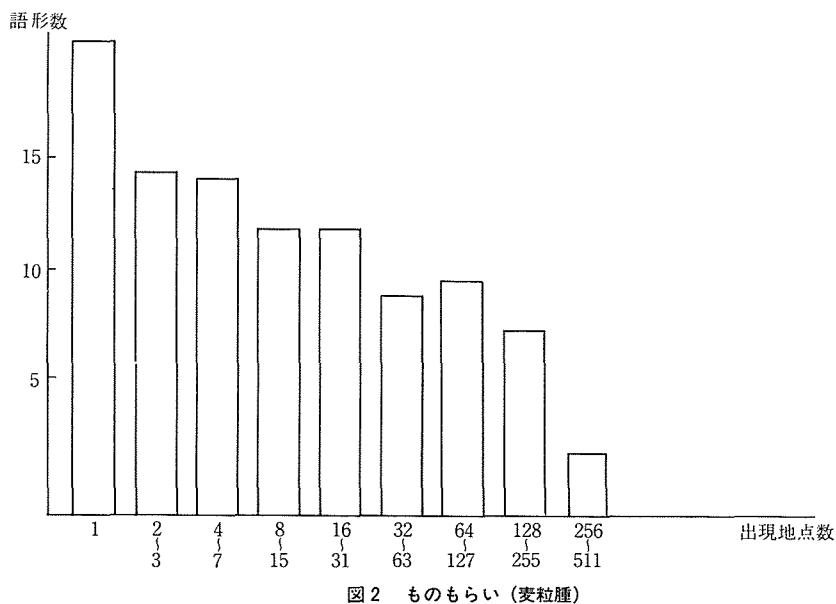
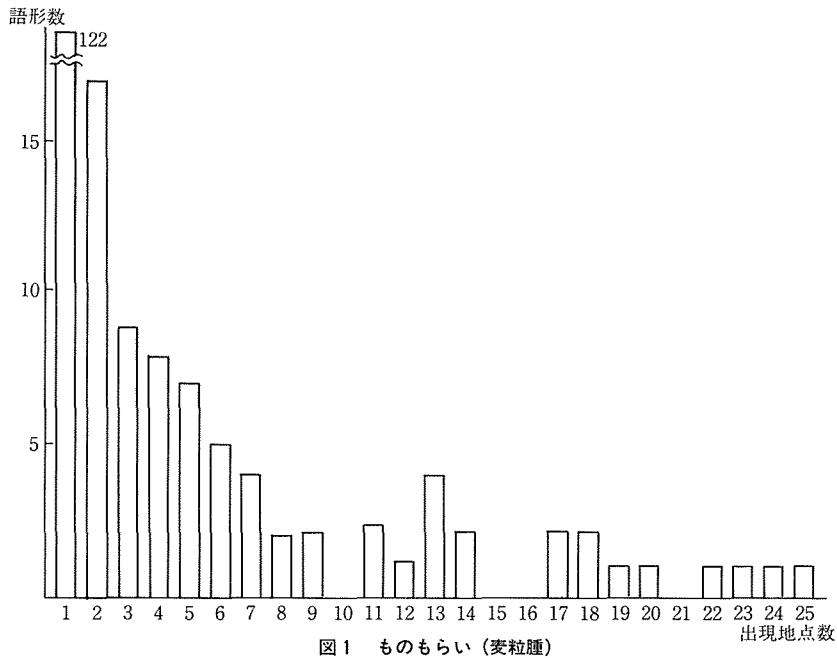
3.1 狐例と地点数の関係

1つの言語地図のなかに現れる語形には、1地点でしか使われないものもあれば、共通語形のように非常に多くの地点で用いられるものもある。使用地点数が1の語形（1地点だけで用いられる語形）の数、2の語形の数……というふうに見たとき、語形の数はどのような統計的分布をみせるだろうか。

まず、図1を見てみよう。これは項目「ものもらい（麦粒腫）」を例として示したものだ。棒グラフの棒の1本1本の長さはその棒グラフの下に書いてある数の地点だけで使われている語形の数を表している。一番左の棒は使用地点数が2の語形の数を、という具合である。これで見ると使用地点数が1の語形がもっとも多く、使用地点数が多くなるにつれ、語形の数が激減していくのがわかる。

この図では出現地点の数が25のところまでしかわからないので、同じ資料を使って、全体がわかるようにちょっと図の作り方を変えたのが図2だ。

図2でも縦軸は語形の数を表すが、目盛りは2を底とする対数目盛である。簡単にいうと刻みを一つ上に上がると数が倍になるような目盛りかたをしている。棒グラフの棒の1本1本は使用地点数が一定の範囲のものの語形数を表している。たとえば、左から2本目の棒の下には2～3とあるが、これはこの棒が使用地点数2と3の語形の数の合計を表していることを示す。このグラフは右下がりに直線的な傾きを示しているが、これは今回データ入力を行った45項目すべてに見られることだ。



以下に45項目すべての語形の使われた地点数と語形数の関係を表にしたものを図3, 4として示すことにする。図2と同じように、最上段の枠に2~3とあるのは、この下のマス目が使用地点数2と3の語形の数の合計を示すことを表している。なにか共通した傾向が見えるようでもある。そこで、全体をならしてみたときに、一定の数字が得られれば、使用地点数と語形数の関係を定式化できるのではないかと考えた。上述の27項目について、使用地点数10までの語形の、それぞれの項目での総語形数に対する割合を計算し、そこからさらに27項目の平均を算出すると図5のようになる。残念ながら、適当な数式の形で出現地点数と全体に対する割合を表現することはできなかった。

さらに、総語形数別に同様の操作を行った結果も図5にまとめて図示した。語形数の多い項目では地点数の少ない語形の数の割合が高くなることが読みとれる。考えて見ればこれは当然の論理の帰結のようなもので、総語形数が増えるときは地点数の少ない語形のほうが増える余地が沢山あるのである。

以上のような統計的分布から連想されるのが語彙統計の分野で知られているZipfの法則だ。Zipfの法則は使用度数による順位と、その使用度数の語形の数の積が一定になるというものだった。ここに見られる分布はZipfの法則とは違うように見える。実際に計算もしてみたが、順位と地点数の積は一定ではない。

ただ、Zipfの法則はあくまでも近似を言っているのであって、頻度の少ない語形は頻度の大きい語形より沢山あるという傾向を表しているということであれば、話は別だ。語彙統計の分野でも言語地図でもよく似た法則がなりたつのは何故かというのには次に出てくる疑問だが、残念ながらよくわからない。

以上の結果は、Zipfの法則の件を除いて、表現は少し違っているが、文献2で述べられていることと同じだ。文献2では17項目だけの結果であったのが、27項目でも、やはり成り立つということがわかったということである。

図3 出現地点数別に見た異なり語形数（項目別）

番号	項目名	1	2 3	4 7	8 15	16 31	32 63	64 127	128 255	256 511	512 1023	1024 2047
101	あたま	41	19	17	7	3	1	1	0	1	0	1
102	つむじ	192	58	27	9	9	6	3	2	3	0	0
103	はげあたま	58	31	18	8	6	2	5	2	1	0	1
104	はげる	30	13	5	3	2	2	1	0	0	1	0
105	ふけ	53	23	5	2	4	4	0	0	0	0	1
106	かお	27	11	3	5	2	1	0	0	0	0	2
107	ほほ	106	31	23	18	9	9	5	1	2	1	0
108	あごーとがった部分	60	14	5	3	2	2	4	0	0	1	0
109	あごー全体	52	16	3	2	2	3	3	0	0	1	0
110	め	10	7	3	3	2	1	3	0	2	0	1
111	まゆげ	36	19	14	10	9	3	8	1	3	0	0
112	ものもらい	122	26	24	13	12	6	7	4	1	0	0
113	はな	12	2	1	1	2	0	0	0	0	0	1
114	みみ	12	5	1	1	1	0	1	0	0	0	1
115	くち	11	2	2	1	2	2	3	1	0	0	1
116	くちびる	48	16	5	6	3	4	2	2	2	0	1
117	した	28	16	10	2	4	3	3	0	0	0	2
118	つば	66	28	21	15	6	5	2	3	0	2	0
119	よだれ	39	16	6	9	8	3	3	2	1	0	1
121	おやゆび	41	23	7	4	6	4	1	0	0	1	1
122	ひとさしゆび	73	23	6	4	4	3	0	1	0	1	1
123	なかゆび	56	34	18	12	3	4	0	1	2	0	1
124	くすりゆび	100	43	15	4	3	5	1	2	2	1	0
125	こゆび	97	37	12	9	4	3	0	0	0	1	1
127	しもやけ	54	16	8	8	1	5	2	2	2	0	1

図4 出現地点数別に見た異なり語形数（項目別）〈続〉

番号	項目名	1	2 3	4 7	8 15	16 31	32 63	64 127	128 255	256 511	512 1023	1024 2047
128	くるぶし	135	46	24	14	4	12	3	1	0	0	0
129	かかと	61	22	20	13	10	7	2	3	4	0	0
130	みずおち	78	39	16	5	3	3	2	0	1	2	0
131	あか	32	13	7	7	0	0	1	1	1	0	1
132	あざ	65	36	16	3	6	4	2	0	1	0	1
133	ほくろー小さいもの	95	23	12	8	5	4	3	2	0	2	0
134	ほくろー大きいもの	72	12	12	4	3	2	6	0	1	1	0
136	おとこ	51	16	8	3	5	0	1	1	1	0	1
137	おんな	58	14	12	8	4	2	0	0	0	1	1
138	おんなー卑称	118	38	14	9	6	1	0	1	0	0	0
139	ひまご	17	7	8	5	2	1	1	1	2	0	0
140	やしゃご	93	22	13	9	4	4	2	0	1	0	0
141	おじいさん	64	20	21	12	6	4	3	0	2	0	0
142	ひいおじいさん	161	48	33	13	2	4	1	0	1	0	0
143	たこ	73	15	17	11	4	2	2	0	1	0	1
144	たけうま	164	40	16	15	8	5	3	0	1	0	1
145	おてだま	183	66	54	30	11	7	6	1	1	0	0
147	おにごっこ	243	57	24	19	5	0	1	2	1	1	0
148	かくれんぼ	152	40	20	16	8	6	1	2	0	0	1
149·150	かたぐるま	338	78	37	15	10	2	2	4	1	0	0

図5 出現地点1～10の語形が総異なり語形数のなかで占める割合
(総語形数によって項目を分類。単位は%, 小数点第2位以下切り捨て)

とりあげた 項目 地点数	全項目	総語形数 1～100	総語形数 101～200	総語形数 201～300	総語形数 301～
1	52.5	47.4	50.7	58.5	62.6
2	11.9	12.5	12.8	9.5	10.6
3	6.7	7.5	6.6	5.1	6.5
4	4.1	3.8	4.6	3.1	4.5
5	2.0	1.9	2.1	2.2	1.8
6	2.3	2.8	2.6	1.7	1.3
7	1.6	1.2	1.7	2.2	1.7
8	1.5	1.7	1.4	2.2	0.6
9	1.2	1.2	1.1	1.2	1.3
10	1.0	1.3	1.1	0.5	0.7

3.2 孤例を多く産出する地点

さて、今まで述べてきたような統計的な分布は地理的に見たらどのような形で表れているのだろうか。使用地点数の多い語形を答えた地点のすぐとなりに全く独自の語形を回答した地点があるという具合にランダムに分布しているのだろうか。それとも、大勢力をもつ語形が一定の地域にかたまって存在し、そのすぐ外側に中勢力の語形があって、さらにその外側にもっと弱い勢力の語形があるという具合にだんだんさびしくなっていくのか。可能性としてはいろいろ考えられる。いま、このような分布を間接的に知るてがかりとして、孤例というものを考える。孤例とは1地点でしか使われない語形のことだが、地点によって孤例の多いところとそうでないところがあることが予想される。つまり、ある地点に使用地点の多い語形が出るか、少ない語形が出るかはランダムではないと考えるわけだ。

そこで27項目のなかで出現した孤例の数の累計で地点を分類してみた。つまり、孤例となるような語形を27項目中、何回答えたかをすべての地点で数えたわけだ。

なお、1つの項目で回答語形が2つあり、どちらも孤例だった場合は孤例数2として数える。こうして得たグラフが図6だ。孤例が1つ以上ある地点は1,306ある。逆に言うと、残りの1,094地点は、27項目のいずれにも孤例を出さなかったということになる。孤例は案外出にくいものだということがこれでわかる。このグラフでも孤例数が増えるにしたがって、地点数が急激に減っていく傾向が見られる。なんとなく最初に見たグラフに似ている。

ところが、孤例数6例から7例のあいだでは一時的に地点数が増加する。いかにも不自然な現象だが、これはもともと孤例を多く産出する琉球地域の地点数が7例のときにピークに達するからだ。本土方言地域だけをとれば、孤例数が1つ増えるごとに地点数が半分以下に減るという傾向は8例のところまで保たれる。

そこで、琉球地域とそれ以外とを分けて表示したのが図7である。白抜きの棒は琉球地域、ベタの棒はそれ以外をそれぞれ表している。琉球地域ではすべての地点で孤例を1回以上出していることにも注意していただきたい。

いま、琉球地域の話がでたが、孤例を多く産出しやすい地点がある地域に固まっているかどうかは図8を見るとよく分かる。意外なことに、特異な方言を持つと考えられている津軽や鹿児島で孤例が沢山出ていないのだ。このことにたいする説明として、孤例はあくまでも地点に関するものであり、方言圏全体の特異性を直接示すものではないと考えられる。津軽のように方言圏の内部で均一性の高い地域ではかえって孤例が出にくいのだ。津軽のなかである地点が変わった語形を出しても、すぐ隣の地点で同じ語形が出ればそれは孤例ではなくなる。この地図からは、ほかにも日本海側に孤例の多い地点が分布していること、佐賀・長崎・熊本で孤例の多い地点が密集していること、離島に孤例が多いことなどが読み取れる。この件に関しては、小林隆氏から等語線の密度が濃い地域というよりは等語線が入り乱れているような地域で孤例の多い地点が沢山見られるという興味深い指摘を受けたことを付け加えたい。

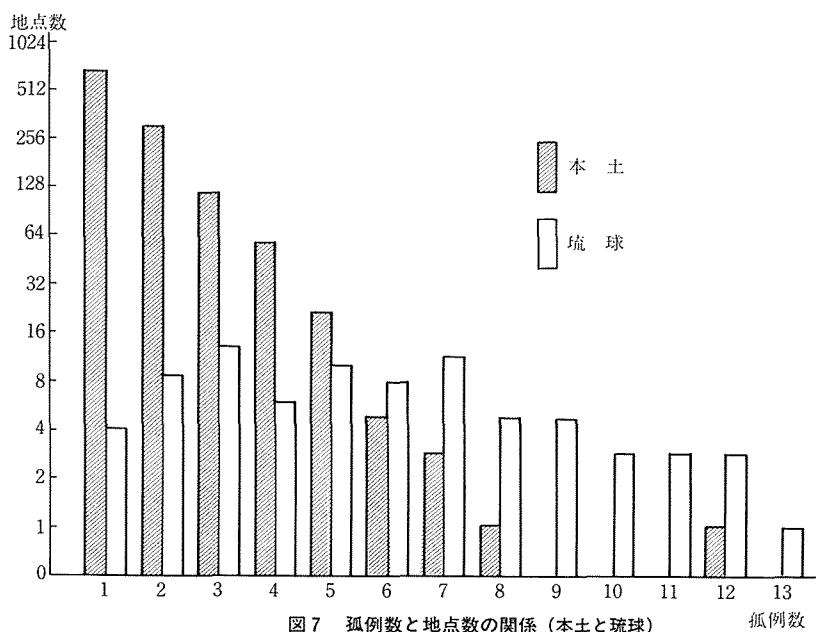
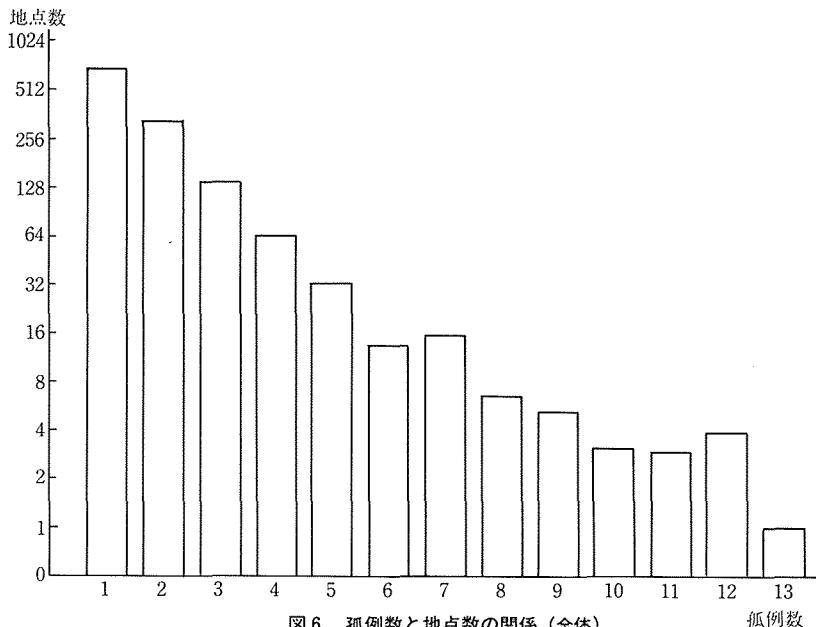
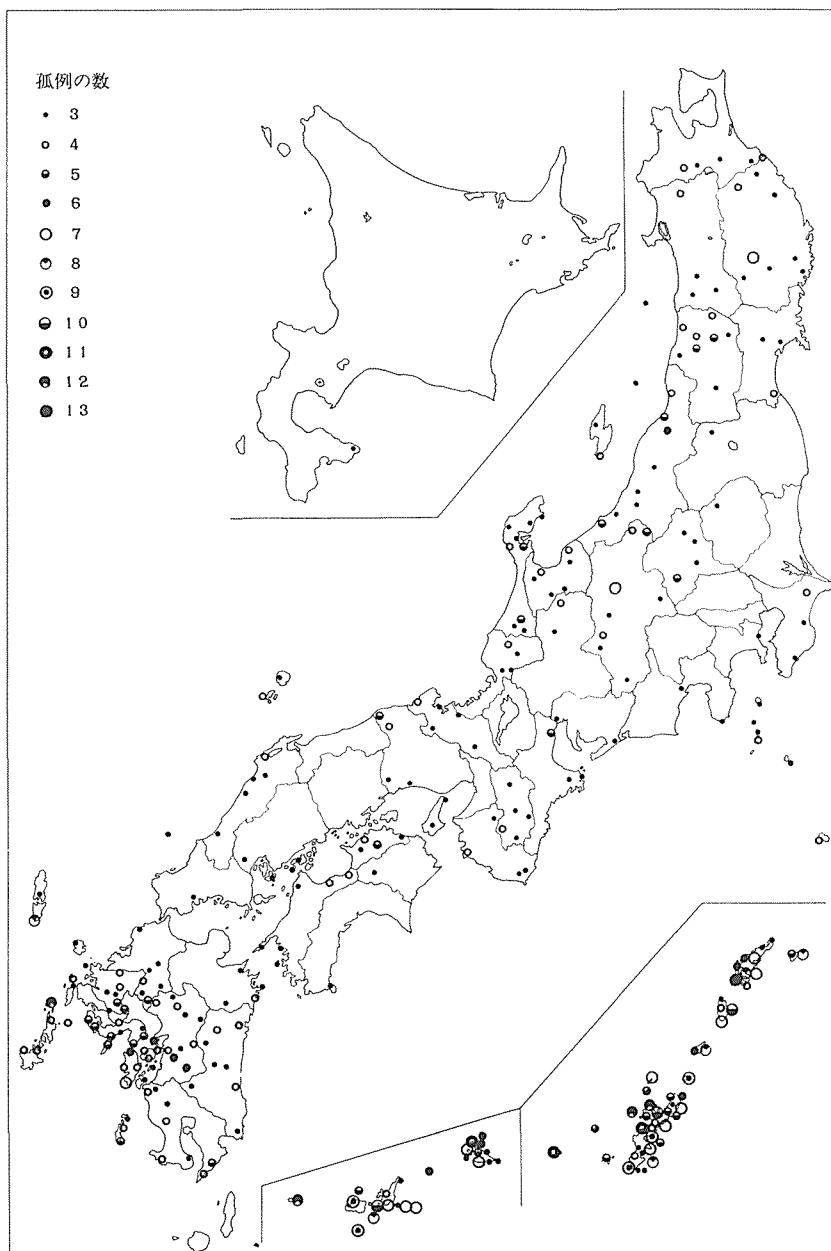


図8 孤例数が3以上の地点の分布図



3.3 琉球地域の特異性

ここで、琉球地域がなぜ孤例を多く出すのか、言いかえれば、琉球地域の孤例数と地点数の関係がなぜ本土方言の地域のそれと異なるのかについて考えてみたい。

図7に見られるような、孤例と地点数の関係について琉球地域のものをA型と呼び、本土地域のものをB型と呼ぶことにする。すると、A型とB型の違いが生まれる原因として、次の3つが考えられる。

- a. ある狭い地域の中だけで見たときにはA型になりやすい。琉球地域は本土方言地域と方言がはっきり異なるので、琉球地域とその他の地域と一緒にした場合でも、琉球地域だけを取り出して見たときとほぼ同じような結果になった。
 - b. 調査地点数が少ないとA型になりやすく、地点数が増えるにしたがってB型に変わってくる。極端な仮定だが、十分に方言的にへだたった2地点を取り上げれば、孤例は非常に多くなる。この2地点で得られる語形は2地点両方で使われるか、1地点だけで使われるかのどちらかしかない。1地点だけで使われる語形は孤例ということになるからである。
 - c. もし琉球地域が、本土方言の地域と同じくらいに方言の多様性を持っているとすれば、本土方言地域の地点数に見合うくらいの地点数を調査しなければ、B型にならない。
- a. の琉球地域に関する部分が正しいかどうかは、琉球地域だけを取り出して孤例数と地点数との関係を見ればよい(図9)。図7と比べるとやはり違いが見られる。図9のほうが孤例が多くなっている。琉球に1地点と本土に1地点しかない語形は、日本全体で見たときは孤例ではないが、琉球だけで見たときは孤例になるので、琉球地域に関して図9が図7より孤例が多くなることはあっても、その逆はありえない。
- a. の前半部分についての検証法は、本土方言地域で琉球地域と同じくらいの地点数の地域を取り出して孤例数と地点数の関係を見ることである。そこで、地点番号650000から653000までの地点をすべて取り出した。この地点番号で650000から653000の地域は県でいうと、京都・福井・滋賀・岐阜・愛

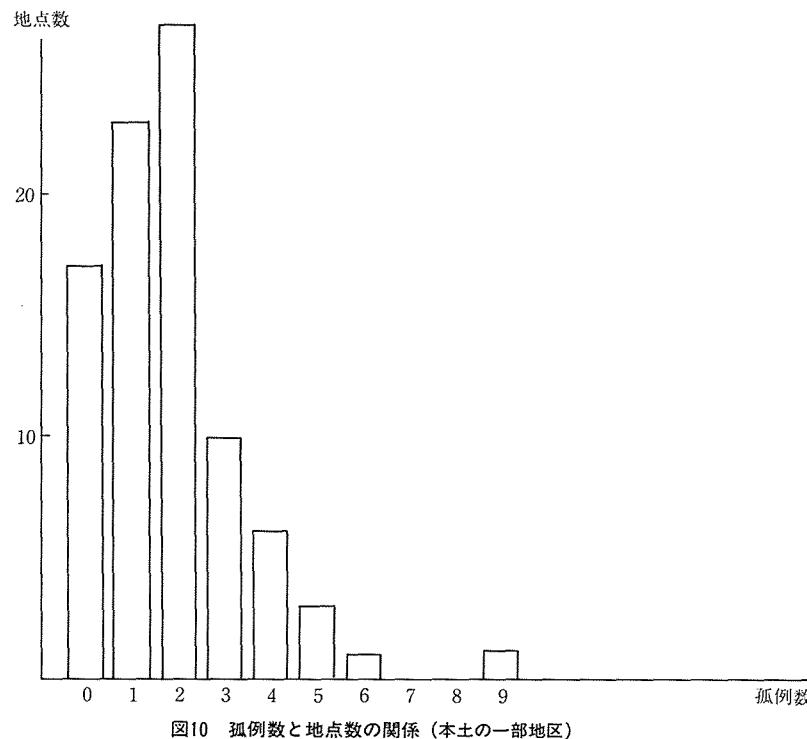
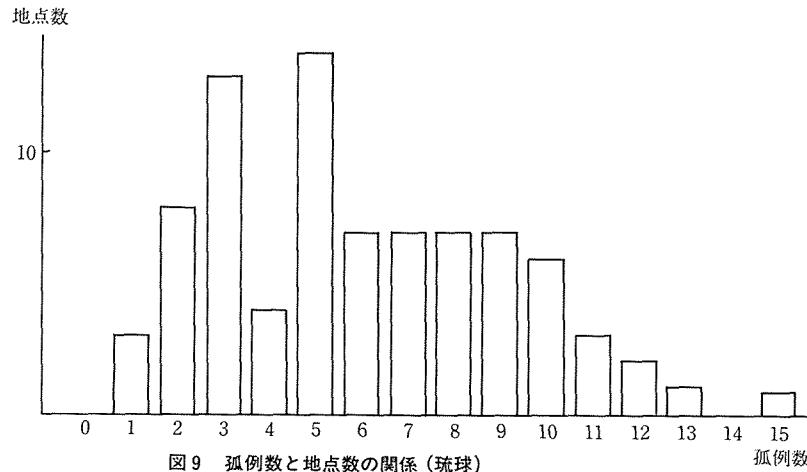
知・兵庫のそれぞれの一部にまたがっていて、方言的にはバラエティーが豊かすぎるわけでもないし、単調すぎることもない。地理的に連続し、かつ琉球地域とおなじくらいの地点数（琉球地域84に対して88）が得られるように地域を選んだつもりだ。

この地域の孤例数と地点の関係は図10に示した。図9と図10を比較すると、琉球地域の方が全体に右側にひろがっている。ピークを見ても図10はかろうじて孤例数1のところではなく、その1つ隣にきているという具合で違いは明白だ。1地点あたりの平均孤例数も、図10の地域で1.9(小数点第2位以下切り捨て)に対し、琉球地域は6.0である。従ってa.だけでは説明できない琉球地域の特殊性があることが予想される。

b., c. の仮説と関係が深いのが地点密度である。地点密度とは一定面積あたりの調査地点数のことである。LAJでは県によって地点密度が大きく変わらないような配慮がなされているが、琉球地域は例外で、むしろ他の地域よりも地点密度が高いくらいに設定してある。どれくらいかというと、琉球地域の大部分を占める沖縄県の地点密度は、北海道を除く本土方言地域の約3倍だ。b., c. の仮説に従えば、これでも地点密度が足りなかったということになる。

いまここで、c.を証明するためには琉球地域の調査地点を増やすことが必要だが、それは不可能である。では、逆に本土方言地域の地点を少しずつ減らしていくたらどうなるだろうか。もし、本土方言地域の孤例の出やすさと琉球方言地域のそれとが同じ程度とすれば、地点数が同じであれば本土方言地域も琉球方言地域も同じパターンを示すはずである。従って、本土方言地域の地点数を減らしていくれば、本土方言地域はA型からB型に変わっていき、どこかで琉球方言地域と同じようなパターンになるはずである。

地点を増やすのに比べると、減らすのは簡単である。調査地点の一部だけをとるようすればいいのである。このようなシュミレーションが手軽にできるのがコンピューターのいいところだ。厳密なことを言えば、地点を減らすたびに語形の分類をし直して孤例の数を計算する必要があるが、今回はそれは目をつぶることにした。



地点を減らすのには、地点番号を大小の順に並べ、一定の数ごとに地点を捨うという方法をとった。全地域からまんべんなく減らすためだ。ただし、このような抜き取り方をした場合、キリのいい数を使うと具合の悪いことが起こる可能性がある。たとえば、全体の10分の1を選んだ場合(甲)と20分の1(乙)とでは乙の地点はすべて甲に含まれることになる。甲が全体から見ると非常に変わった地点をたまたま沢山含んでいたとする、乙は全体の20分の1というよりは、甲の2分の1といったほうが適切になってしまふかもしれない。

シミュレーションの結果は図11~13の通りである。全体の11分の1の地点を取ったときにピークは孤例数2に移ったが、孤例の全くない地点もまだかなりある。21分の1にするとピークは孤例数3に移る。全体の31分の1にしても依然として孤例のない地点があるが、ピークの位置は孤例数7に来ている。しかし、1地点当たりの孤例の平均は全体の31分の1のとき4.0に対して琉球地域だけの場合は6.0となっていて、まだ大分差がある。

以上の結果は琉球方言の多様性の傍証となるものだろう。また、LAJの地点密度が不十分だったことも示している。ただ、それでは地点密度がどれくらいだったら良かったのか、はっきりした数字を出すことは難しい。

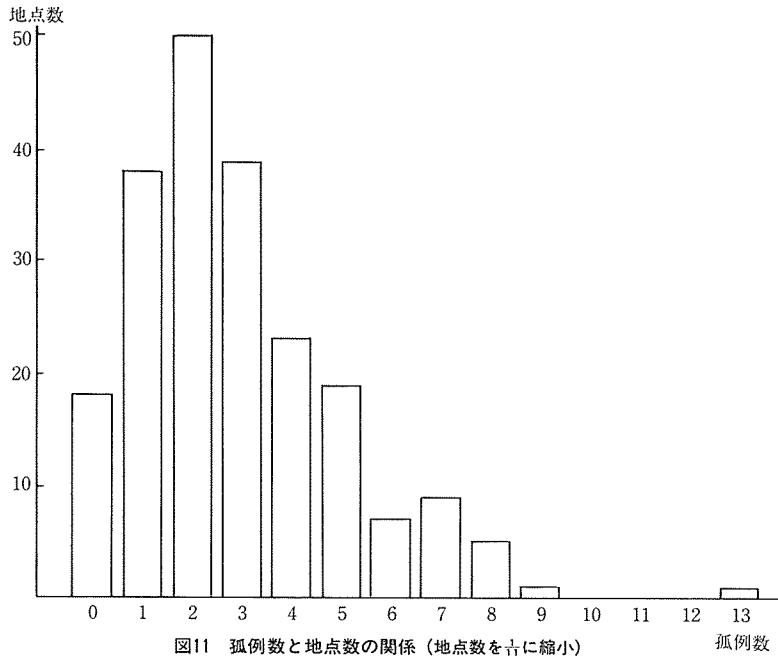
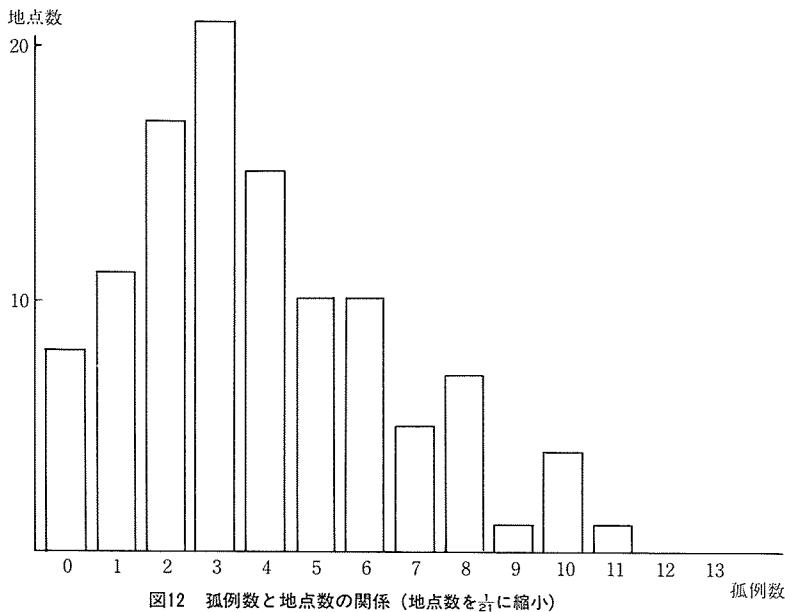
わたしが今回述べたかったことは大きく言って次の2つである。

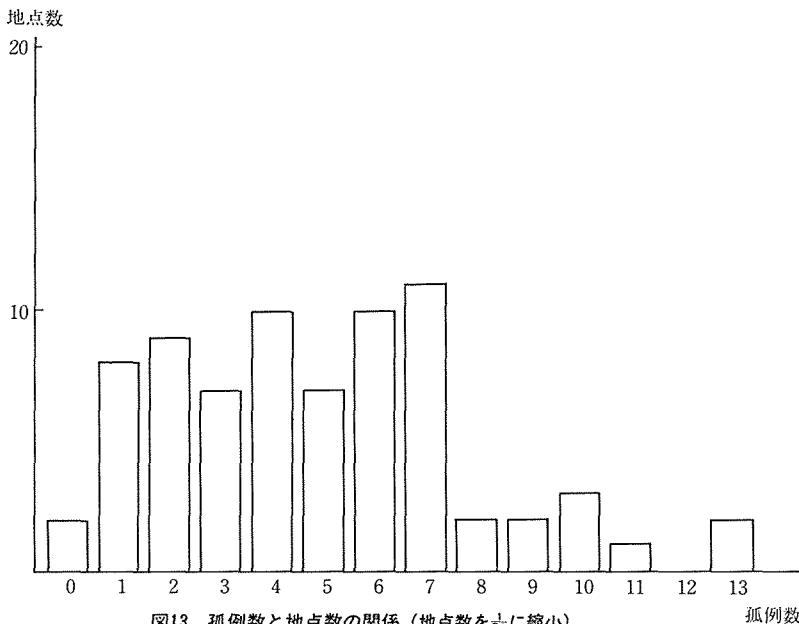
- a. 使用地点の数と語形の数には一定の関係があるということ。
- b. 孤例を地点や地域の特性を知る手掛りにできるのではないかということ。

3.4 問題点

以上、結論めいたことまで述べたが、ここに至るまでに全く問題がなかったわけではなく、研究所内での発表や方言研究会の席上でいろいろな方から御指摘を受けた。以下に、方法上の問題点と思われるものを挙げる。

- a. このような研究の本質に関わってくる問題として方言語形の分類の問題がある。言語地図の語形の分類は研究者が行うものであり、人によって分類の仕方が違ってくることは十分ありうる。

図11 孤例数と地点数の関係（地点数を $\frac{1}{15}$ に縮小）図12 孤例数と地点数の関係（地点数を $\frac{1}{21}$ に縮小）



- b. 孤例といっても誤答や意味のすこし違うものがまぎれこんではいないか。
- c. LAJで違う語形に分類されていれば、「違う」ことになってしまう。しかし、「違ひ方」にもいろいろあって、単なる音声の差しかないものも、全く異なっているものも一視同仁に「違う」というのはどういうものか。
- d. 九州と津軽のように離れたところに1地点ずつ存在しているような語形は定義からすると孤例ではないことになるが、周囲との関係からすると非常に孤例に近い。

- a. については文献2において詳しく述べられている。筆者としては、そのような食い違いが生ずるのは当然であるが、語形の統計的な性質に大局においては影響はないとする立場をとる。
- b. についても文献2で詳しく論じられている。今回はコンピューターを使った実験的研究を行うことが主眼だったが、今後いくつかの項目について原カードに当たる必要がある。ただ、この場合も正しくは孤例と呼べない

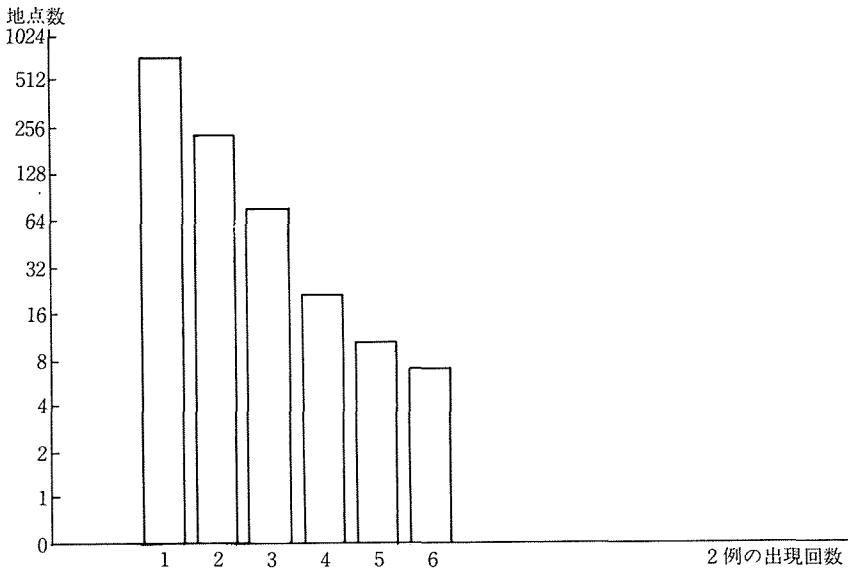


図14 2例の出現回数と地点数の関係

ものが混じっていたとしても大局は影響を及ぼさないだろうとの見通しがある。

ところで、孤例は1地点でしか得られなかった語形であるが、それと同じように2地点でしか得られなかった語形を仮に2例と呼ぶことにする。2例について図6とおなじように作ったのが、図14である。個々の調査項目において、2例は孤例の地点数の半分以下程度であったが、そのことは図14にも現れていて2例を7回以上答えた地点はない。6回が最高である。また、右下がりの傾きも図6に比べて急である。

孤例は孤立した存在ではなく、2例や3例の延長線上に存在しているのではなかろうか。同じことが図3～4からも読みとれる。

c., d.については、筆者も割り切れない思いがしないでもない。しかし、「違い方」に差を認めるることは「質」の概念を持ち込むことであり、データの取り扱いを非常に難しくする

4. 今後の見通し

今後、この分野での研究の課題としては次のようなことが考えられる。

- a. 小地域（郡程度の大きさ）の言語地図などでも同じようなことが成り立つかどうか検証する。
- b. 第3巻以外のLAJのデータを入力する。データは多いほうがよい。
- c. 孤例と地点数の関係を定式化する。
- d. 孤例がひとつひとつの項目でどのような地理的分布を見せるかを明らかにする。

最終的には地理的分布とは何かということが、こうした計量的研究から見えてこないかというのが、私の現在漠然と考えていることだ。

5. 研究の分担と謝辞

この研究は昭和58年度から60年度にわたる科学研究費「方言研究資料の電子計算機による作成および分析に関する研究」の一環として行われた。データの入力と修正に関わる部分は言語変化第一研究室の佐藤と小林が担当し、沢木は修正をふくむそれ以後の部分に参加した。

また、本稿を成すまでの過程で徳川宗賢氏、井上史雄氏、および研究所の諸氏から貴重な御助言を賜った。記して感謝する。

[参考文献]

1. 徳川 宗賢 言語地図における孤例の処理(『第13回日本方言研究会発表原稿集』1971)
2. 徳川 宗賢 言語地図における孤例 (『ことばの研究』4, 1974)
3. 沢西秀早子 標準語形の全国的分布 (『言語生活』354, 1981)

4. 国語研究所 方言研究と電子計算機（内部資料〈科学研究費の報告書〉
1986）

方言意識と方言使用の動態

——中京圏における——

真田信治

1. はじめに——研究の目的——

ここでは、方言の変容（地域的・年層的変容）のプロセスにおいて方言意識がどのようにかかわるかをめぐってのケーススタディの結果を報告する。

フィールドは、東西両方言の緩衝地帯である東海地方である。この地方において、実際に東と西のことばがそれぞれどのように意識されているか、あるいはどういうふうにイメージ（評価）されているか。そして、その様相と現実の方言の動態とがどのような関係にあるのか、ということを明らかにしたいと考えた。そもそも、現時点において、いわゆる東西方言の境界線はどのように推移しているのであろうか。

ところで、東西方言の境界ということでは北陸地方も対象になるわけであるが、ここで東海地方、中京圏を取り上げるのは、第一に、この地域での社会的動向が複雑な点にある。まず、三重県の北部は、方言区画上は近畿方言の行なわれる地域であるが、名古屋という大都市をひかえて、近年、そこをセンターとする経済、文化の強い影響を直接的に受けつつあることが指摘される。このような情況において、名古屋のことばはこの地でどのようにイメージ（評価）されているのか。また、経済的、文化的事象の浸透に応じた名古屋ことばの浸透ということがあるのかどうか、などの点を解明したかったのである。一方、愛知県の三河方面では、伝統的なプライド、すなわち江戸そして東京ことばのルーツは三河であるといった意識を背景に、同じ愛知県内でも尾張方面よりも東京のことばを志向する傾向の強いことが認められる。

県都、名古屋のことばはこの地においてはどのようにイメージ（評価）されているのか、といった問題が対比的に存在する。これらを総合的に把握したいと考えた。

2. 調査について

1981年10月の予備的調査（真田による）の結果をふまえて、具体的な調査対象地点を、三重県北部の桑名市と桑名郡長島町（図1参照）、そして名古屋市と三河側の知立市の4地点と決定した。この4地点で、老年層、若年層各8名ずつ、計64名の生え抜きのインフォーマントを選定して、それぞれの地点に出向き、インフォーマントに面接した。調査期間は1981年11月24日～28日。調査者は、真田のほか、佐藤亮一、高田正治、沢木幹栄、白沢宏枝の5名である。

インフォーマントの属性を、次に表1に示す。上の二段が老年層、下の二段が若年層ということになる。

具体的な地点について、「桑名」は桑名市街地、「長島」は大字長島、「名古屋」は熱田区と中区、「知立」は知立市街地をそれぞれ指す。

インフォーマントの選定に当っては、桑名市教育委員会、桑名市立光風中学校・陽和中学校、長島町立長島中学校、名古屋市熱田

表1 インフォーマントの属性（生年・性別）

	桑 名				長 島				名 古 屋				知 立			
老	M29 m	M29 m	M29 m	M30 m	M38 m	M41 m	M44 m	T 7 m	M40 m	M40 m	M41 m	M44 m	M34 m	M41 m	M44 m	M45 m
	M34 m	M36 f	T 3 m	S 3 m	T 11 f	T 12 f	T 12 f	S 3 f	T 2 f	T 3 f	T 4 m	T 14 f	T 2 m	T 3 m	T 5 m	T 8 m
若	S 41 m	S 41 m	S 42 f	S 42 f	S 41 m	S 41 f	S 41 m	S 42 m	S 41 m	S 41 f	S 42 m	S 42 m	S 43 m	S 43 f	S 43 m	S 43 m
	S 42 m	S 42 f	S 43 f	S 43 m	S 42 f	S 43 f	S 43 m	S 43 m	S 42 f	S 42 m	S 43 f	S 44 f	S 44 m	S 44 f	S 44 f	S 44 f

M：明治、T：大正、S：昭和／m：男性、f：女性

区役所・中区役所、名古屋市立宮中学校、知立市教育委員会、知立市立竜北中学校のご協力を仰いだ。

なお、本稿では、考察に際して、桑名市、長島町を含む愛知・岐阜・三重県境での言語地理学的100地点調査のデータ（真田信治「愛知・岐阜・三重県境言語地図」）も参考として扱うことにする。このデータは真田が個人的に集めたものである。調査は1978年10月～1979年12月の間に行なった。調査に当っては、一部で柏山女学園大学文学部の教員、学生の助力を得ている。

3. 方言意識の様相

3.1 所属意識（「東」か「西」か）

最初に当該地域の人々の所属意識をたずねた結果のデータを掲げる。

設問は、次のようにあった。

「日本を大きく東と西とに分けるとすれば、この土地はそのどちらに属していると思いますか。」

表2での各欄は上の表1での各インフォーマントの位置に対応している。

全体的に、東西の緩衝地帯としてのこの地の特徴がよく現われているといえよう。東日本に属していると考える人と西日本に属していると考える人が拮抗して存在しているのである。しかし、詳しく見れば、老年層においては、桑名、長島では「西」と意識する人が多く、知立では「東」と意識する人が多いことがわかる。その間には移行的状況が見える（表3参照）。なお、特に桑名の若年層はすべてが「西」と回答し、老年層とさわだつ相違を示していることが注目される。また知立においても「西」とする人があるが、この人々に、「では『東』はどこからですか」とたずねた結果では、すべての人が「浜名湖からむこう」と回答したことをつくづけておきたい。

さて、三重側の桑名と長島のインフォーマントに、「あなたは関西の人ですか」とたずねた結果は、表4のようであった。

「Yes」と「No」とが拮抗しているが、どちらかといえば、桑名に「Yes」が多く、長島に「No」が多い傾向を見てとることができよう。

表2 日本を大きく東と西とに分けるとすれば、この土地はそのどちらに属していると思ひますか。

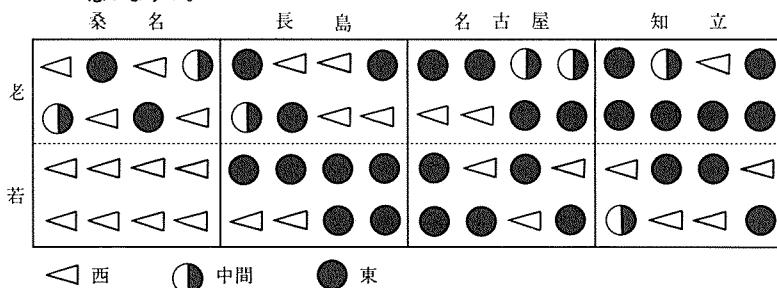


表3 表2と同じ(老年層)

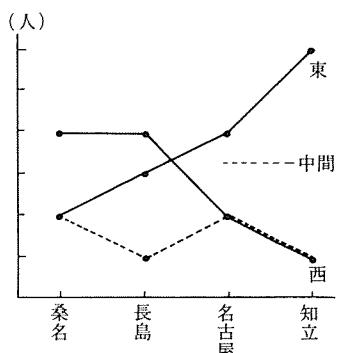
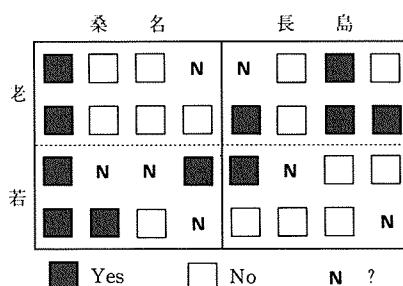


表4 あなたは「関西人」ですか。



この土地のことばは、関東、関西のどちらに近いと思いますか。

表5 老年層

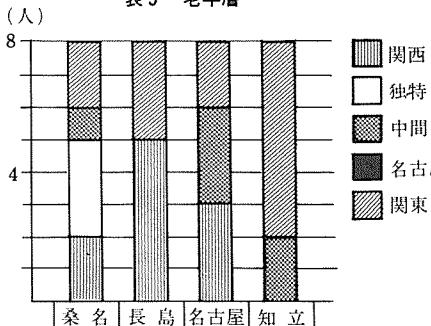
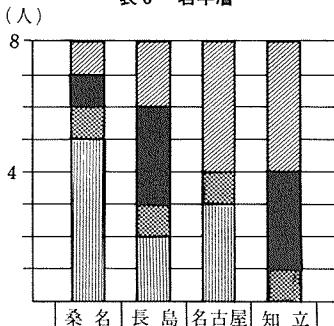


表6 若年層



3.2 土地ことばについての意識

次に、現在の当該地のことばに関して、それが東西ことばのどちらに近いかを判断してもらった結果のデータを見よう（表5・6）。

設問は、次のようにあった。

「この土地のことばは、関東、関西のどちらに近いと思いますか。」

表5は老年層における、また表6は若年層における実態である。

まず、老年層の場合について見ると、ほぼ東になるほど「関東」とする回答が多く、西になるほど「関西」とする回答が多くなる。ただし、知立には「関西」とするものはいないし、長島をのぞく地点には「どちらとも言えず中間」とする回答も多い。なお、桑名には、「ここの言葉は独特」とする、まさに独自の回答が見られることが注目される。この地の、自立心を培う風土性といったものを改めてうかがうことができる。

若年層において指摘されることは、老年層では見られなかった回答形「名古屋」が新たに各地で顕著に出現していることである。「関東」と「関西」のみを指示したにもかかわらず、若年層が積極的に「名古屋」といった具体形で回答するのは、やはり、この地域で名古屋の影響が最近になってより強くなっている、そしてそのことを若い人々が特に意識しているということを示すものではないかと思う。

表7 この土地のことばは今どこのことばの影響を受けつつあると思いますか。

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	・・ +	☒○	+	•
若	• ○	○○	•	+ ○
東京	— 関西	☒ 桑名	○ 名古屋	• 変化ない、分からない

3.3 ことばの変化についての意識

さて、「この土地のことばは今どこのことばの影響を受けつつあると思いますか」とインフォーマントにたずねた結果のデータは、表7のようであった。

まず、桑名では錯綜した状況となっているが、「東京」とする回答が比較的多いといえよう。「変化ない」という回答も多い。長島では「桑名」とする回答が存在する。しかしそれにもまして「名古屋」とする回答が多いことが注目される。一方、名古屋では圧倒的に「東京」である。ただし、「関西」とする回答も若干見られる。そして、知立ではやはり「東京」が多いが、特に若年層において「名古屋」とする回答が増えていることが注目されるのである。

3.4 各地方言のイメージ

ここで具体的に対象としたのは、「関西のことば」「名古屋のことば」および「東京のことば」についてである。それぞれについて全体としてどのような印象をもつか。そのことばを聞くとまずどんなことがイメージされるかを自由に回答してもらった（ただし、名古屋での場合「名古屋のことば」に関しては「この土地のことば」と言い換えてたずねている）。

以下にその結果を表の形で示す。なお、それぞれのコメントを、筆者（真田）の主観において、プラス評価（+）、マイナス評価（-）として判定した。「知らない」「何も感じない」などのはか「発音が変わっている」「ちがうことば」などの客観的コメントについてはゼロ評価（0）とした。そして、それぞれの評価を合計してグラフ化した（ゼロ評価は計数外とする）。

a. 「関西のことば」の評価

まず、「関西のことば」について見よう（表8）。

若年層（白ヌキ）においては、桑名をのぞいて、老年層にくらべ棒が短くなっているが、これはゼロ評価が多いということで、「関西のことば」があまり身近でないことを示すとともに、無関心層が多くなっていることのあらわれと見られよう。

地点ごとに見ると、桑名では、老年層においてプラス評価をする人が多い

表8 「関西のことば」の評価

印 象 (評価) 印 象 (評価) 印 象 (評価) 印 象 (評価)

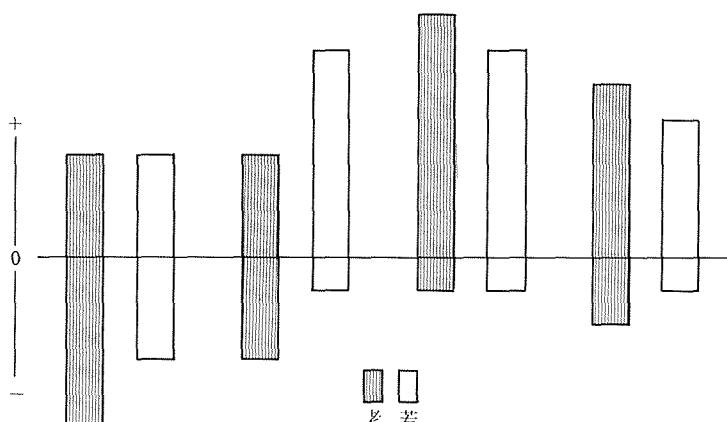
老	知らん (0)	聞きとりに くい (-)	じやらついて いる (-)	おっとりしす ぎ (-)
	親しみやすい (+)	はつきりし すぎる (-)	知らない (0)	柔らかい (+)
	情的で柔らかい (+)	きつい (-)	優しい (+)	上品 (+)
	知らん (0)	おとなしい (+)	しみつたれく さい (-)	柔らかい (+)
	優しい (+)	柔らかだ (+)	あたりが柔 らかい (+)	柔らかい (+)
	優しい (+)	別に感じない (0)	しっとりして いて良い (+)	いやらしい (-)
	端的で良い (+)	きつい (-)	まるい感じ (+)	分りにくく (-)
	汚ならしい (-)	好ましくない (-)	早 い (-)	きれいでフランス語のよう (+)
若	雑な感じ (-)	発音が変わつ ている (0)	知らない (0)	知らない (0)
	落ち着いてい る (+)	知らない (0)	ちがうことば (0)	優しい (+)
	知らない (0)	別に感じない (0)	知らない (0)	おもしろい (+)
	柔らかい (+)	知らない (0)	おもしろい (+)	聞きとりにく い (-)
	知らない (0)	しゃべっている ことが分らない (-)	別に感じない (0)	知らない (0)
	アクセントが きつい (-)	知らない (0)	きれい (+)	別に感じない (0)
	重 い (-)	おもしろい (+)	田舎くさい (-)	別に感じない (0)
	ちょっときつい (-)	古いことば (0)	知らない (0)	きれい (+)

桑名から

長島から

名古屋から

知立から



のに対し、若年層は逆にマイナス評価をする人が多くなっていることが注目され、一方で長島では、特に老年層においてマイナス評価がかなり多いことが注目される。名古屋ではプラス評価とマイナス評価とがほぼ拮抗しているようである。

b. 「名古屋のことば」の評価

次に「名古屋のことば」について見る（表9）。

第1に指摘されることは、若年層において長島をのぞいては、いずれの地点においてもマイナス評価が多くなっていることである。若年層での「名古屋のことば」に対する評価はあまり高くないことがわかる。

第2に指摘されることは、桑名ではマイナス評価が圧倒的なのに対し、長島ではプラス評価が多いということである。この点を先の表8と対照して見ると、「関西のことば」の評価と「名古屋のことば」の評価が両地点でまったく逆になっていることが注目される。すなわち、桑名では「関西のことば」を比較的プラスに評価する一方で、「名古屋のことば」は評価しない傾向にあり、名古屋に地理的に近い長島では三重県に属しつつも「名古屋のことば」をプラスに評価する一方で、「関西のことば」はあまり評価しない傾向にあるわけである。その対照が興味深い。

なお、知立では、プラス評価とマイナス評価とがほぼ拮抗しているが、上述のように若年層ではマイナス評価の方に傾きつつあるようである。

c. 「東京のことば」の評価

最後に「東京のことば」について（表10）。

桑名をのぞいては、いずれの地点においてもプラス評価が多くなっている。その傾向は特に若年層に著しい。「東京のことば」をもっとも高く評価するのは名古屋である。大都市名古屋が率先して「東京のことば」を好意的に受け入れている状況が見えるのである。ただし桑名においては「東京のことば」の評価はまだあまり高くはない。この点は表8とも対照されたい。

表9 「名古屋のことば」の評価

	印 象 (評価)	印 象 (評価)	印 象 (評価)	印 象 (評価)
老	じやけらくさい (-)	良くない (-)	良いことば (+)	柔らかみがある (+)
	分りにくい (-)	上品 (+)	女性的なことば (+)	別に感じない (0)
	ところさい (-)	柔らかい (+)	なまってる (-)	上品 (+)
	感じが悪い (-)	分りにくい (-)	もっとも良い (+)	柔らかい (+)
	まったくの方 (-)	汚ない (-)	まのびしてる (-)	女々しい (-)
	げさくい <下品> (-)	おもしろくて良い (+)	良いことば (+)	いやらしい (-)
	ふつう (0)	優しい (+)	別に感じない (0)	甘ったるい (-)
	別に感じない (0)	柔らかい (+)	ふつう (0)	柔らかすぎで良くない (-)
若	田舎っぽい (-)	ふつう (0)	良いことば (+)	なまってる (-)
	ちがっている (0)	知らない (0)	汚ない (-)	優しい (+)
	知らない (0)	別に感じない (0)	別に感じない (0)	知らない (0)
	好きではない (-)	変ってる (0)	おかしなことば (-)	にごってる (-)
	おもしろい (+)	親しみやすい (+)	汚ない (-)	知らない (0)
	きつくて乱暴 (-)	丁寧ではない (-)	汚ない (-)	別に感じない (0)
	ひらべったい (-)	汚ない (-)	ふつうの日本語 (0)	猫みたい (-)
	何も感じない (0)	おもしろい (+)	汚ない (-)	汚ない (-)

桑名から

長島から

名古屋から

知立から

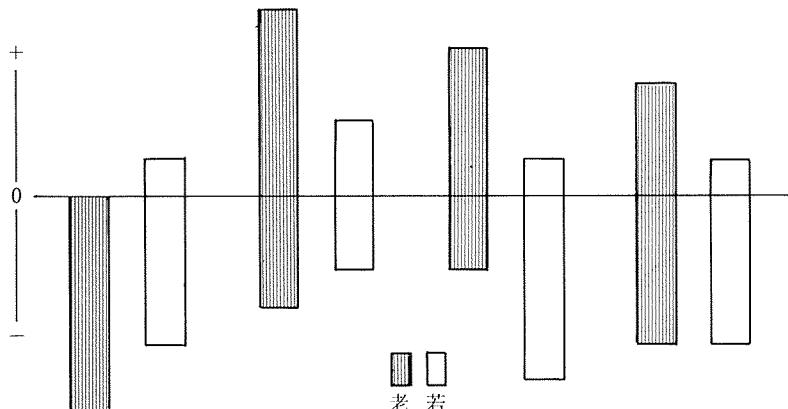


表10 「東京のことば」の評価

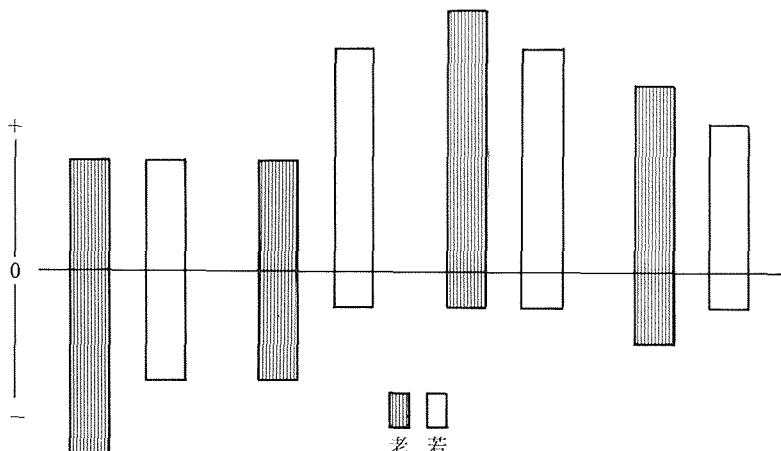
	印 象 (評価)	印 象 (評価)	印 象 (評価)	印 象 (評価)
老	えらそう (-)	なじみやすい (+)	はぎれが良い (+)	三百年前の三河ことば (+)
	きつい (-)	知らん (0)	語尾がはつきりしている (+)	別に感じない (0)
	とろくさい (-)	はぎれが良い (+)	つんとした感じ (-)	荒く粗雑 (-)
	てきぱきしている (+)	きつい (-)	はぎれが良い (+)	はつきりしている (+)
	きつい (-)	はぎれが良い (+)	はぎれが良い (+)	男らしく簡潔 (+)
	はぎれが良い がきつい (-)	きつい (-)	粹なことば (+)	語尾がきつい (-)
	丁寧 (+)	知らない (0)	明確ではつきりしている (+)	元気が良い (+)
	きれい (+)	固苦しい (-)	きれいだ (+)	いさましい (+)
若	ぼっちゃんぽい (-)	冷たい (-)	国会議員のことば (-)	特に感じない (0)
	マッポ<police>のことば (-)	標準語 (+)	標準語 (+)	丁寧 (+)
	おとなしい (+)	標準語 (+)	ふつう (0)	標準語 (+)
	固い (-)	聞きやすい (+)	標準語 (+)	知らない (0)
	別に感じない (0)	分りやすい (+)	標準語 (+)	固苦しい (-)
	上品 (+)	別に感じない (0)	丁寧 (+)	別に感じない (0)
	標準語 (+)	標準語 (+)	都会的 (+)	共通語 (+)
	別に感じない (0)	優しい (+)	ニュースのことば (+)	翔んでる (+)

桑名から

長島から

名古屋から

知立から



さて、以上の方言意識の様相が、具体的な方言変容にどのようにからむのかという点の検証のために、以下、言語事象の実態を個別に見ていくことにしたい。

4. 方言変容の状況

まず、各項目について、地域差と年層差の実態に焦点を当てる。

はじめに、音韻関係について。例の名古屋での母音の融合化した音(æ: , ϕ , $y:$)の動向について見る。

- (1) 「蠅」(質問文「(絵)夏、たくさん出て食物にたかる、この虫を何と言いますか。」) ……表11

年層差がはっきりと出ている。老年層での発音は [hai] が一般なのに対して、若年層では [hae] で、変化は歴然としている。いわゆる標準化である。なお、名古屋の老年層の一部は [hæ:] で、これは当地の音韻体系に従った形であるが、しかし、この音は周辺に影響を及ぼすことはまったくなく、名古屋のなかで消えつつあるものようである。

- (2) 「白い」(「色のことについてですが、『黒い』の反対は何と言いますか。」) ……表12

[s_{iro}:] の形は名古屋の老年層、しかも明治生まれの人に限られており、あとは全般に [s_{iroi}] である。名古屋の老年層の一人に [s_{ire}:] の形が聞かれるが、これは [s_{irφ}:] からの変形であろう。[s_{irφ}:] の音も周辺に影響を及ぼすことなく、消滅しつつあることがわかる。

- (3) 「寒い」(「『暑い』『あったかい』の反対は何と言いますか。」) ……表13

第2音節の子音には [b] と [m] とがあるが、両形の出現に関する地域差、年層差ははっきりは見えない。ただし、若年層では [b] が減退しているようである。[s_{aby}:], [s_{amy}:] の形はやはり名古屋の老年層に限られており、若年層には引き継がれてはいない。また、周辺に影響を及ぼしてもいい。名古屋の若年層の一人に [s_{ami}:] の形が聞かれるが、これは [s_{amy}:] からの変形であろう。

表11 「蠅」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ● ● ●	○ ○ ○ ○
若	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
	● [hæ:]	○ [hai]	○ [hae]	

表12 「白い」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ● ● ●	○ ○ ○ ○
若	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
	● [ʃirɸ:]	● [ʃire:]	○ [ʃiroi]	

表13 「寒い」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ● ● ●	○ ○ ○ ○
若	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
	● [saby:]	● [samy:]	○ [sami:]	○ [sabui]
				○ [samui]

(4) 「お前」(「相手をさして『お前』と言うとき, どのように言いますか。」) ……

表14

この項目は注目される。名古屋の老年層での [omæ:] は, 音韻体系に従った形で, 母音自体のバリエーションの問題であるのだが, 若年層では実は, 母音は変えずに, 拗音化した [omja:] の形で発音されているのである。これは 8 母音 (i, e, a, o, u, æ, ɸ, y) から 5 母音 (i, e, a, o, u) へという母音体系の変化を背景とした動きと考えられる。そして, 興味深いのは, この拗音化した [omja:] の形が周辺へ影響を及ぼしている様子がうかがわれる事である。長島や桑名の若年層にこの [omja:] が聞かれるのである。しかし, これはあくまで併用としてのもので, 長島では 5 人の併用者のうち 3 人までが“ふざけて言うとき”とコメントしているし, また桑名では“けんかのとき”とことわっている。したがって, これらの地では名古屋の影響を間接的に受けているのだが, しかし, その受け入れ方は, 規範を志向するといった方向とは異なるものようである。これはさきほど述べた, この地に影響を与えていたという名古屋ことばの実体をうかがわせるものである。なお, この [omja:] の形は知立の方ではまったく現われてはいない。

(5) 「出した」(「物を中から外へ出すとき, 『ダシタ』と言いますか, それとも『ダイタ』と言いますか。」) ……表15

文法と音韻にからむ項目であるが, イ音便形の [daita] は長島より東の老年層に現われている。この形は中部地方に多く見られるものである。名古屋の老年層のみは, これが [dæ:ta] の形で現われている。しかし, 若年層では知立の一人をのぞいてほとんど [daʃita] と入れ替わってしまっている。

(6) 「白くなる」(「色のことについてですが, 『シロクナル』と言いますか, 『シリナル』と言いますか。」) ……表16

文法に関する項目で, 例の形容詞の音便形の動向であるが, ウ音便形 [firo-(:)naru] が老年層では全域で大勢を占めているのに対して, 若年層では標準形 [jirokunaru] が, 特に名古屋, 知立で圧倒的で, [ʃiro-(:)naru] を駆逐している状況がわかる。しかし, その標準化の程度には地域差が存在するようで, 桑名ではまだ [ʃironaru] を根強く残存させている。標準化にも地域によ

表14 「お前」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
		老	老	老	老
老		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ● ● ●	○ ○ ○ ○
		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ● ● ●	○ ○ ○ ○
若	*	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
	*	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

● [omae:] ○ [omja:] □ [omai] ○ [omae]
 *けんかのとき *ふざけていうとき

表15 「出した」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
		老	老	老	老
老		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ● ● ●	○ ○ ○ ○
		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ● ○ ○	○ ○ ○ ○
若		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

● [dæ:ta] ○ [daita] ○ [daʃita]

表16 「白くなる」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
		老	老	老	老
老		◀◀◀◀◀	◀◀◀◀◀	◀◀◀◀◀	◀◀◀◀◀
		◀◀◀◀◀	○ ◀ ○ ◀	◀◀◀◀◀	◀◀◀◀◀
若		○ ◀◀◀◀	◀ ○ ○ ◀	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
		◀◀◀◀○	○ ○ ◀ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

▲ [firo:naru] ▲ [fironaru] ○ [sirokunaru]

る遅速のあることが認められるのである。

- (7) 「買った」（「お金を支払って品物を手に入れるこれを『カッタ』と言いますか、それとも『コーダ』と言いますか。」）……表17

東西両方言を分ける指標とされる項目であるが、桑名と長島との間が大きな境目になっていることがわかる。ただし、長島、名古屋での老年層にも若干 [ko:ta] が聞かれる。[ko:ta] は桑名では若年層においてもいまだ根強く保存されている。

- (8) 「貰った」（「人から物をもらった時『モラッタ』と言いますか、それとも『モロータ』と言いますか。」）……表18

前項と同様の範疇の項目である。やはり、桑名と長島の間に境界がある。長島、名古屋にも若干 [morota] の形が存在している。なお、[muratta] という形が名古屋、知立の一部に現われている。

- (9) 「貸す」（『借りる』の反対は何と言いますか、物を借りに来たらどうしますか、どうすると言いますか。）……表19

全域で [kasu] が見られるが、老年層の一部に方言形の [kaseru] が存在する。しかし、この形はすでに勢いを失っている。

- (10) 「箸」のアクセント（絵を示し、「箸」の文字を読ませる）……表20

東京式の形 ([$\overline{\circ}\circ$]) と京阪式の形 ([$\circ\overline{\circ}$]) は老年層においては、従来の記述の通り、長島と桑名の間の揖斐川（・長良川）を境としてはっきりと対立していることがわかる。しかし、隣接する桑名の若年層ではその半数が東京式の形に発音するようになっていることが注目される。

- (11) 「日(が)」のアクセント（「日がのぼる」という文を読ませる）……表21

従来 [$\overline{\circ}(\circ)$] 形と [$\circ(\overline{\circ})$] 形とが尾張と三河の境界で対峙していると指摘されているが、老年層においては、まさに名古屋と知立とで歴然とした対立がある。ただし、名古屋の若年層には [$\circ(\overline{\circ})$] 形への変化が著しい。一方、長島、桑名などでは [$\circ(\overline{\circ})$] 形への変化のきざしはまだ見られないのである。東京化への流れは、やはり大都市、名古屋が先行しているということがここにも認められるのである。

- (12) 「名古屋」のアクセント（「名古屋」の文字を読ませる）……表22

表17 「買った」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	◀◀◀◀◀	○◀○○○	◀○○○○	○○○○○
若	◀◀◀◀○	◀○○○○	○○○○○	○○○○○
	◀ [ko:ta]	○ [katta]		

表18 「貰った」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	◀◀◀◀◀	○○○○○	◀○○○○	○○●●○
若	◀◀○○◀○	◀○○○○	○●○○○	○○○○●
	◀ [moro:ta]	◀ [morota]	○ [moratta]	● [muratta]

表19 「貸す」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	○○○○○	○○●○○	○○○○●	○○○○○
若	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○
	○ [kasu]	● [kaseru]		

表20 「箸」のアクセント

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	△△△△	○○○○	○○○○	○○○○
若	△△△△	○○○○	○○○○	○○○○
	△ [○○]	○ [○○]		

表21 「日(が)」のアクセント

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	△△△△	△△△△	△△△△	○○○○
若	△△△△	△△△△	△△△○△	○○○○
	△ [○(○)]	○ [○(○)]		

表22 「名古屋」のアクセント

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	●●○○	○●●○	●○○○	○●○●
若	○●●○	●●●○	○○○○	○○○○
	● [○○○]	○ [○○○]		

[○〇〇]形のアクセントは老年層に散在しているが、若年層では皆無であった。ただし若年層の場合、自然会話では[○〇〇]形もかなり傍受された。インフォーマントは、フォーマルな形は[〇〇〇]形と意識しているようであり、この項目については文字を読ませるだけではなく、さまざまに文体を変えて調査してみる必要があろう。

- (13) 「から」(「『雨が降っているから行くのはやめろ』ということを言ってみてください。」) ……表23

接続助詞「から」に対応する表現形の動向を見るために設定した項目だが、この地域は全体に「デ」の分布域で、地域差、年層差はほとんど見られなかった。

- (14) 「行かなかつた」(「『私は行かなかつた』ということを言ってみてください。」)
……表24

年層差が歴然としている。老年層は「イカナ^ンダ」が圧倒的であるのに対して、若年層にはいわゆる新方言形の「イカンカッタ」が全域で勢力を広げている。桑名では「イカヘン^ダ」という形が、また長島では「イカヘンカッタ」という、関西の若年層に席巻している形が若干見られる。なお、標準形「イカナカッタ」は名古屋の3名と知立の1名に見られるだけである。

- (15) 「～シテミエル」(「あなたは『読ンデミエル』『書イテミエル』のような『～シテミエル』ということばを使うことがありますか。」) ……表25

東海地方特有の表現であるが、この表現は老年層においては全域で用いられており地域差はない。敬意面でプラスの評価が与えられている表現で“改まった表現”“敬った表現”“上品な表現”などといった内省報告が多い。“インテリ層が使う”という報告もあった。“新しい表現”と内省する人が各地にいることが注意を引く。いずれにしてもこの地方ではこの表現が方言形であるとの意識は希薄である。なお、若年層において「自分は使わない」との報告が多いが、これは現実においてそのような表現を使う場がない、あるいはそのような生活中まだなじまないということなのであろう。ちなみに、「使う」と答えた者の方が多くが“先生など目上の大人に使う”と答えていることにも留意したい。

表23 「降っているから」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老		● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ○ ●	● ○ ● ●
		● ● ○ ○	○ ○ ● ●	● ● ● ●	○ ○ ● ○
若		● ● ● ●	● ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
		● ● ○ ○	● ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

● ~デ ○ ~カラ

表24 「行かなかった」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老		▽ ▽ ▽ ▽	▽ ▽ ▽ ▽	▽ ▽ ▽ ▽	▽ ▽ ▽ ▽
		○ ▽ ▽ ▽ ▽	○ ▽ ▽ ▽	○ ▽ ○ ○	○ ○ ○ ○
若		○ ○ ○ ▽	○ ○ ○ ▽	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
		○ ○ ○ ▽	○ ○ ○ ▽	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

▽ イカナング
▽ イカヘンダ
○ イカンカッタ
○ イカヘンカッタ

表25 「~シテミエルという表現を使うか」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老		改 ● ●	● ○ 改	新 上	新 改
		敬 敬 改	改 新	改 ○	改 敬
若		* ● ●	● ● ●	* *	● ● *
		● * ●	● * ●	● ● *	● ● ●

| 使う ●自分は使わない
 改…改まった表現 敬…敬った表現 上…上品な表現 新…新しい表現
 ①…インテリ層が使う *先生など目上の大人に使う

- (16) 「食パン」（「『食パン』のことを『ショクパン』『ショッパン』、そのどちらで言いますか。」）……表26

名古屋、知立の方面でどちらかといえば「ショッパン」が優勢である。桑名は「ショクパン」が圧倒的、長島はその緩衝といえようか。年層差はないようである。

- (17) 「自転車」（「『自転車』のことを『ジテンシャ』『ジデンシャ』、そのどちらで言いますか。」）……表27

「ジデンシャ」と「ジテンシャ」が全域で拮抗しており、地域差、年層差はほとんど見られない。

- (18) 「ケッタ〈自転車の俗語〉」（「『ケッタ』と言ったら何のことか知っていますか。使いますか。」）……表28

年層差がはっきりと出ている。各地ともに老年層はまったく使用しない。しかし、若年層の使用は圧倒的である。なお、この語は、この地方特有の俗語で東京や関西ではあまり知られてはいない。

以下の項目では、「愛知・岐阜・三重県境言語地図」を利用しつつ、その動態を見ていくことにしたい。この地図のデータは老年層を対象としたものであるが、図1に示したように、その年齢にはかなりの幅がある。なお、図1には性別も記した。男女比は65対35となっている。

- (19) 「よだれ」（「赤ん坊がよく口から水のようなものをたらしていることがありますか、その水のようなもののこと何と言いますか。」）

図2を見ていただきたい。ヨドとヨダレが長島あたりを緩衝として東西で対立している。ヨドはある時期勢力をもって三重側に入りこんだと推測される。しかし、若年層においてはいまやその流れがとどまり、ヨドは逆に各地で衰退しはじめている。

表29によれば、特に名古屋での衰退が著しく、ここでの若年層では全員がヨダレに変わってしまっていることがわかる。なお、これは西からの影響ではなく標準化であると認められる。

- (20) 「恐ろしい」（「大きな犬が何匹もほえかかって、いまにもかみつきそうにな

表26 「食パン」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
		老	若	老	若
老	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
若	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
老	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
若	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

● ショッパン ○ ショクパン

表27 「自転車」

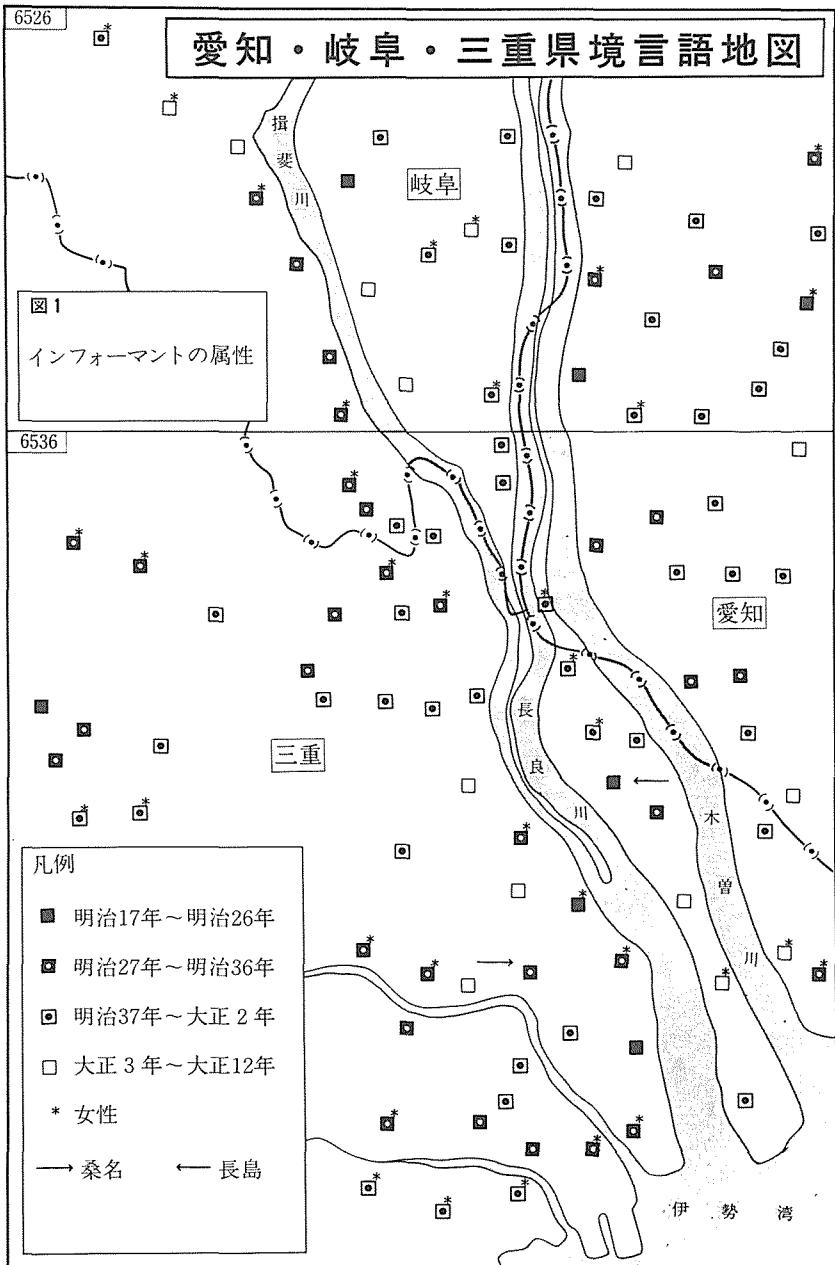
		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
		老	若	老	若
老	○ ● ● ○	● ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ●	○ ● ● ○
若	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○	● ○ ○ ○	● ○ ○ ○
老	○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○	● ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○
若	● ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○	● ○ ○ ○	● ○ ○ ○

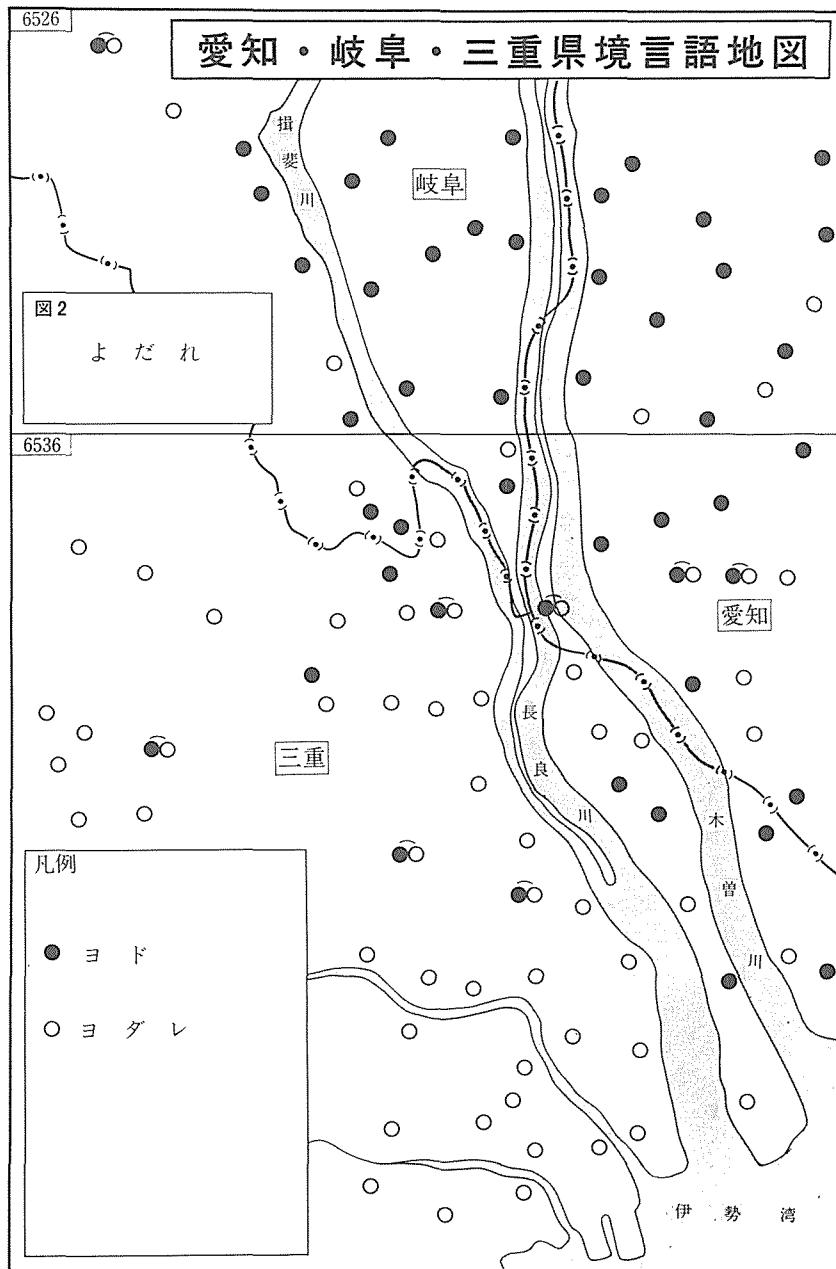
● ジデンシャ ○ ジテンシャ

表28 「ケッター(自転車)という語を知っているか, 使うか」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
		老	若	老	若
N	N N N N	N N N N	N N N N	N N N N	N N N N
N	N N N N	N N ○ N	N N N ○	N N N N	N N N N
●	● ● ● ●	● ○ ● ●	● ● ● ●	● ○ ● ●	● ○ ● ●
●	● ● ● ●	● ○ ● ●	● ● ● ●	● ○ ● ●	● ○ ● ●

N 知らない ○ 知っている ● 使う





る。そんな時の感じをどんなだと言いますか。」)

図3によれば、愛知側にはオソガイ ([osogæ:] [osoga:] なども含む) が分布する。三重側にはオソロシイとコワイが混在しているが、コワイはオソロシイの上にかぶさるような形で分布している。コワイとオソロシイの併用地点では、いずれからも前者コワイの方が新しいと報告されている。したがって、この地では、

オソロシイ>コワイ

の変化がおこっているのである。

この変化は表30においても検証することができる。若年層ではコワイが圧倒的な勢力を広げているからである。その状況は名古屋や知立などの本来オソガイの地域においても同様である。ただし、若年層におけるコワイの拡大については、西からの影響というよりも、どちらかというと、やはり東京での運用状況を背景とした共通語化であるとみなすべきものであろう。

(21) 「かかと <踵>」(「(絵)足のこのへんのことを何と言いますか。」)

図4によれば、カガトの形が全域に分布している。三重側にはキビスも散見する。

表31からは、カガトから標準形カカトへの激変が読み取れる。桑名の老年層には若干キビスも現われているが、若年層においては皆無となっている。長島と知立の若年層にN R (「知らない」) が見られますが、ここには<踵>が若い世代において無関心のものになってしまっていることが示されていよう。その名称ももはや伝承されないのである。まさに現代の情況を示す一例といえる。

(22) 「梅雨期」(「夏の始めごろの長く雨の降り続く時期のことを何と言いますか。」)

ニューバイが愛知、岐阜側に分布している。一方、セツが三重側に分布している。その中間地帯にツイリの類が見られる(図5)。なお、知立にはシケという形も存在する。

このような老年層における語形のバリエントの多さにくらべ、表32で見るごとく若年層での語形は単調である。いまや全域で標準形ツユが一般化しつ

表29 「よだれ」

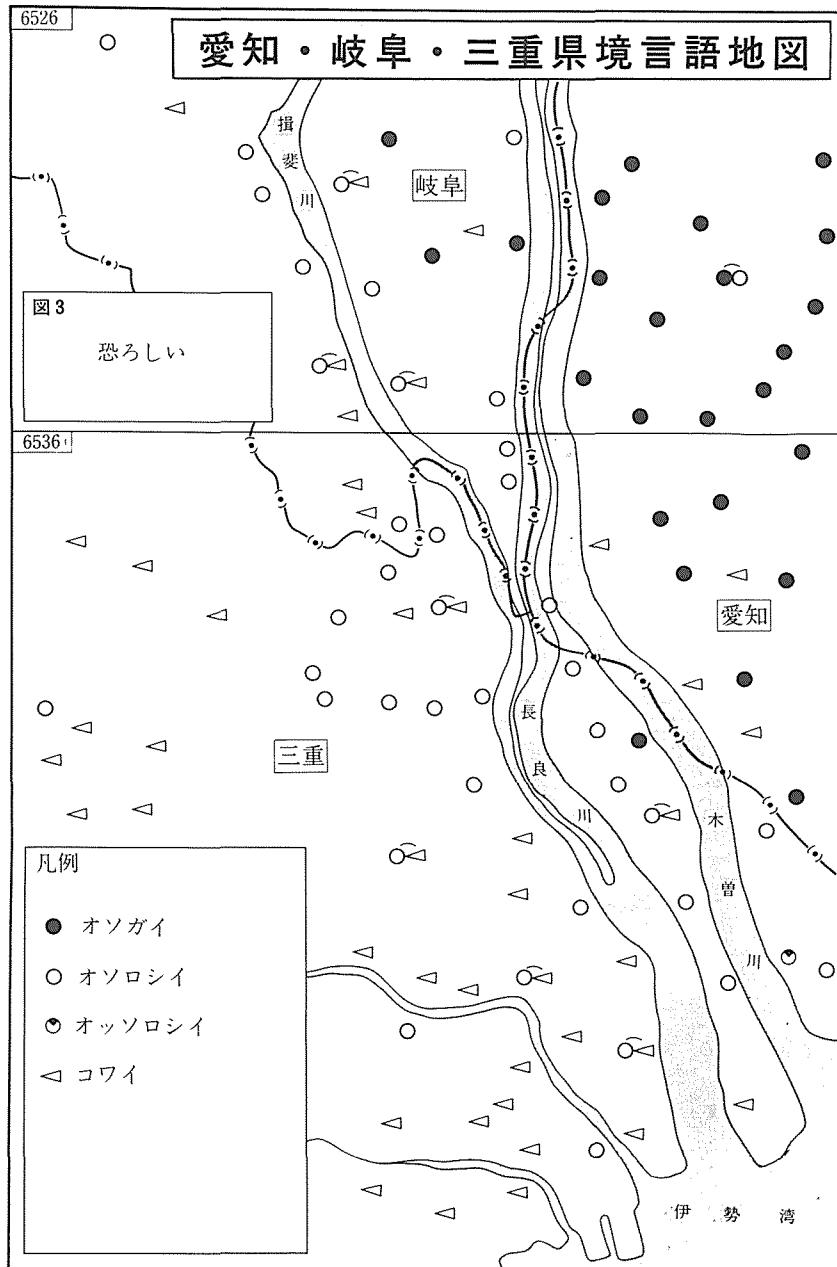
	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	○ ○ ○ ○ ○	● ● ○ ○ ●	○ ○ ● ○ ○	● ○ ○ ○ ○
若	● ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○
	● ヨド	○ ヨダレ		

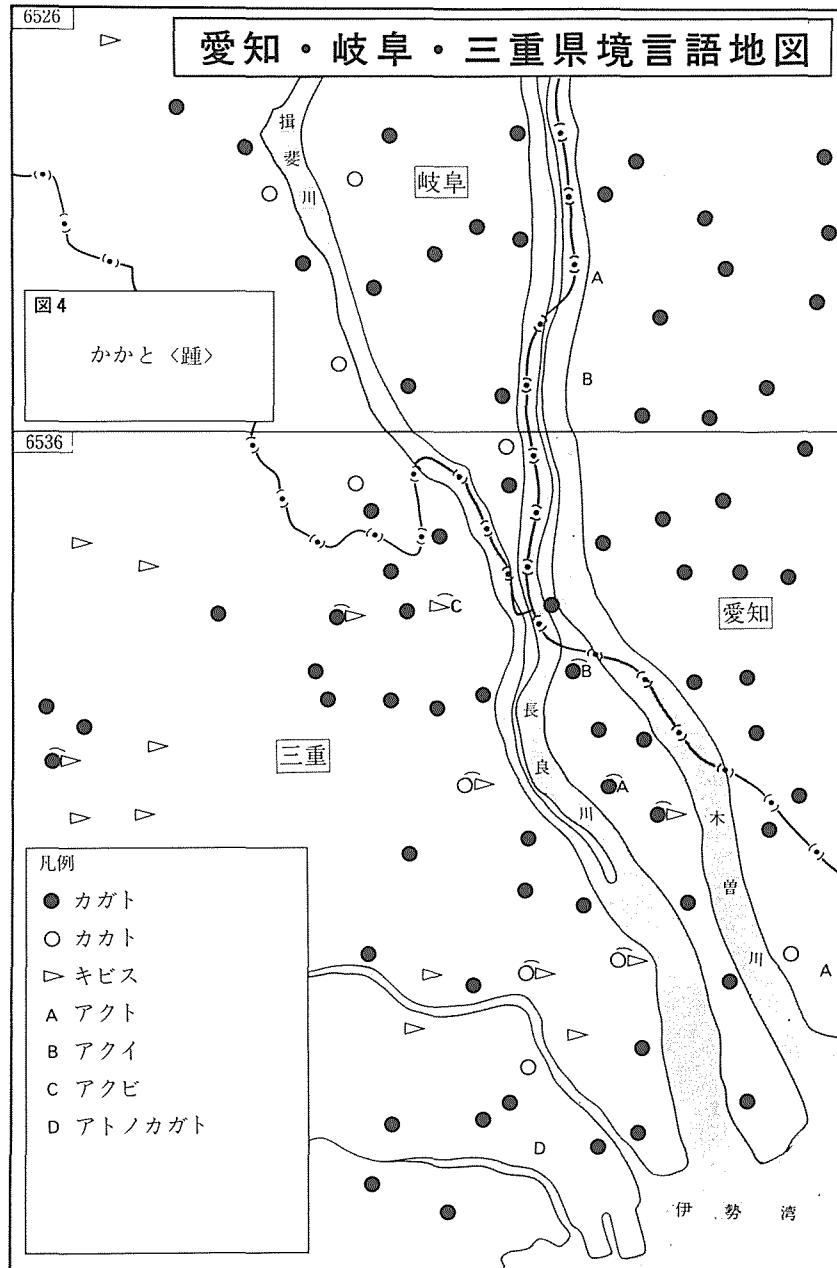
表30 「恐ろしい」

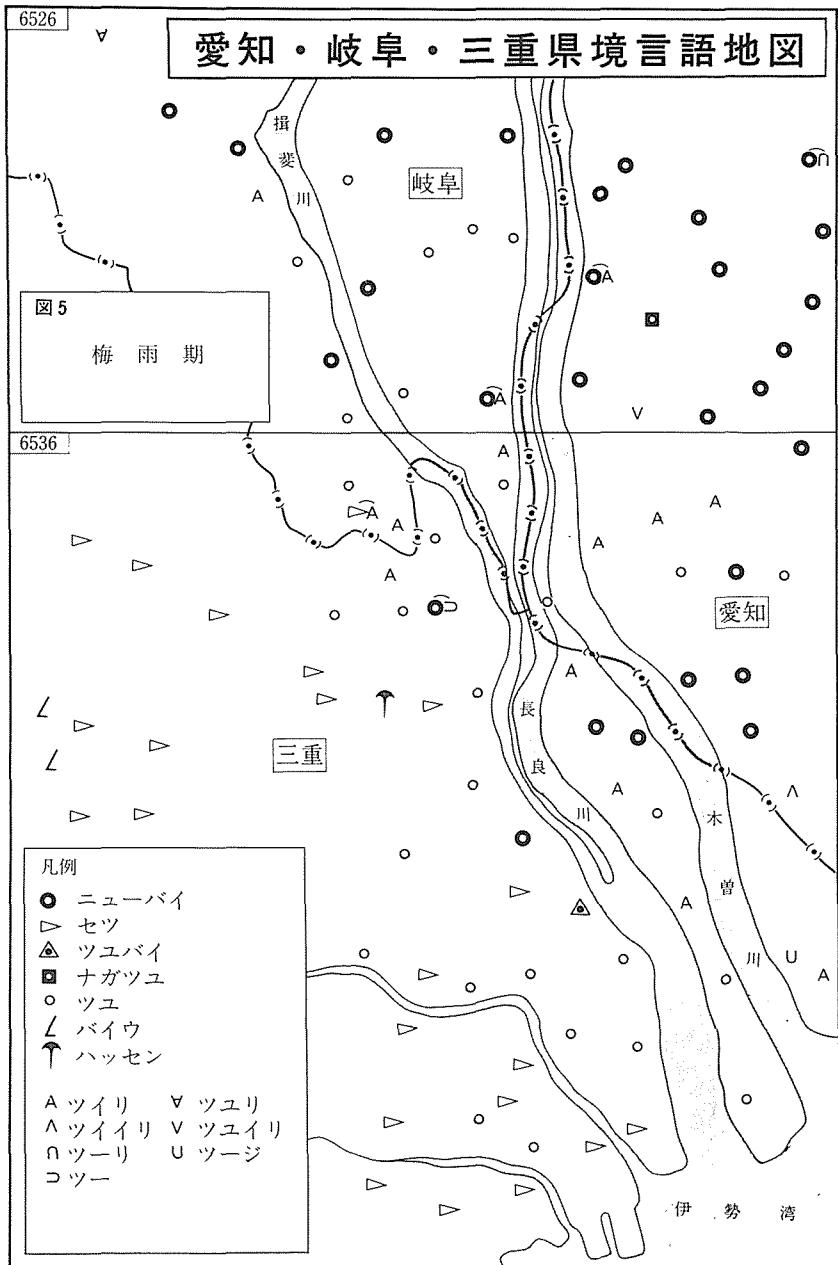
	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	△△○△△	○△○○△	●●△○○	●●●●●
若	△△△△△	○△○○○	△△△△△	△●△△△
	△ コワイ	○ オソロシイ	○ オッソロシイ	● オソガイ

表31 「かかと<踵>」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	△○△○△	●●●●●	●●●●●	●●●●●
若	●●●●○	○○○○NR	○○○○○	○ NR ○ ○
	△ キビス	● カガト	○ カカト	NR 知らない







つあるようである。

(23) 「(大根を) 煮る」(「大根をなべに入れて、みそやしょうゆを入れて火にかける。そうすることを大根をどうすると言いますか。」)

タクとニルとがまったく混在している。どの地域においてもそれぞれの語形のまとまった分布域は見られないようである(図6)。

しかし、表33によれば、西からのタクの勢力は本来的に知立方面までは及ばなかったものようである。老年層において、桑名、長島ではタクとニルとが拮抗しているが名古屋でのタクの勢力は弱く、若年層では標準形ニルに圧倒されて皆無となっている。

(24) 「いい(天気だ)」(「空が晴れて日が照っている。そんな時、きょうの天気はどんな天気だと言いますか。」)

図7によれば、エーが全域に濃く分布している。イーも全域で見られるが勢力は弱いようである。ヨイは4地点で見られるにすぎない。なお、別語形とは「上(天気だ)」「結構な(天気だ)」などの表現を一括したものである。

ところで、表34では西から東へのエーからイーへの移行的状況が見える。ただし、若年層においてはエーが桑名では100%であるのに対し、長島では皆無となっており、長良川をはさんで大きな断層があることが注目される。

(25) 「(いい天気) だ」(同上)

ダは愛知側に濃く分布するが、木曽川を越えた岐阜側や三重側にも散見する。一方、ジャは岐阜側に比較的多く、三重側はヤが圧倒的である。愛知側にもそれぞれ一地点ずつジャとヤが見られる(図8)。

表35によれば、名古屋以東はまったくダの世界であることがわかる。長島では、ジャが老年層の一人に使われているものの、若年層では姿を消している。老年層に多いのはヤであるが、このヤも若年層においては過半数を割ってダに圧倒されつつある。ダは標準形としての権威を背景に、いまや木曽川を越えて三重側へなだれこみつつあるといった状況である。

(26) 「里芋」(「(絵)これを何と言いますか。茶色の毛が生えていて煮るとぬるぬるします。いろいろ種類がありますが、ひっくるめて何と言いますか。」)

図9によれば、ジイモという語形が愛知、岐阜側に濃く分布している。ツ

表32 「梅雨期」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	▷▷▷○	○○○○	○○○○○	○B○○OB
	▷▷▷○	○▷○○	○○○○○	○○○B○B
若	○○○○	○○○○	○○○○○	C○○○○
	○○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○

▷ セツ ○ ニューバイ ○ ツユ B シケ C ウキ

表33 「(大根を)煮る」

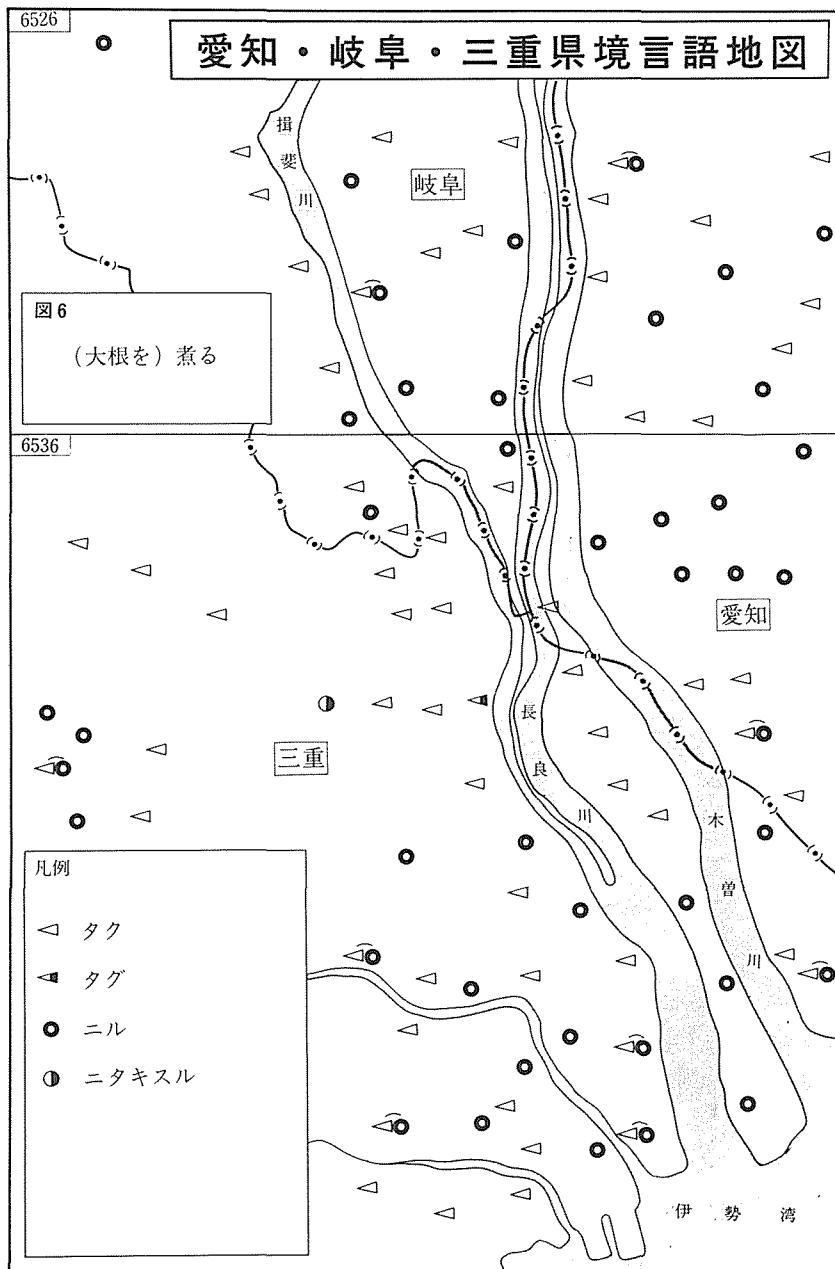
	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	○△○○△	○○△○	△△○○△	○○○○○
	△○○△△	○△△△△	○○○○○	○○○○○
若	○○△○	○○○○△	○○○○○	○○○○○
	○△△○	△○○○	○○○○○	○○○○○

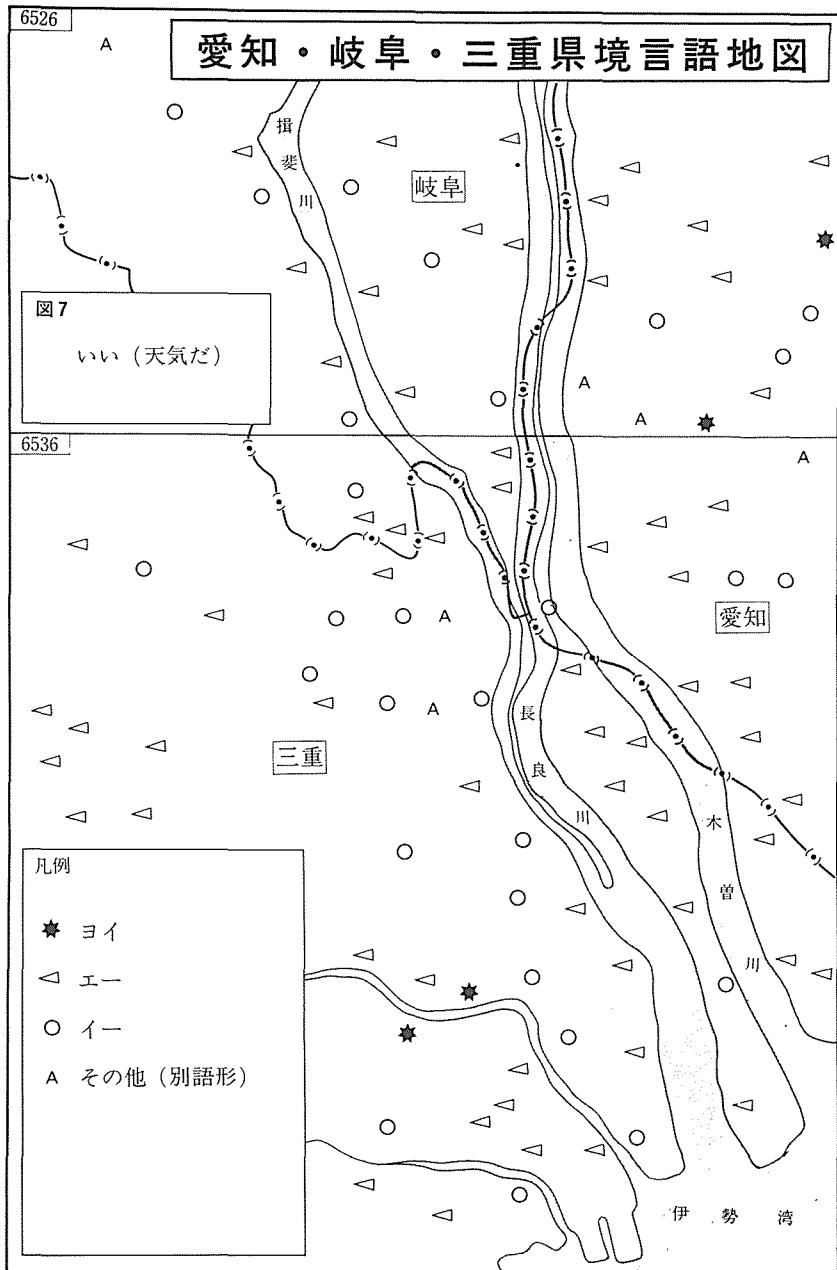
△ タク ○ ニル

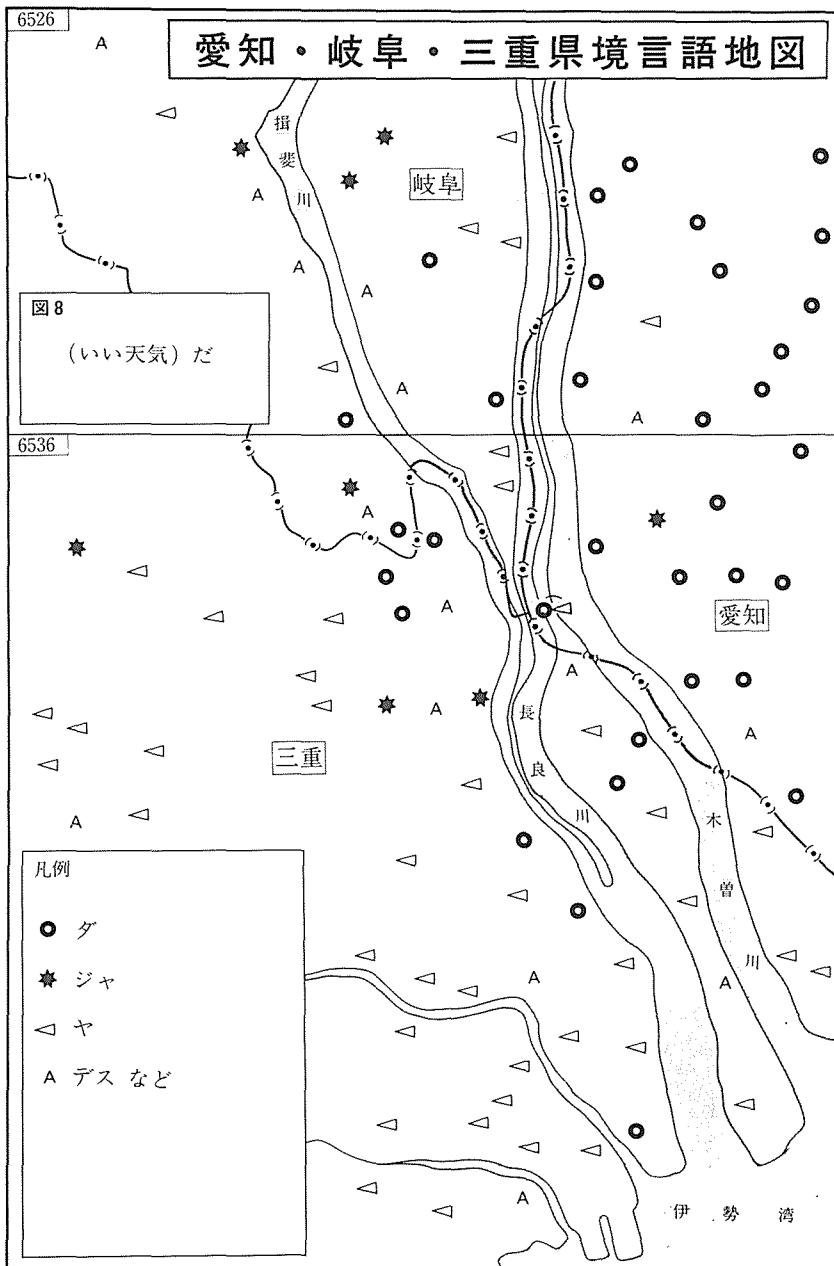
表34 「いい(天気だ)」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	A△△△	△△△△△	△△○△△	○*△○○
	△△△△△	△△△△○	△△△△△	○△○△△
若	△△△△△	○○○○○	△○○○○	○○○○○
	△△△△△	○○○○○	○○○○○	○○○○○

△ エー ○ イー * ヨイ A ジョー







チイモも点在するが、これはジイモの〈地芋〉に対する〈土芋〉であろう。三重側では北から、ハタイモ、タダイモ、ト(一)ノイモがそれぞれに領域をもって存在している。比較的語形変種の多い項目といえる。

表36によって、標準形サトイモの浸透の様相がうかがわれるが、長島ではジイモ、タダイモ、ハタイモも錯綜して現われており、若年層においてもいまだジイモの使用がめだっている。なお、桑名、名古屋、知立の若年層にそれぞれ1人ずつ、単なるイモの形が見られる。また、名古屋で、いずれも併用ではあるが、ケイモという表現が現われている。〈毛芋〉という見立てであろう。

- (27) 「(塩味が)うすい」(「汁などを作った時、塩の味が足りないのを言うのに、この汁の味はどんなだと言いますか。」)

図10によれば、ミズクサイが全域に濃く分布している。この地域はミズクサイの勢力範囲なのである。ただし、木曽三川河口から三重側にかけて古形アマイがかなりの地点で見られる。標準形ウスイも全域にわたって点在する。なお、愛知側の2地点に見られるニスイは、この方言では本来〈弱い〉という意味を表したものである。意味の拡大が生じたものと思われる。

ところで、表37で見るよう、この項目では若年層においても、かなり方言形が使われている点に興味がそそられる。家庭生活にかかわる項目では方言が比較的保たれるという事例とすべきか。

- (28) 「まぶしい」(「太陽を見るとあまり明るいので目があけられないような感じがします。その感じをどんなだと言いますか。目がくらむとはちがいます。」)

図11によれば、ヒドロイ、ヒドルイの類が愛知側に、マバイ、ママイの類が三重側に主として分布している。その緩衝にマバユイ、メバユイの類が錯綜して分布する。ともかくこの項目に関しては、語形の変種が著しく多い。

当該地域での孤例は次の通りである。

マムシイ マブイ カガハイイ ハガユイ メバシイ マバシイ ヤドロイ

これらのうち、メバシイはメバユイとマブシイとの、またマバシイはマバ

表35. 「(いい天気)だ」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
		A ◀◀◀	★◀◀◀	○○○○○	○○○○○
老		◀◀◀○○	◀◀◀	○○○○○	○○○○○
		◀◀◀	○○○○○	○○○○○	○○○○○
若		◀◀◀	○○○○○	○ A ○○○	○○○○○
		◀◀◀○○	◀○○ A	○○○○○	○○○○○

◀ ャ ★ ジャ ○ ダ A Ø (該当部分なし)

表36 「里芋」

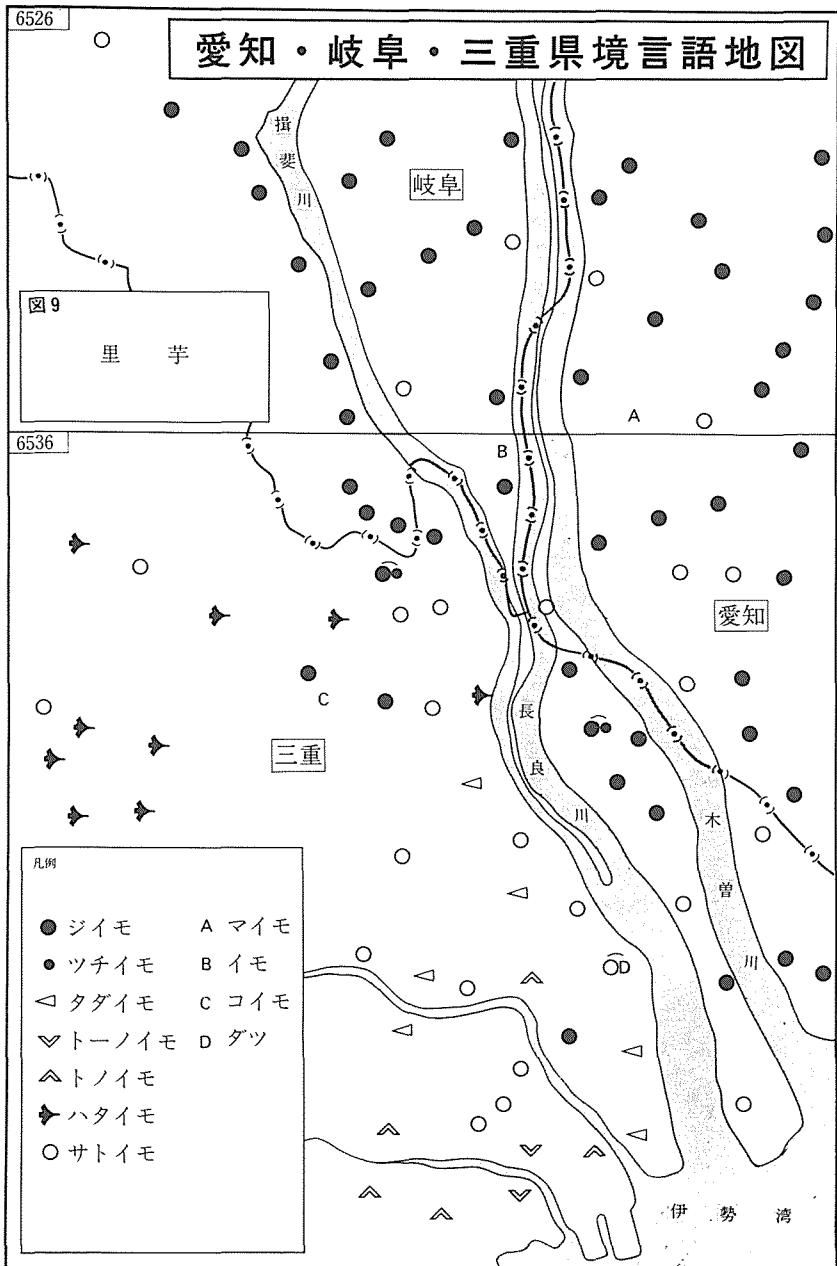
		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老		○○○○○	●◀○●△○	○○●○○ E	○○○○○
		○●○○○	○○○○○	●○ D ●○	○○○○○
若		○○○○○	○●●●○	○○○○○	○○○○○
		B ○○○○	●○○○○	B ○○○○	○○○○ B

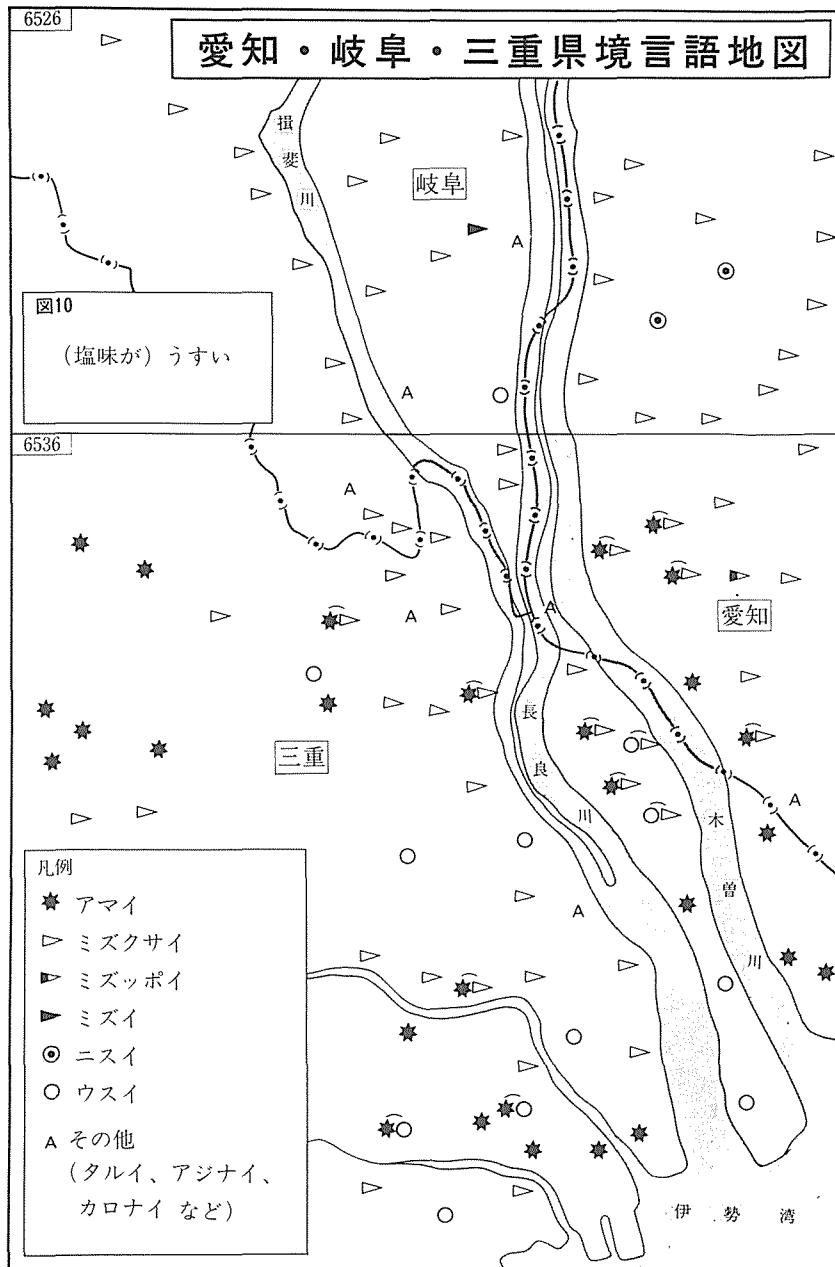
● ジイモ ▲ タダイモ → ハタイモ ○ サトイモ
D ダツイモ E ケイモ B イモ

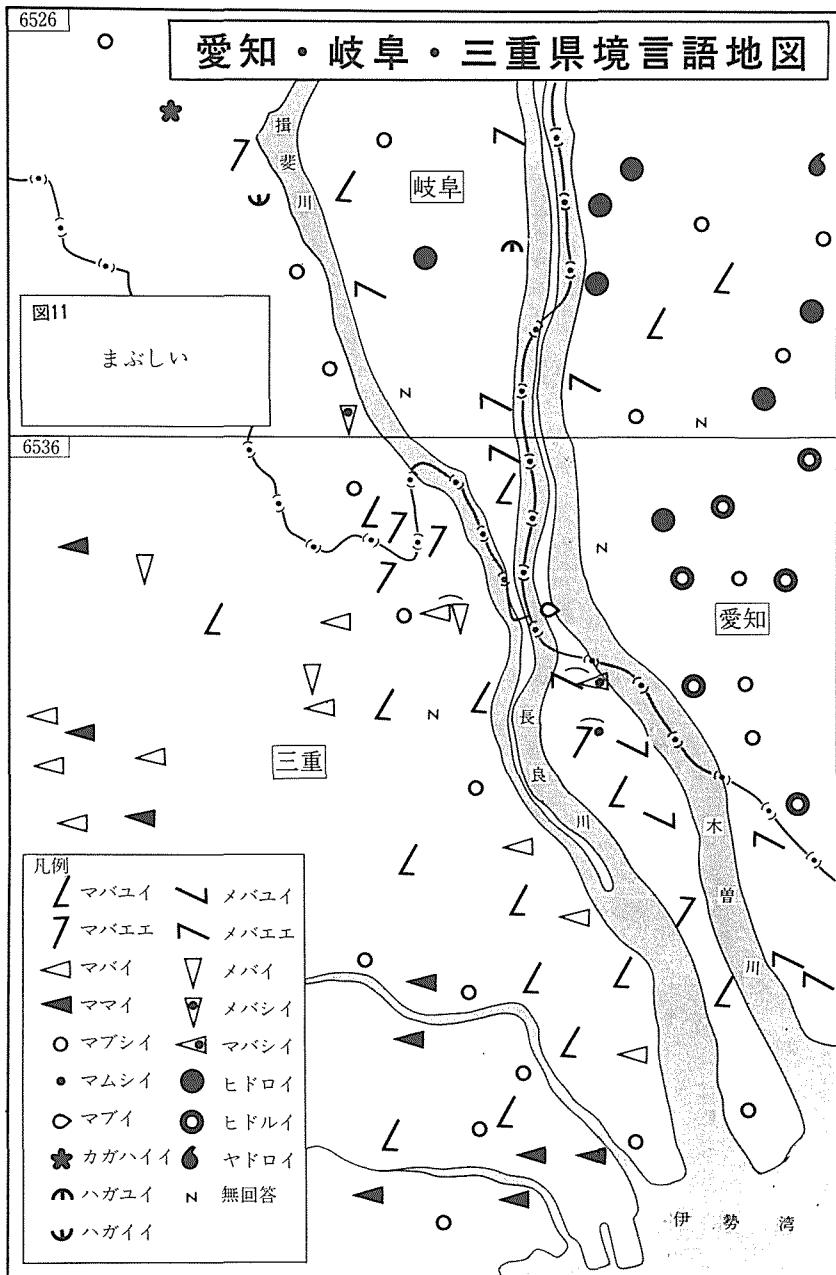
表37 「(塩味が)うすい」

		桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老		○ ▷▷★ ▷	○ ○ * * *	△○○▷	* * * *
		* ▷ * ○	○ ▷ ▷○	○○○○○	○ * ▷ * ▷
若		○ ○ ▷ ○	○ ▷ * ▷	○○○○*	○ ○ * ○
		○ * ○ ○	○ * ○ ○	▷○○○○	○ * * ○

* アマイ ▷ ミズクサイ ○ ウスイ ○ シオウスイ







ユイとマブシイとの混交形と認められる。

表38においても、孤例が見られる。桑名でのババイである。ただし、この表で上に孤例としたマブイ、マバシイが現われてくるので、これらは孤例ではなくなるわけである。若年層においては標準形マブシイが圧倒的となっている。

表38 「まぶしい」

	桑 名	長 島	名 古 屋	知 立
老	◀ L 7 ○	7 ▲ L L	● ○ L ●	□ □ □ □
	L 7 △ ○	L ○ 7 ○	● ○ ● N	□ L □ □
若	○ ○ ○ ○	○ ○ ◀ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ □ ○ ○

◀ ババイ L マバユイ 7 マバエエ ● ヒドロイ □ ヒズルイ
 △ マブイ ▲ メバエエ ▷ マバシイ ○ ヒドルイ ○ マブシイ

5. まとめ

以上、各事象について、地域差と年層差に焦点を当て、その動態を観察してきたが、言語項目に関しては、かつてのことはいざしらず、現況では、いわゆる純粹名古屋弁の周辺に及ぼす影響はほとんどなく、全体的に標準化が進行していることが判明した。のことと、方言意識の様相のところで見た“名古屋の影響が強くなった”というインフォーマントの内省とはどのように結びつくのであろうか。

注意したいのは、ここでの“名古屋の影響”的内容にはおそらく純粹名古屋弁そのものは含まれていないのだろうということである。若年層において名古屋弁の評価自体は多くの地点で低く出ているからである。ここでのインフォーマントのコメントは、あくまで名古屋を経由しての共通語(東京語)の普及の状況を意識した表現であると推測される。

東京語はまず大都市名古屋にくいこみ、そこをセンターとして周辺部、特

に西方へ勢力を広げているのである。そして、それは、まず長島へ、そして桑名へと移行的に浸透していることが明らかとなった（調査地点の中では桑名が東京語化に対する抵抗のもっとも強い地である）。したがって、この点からすれば、東西両方言の境界線はまさに漸次西へ移動しつつあると見做すこともできるであろう。

特殊方言音の地域差・年齢差

飯 豊 育 一

1. はじめに

山形県西田川郡温海町地区には、共通語の/ku/に対応して、しばしば[Φǖ]が聞かれる。筆者が最初にこれを耳にしたのは、1950年であった。国立国語研究所による鶴岡市民の言語生活の調査が行われ、特に共通語化の実態とその要因を明らかにしようとする推計学的調査は、方言と共通語との研究界においては画期的な調査であった。これは、1948年、占領軍民間情報教育部と協力して、読み書き能力調査委員会が全国の市町村270地点で行った読み書き能力調査の方法にヒントを得ていると言えるが、当時としては、斬新なものであった。その臨地面接調査が終了して、帰京の際、同じ庄内地方に属していても、鶴岡市と鼠ヶ関地区との間には、どのような言語差があるだろうか、調査しておきたいと思った。鼠ヶ関は新潟県との県境にもなっていて、その言語特徴はその意味でも注目された。そこで鼠ヶ関地区の言語調査を個人的に行うことにしてしまった。その結果、大まかな言語的特徴は鶴岡市等とほぼ同様であるが、共通語の/ku/に対応して[Φǖ]が聞かれるという顕著な事実を知った。

[Φǖseba] (来れば), [Φǖsūito] (来ると), [Φǖsūika] (来るか), [Φǖsi] (櫛), [Φǖ:] (食う), [Φanε:] (食わない), [Φǖε:] (暗い), [ΦǖrǖΦǖrǖ] (クルクル), [Φanǖgī] (桑の木), [Φäzi] (火事)

そのことを、内々の話題では報告したが、これを正式の調査に採り上げる機会を失していた。今回、この件で、調査することが可能になったことを喜びとする。

しかし、この間に、『金沢大学語学・文学研究』（創刊号）に「石川県珠洲市方言の“ク”と“フ”」が川本栄一郎氏によって報告された。これによると石川県の珠洲市方言や能登島方言にも同様な事象が見られるばかりでなく、共通語/hu/に対応して [ku] の行われたらしい例もみられるという。すなわち、古い方言集をみると、

ク→フ の例として

ふし（櫛）、ふうき（空気）、ふさ（草）、ふび（首）、ふわのは（桑の葉）、
ふき（茎）、ふるま（車）、ふすり（薬）、ふり（栗）、ふらがり（闇）……

フ→ク の例として

くみ（文）、くね（舟）、くろしき（風呂敷）、くた（蓋）、くところ（懐）、
くで（筆）、くき（落）、くじさん（富士山）、くしき（不思議）、……

これについて、川本氏は次のように述べている。

あるいは、「ク」と「フ」が同じ音で [kɸɯ] と発音されていたのを方言集の筆者が、「ク」の訛りは「フ」にひきつけて書き取り、「フ」の訛りは「ク」にひきつけて書きとるということをしたために、「ク」と「フ」は全く逆に発音されているという表記のしかたになってしまったのではないかろうか（p. 103）。

そして「ク」と「フ」が同じ音の [kɸɯ] に訛ることになったのは、

- (1) 特に語頭にくる「ク」の場合に、[ku] の母音 [u] をはっきり発音しようとして唇に力がはいり、その影響で子音 [k] が唇音化し、同時に母音 [u] の唇音的性質が子音に吸収されて弱まり、[kɸɯ] という音が生じたのではないか。
- (2) 「フ」の場合はハ行音における [ɸ] → [h] という変化が「フ」に及んで [ɸɯ] が [hɯ] に変わったが、特に語頭では力がはいって破裂音の [k] が加わり、[kɸɯ] という音になったのではないか。
- (3) 「フ」の [kɸɯ] はあとで「ク」の [kɸɯ] に統合され、「フ」も「ク」も同じように [kɸɯ] と発音されることになったのではないか（p. 101）。この報告に述べられている事象は、山形県の鼠ヶ関地区に見られる事象とほぼ同一のものと思われる（ただし、その説に賛成するわけではない）。

すでに、その頃には、筆者は東北の全般を調査していたので、山形県西田川郡温海町地区のかなり広い範囲に、この「ク」→「フ」の事象の存することを知っていたが、「フ」→「ク」の事象は認められなかつたので、もし、石川県のこの地方に、この事象が認められるなら、それは注目すべきことである。しかし、川本氏も述べているように、それは、古い方言集に見えるだけであり、1969年当時においては、「ク」→「フ」の事象だけであったという。筆者の聞いた温海町地区の場合は、すべて「ク」→「フ」と言える事象ばかりであった。

したがって、この事象は、東北方言の「キ」→「チ」や東京方言の「ヒ」→「シ」の事象に類するものと思う。

(1) 「キ」→「チ」の例（石巻市）

[tʃimī] (君), [tʃīmafr̩] (きまり), [tʃō:kai] (協会), [tʃō:içū] (教育),
[tʃibūwaf̩i] (きみがわるい), [tʃintʃūr̩] (緊急), [kadʒūr̩] (柿を)

(2) 「ヒ」→「シ」の例（東京）

[ʃījaʃi] (東), [ʃīʃīʃi] (ひしひし), [ʃīʃoi] (広い), [ju:r̩si] (夕陽)

これらの場合、この逆の「チ」→「キ」や「シ」→「ヒ」の例はほとんど聞かれない。もし、あるとすれば、多くは誤った回帰に属するものが大部分である。「ク」→「フ」の場合もおそらく同様であろうと思う。

また、何故、共通語の /ku/ に対応して [ɸū] が現れるかについては、筆者は川本氏の見解に対して必ずしも賛成ではない。それらのことについては以下に述べたい。

ただし、ここで注意しておきたいのは、山形県温海地区と石川県能登地区とに共通して、同様な言語特徴が見られるということである。日本海沿岸は他の言語特徴にも、同じような例が見られる。すなわち、日本海沿岸に統いて、同じ言語特徴が急速に分布して行く姿を認めることもできるし、また、同じ言語特徴が、とびとびに分布している姿をとらえることもできる。これは、日本海が交通路として重要な役割を果たしていることを証するものでもあろう。たとえば東北方言の特徴とされる「イ・エの混同」「シ・ス、チ・ツ、ジ・ズ等の混同」等は能登半島各地や福井県三国町等にも認められるし、文法的

特徴の「オキラセル」(起きさせる)の使用等も同様である。日本海の交通と言語伝播についてはもっと十分に、調査を進めるべきであろう。

2. 調査の概要

2.1 調査の目的

山形県西田川郡温海町地区には、共通語の/ku/に対応して、しばしば、[Φɯ] [Φɯ̄]が聞かれる。これは、語種や地域や使用者の年齢等により、当然、差があるようであるが、その実態はどうであろうか。また、場面による差もあるようであるが、その実態は、どのようにであろうか。すなわち、/ku/→[Φɯ] [Φɯ̄]の実態を明らかにしようとするのが目的である。また、[kw] [kɯ̄]→[Φɯ] [Φɯ̄]がどのような過程を経て、現在のような姿に定着したのかも明らかにしたい。現実の方言の発音を観察することにより、その変遷・変化のプロセスを考察することは可能である筈である。

2.2 調査法

2.2.1 準備調査

1980年10月17日—10月23日の7日間にわたって、山形県西田川郡温海町において、準備調査を行った。温海町の戸沢、温海、浜中、小岩川、小国、越沢、鼠ヶ関の7地点と新潟県山北町である。この結果、次のようなことがわかった。

(1) 温海町地区的音韻的特徴は、概ね鶴岡市の特徴と同じであり、そのモーラ表は次のようになる。

'u	'o	'a	'ɛ	'e	-	'ju	'jo	'ja	'jɛ	'wa	'wɛ
ku	ko	ka	kɛ	ke	ki	kju	kjo	kja	-	kwa	-
gu	go	ga	gɛ	ge	gi	gju	gjo	gja	-	gwa	-
ŋu	ŋo	ŋa	ŋɛ	ŋe	ŋi	ŋju	ŋjo	ŋja	-	(ŋwa)	-
-	so	sa	se	se	si	sju	sjo	sja	-	-	-
-	zo	za	zɛ	ze	zi	zju	zjo	zja	-	-	-

-	co	ca	-	ce	ci	cju	cjo	cja	cje	-	-
-	to	ta	tε	te	-	-	-	-	-	-	-
-	do	da	dε	de	-	-	-	-	-	-	-
ru	ro	ra	rε	re	ri	rju	rjo	rja	-	-	-
nu	no	na	nε	ne	ni	nju	njo	nja	-	-	-
mu	mo	ma	mε	me	mi	mju	mjo	mja	-	-	-
Fu	Fo	Fa	Fε	Fe	Fi	Fju	Fjo	Fja	-	-	-
bu	bo	ba	bε	be	bi	bju	bjo	bja	-	-	-
pu	po	pa	pε	pe	pi	pju	pjo	pja	-	-	-
N	Q	R									

これについて、詳細な説明は控えるが、要点を次に述べる。

/i/ と /e/ の区別は設けない。人により [zefi] (襟), [zebi] (蝦) と言ったり [ibi] (蝦), [ifi] (襟) と言ったりする。さらに、また, [ze:] (家), [zeN] (縁)とも言い、いくつかの語について、使い分けがあるようであるが、改めて、発音させれば [ibi] [ifi] のようになり区別はなくなる。

/jε/ ; [Φajε:] (早い)

/wε/ ; [sawε:da] (さわいだ)

/kε/ ; [kε:] (貝), [takeε] (高い)

この /'ε/ と /'e/ との区別はすでに失っている人も多い。

/cjε/ ; [tʃittjε:] (小さい)

ハ行は高年齢層の人は多く [ɸ] 音を使用しているが、しだいに [h] 音が多くなりつつある。

[Φa] (葉), [Φε] (蠅), [Φēbi] (へび), [Φi] (火), [Φotaro] (ほたる), [ΦagūñN] (百円), [Φe:] (塙), [Φutoi] (大きい), [Φī:Φo:] (お手玉)……

(2) /ku/ → [Φu] [Φū] の例

[Φūdži] (くじ), [Φūsošebi] (くそへび), [Φurobosi] (くるぶし), [Φūbikofī] (肩車), [Φūŋi] (釘), [Φūdzū] (靴), [Φādži] (火事), [Φūdzibigī] (くじびき), [Φa] (桑), [Φakogi] (桑こぎ), [Φajo] (桑の実), [Φūfo] (田のあぜ), [Φa] (鍬), [Φasi] (菓子), [Φū:] (食う), [Φiba]

(食べば), [Φi:] (食え), [Φane:] (食わない), [Φefw] (くれる), [Φeda] (くれた), [Φuʃogeqta] (黒かった), [Φuʃfɪr] (栗), [Φuʃma] (熊), [Φuʃfɛ:] (暗い), [Φuʃsaʃtū] (腐る), [Φuʃdʒo] (苦情), [Φuʃgɪ] (茎), [Φuʃfʊbɪ] (くるみ), [Φuʃfʊsi] (苦しい, 古い), [Φuʃsi] (櫛, 串), [Φuʃsa] (草), [Φuʃbɪ] (首), [Φuʃmɪ] (組), [Φuʃbo] (くも), [Φuʃjasɪ] (くやしい), [Φuʃfʊma] (車), [Φuʃfa] (蔵), [Φi:Φuʃeda] (日が暮れた), [tosinoΦuʃfe] (年の暮), [Φasija] (菓子屋), [Φu:kçɪ] (空気), [Φu:] (食う), [Φenɛ:] (食えない), [Φefvɪ] (食える), [ΦedəbaΦe] (食いたいなら食え), [Φuʃvɪ] (来る), [Φuʃddojo] (来るとよ), [tonoΦuʃdzɪ] (戸口), [Φenɛ] (くれない), [Φeʃaenɛ] (くれられない), [Φeʃe] (くれよ), [Φedeko:] (くれてこい), [Φideko:] (くれてこい), [Φuʃmatombo] (おはぐろとんぼ), [Φuʃfʊʃɪ] (黒い), [Φuʃkeʃvɪ] (くける)

ただし, 語によっては, /ku/ → [Φu] の事象の現れにくいものもある。たとえば, 「クリーム」「低い」「国」「杭」「九谷焼」「癖」「九九」「会議」「会館」「官序」「丹波栗」「大栗」等は [Φu] は現れなかつたし, 「金釘」「竹釘」「竹串」「枯草」等の複合語も比較的に現れる率は低かった。

語中・語尾の「ク」に対応して, この方言では [gu] が現れるのが普通で [Φjagu] (百), [ʃɔ:sogu] (ローソク), [Φuigui] (服), [çigui] (低い), [tambaruʃi] (丹波栗), [o:pjuʃi] (大栗) のようになるので, /ku/ → [Φu] の事象は現れにくい。「菊」「地区」等は, 時には, 無声化して, 「kçɪkʊ」「tsɪkʊ」のような形になるが, [Φu] ではなかつた。

しかし, 複合語の場合には, たとえば, [kaʃeΦuʃsa] (枯草), [tonoΦuʃdzɪ] (戸口), [takeΦuʃsi] (竹串), [siføΦuʃma] (白熊), [kanaΦuʃji] (金釘), [ΦosoΦuʃbi] (細首) 等の例が見られた。

したがって, この事象については, 次のようにまとめることができそうである。

- (1) 語中, 語尾の「ク」は, たとえば, 「袋」「百」「菊」「低い」等は [Φuiguiʃo] [Φjagu] [kçɪgui] [çɪgui] のように有声化していることが多いが, [Φuʃkʊʃo] [Φjakʊ] [kçɪkʊ] [çɪkʊ] のような形もないわけではない。しかし, こ

の場合にも [Φɯ] [Φɯ̄] は聞かれなかった。ということは、[ku] → [Φɯ] の事象は、語中・語尾の [-k-] 音が有声化するという事象よりも後に行われたからであろう。すなわち、語中、語尾の [-k-] 音が有声化するという事象が成立して、[sagɯ̄laj] (桜), [kagɯ̄] (書く), [Φɯ̄gɯ̄] (服), [dogɯ̄dabɪ] (どくだみ) 等が整備された後に [ku] → [kū] の事象が起きたのであろう。それ故、複合語の意識の強いものには、たとえば、[ʃiʃoxɯ̄ma] (白熊), [kanaΦɯ̄jɪ] (金釘), [tonoΦɯ̄dʒɪ] (戸口) のように波及したが、それ以外の一般の語中、語尾の共通語/-k-/音に対応しては多く [-g-] 音が現われる故に [ku] → [Φɯ] の事象から免れることになったのであろう。

- (2) [k] → [Φ] の見られるのは、単に /ku/ のみでなく, /kwa/ に対応する場合にも同様である。たとえば、[Φasɪ̄] (菓子), [Φanɯ̄gī] (桑の木), [Φaŋō] (桑の実) 等であるが、「食う」の語形変化を見ると、[Φɯ̄:] (食う), [Φane:] (食わない), [Φaene:] (食われない), [Φɯ̄ta] (食った), [Φī:] (食え), [Φebaē:] (食えばいい), [Φō:] (食おう) のようになるが「来る」の場合は、[Φɯ̄mɯ̄] (来る), [kone:] (来ない), [kq̄ita] (来た), [kō:] (来い), [Φɯ̄seba] (来れば) のようであって、「来る」「来れば」の形だけに見られる。

「くれる」について見ると、[Φeʃɯ̄] (くれる), [Φene:] (くれない), [Φeda] (くれた), [Φeʃaene:] (くれられない), [Φeʃaseʃu] (くれさせる), [Φeʃeba] (くれれば), [Φeʃe] (くれろ) のようである。

また、「食える」について見ると、[Φeʃɯ̄] (食える), [Φene:] (食えない), [Φeda] (食べた), [Φeʃeba] (食えれば) のようになる。

したがって、「食える」と「くれる」の違いは、ともに一段活用であるが、「くれる」は [Φeʃaene:] (くれられない), [Φeʃaseʃu] (くれさせる), [Φeʃe] (くれ) の言い方があるが、可能動詞の「食える」にはそのような言い方がないということである。

現在のこの地区の /k-/ → /Φ-/ の事象は、/ku/ と /kwa/ に対応して [Φɯ̄] [Φa] が聞かれるだけである。しかるに動詞活用において、[Φaene:] (食われない), [Φaseda] (食わせた), [Φɯ̄:] (食う), [Φɯ̄mɯ̄] (来る), [Φɯ̄seba] (来れば) 等が見られるのは当然だとしても、[Φō:] (食おう), [Φeba] (食

えば), [Φi:] [Φe:] (食え), [Φerǖ] (くれる), [Φeda] (くれた), [Φe'eba] (くれれば), [Φeo] (くれ), [Φerǖ] (食える), [Φeda] (食えた), [Φe'eba] (食えれば)等の形が見られるのは、どう解釈すべきであろうか。現在見られるのは、すべて、かつて、/ku/または/kwa/であったものに限られる。したがって、たとえば [Φo:] (食おう) は、

kuwau>kuwo:>Φuwo:>Φuo:>Φo:

のように変化し、他の形も、すべて、同様に

kuweba>kueba>Φueba>Φeba (食え)

kuwe>Φuwe>Φue>Φe: (食え)

kureru>kueru>Φueru>Φe:ru>Φeru (くれる)

kureta>kueda>Φueda>Φe:da>Φeda (くれた)

kurereba>kuereba>Φuereba>Φe:reba>Φereba (くれれば)

kuereba>Φuereba>Φe:reba>Φereba (食えれば)

のように変化したものと考えられる。すなわち、「食う」「くれる」「食える」等が、他の東北諸地方に見られるように、

カネー (食わない)	ケル (くれる)
------------	----------

ケバエー (食えばいい)	ケダ (くれた)
--------------	----------

ケー (食え)	ケネー (くれない)
---------	------------

ケレバ (食えれば)	ケレバ (くれれば)
------------	------------

ケダ (食えた)	ケレ (くれ)
----------	---------

のような形になる前に、/k-/→/F-/の事象があったと解釈される。

2.2.2 調査の規模

共通語の/ku/に対応して、[Φu] が現われる、あるいは、かつて/kwa/と発音されたモーラに [Φa] が現われるのは、山形県西田川郡温海町地区の言語特徴の一つである。これが行われるのは、概ね、この地区に限られる。遠く、能登半島に同様の例がかつて見られたが、現在ではあまり見られないようであるし、また隣町の山北町（新潟県）でも、この特徴はほとんど聞かれなかった。そこで、調査地点は、温海町地区に限ることにし、特徴の顕著な

海岸部より、2地点(温海、鼠が関)，やや特徴のうすい内陸部より1地点(戸沢)を選んだ。

調査対象者（話者）

調査担当者5名が5日間の調査日数で行う小調査であるから、その能力から考えて、戸沢、温海、鼠が関の調査地点から、それぞれ、同数の話者に協力を仰ぐこととし、年代による違いを重視して、各地点とも

70歳代（男・女）10名、40歳代（男・女）10名、中学2年生4名を調査対象者（話者）とした。調査票による面接調査を予定した。

調査月日・担当者

調査月日、1980年11月19日（水）—11月25日（火）。実際の調査活動は11月20日より11月23日（日）までの4日間とし、24日（月）は整理日とした。

担当責任者は飯豊であるが、面接調査等には、佐藤亮一、真田信治、沢木幹栄、白沢宏枝の協力を得ているほか、隨時、助言を受けた。また整理については、白沢宏枝ほかの助力が多い。

2.2.3 調査項目

戸沢、温海、鼠が関の三地点から、それぞれ、24名（70歳代10名、40歳代10名、中学2年生4名）を話者として、面接調査を実施することとして、調査項目を次ページのように選んだ。

このうち、40 蟻、41 蠅、45 火箸、67 日が は「は行」子音を調査するもので、このほかに隨時、参考として、「葉、百円」等の数語を尋ねて、比較資料とした。

25 クレヨン、61 アイスクリーム は外来語である。たぶん/ku/→/Fu/は、かなり古い時期に成立したものであろう。kueba>keba（食べば）や、kureru>kueru>keru（くれる）の確立以前に成立したものであろうから、新しい外来語は、この事象の影響は受けないであろう。

同様に、新しい語も、この事象の枠外にあるであろう。20 くじゃく、52

関東, 49 煙章, 53 火曜日 は, この例になるであろう。

語中, 語尾の場合は, 多く [Φigwii] (低い) のようであって, [Φui] とはなりにくいやうであるが, 果たしてどうであろうか。10 食いたくない, 20 くじやく, 42 菊, 44 西瓜, 51 九九, 60 くるくる, 66 高くて は, そのための調査語である。

1	とうもろこし	25	ク レ ョ ン	49	煙	章
2	粟	26	首	50	籤	引
3	くるみ	27	口	51	九	九
4	桑(の木)	28	口	52	関	東
5	桑の実	29	薬	53	火	曜
6	茎	30	くるぶし	54		癖
7	果物	31	車	55	黒	い
8	菓子屋	32	釘	56	来る	だろ
9	食おう	33	靴	57	来	る
10	食いたくない	34	長	58		鍼
11	食えば	35	畦	59	鍼の種類	
12	食え	36	草	60	くるくる	
13	食うのか	37	枯	61	アイスクリーム	
14	食わない	38	田の草とり	62	くれられない	
15	食つた	39	雲	63	くれれば	
16	蜘蛛	40	螢	64	く	れ
17	鯨	41	蠅	65	くれよ	う
18	熊	42	菊	66	高	く
19	白熊	43	花壇	67	日	が
20	くじやく	44	西瓜	68	暮れ	た
21	かっこう(鳥)	45	火箸	69	食われない(条件)	
22	まむし	46	火事	70	食われない(能力)	
23	かまくび	47	山火事			
24	櫛	48	蔵			

また、複合語は、どうであろうか、複合の程度により、違いがあるであろうか、18 熊と19 白熊、26 首と23 かまくび、33 靴と34 長靴、36 草と37 枯草 38 田の草とり、46 火事と47 山火事、58 鍬と59 鍬の種類は、このための調査語である。

動詞「食う」「来る」「くれる」と形容詞「高い」等は、その活用形が、/ku/を含むことで、この事象に関係を持つが、さらに、それが史的変遷の過程において、現在の活用形を生み出す要因となっていることに注目せねばならない。いくつかの調査語を準備した。

3. 結 果

3.1 /ku/・/kwa/・/fu/・/fa/と語の種類

ここでは、現在の温海町地区において、共通語の/ku/あるいは/kwa/に対応して、それぞれ [Φǖ], [Φa] の現われる特徴について、それが、どのような性質の語に多く見られるか、あるいは、どのような語に現われにくいか、ということについて、述べたい。

3.1.1 現れにくい語

まず、「42 菊」についてみると、第2モーラは共通語の/ku/に対応して、[gǖ] あるいは [kǖ] が現われている。話者72名中、約50%が [gǖ] であり、残りが [kǖ] であるが、この場合、[Φǖ] は1例も現われていない。

また、「44 西瓜」についてみると、[-kwa] [-gwa] はそれぞれ、高年層に1名、3名聞かれたが、他はすべて、[-ka] [-k̄a] [-ga] であり、[-ka] は27名で [-k̄a] [-ga] が41名であった。[-Φa] は全く聞かれなかった。また、これについては、特に中学生と40歳以上との間にもあまり大きな差はないようである。

次に「20 くじやく」の語末のモーラについてみると、[-kǖ] が44名で、残り、28名中、26名が [-gǖ] で、2名が無回答であった。[-Φǖ] は、まったく現われなかった。

また、「51 九九」についてみると、語末のモーラは、[-gū] は、72名中、33名で、残りの39名はすべて、[-kū] であった。この場合も [Φū] は全く見られなかった。

つぎに「59 鍬の種類」についてみる。この地域においては,/majuwa/ (馬鍬), /biQcjuRjwa/ (備中鍬), /toRjwa/ (唐鍬), /madonjwa/ (窓鍬) 等の種類の鍬が用いられているが、今や機械化されている農業では、これらの鍬を使うことも、しだいに少なくなってきた。これについて、[-ŋwa] は、72名中、7名で、すべて、戸沢地区の人だけで、5名が高年層で、中年層が2名であった。[-ga] は14名で、[-ŋa] は33名である。中学生は、[bitʃo:guwa] 類が3名、[bittʃo:ŋuwa] 類が3名、残り6名は「知らない」という。中・高年層にも「知らない」類が5名みられたが、戸沢地区には、なかった。いずれにしても、この場合にも、[-Φa] は、全く聞かれなかった。

以上の5項目は、いずれも、[Φū] あるいは [Φa] の全く現われなかつたものであるが、現われ方が皆無ではないが、きわめて少ない項目はほかにもあった。全体で、[Φū] あるいは、[Φa] の出現率が20%に達しなかつたのは、予想したものが多かった。「20 くじゃく・23 かまくび・25 クレヨン・51 九九・60 くるくる・49 熏章・56 来るだろう・34 長靴・57 来るか・53 火曜日・21 かっこう(鳥)・43 花壇・66 高くて・52 関東・61 アイスクリーム」の15語がそれである。

このうち、「25 クレヨン・61 アイスクリーム」は、外来語である。一般に使用されるようになったのは、そう古くはない。一方、「食う」や「くれる」の活用をみると、[Φane:] (食わない), [Φedə:ba] (食いたければ), [Φeba] (食えば), [Φūta] (食った), [Φide:baΦi:] (食いたければ食え), [Φo:] (食おう) 等の形や [Φeraenε:] (くれられない), [Φeda] (くれた) 等の形が見られる。この二語の活用形は、[Φ-] が多く現われていて、k>Φ の典型的な事象例と見做されるが、k>Φ は、/ku/, /kwa/のみに見られることで、/ka/, /ki/, /ke/, /ko/, /kja/ 等には見られないことであるから、これらの活用形も、たぶん /kuwaneR/ > ΦuwaneR/ > ΦaneR/ あるいは /kuwaneR/ > kwaneR/ > ΦaneR/ のように変化したものであり、/kuwaneR/ > kaner/ >

Φ aneR/のように変化したものではないであろう。同様に

kuoR> Φ uoR> Φ OR (食おう)

kuedεR> Φ uedεR> Φ edεR (食いたい)

kueba> Φ eba> Φ eba (食えば)

kureru>kueru> Φ ueru> Φ eru (くれる)

kureda>kueda> Φ ueda> Φ eda (くれた)

kurerareru>kuererau> Φ ueraeu> Φ eraeu (くれられる)

であろう。したがって、k> Φ の事象は、kuoR>kor, kue>ke 等の事象成立以前に成立したものであろう。現在では、新しい語をも、そのなかに取り込む力はない。「クレヨン」「アイスクリーム」に、k> Φ の事象例が少ないのは当然であろう。「アイスクリーム」は誘導によって、「[aɪsʊ Φ ūfɪ:mɪ Φ]とも言う」と答えたものが、40歳代男性（戸沢地区）に一人見られたが、他の地区には皆無であった。「クレヨン」は、やや多く8名である。戸沢地区には、積極的自発的に[Φūfɪ:rejɒn]と回答した話者が3名あったが、他は、誘導によるものである。とは言え、その差は、やはり「クレヨン」の、この地区への導入の歴史の古さを示すものであろう。

また、新しく使用された語も、同様に、この事象の影響はあまり受けないと予想された。20 くじやく, 49 熱章, 52 関東, 53 火曜日, 43 花壇がそれである。「関東」「花壇」は一部有識層の間では、古くから用いられたかもしれないが、一般庶民の間に広く普及するのは学校教育からであろう。

結果の一部を示せば、表1のようになる。予想したとおり、これらの語に

表1 調査結果の一部（新しい語）

	戸 沢		温 海		鼠 が 関		全		計
	Φ	誘	Φ	誘	Φ	誘	Φ	誘	
くじやく	6	2	1	0	4	0	11	2	13
熱 章	2	3	0	0	0	1	2	4	6
関 東	0	1	0	0	0	0	0	1	1
火 曜 日	3	0	1	0	0	0	4	0	4
花 壇	1	0	0	0	0	1	1	1	2

については、 $k > \Phi$ の事象は、多くは見られなかった。「くじやく」は、ある程度の回答者が [Φüidzakü] のような反応を示したが（18.1%），これは、他の語に比較して、親しみを覚えるせいでもあろうか。

次に複合語の場合を見るにすることにする。46 火事と 47 山火事，36 草と 37 枯草と 38 田の草とり，33 靴と 34 長靴，18 熊と 19 白熊，26 首と 23 かまくび が考察の対象である。話者が質問に答えて，[Φādzī] のように， Φ 音で反応したものと，誘導によって，「[Φādzī] とも言う」と反応したものを見ると表 2 のとおりである。

これを見ると，単独の場合と複合語の後半となっている場合とで，あまり差のないこともあるし，かなり差のあることもあるようである。

「火事」と「山火事」では，ほとんど差は見られない。

次に，「草」と，「田の草とり」では，たいした差はないが，「草」と「枯草」では，やや違いがめだつ。それは，「田の草」は「タノクサ」であるのに，「枯草」は「カレク^クサ」と連濁を生ずることのあるのが，この方言の特徴である。その分だけ， $k > \Phi$ の現れるのは少なくなる。

「靴」と「長靴」の場合は，[Φüidzü] と [najanüidzü] のように，連濁を

表 2 調査結果の一部（複合語との関係）

	戸 沢		温 海		鼠 が 関		全		計
	Φ	誘	Φ	誘	Φ	誘	Φ	誘	
火 事	6	4	9	2	18	2	33	8	41
山 火 事	6	5	9	2	16	3	31	10	41
草	2	8	4	4	16	5	22	17	39
枯 草	4	5	1	5	10	6	15	16	31
田の草とり	4	5	4	4	12	6	20	15	35
靴	8	3	5	1	13	3	26	7	33
長 靴	1	2	0	0	0	1	1	3	4
熊	5	6	6	3	13	3	24	12	36
白 熊	5	2	3	2	5	5	13	9	22
首	5	7	6	2	11	5	22	14	36
かまくび	1	2	0	1	2	3	3	6	9

生じていることが多い。したがって、「長靴」の場合に「 Φ 」がほとんど現れないのは当然であろう。それは、一般に、語中・語尾の/-ku/, /-kwa/に対応して、この方言では、[-gūi] [-gwa]の現れることが多く、既述のように、「菊」「西瓜」「くじやく」「九九」「備中鉄」等の場合に、[Φ]の現われないのも、このことと関係があろうし、「66 高くて」も、多くは[tagagūide]のような反応が多く、[Φ w] はただ1名、鼠が関の高年男性に見られただけである。

したがって、「長靴」は連濁を生じていることが多いということが、そのまま、複合語の結合度の強さを示しているとも言える。語中・語尾の/-ku/, /-kwa/に k> Φ の事象がほとんど見られないのと同様な性質に基づくものであろう。

「熊」と「白熊」の場合は、後者が日常的に親しくない存在であり、したがって、「D. K.」や「N. R.」が若干見られたが、[sifogūima] 等が20%近く見られたことは注目すべきであろう。東北南部や北関東では、[sifokūima] と言うが、この地区では、[sifogūima]が、かなり見られた。そして、[sifōΦūma] は22名（約30%）にとどまった。

これに対して、「22 かまくび」において、k> Φ の事象が9名(12.5%)であったのは事情が異なるようである。すでに「かまくび」という語を知らない人が増してきている。約半数が「D. K.」あるいは「N. R.」であった。もっとも、「知らない」等の回答は、高年層には少なく、(7名, 23%), 中年層は、約半数で(14名, 47%), 中学生は全員であった。

これは「1 とうもろこし」の場合と比較して、興味深い。「とうもろこし」は、この地の方言で、[Φasikī-bi] と言われる。たぶん、「蜀黍」に対して、あまく美味なることに着目して、「菓子～」と命名したものであろうが、今や、その命名の由来がわからなくなってきたいるようである。最も町の中心である温海地区で、13名(54%), 戸沢地区18名(75%), 鼠が関地区21名(88%)であるが、だいに、中学生や中年層に、/ki bi/ という形が多くなってきているのは、現在、「黍」や「蜀黍」が作られなくなって、紛れる恐れがなくなったからであろうか。

3.1.2 現れやすい語

一方、共通語の/-k-/に対応して、/-ɸ-/の現れるのは/ku/, /kwa/の場合であるが、よく現れる10項目は、各地区、それぞれ表3のとおり、カッコ内は、回答者数。各地区とも24名について面接調査。

これを見ると、「桑の実」「桑(の木)」「くろ(畦)」「くるみ」「茎」「口」とともに「食わねー」「食えば」「食え」「食った」「食う」「食いたく」「食おう」「くれれば」「くれられない」等の「食う」「くれる」の活用形が上位を占めている。かつそれらは、[ɸane:] (食わない), [ɸeba] (食えば), [ɸo:] (食おう), [ɸeda] (くれた), [ɸeɸaene:] (くれられない)のようになっていて、単に, ku>ɸu の事象であるとばかりは言えない状態である。だから、たとえば

kueba>ɸueba>ɸeba (食えば)

kureta>kureda>kueda>ɸueda>ɸeda (くれた)

のような通時的変遷を考える必要がある。そして、この k>ɸ の事象は、かなり古い時期に生じたものであろうし、基本語の動詞の活用形の各形は、活用形式のみならず、音韻的変化をも含んでいるので、これを回帰するのは、か

表3 調査結果の一部 (方言音が現れやすい語)

戸 沢		温 海		鼠 が 閑		全	
1	桑 の 実(22)	1	食 わ ね 一(21)	1	桑 の 実(24)	1	桑 の 実(66)
	く れ れ ば(22)		桑 の 実(20)		食 お う(24)	2	食 わ ね 一(65)
3	食 わ ね 一(21)	2	食 え ば(20)	3	食 え ば(24)		食 え ば(63)
	桑 (の木)(20)		食 え(20)		食 い た く(24)		食 え(63)
4	く ろ(20)	5	食 う(19)	5	食 わ ね 一(23)	5	食 い た く(62)
	食 い た く(20)		く れ れ ば(19)		食 つ た(23)		く れ れ ば(62)
7	食 え(20)	7	食 つ た(18)	5	食 う(23)	7	食 う(61)
	く る み(19)		食 い た く(18)		食 え(23)	8	食 お う(60)
8	食 お う(19)		桑 (の木)(17)		く れ ら れ な い(23)	9	く れ ら れ な い(59)
	食 え ば(19)		茎 (17)	10	口 (22)	10	桑 (の木)(58)
	食 う(19)		食 お う(17)		く れ よ う(22)		食 つ た(58)
	く れ ら れ な い(19)		く れ (17)		く れ ら れ な い(17)		

なり困難であろう。「食う」「くれる」の活用形には、この事象が、現在でも、比較的よく現れている。

これに対して、「来る」の場合は、きわめて少ない。「来るだろう」は、6名(8%),「来る」は4名(5.6%)である。昭和25年に鼠が関地区を訪れた際には、ふんだんに耳にしたが、今回は「来る」については、あまり耳にすることはできなかった。これは、たぶん、それだけ、共通語化が進んだせいであろう。それについては、「来る」の場合は、単純に $ku > \Phi u$ の関係が成立しているので、回帰しやすいことも重要な条件となっているものと考えるべきであろう。

3.1.3 ま と め

以上のことと要約すれば、次のように言えるであろう。

- (1) この事象は、共通語の /ku/ あるいは、かつての /kwa/ に対応して、それぞれ、[Φüü] (/Fu/), [Φa] (/Fa/) の現れるものである。現在でも、温海町地区にかなり盛んであるが、それは、日常生活によく使用される語に多く見られる。
- (2) 語頭にはよく現れる。語中・語尾には現れにくい。
- (3) 複合語の場合には、結合度の強弱により差がある。結合度が強く、連濁を生じているような場合には、この事象は見られない。ただし、この地区では、「枯草」「白熊」のような語でも、[kaʃegüüsa] [sifogüüma] のように発音する人がいる。
- (4) 外来語は、この事象は現れにくい。しかし、古くから使用されている外来語は、新しい外来語よりも、この事象を見せる。「アイスクリーム」より「クレヨン」が、[ΦüüʃejoN] すなわち $ku > Fu$ の事象を多く見せる。
- (5) 新しい語は、この事象の影響をあまり受けない。「勲章」「くじやく」「火曜日」「花壇」「関東」等がそれである。ということは、この事象を生じさせている力は今や過去のものであって、新しく勢力を伸長させることはないであろう。
- (6) 今後は、しだいに共通語化が進むであろう。しかし、「食う」「くれる」の

ように、活用形式と音韻変化とが複雑に重なりあっていいるようなものはなお、しばらく生き残るかもしれない。

3.2 /ku/・/kwa/・/Fu/・/Fa/と地域差

この事象は、温海町地区に行われるが、現在の温海町は、温海町、念珠ヶ関村、福栄村、山戸村の合併したものである。温海地区と鼠が関地区とは海岸部であり、戸沢地区と福栄地区は内陸部(山間部)である。海岸部でも、町の中心部である温海地区と漁港としての伝統を持つ鼠が関地区とは、言葉の上でも違いがあるようである。また、戸沢地区は農山村としての性格を持つ。この三地区における差をみると次のように言えるであろう。

調査語は70であるが、ku>Fu、kwa>Faの該当項目としたものは、66項目である。そのうち、20 くじゃく、42 菊(きく)、44 西瓜(すいか)、51 九九(くく)、59 鍬の種類(びっちょうぐわ)、の5項は3地区とも、該当例はゼロであったから、残りの61項目について、表を作製した。表4全体、表5戸沢、表6温海、表7鼠が関がそれである。

これによれば、[ɸ]音を現在でも残している比率と共通語化との地区ごとの比較は表8のようになる。

すなわち、[ɸ]音は、全体では約半数であり、共通語化は四分の一である。しかし、地区ごとにみると、温海地区は[ɸ]は37%であり、共通語化も30%を超えて、相拮抗しているが、戸沢では[ɸ]の46.7%に対し、共通語化は23.4%で、共通語化はかなり少ないし、鼠が関においては、[ɸ]の59.9%に対し、共通語化は18.6%であり、三分の一にも達しない。地域により、[ɸ]音を保存しているか、共通語化しているかにかなりの差があることがわかる。

さらにその内容をみると、全体の80%以上が[ɸ]音を使用している項目数は、戸沢7、温海4、鼠が関23であり、全体の半数以上(50%以上)が[ɸ]音を使用している項目数は、戸沢29、温海19、鼠が関43である。また、この61項目のなかで、[ɸ]音の全く現れなかったのは、戸沢1(高くて)、温海7(高くて、かっこう、長靴、花壇、勲章、関東、アイスクリーム)、鼠が関5(かっこう、関東、火曜日、くるくる、アイスクリーム)であり、地域による

表4 調査結果の全容（全地区）

順位	1	2	3	3	5	5	7	8	9	10	10	12	12	12	15	16	17	18	18	20	20	22	23	24	24	24	27	28	28	30	30	32	32	32			
調査語	5桑の実	14食わね	11食え	12食べ	10くねば	63くねば	13くねば	9くねば	62くねば	15くねば	4くねば	桑(の木)	茎くねば	64くねば	35くねば	65くねば	1くねば	3くねば	58くねば	16くねば	蜘蛛くねば	2くねば	3くねば	20くねば	27くねば	32くねば	46くねば	47くねば	55くねば	50くねば	68くねば	36くねば	24くねば	7くねば	8くねば	18くねば	熊首
Φ	47	46	40	45	37	54	43	36	47	39	34	32	44	46	40	38	14	38	34	15	31	26	27	33	31	33	25	36	22	30	10	16	24	22			
誘	19	19	23	18	25	8	18	24	12	19	24	23	11	9	14	14	35	10	13	29	13	17	14	8	10	8	15	3	17	8	28	20	12	14			
計	66	65	63	63	62	62	61	60	59	58	58	55	55	55	54	52	49	48	47	44	44	43	41	41	41	41	40	39	39	38	38	36	36	36			
k ^等	2	1				1			1								2		1	1					1	4		1		2	1	2	1				
誘		1	1	1					3																									1			
共		1		1	2	6	1		8	3	6	15	7	2	2	17	21	18	18	4	8	20	14	13	13	13	10	16	22	15	20		28	19			
N	3		1	2	3		1	1		3		1	6	3																			2		1		
他	5	8	7	7	5	4	10	4	5	4	11	2	4	13	16	6	3	6	10	14	20	9	13	18	18	20	17	9	18	14	32	7	17				
順位	35	35	37	37	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	50	52	52	54	54	54	54	58	59	59	59	59	59	59	59	59					
調査語	17鯨の草	38田とり	33靴	31車	54枯草	37雲	28白	48藏	19熊	29指	22まし	20裏	22まし	20くじ	23やく	51かまく	60くじ	49くじ	56くじ	34九く	57くじ	53来る	57たろう	21かまく	21花	43つこう	66(鳥)	52高くて	61関東	アイスクリーム		計					
Φ	24	20	26	22	22	15	21	17	9	13	13	6	11	3	3	6	0	2	2	1	3	4	4	4	1	1	0	0	1,384	(31.5%)							
誘	11	15	7	11	10	16	9	10	14	9	7	11	2	6	5	1	7	4	4	3	1	0	0	1	0	1	1		720	(16.4%)							
計	35	35	33	33	32	31	30	27	23	22	20	17	13	9	8	7	7	6	6	4	4	4	4	2	1	1	1	2,104	(47.9%)								
k ^等	2	2		5	2	2	3		2	1	3			1	1	1				1	5		5	2	2				61								
誘																																6					
共	15	14	12	27	23	20	32	12	36	26	29	26	26	12	43	28	41	58	6	1	15	51	30	39	4	60	46		1,062	(24.2%)							
N		6	1		5		3	4	1		1	25	2		9		1		1		8	6	1	7					119								
他	20	15	26	12	12	14	8	33	7	20	20	28	29	26	17	36	14	7	59	66	51	12	30	20	64	225	1,029										

表5 調査結果の全容（戸沢地区）

表6 調査結果の全容（温海地区）

調査語	14	11	12	5	13	63	10	6	9	4	64	62	65	16	35	1	58	30	2	46	47	3	27	50	55	7	18	68	17	36	38	26	54	
食わねー！																																		
Φ	13	9	10	12	12	15	10	11	7	9	10	11	12	11	11	12	7	10	9	1	9	9	2	6	7	9	3	6	7	8	4	4	6	6
誘	8	11	10	8	7	4	8	7	10	8	7	6	5	5	3	2	6	3	3	10	2	2	8	4	3	1	6	3	2	1	4	4	2	2
計	21	20	20	20	19	19	18	18	17	17	17	17	17	16	14	14	13	13	12	11	11	11	10	10	10	10	9	9	9	8	8	8	8	
k ^φ 等	1		1			1										1		1		1									2	1	2			
誘		1									2																							
共	1			3	1	4	1	2	1		7			7	5	1	10		10	8	6	11	3	6	4	10	12	7	8	11	6	11	12	
N			2			1			3			1		3			8					1	1									4		
他	1	4	3	2	4	1	4	5	6	2			7	2	2	10		4	3	4	7	3	10	7	10	5	3	8	5	5	5	2		
調査語	28	32	24	31	37	48	8	33	39	19	60	22	29	51	57	23	25	56	20	53	66	21	34	43	49	52	61				計			
口紅	釘	櫛	車	枯草	蔵	蘿子	屋	雲	白熊	くる	くる	まむし	九九	来る	か	まく	クレヨン	来る	だらう	くじや	曜日	高く	かづこう	長靴	花壇	勧業	関東	アイスクリーム						
Φ	3	5	6	6	1	3	3	5	3	3		1	1	1	2				1	1										333 (22.7%)				
誘	4	2	1	1	5	3	3	1	2	2	3	2	2	1	1	1	1												210 (14.3%)					
計	7	7	7	7	6	6	6	6	5	5	3	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1								543 (37.1%)					
k ^φ 等					2			1	1												2								17 (1.2%)					
誘								1																						3 (0.2%)				
								1																						1 (0.1%)				
共	5	12	8	11	9	12		6	16	9	10	11	12	10	4	6	20	2	12	17	1	13	1	16	22	20	14		447 (30.5%)					
N						1		1			5				1	8		1	1		2	1	3			48 (3.3%)								
他	12	5	9	6	8	4	16	12	2	10	5	10	9	12	17	9	3	20	10	6	21	9	23	7	2	1	10		397 (27.1%)					

表7 調査結果の全容(鼠が関地区)

調査語	10 食 い た く 11 食 え ば う 9 食 お う 5 桑 の 実 13 食 う 15 食 つ ね 14 食 え れ ら れ な い 12 6 2 7 65 32 4 釣 桑 (の 木) 6 36 1 64 35 63 3 46 55 58 2 47 38 30 50 24 68 8 葉 子 屋 16 37 26 首 枯 草	15 18 19 20 17 17 18 20 20 14 19 16 14 15 16 18 19 20 21 9 18 18 18 18 12 16 12 13 13 16 17 11 14 10 11
Φ		
誘	9 6 5 4 6 6 5 3 3 8 3 5 7 6 5 3 2 1 11 2 2 2 7 3 6 5 5 2 1 6 3 6 5	
計	24 24 24 24 23 23 23 23 22 22 21 21 21 21 21 21 20 20 20 20 19 19 18 18 18 18 17 17 16 16	
k*等		1
誘		
共		1
N		1 1
他		1 1 1 1 1 2 1 2 1 1 2 2 3 2 3 3 2 3 5 2 3 7 1 2 4
調査語	54 熊 靴 口 紅 28 車 果 物 31 7 17 39 29 48 19 22 23 20 51 49 57 25 34 43 56 66 21 52 53 60 61 アイスクリーム	計
Φ	12 13 13 10 11 4 10 11 11 4 5 3 2 4 3	661 (45.2%)
誘	4 3 3 5 4 10 4 3 3 6 5 4 3	216 (14.8%)
計	16 16 16 15 15 14 14 14 10 10 7 5 4 3 1 1 1 1 1 1	877 (59.9%)
k*等	1 1	14 (1.0%)
誘		
共	4 6 2 3 8 6 5 7 6 11 8 11 4 8 5 17 4 13 13 2 9 21 20 15 16	273 (18.6%)
N	1	39 (2.7%)
他	3 1 5 6 1 4 5 2 4 1 4 6 8 9 15 5 18 8 23 6 21 23 11 4 7 8	263 (18.0%)

表8 方言音残存率・共通語化の率（全地区）

	全 体	戸 沢	温 海	鼠 が 関
Φ	1,384 31.5%	390 26.6%	233 15.9%	661 45.2%
誘	720 16.4	294 20.1	210 14.3	216 14.8
計	2,104 47.9	684 46.7	543 37.1	877 59.9
共通語	1,062 24.2	342 23.4	447 30.5	273 18.6

差が明らかである。[Φ] 音使用は、鼠が関地区が多く、共通語化は温海地区が進んでいると言える。戸沢地区は、[Φ] 音使用も共通語化も、その中間にある。しかし、61項目中、[Φ] 音の現れなかった項目数は、温海地区 7、鼠が関地区 5 に対し、戸沢地区 1 である。また、1 例だけ現れたのは、温海地区 5、鼠が関地区 7 に対し、戸沢地区 4 である。つまり、1 例以下の項目数は

戸沢地区 5 関東、アイスクリーム、花壇、来るか（以上 1 例）

高くて（以上無例）

温海地区 12 かまくび、クレヨン、来るだろう、くじやく、火曜日

（以上 1 例）

高くて、かっこう、長靴、花壇、勲章、関東、アイスクリーム
(以上無例)

鼠が関地区 12 勲章、来るか、クレヨン、長靴、花壇、来るだろう、高くて
(以上 1 例)

かっこう、関東、火曜日、くるくる、アイスクリーム
(以上無例)

すなわち、各地区24名のうち、1名だけ、[Φ] で反応した項目、あるいは1名も、[Φ] の現れなかったものは、温海地区も鼠が関地区も12項目あったが、戸沢地区では 5 項目であって、戸沢地区では、少数者は、現在でも、多くの語について、[Φ] 音を使用していて、「クレヨン・勲章・長靴・火曜日・かっこう」等のようだ、他の地区では、めったに [Φ] 音の聞かれなくなった

語についても、なお、かなり耳にことができる。

逆に共通語化について見ると、半数以上が共通語形で回答した項目は、

戸沢地区 蔵（13名）、九九（13名）、火曜日（14名）、くるくる（16名）、ア

イスクリーム（16名）、勲章（19名）、関東（19名）……7項

温海地区 熊・癖・釘・藏・薬指・くじやく（以上12名）、かっこう（13名）、

アイスクリーム（14名）、花壇・雲（以上17名）、火曜日（17名）、

クレヨン・関東（以上20名）、勲章（22名）……14項

鼠が関地区 クレヨン・花壇（以上13名）、くるくる（15名）、アイスクリー

ム（16名）、勲章（17名）、火曜日（20名）、関東（21名）……7項

以上によっても、アイスクリーム、勲章、関東、火曜日等は、各地区に通じて、共通語化していることがわかる。これらの語の一般的な使用は比較的新しい。k>Fの変化がかなり古かったと認められるので、これらの語は、その変革の波にさらされることを免れたものであろう。しかし、地域の差に着目するなら、温海地区が、最も共通語化していることは明らかである。それが、日常語の「熊・癖・釘・薬指・藏・雲」にまで及んでいることは、注目すべきであろう。もう、この地区で、この特徴が、失われるであろうことはそう遠くはないことを示しているようである。

3.3 /ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/ と年代差

/ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/の事象と解釈されるこの特徴は、年代により、かなりの差を見る。60・70代と40代と中学生との違いは次の表9によって、示される。

表9 方言音残存率（地区別・年層別）

	60・70代	40代	中学生	計
戸沢	233 (38.2%)	362 (59.3%)	89 (36.5%)	684 (46.7%)
温海	272 (44.6)	241 (39.5)	30 (12.3)	543 (37.1)
鼠が関	406 (66.6)	390 (63.9)	80 (32.8)	876 (59.8)
全 体	911 (49.8)	993 (54.3)	199 (27.2)	2,103 (47.9)

各地区とも、60・70代と40代とは各10名で、延べ610項のうち、/F/音の現れた率である。20代は、各4名で、延べ244項目のうち、/F/音の現れた率である。

これによれば、温海地区も鼠が関地区も、60・70代が最も/F/音が現れていて、ついで40代が多く、中学生に少ない。年齢の若くなるにつれて、/F/音が少くなり、逆に共通語化が進むのは、現代日本の方言と共通語との関係においては、極めて一般的な常識的な傾向と言える。ところが、戸沢地区では、60・70代の38.2%の/F/音出現率に対して、40代のそれは59.3%であって、40代に/F/音が多く使用されているばかりでなく、中学生も36.5%も使用していて、これは3地区で、中学生としては最も多い。これは、どういうわけであろうか。

戸沢地区において、60・70代の/F/音出現率が低いのは、つまり、60・70代の/F/音保存率が低いことである。かつて、戸沢地区に、この方言音が、広く一般的に行われていて、それが、共通語化の波にさらされて、消失しつつあるのであれば、中学生の方がもっと共通語化している筈であり、40代の場合にも、その出現率は、もっと低くあるのが普通であろう。しかるに、40代よりも60・70代が/F/音の保存の少ないのは何故であろうか。

そこで、もっと詳しく検討することにして、男性と女性との差をみると、次の表10のようになる。

これらの表をみると、温海地区は、その傾向として、この方言音を保存する率が低く、鼠が関地区は一般的の傾向として、保存率が高いと言えるが、いずれも、60・70代より40代がやや、保存率が低くなり、さらに、中学生との

表10 方言音残存率（地区別・年層別・男女別）

	60・70代		40代		中学生		
	女	男	女	男			
戸沢	233(38.2%)	84(27.5%)	149(48.9%)	362(59.3%)	170(55.7%)	192(63.0%)	89(36.5%)
温海	372(44.6)	123(40.3)	149(48.9)	241(39.5)	130(42.6)	111(36.4)	30(12.3)
鼠が関	406(66.6)	210(68.8)	196(64.2)	390(63.9)	188(61.6)	192(63.0)	80(32.8)
全 体	911(49.8)	417(45.6)	494(54.0)	993(54.3)	488(53.3)	495(54.1)	199(27.2)

間に、大きな断層のあるのがわかる。そして、60・70代と40代との男性・女性の差は、あまり大きくなのが普通である。それは、今までの多くの調査でも、同様であった。ところが、戸沢地区の場合には、60・70代の方言音の保存率が、かなり40代のそれより低いばかりでなく、その程度は中学生の保存率とほぼ等しいのである。さらに注目したいのは、60・70代の方言保存率が男性・女性によって、かなりの差のみられることである。女性の27.5%は男性の48.9%に比較して、低すぎると言わねばならないであろう。

これらの事実は、戸沢地区には、他の地区にはみられないアイスクリーム等の新語にも [ɸ] が現れていること等と相俟って、この地区は、全体としては、鼠が関地区より、この方言音が現れていないのであるが、それは、温海地区と同様に、共通語化が進んでいるからであると結論するわけにはいかないようである。むしろ、この地区は、/kwa/・/ku/ > /Fa/・/Fu/の事象が全域に広がりつつあるとみるのが妥当であろう。かつて、この地区は一部地域に、この方言音が行われていたが、全域には行われていなかった。それが広域的生活を行う時代になって、全域に広がっている。だから、農山村の活動の中心となる40代の人たちが、最もこの方言音を使用し、60・70代には少ないものである。また、60・70代では、より対外接触の機会の多い男性に、この方言音の使用が多いのであろう。アイスクリーム等の新語にも、この特徴音が及ぶのも、これが、この地区では一部の人には生きているきまりであるからであろう。各地方言において、共通語と対比して、方言的特徴とされるものは、極めて多いが、それらの特徴とされる事象は、要するに一種の言語的きまりと見做し得ることが多い。この「きまり」は、今日では、活力を失っていることが多い。それは、共通語化の大きな波が全国津々浦々にまで、及んでいるからである。だから、南奥方言の特徴である、(1) [kī] > [tsī] とされる事象、例一チミ（君）・チンチュ一（緊急）・チョーイク（教育）、(2)シ・スの混同と言われる事象、例一ナス（梨）・スカ（鹿）・スヌ（鮓）、(3)人格を持つもののヲ格表現に「～ドコ」を用いる事象、例一オレドゴ ハでーダ[hade:da]（おれをなぐった）、(4)見聞の事実を報告する表現に「～ケ」を用いる事象、例一アノ ヒトモ カグッケ（あの人も書いたよ）等は、一般的には、共

通語化の大きな傾向の前に、力を失って、今やしだいに勢力を弱めて、もはや分布領域を拡大したり、青少年に広く通用することは、期待できないであろう。これに対して、(5)「来る」の受身の形に「キラレル」を用いる事象や、(6)形容詞に「べー」の接続する形が、「タケーベー」[take:be:] (高いべー), 「サムイベー」であり、かつて多くみられた「タカカンベー」「サムカンベー」の形は、しだいに見られなくなっているという事象は、今やしだいに、その領域を拡大し、青少年にも広く使用されるようになってきている。(1)(2)(3)(4)の事象をささえている言語上のきまりは、現時点では、もはや生成発展する活力を失っているきまりであると言える。これに対して、(5)(6)の事象をささえている言語上のきまりは、現時点でも生成発展する活力を持っている。活力ある生きたきまりである。形骸化したきまりではない。ところで、この地区の/kwa/・/ku/ > /Fa/・/Fu/の事象は鼠が関地区では、まだある程度の活力を持っているが、温海地区では、かなり活力を失っていると認めることができる。そして、戸沢地区では、全般としては、必ずしも、力強く活動しているとは言い難いであろうが、一部地域では、生成発展する活力を持っている言語上のきまりであると言える。このように考えると戸沢地区の事象が、他の2地区と異なっていることもよく理解されよう。

戸沢地区における、この方言音と年代との関係において、60・70代よりも40代の保存率が高いのは、この方言音が、はじめは、温海・鼠が関等の海岸部に多く用いられていたが、一方では、共通語化の傾向に影響されて、しだいに消失しつつある温海地区のような場合もあるが、町村併合による、広域な社会生活により、内陸部にも広く浸透しているという面もあると考察された。戸沢地区は、かつては、山五十川とで、山戸村を形成していて、温海・鼠が関地区との交渉は、あまり多くはなかった。この方言音も、極めて、ゆるやかに及んでいたが、併合により、文化的経済的政治的に優位にある温海・鼠が関の言語的特徴が広まっているものと思う。このことは、個人ごとの結果をみるとことにより、一層明らかになる。

3.4 /ku/・/kwa/・/Fu/・/Fa/と個人差

この調査は厳密なサンプリング法に基づくものではないし、3地区ともに60・70代10名（男女各5名）、40代10名（男女各5名）、中学生4名（男女各2名）計24名について実施したものであるが、調査語70のうち、該当例の1例も現れなかったものを除き、61項目について集計した。3地区の個人別表は、次のようになる。この集計表は、基本的には、表4～7と同じ基準によるが、「その他方言形」「共通語形」の認定は、差がある。すなわち、調査語全体が共通語形であるか（表4～7），それとも該当項目だけが共通語形式であっても、それを共通語形とするか（表11以下）の差である。

表11は戸沢地区の個人別表である。話者番号No.1～5は60・70代の女性であり、No.6～10は男性である。No.11～15は40代の女性であり、No.16～20は男性である。No.21・22は中学生女生徒であり、No.23・24は男生徒である。この構成は表12・表13も同じである。

表11において、まず注目されるのは、No.3, No.8, No.23の3名が極端に/Fu/・/Fa/を使用しないということである。ついで、No.11, No.17も多くを使用しない。61項目中、/Fu/・/Fa/を使用しているのは、それぞれ、2項（No.3）、1項（No.8, No.23）であり、ついで、12項（No.11）、15項目（No.17）であった。これらの5名は特に他と異なる社会的・文化的・歴史的条件を持っているわけではない。No.3は戸沢小学校（3年）と山戸小学校（3年）で尋常科6年を卒業して、庄内に数か月を過ごしたほかは、すべて、戸沢に住み、農業に従事している明治44年生まれの女性である。No.8は明治38年生まれの男性で、同様に山戸小学校の尋常科を卒業し、農業と炭焼きに従事し、昭和14年～35年に近くの五十川の炭坑に働いたほかは戸沢に住んでいる。No.23は昭和40年生まれの男子中学生で、ずっと、戸沢に住んでいる農家の少年である。No.11は昭和11年生まれの女性で、山戸中学を卒業して以来ずっと農業に従事している主婦である。No.17は、昭和10年生まれの男性で、同様に小学卒業後農業に従事している。これらの5名はいずれも、特に共通語化が進んでいるわけではない。調査の際の応答等も他の話者と異なった共通語使用はない。もし、強いて、共通点を求めるなら、それは、戸沢地区的生育地・居

住地が、いずれも戸沢甲46番地～73番地にあるということである。戸沢地区は地番整備で、甲乙にまとめられ、甲は283番地、乙は243番地までに話者は散らばっているが、/Fu/・/Fa/の使用の少ない人々は、実は、戸沢地区の一部の集落に所属しているだけのことであった。つまり、戸沢地区は、この方言音が、もとから広く分布していたのではなく、町村併合後に全般的に拡がりつつあるのである。これらの5名の話者は、共通語化したために/Fu/・/Fa/音の使用が少ないのでなく、/ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/とされる、この方言音を、はじめから習得していなかったのであり、それは、この地区がそのような言語的環境でなかったせいである。

ところで、この戸沢地区で、61項目中56項目に、この方言音で反応した話者がいる。3地区の話者の72名中、45項目（73.8%）以上について、この方言音で反応したものは計10名であるが、51項目の/Fu/・/Fa/使用が鼠が関地区に1名みられるのを除き、他は48項目以下であるから、この56項目の反応は注目すべきものである。この話者は大正8年生まれの男性で、高小卒業後、青年学校に4年間通学し、昭和14年～20年は兵役で、北支・千島等に従軍し、終戦後、農業・炭焼きに従事し、生炭組合役員や公民館主事を兼務している人である。普通なら最も共通語化していてもいい筈の人である。他の地区の人をはじめ、多くの人と接触をするこの話者に極めて、この方言音が多く聞かれたのは、まことに象徴的である。この話者にとっては、この方言音をささえている言語上のきまりは、生きたきまりである。だから「アイスクリーム」「関東」「花壇」「火曜日」「勲章」「クレヨン」等もすべて、このきまりにしたがって、/Fu/・/Fa/が現れている。

温海地区で、最も、この方言音の現れなかったのは、No. 4, No. 12, No. 19, No. 21, No. 24の5名である。このうち、No. 4は/Fu/・/Fa/反応2項目（とうろもこし [ɸasikibī], 畔 [tanoɸūfō]）であるが、明治44年生まれの女性で、高小卒後、裁縫女学校に3年通った後、東京に19歳～29歳まで住んでいたという経歴を持つ。また、No. 12は昭和12年生まれの女性で、温海中学卒業後、北海道に3年住んだ経験があり、現在牛乳配達をしている。この方言音反応は、4項目（とうろもこし、畔、および、桑の実 [ɸanomi]、桑の木

表11 調査結果の全容

(話者別) <戸沢地区>

	27	31	55	33	39	47	36	46	47	36	46	46	37	38	20	54	19	48	22	25	28	49	21	56	60	23	29	34	53	51	43	52	57	61	66	計	誘
口	車	黒い靴	雲	山	火事	草	枯草	火事	草	枯草	火事	草	の草	とり	くじやく	白熊	藏	まむし	クレヨン	口紅	熱章	来るだらう(鳥)	くるくる	かまくび	葉指	長靴	火曜日	九九	花壇	関東	来るか	アイスクリーム	高くて	Φ	音導		
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	(●)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	17	3			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	(●)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	24	6			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	2	1			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	18	6			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	23	12			
●	●	●	●	N	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	27	7			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	44	8			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	1	0			
●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	29	11			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	48	22			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12	9			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	42	7			
○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	41	28		
○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	33	15			
○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	42	37			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	56	10			
●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	(●)	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	15	3			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	(●)	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	35	30			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	O	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	42	10			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	44	1			
(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	16	9			
○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	O	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	39	32			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	1	0			
○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	(●)	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	33	27			
11					10	9	8	7		6	5						4	3					2	1				0	684								

表12 調査結果の全容

● Φ ○ Φ(誘導) ▲ Kwa・k^Φ・k^x等 | その他方言形 ● 共通語形 N 無答・誤答

(話者別) <温海地区>

表13 調査結果の全容

●Φ		○Φ(誘導)		▲kwa・k ^Φ ・k ^X 等		その他方言形		●共通語		N 無答・誤答																					
話者番号	話者生年	5 桑の実	9 食い立く	10 食えば	11 食え	12 食う	13 食わね	14 食つた	15 食れられない	27 口	32 釘	65 くれよう	1 とうもろこし	4 桑(の木)	6 茎(くろ)	35 草(くろ)	36 くれれば	63 くれ	64 くれれば	3 くるみ	46 火事	2 栗	47 山火事	55 黒い	58 鍬	24 檵	30 田の草	38 とり	50 篠	68 蓋引き	
1	M37	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
2	" 41	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
3	" 41	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
4	" 41	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
5	" 44	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
6	" 38	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
7	" 39	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
8	" 42	●	○	○	○	N	▲	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
9	" 44	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
10	" 45	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
11	T 13	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
12	S 7	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
13	" 9	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
14	" 12	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
15	" 13	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
16	" 5	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
17	" 8	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
18	" 9	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
19	" 10	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
20	" 13	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
21	" 41	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
22	" 41	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
23	" 41	○	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
24	" 42	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
		24	24		23			22		21										20	19			18							
		4	5	9	6	3	6	5	6	3	8	6	3	3	7	6	1	5	0	2	11	2	7	3	2	2	2	5	6	5	1

(話者別) <鼠が関地区>

葉子屋	蜘蛛	熊	首	靴	枯草	癖	口紅	車	果物	鯨	薬指	雲	白熊	蔵	まむし	くじやく	かまくび	くじやく	九九	クレヨン	長靴	花壇	煎餅	来るだろう	来るか	高くて	かづこう(鳥)	関東	火曜日	53	60	61	計誘導	
●	●	●	○	○	N	●	○	○	○	●	○	○	(●)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	45	19			
○	●	▲	●	●	N	●	●	●	○	●	●	●	N	▲	●	N	▲	▲	N	●	N	▲	●	●	●	●	●	●	●	40	4			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	48	2			
○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	42	17			
○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	35	8			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	46	12			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	44	13			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13	4			
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	51	42			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	42	2			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	41	1			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	30	1			
●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	37	6			
●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	41	18			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	39	1			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	43	1			
○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	44	8			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	41	5			
●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	30	20			
○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	44	5			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	21	9			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	19	1			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	25	5			
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	15	13			
17	16				15	14		10	7	5	4	3	3	5	6	4	3		1	1	1	1	1	1	1	1	1	0		876				
6	3	3	5	3	6	4	5	4	10	4	3	3	5	6	4	3		1	1	1	1	1	1	1	1	1								

[ɸanogī]) である。No. 19は昭和10年生まれの男性で、この地区で有名な商店の主人で、PTA の会長をしている顔役である。この方言音反応は 9 項目である。No. 21, No. 24は中学生である。一人は寺の娘であり、一人は商店の息子である。この方言音反応はそれぞれ、0 と 6 である。こうしてみると、この地区で、方言音の出現率の低い人は、それぞれに、それなりの条件を持っている人であると言える。

逆に、この方言音をよく保存しているのは、戸沢地区と同様に45項目以上のものは 4 名で、No. 1 (46項目), No. 7 (45項目), No. 10 (47項目), No. 14 (47項目) であるが、No. 1は鶴岡市の染織学校 3 年卒で鶴岡に住んでいたが現在は農業に従事している。No. 7は小学校卒後ずっと温海に居住している神主で、老人会役員をしている。No. 10は高小卒後鶴岡市や北海道に二十数年間居住し、大阪・東京にも、しばしば往来する大工職で、学校の父母会長をしている。妻と子 3 人のほかに弟夫婦を同居させている世話やきの人である。No. 14は昭和17年生まれ、温海高校卒で、婦人会の組長をしている。これらの人々に共通しているのは、この地区に居住し、この地区の高年層の人たちと、積極的に接触していることであろう。つまり、土地の人と積極的なコミュニケーションを志していると認められることである。

次に、鼠が関地区をみると、この地区で特に目立つのは No. 8の13項目の反応を除いて、40代以上の話者はすべて、30項目以上に、この方言音で反応している。No. 8は明治42年高小卒後、16歳より十数年札幌市に居住し、その後、兵役に 2 年従事したという。共通語化が進んだとしても、当然の条件を持っている。No. 24は15項目の反応であるが、中学生で、父親は国鉄職員である。もっとも、この地区の 4 人の中学生は、この方言音での反応は、15項目(24.6 %)~25項目(41%)であり、中学生が平均して共通語化していると認めて、差し支えないであろう。

3.5 調査員による差

以上、/ku/・/kwa/・/Fu/・/Fa/とされる方言的特徴音についての小調査の結果の概略を述べた。この調査は 3 地区72名についてのものである。調査員

は飯豊ほか4名である。この5名の調査員の面接した結果は果たして等質であろうか。もし、はなはだしく、無統一、不等質であるなら、上述したことすべて無価値であろう。

われわれは、調査をはじめる前に数回にわたり、打ち合せを行い、問題と調査法、回答の把握の方法、記述の方針等について、統一を計った。だから大きな差は生じないだろう。調査中も全員同宿し、毎日、検討会を開いて、打ち合せを行った。たぶん、この結果は同じ基準で調査された結果と見做していいであろう。

しかし、なお、検討してみる必要がある。少なくとも、検討してみる価値はあるだろう。以下に、その検討の結果を報告する。5名の調査員が各自面接調査した話者は、それぞれ、15名あるいは14名であるが、どのように判定したかは、表14～表17によって示される。

表14についてみると、I, N, R, T, Wの5名の調査員が各自分担した14名・15名の話者の回答を、どのように判定したかがわかる。

この温海町地区方言音を、直接あるいは誘導によって、聞き出しているのは、I 58.4%, T 55.3, N 48.2, R 40.9, W 38.0である。IとTは誘導形が多い点（それぞれ26.7%, 28.7%）でも似ており、共通語形式、その他形式や無答・誤答形式の割合等も、ほぼ同様である。RとWは誘導形の割合も、ほぼ同様であるが、共通語形の割合とその他形の割合は差がある。NはI・TにもR・Wにも似てはいない。その中間に位置している。

ところで、戸沢地区で、/ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/とされるこの方言音の反応の低かった5名と、温海地区で同様に低かった5名と、鼠ヶ関地区で低かった2名とを担当したのは、I 1名、T 1名、N 2名、R 4名、W 4名であった。また、45項目(73.8%)以上の反応を示した10名を担当したのは、I 4名、T 4名、N 2名であった。この極端に他と異なる話者を除いて集計すると、この方言音を聞き出している調査員の割合は、

I 284 (9名) 51.7%, N 315 (10名) 51.6, R 337 (11名) 50.2

T 285 (9名) 51.9, W 322 (11名) 48.0

となる。これによれば、Wがやや低いことは否定できないが、その差は許容

表14 調査員別集計表（全体）

	I	N	R	T	W
Φ	271 31.7	370 43.3	282 30.8	227 26.6	232 25.4
Φ誘導	228 26.7	42 4.9	92 10.1	245 28.7	115 12.6
kwa・k ^ɸ ・k ^X	7 0.8	14 1.6	13 1.4	0	27 3.0
kwa・k ^ɸ ・k ^X 誘導	0	0	0	0	7 0.8
共通語形	187 21.9	152 17.8	189 20.7	194 22.7	344 37.6
無答・誤答	14 1.6	17 2.0	30 3.3	19 2.2	39 4.3
その他	147 17.2	259 30.3	309 33.8	169 19.8	151 16.5
人	14	14	15	14	15
項目	854 100	854 100	915 100	854 100	915 100

表15 調査員別集計表（60・70代）

	I	N	R	T	W
Φ	171 40.0	169 39.6	34 18.5	153 41.8	94 22.0
Φ誘導	106 24.8	24 5.6	30 16.3	96 26.2	35 8.2
kwa・k ^ɸ ・k ^X	7 1.6	11 2.6	9 4.9	0	23 5.4
kwa・k ^ɸ ・k ^X 誘導	0	0	0	0	7 1.6
共通語形	62 14.5	91 21.4	21 11.4	37 10.1	170 39.8
無答・誤答	4 0.9	5 1.2	12 6.5	7 1.9	21 4.9
その他	77 18.0	127 29.7	77 41.8	73 19.9	77 18.0
人	7	7	3	6	7
項目	427 100	427 100	184 100	366 100	427 100

表16 調査員別集計表（40代）

	I	N	R	T	W
Φ	95 31.1	183 60.0	236 38.7	64 21.0	105 34.4
Φ 誘導	100 32.8	17 5.6	47 7.7	107 35.1	39 12.8
kwa・k ^Φ ・k ^X	0	1 0.3	4 0.7	0	4 1.3
kwa・k ^Φ ・k ^X 誘導	0	0	0	0	0
共通語形	72 23.6	46 15.1	119 19.5	83 27.2	105 34.4
無答・誤答	3 1.0	5 1.6	11 1.8	4 1.3	9 3.0
その他	35 11.5	53 17.4	193 31.6	47 15.4	43 14.1
人	5	5	10	5	5
項目	305 100	305 100	610 100	305 100	305 100

表17 調査員別集計表（10代）

	I	N	R	T	W
Φ	5 4.1	18 14.8	12 9.8	10 5.5	33 18.0
Φ 誘導	22 18.0	1 0.8	15 12.3	42 23.0	41 22.4
kwa・k ^Φ ・k ^X	0	2 1.6	0	0	0
kwa・k ^Φ ・k ^X 誘導	0	0	0	0	0
共通語形	53 43.4	15 12.3	49 40.2	74 40.4	69 37.7
無答・誤答	7 5.7	7 5.7	7 5.7	8 4.4	9 4.9
その他	35 28.7	79 64.8	39 32.0	49 26.8	31 16.9
人	2	2	2	3	3
項目	122 100	122 100	122 100	183 100	1 100

できる範囲にあると言えよう。他はいずれも50%~51%である。

表15についてみると、調査員別のこの方言音の出現率は

I 277 (7名) 64.8%, N193 (7名) 45.2, R64 (3名) 34.8

T249 (6名) 67.0, W129 (7名) 30.2%

であるが、同様に極端に差を示すものを除けば（除外するのは、すべて表14において除外した同人物である）

I 180 (5名) 59.0%, N96 (4名) 39.3, R64 (3名) 34.8

T63 (2名) 51.6, W113 (4名) 46.3

である。

表16における調査員別のこの方言音の出現率は、

I 195 (5名) 63.9%, N200 (5名) 65.6, R283 (10名) 46.4

T171 (5名) 56.1, W144 (5名) 47.2

であるが、同様に極端に差を示すものを除けば、

I 92 (3名) 50.3%, N200 (5名) 65.6, R252 (7名) 59.0

T171 (5名) 56.1, W135 (4名) 55.3

であり、これも、より妥当な出現率と言えるであろう。

表17は中学生についてのものであるが、中学生は話者の数が少なく、各調査員の分担した数は2~3名であるから、これを改めて問題にすることは、さし控えることとする。

いずれにしても、調査員による差のあることは否定できないであろうが、調査の結果を無にするほどのものではないと判断された。

4. ま と め

以上、山形県西田川郡温海町地区における、/ku/・/kwa/ > /Fu/・/Fa/とされる、特殊方言音について、それが、現在、この地区にどのように行われているのかについて、1980年11月19日—25日にかけて、小調査を行った。戸沢地区、温海地区、鼠ヶ関地区、各24名（60・70代10名、40代10名、中学生4名）についてである。

それについて、次のような結果を得た。

1. /ku/・/kwa/・/Fu/・/Fa/とされる、この方言音はかなり古く成立したものと思われる。それは/kwa/・/ka/の成立以前であり、また、

/ku'OR/・/koR/ (食おう)

/kur eru/・/ku eru/・/keru/ (くれる)

/kurerar eru/・/kueraeru/・/keraeru/ (くれられる)

/kurereba/・/kuereba/・/kereba/ (くれれば)

等の成立以前であると思われる。したがって、この言語上のきまりが、活力を持っていた時代には、該当する形態を持つものは、この力に染められたものと思うが、現在は、一部地域を除いて、共通語化の力の方が強く、今や一般的には、この方言音のきまりは強力とは言えない。明治以降、近代化の波とともに使用されるようになった新語や、改まって文化学術等に用いられる専門語等は、この方言音のきまりから免れている。また、形態素として、はっきり把握できる複合語後部要素は、この方言音のきまりが及ぶが、完全な単純語の語中・語尾の要素は一般に、このきまりを受けない。「菊」「くじゃく」「じしゃく」「高くて」等は、多く [-gū] の形をとるせいであろう。まれに [kikū] の形が聞かれるが、[-Φū] は聞かれなかった。

2. 鼠が関、温海地区に古くから行われたようである。温海地区は、現在共通語化が進んでいる。内陸部は、かつては盛んではなかったようであるが町村併合によるものと思われるが、現在では、その勢力が及んでいる。内陸部においては、地区により、かなり活力ある生きた「きまり」として働いているようである。それは、この町内では、温海・鼠が関は、文化的経済的政治的に中心であり、優位にあるからであろう。

3. 年代差・男女差についてみると、温海・鼠が関地区では、60・70代に方言音が多く保存され、ついで40代がやや低くなり、中学生は、ぐっと共通語化が進んでいるという一般的パターンであるが、戸沢地区は、40代の男性に高く、ついで40代女性、60・70代男性、つぎに60・70代女性の順になっている。普通は60・70代女性が最も方言を保存するものである。それは男性は高年齢でも、社会的に活動し、外部と接触することが多く、どうしても、共

通語化の波にさらされがちであるからであろう。また40代では男女差はあまり大きくはないのが普通である。しかるに、戸沢では40代男性が最もこの方言音を持っている。それは、たぶん、温海町内の他の地区の人々と接触する割合の最も高いせいであろう。

4. 個人差についてみると、温海・鼠が関地区では、この地区の高年層と積極的に接触しようとする人は、この方言音を使用する傾向が見られるが、学歴があり、他の地区の人と接触する機会の多い人は共通語化が進んでいる。もちろん、中学生は一般的に共通語化が進んでいるが、この方言音に関する限り、戸沢地区では逆であり、町内の他の地区と接触する人はこの方言音をよく使用している。

5. 調査員による差のあることは否定できないが、調査の際によく打ち合せを行い、回答の把握について、繰返し統一をはかることにより、最小限度に、その差を縮めることができるであろう。われわれは、この点で、かなり成功していると思うが、なお今後、努力したい。

6. この/ku/・/kwa/・/Fu/・/Fa/の事象をどうとらえるかについては、はじめに述べたので詳しく述べることはしない。たぶん

[kɯ̥] > kxɯ̥] > [xɯ̥]

に転じたものであろう。この地区では、ハ行は[ɸɯ̥, ɸo, ɸa, ɸe, ɸi] のようであるから、[kɯ̥] > [xɯ̥] は、このハ行音にのみこまれて [ɸɯ̥] となつたものであろうというのが、わたしの解釈である。

〔付 記〕

調査に際しては、下記の機関、ならびに、多くの話者の方々のお世話になった。記して感謝の意を表する。

温海町教育委員会、(新潟県)山北町教育委員会、温海町公民館、鼠が関公民館、戸沢公民館、温海中学校、念珠が関中学校、山戸中学校。

福井市およびその周辺地域における アクセントの年齢差、個人差、調査 法による差

佐藤亮一

1. 調査の目的・方法

1.1 調査の動機と目的

福井県嶺北地方のアクセントは平山輝男氏が1953(昭和28)年に行った調査によって、その詳細な分布が明らかにされた。それによると、福井市を中心とする比較的狭い地域に無型アクセントが分布し、それをとりまく形で三国式、今庄式、大野式のような類の統合体系の異なる多型アクセントが分布する注1(図1)。

しかるに、第2回一型アクセント研究会(1980年10月)で杉藤美代子氏が福井市のアクセントとして発表された調査報告を見ると、高年層話者の発音(5名の話者が2拍名詞各類10単語を助詞をつけずに各語3回、すなわち、のべ30回発音したときの、1人当たりの平均値)について、I IVV／II IIIの傾向が認められた(表1)。これは福井市が無型アクセントであるという従来の説を疑わせる結果と言わざるを得ない。

そこで、福井市内、およびその周辺のアクセントについて、次の仮説(予想)の下に調査を行うことにした。

- ① 高年層は大部分が無型ア('ア'はアクセントの略。以下同じ)であるが、一部に多型アの話者が存在する(これまでの調査では、話者の個人差・年齢差、あるいは調査法などとの関係で多型アの存在が確認できなかった可能性があると考える)。
- ② 中年層はすべて無型アである(多型アの話者は高年層の一部に残存する

にすぎないと予想する)。

- ③ 若年層の中には無型ア的な者と東京ア的な者とが存在する（従来無型アと言われてきた地域において若年層の一部が共通語アクセント化『東京語アクセント化』^{注2}）しつつあることが報告されている。これまでの報告は主として東日本方言圏内における無型アクセント地域を対象としたものである

図1 福井県嶺北方言音調分布図（平山輝男1953）



平山輝男「福井県嶺北方言の音調とその境界線・その1」(『音声学会会報83』, 1953) から。

が、西日本方言圏内に位置する福井市においても同様の傾向が認められるることを予想する)。すなわち、この研究は次の3点を主要な目的としたものと言える。

① 無型アであることが定説化している福井市方言話者の中に多型アクセントの話者が存在するのでは

ないかという仮説を実証すること。
かっこ内の数字は、30回の発音中、その型に発音した平均値。

② 福井市アクセントの年層差についての仮説を実証すること。

③ ①②の目的を達成するための調査法(質問法)と分析法を開発すること。

1.2 調査の内容(第1回調査について)

調査時期 本研究に関する調査は2回に分けて行った。第1回調査は、予備調査を1982年11月に筆者が担当して実施し、本調査を同年12月に筆者・沢木幹栄・白沢宏枝(以上、国立国語研究所員)、小林隆(当時は国立国語研究所非常勤研究員、現在は同所員)、および、真田信治氏(大阪大学助教授)、加藤和夫氏(当時は東京都立大学人文学部助手、現在は和洋女子短期大学講師)が共同で行った。第1回調査の結果を踏まえて調査方法の一部を改善し、第2回調査を1983年7月(一部は同年3月)に実施した。調査者は筆者・沢木幹栄・小林隆であり、一部に山口幸洋氏(国立国語研究所地方研究員)の協力を得た。この章では第1回調査について述べる。

調査地域・調査対象者 調査地域は福井市内を中心とし、参考として、福井市の周辺6か所(坂井郡三国町<中心部>、坂井郡坂井町<上兵庫>、吉田郡松岡町<中心部>、武生市下中津原町、鯖江市定次町、南条郡今庄町)をも調査した。話者は、福井市内については、中学生20名(男9名、女11名)、その父または母20名、中学生の祖父または祖母20名(以上、合計60名)、いずれも福井市内で生れ育った者を対象とし、周辺6か所については、それぞれの地

表1 福井市高年層話者のアクセント
(杉藤美代子1980)

1類	● ○	(26.2)
2類	○ ●	(21.2)
3類	○ ●	(22.2)
4類	● ○	(24.2)
5類	● ○	(27.6)

点で高年層話者数名を調査した。

各地点における調査対象者（話者）は次のとおりである（以下、①は話者記号、②は話者の生年（西暦の下二桁）、③は父親の主な生育地、④は母親の主な生育地、⑤は外住歴（外住時の年齢）をあらわす。また、話者符号について、「福」は「福井市内」、「三」は「三国町」、「坂」は「坂井町」、「松」は「松岡町」、「武」は「武生市」、「鯖」は「鯖江市」、「今」は「今庄町」、「若」は「若年層（中学生）」、「中」は「中年層」、「高」は高年層、「m」は「男性」、「f」は「女性」の略称である。なお、以下に記す話者のうち、*印の者は出身地が他地域であったので、小稿では分析の対象から外した）。

①	②	③	④	⑤
福 1 若m	70	福井市	福井市	なし
〃 2 〃 〃	70	東京	武生市	〃
〃 3 〃 〃	70	福井市	松岡町	〃
〃 4 〃 〃	70	静岡県	坂井町	〃
〃 5 〃 〃	69	福井市	福井市	〃
〃 6 〃 〃	69	〃	松岡町	〃
〃 7 〃 〃	70	〃	坂井町	〃
〃 8 〃 〃	69	〃	福井市	〃
〃 9 〃 〃	70	〃	〃	〃
〃 10 〃 f	70	〃	丸岡町	〃
〃 11 〃 〃	69	〃	勝山市	〃
〃 12 〃 〃	69	勝山市	福井市	〃
〃 13 〃 〃	69	福井市	三重県津市	〃
〃 14 〃 〃	69	〃	福井市	〃
〃 15 〃 〃	70	〃	〃	〃
〃 16 〃 〃	69	〃	〃	名古屋（4—6）
〃 17 〃 〃	69	勝山市	〃	なし
〃 18 〃 〃	69	大野市	〃	〃

" 19 "	70	福井市	"	"
" 20 "	69	静岡県島田市	"	"
福 1 中 m	40	福井市	"	東京 (18—22)
" 2 " m	34	"	不明	東京 (25—29)
* " 3 " f	45	吉田郡小船渡	吉田郡上志比	松岡町 (0—24)
" 4 " m	33	福井市	吉田町(静岡)	丸岡町 (5—8)
				春江町 (8—11)
				三国町 (11—14)
* " 6 " f	42	松岡町	松岡町	松岡町 (0—22)
" 7 " m	42	福井市	福井市	京都 (18—22)
" 8 " f	47	"	"	なし
" 9 " m	31	"	"	"
" 11 "	40	"	"	大阪 (18—22)
" 12 " f	36	名古屋	"	なし
" 13 " m	38	福井市	三重県志摩郡	"
" 14 " f	42	松岡町	福井市	"
" 15 " f	46	福井市	"	"
" 16 " f	46	"	"	"
" 17 " f	42	"	鯖江市	東京 (18—22)
" 18 " f	42	"	福井市	なし
" 19 " m	39	"	"	"
" 20 " f	46	金津町	"	東京 (15—22)
				静岡県藤枝市(22—24)
" 21 " f	43	福井市	"	なし
" 22 " f	31	"	"	"
福 1 高 f	10	"	"	"
" 2 " f	11	永平寺町	話者幼時死去	東京 (14—22)
" 3 " f	22	福井市	三国町	三国町 (22—27)
" 4 " m	04	"	福井市	東京 (21—27)

				丸岡町 (29—33)
				池田町 (34—38)
* " 6 " m	08	武生市	"	武生市 (0—23)
" 7 " f	18	福井市	"	なし
" 8 " f	21	"	"	"
" 10 " f	11	"	"	三国町 (22—27)
" 11 " f	05	"	"	なし
" 12 " f	16	"	"	"
" 13 " m	09	"	三国町	京都 (18—22)
" 14 " f	08	"	福井市	なし
" 15 " m	15	"	"	外地 (27—37)
" 17 " m	15	"	"	なし
" 18 " f	20	"	吉田郡郡村	"
" 19 " f	15	勝山町	福井市	"
" 20 " f	11	大野郡東河原	今立郡小畑	東京 (20—24)
" 23 " f	16	福井市	福井市	吉田郡 (33—34)
" 24 " f	03	"	"	足羽郡 (22歳頃 1年)
三 1 高 f	95	富山県滑川市	三国町	福井市(若い頃に約1年)
" 2 " f	06	三国町	"	なし
" 3 " f	13	"	"	"
坂 1 高 f	14	坂井町	坂井町	"
" 2 " f	16	"	"	"
" 3 " f	23	"	"	外地 (0—2)
松 1 " m	11	松岡町	松岡町	姫路 (28—32)
" 2 " f	11	旧萩野村	"	なし
" 3 " m	12	旧磯部村	"	鯖江 (21—22)
				外地(25—27, 29—35)
				東京 (50—61)
武 1 " f	09	下中津原町	下中津原町	広島県呉市 (22—25)

" 2 " f	12	"	"	武生市武生（若い頃）
" 3 " m	13	"	"	外地（25—29）
鯖 1 " m	06	定次町	横越町	なし
" 2 " m	17	"	武生市北新庄	外地（27—29）
" 3 " f	20	下新庄村	武生市新保町	下新庄村（0—21）
今 1 " m	96	今庄村	今庄村	京都（16—20）
" 2 " f	02	"	"	なし
" 3 " f	13	"	"	"

上記のうち、福井市内の話者については、まず、若年層の話者（中学生）に1~20の番号を与え、その父親または母親（中年層）、および、その祖父または祖母（高年層）には中学生と同一の番号を与えた。すなわち、同一家族には同一の番号を与えたことになる。中年層話者と高年層話者の一部に欠番が存在するのは、話者の都合により、中学生の親または祖父母を調査できなかったケースがあったためである。そのため、福井市の中年層と高年層については、中学生の家族のほかに、若干の話者を追加調査した。「福21中」「福22中」「福23高」「福24高」の4名がそれである。

調査語・調査の方法 調査語としては、次に示すとおり、2拍名詞各類5語ずつ計25語を選定した。調査語の選定にあたって、1拍めと2拍めとの母音の広狭の組み合わせについて配慮した。

調査語はカードの形で話者に示し、それぞれの単語について、次の順序で調査を行った（以下の例で、「　　」内を1枚のカードに記入した。たとえば、

類	広一広	狭一広	広一狭	狭一狭
I	風・顔	庭	鳥	水
II	音	胸	夏	石・冬
III	山	池	足	犬・耳
IV	肩	糸	箸・針	海
V	雨	鮒・蜘蛛	春	鶴

「風が吹く／風」は、右に示すように上段に文（文末に句点）を、下段に単語（語末に句点）を配置し、上段の文を読んでから一呼吸おいた
のち、下段の語を読んでもらった)。

風が吹く。
風。

① 〈A式〉 それぞれの単語を文頭に置いた短文、および、単語言い切りの形を話者に読んでもらう。これを2回くりかえす。提示順序は異類混合配例。具体的には次のとおり（括弧内のI～Vはアクセントの語類をあらわす）。

「風が吹く／風」(I), 「音がする／音」(II), 「顔が赤い／顔」(I), 「山が見える／山」(III), 「肩が痛い／肩」(IV), 「庭が見える／庭」(I), 「雨が降る／雨」(V), 「胸が痛い／胸」(II), 「糸が切れた／糸」(IV), 「池が見える／池」(III), 「鮎が釣れた／鮎」(V), 「鳥が鳴く／鳥」(I), 「蜘蛛がいる／蜘蛛」(V), 「夏が来た／夏」(II), 「箸がない／箸」(IV), 「足が痛い／足」(III), 「針が長い／針」(IV), 「水が流れる／水」(I), 「石が落ちる／石」(II), 「海が見える／海」(IV), 「冬が来た／冬」(II), 「春が来た／春」(V), 「犬がほえる／犬」(III), 「鶴が飛ぶ／鶴」(V), 「耳が長い／耳」(III)

上記を一度最後まで読んでもらってから最初に戻り、もう一度くりかえした。なお、「鮎」「蜘蛛」「箸」には振仮名をつけた。

② 〈B式〉 二つの単語について、短文、および、助詞「が」の付いた文節言い切りの形で、両者を比較しつつ発音してもらう（これを「比較発音」と呼ぶ）。このときに、型の区別の有無についての話者の意識もたずねる。提示したカードの内容、および、話者への質問は次のとおり。

風が吹く。
音がする。

問1 これを読んでください。

問2 もう一度読んでください。

(カードの例) 問3 それでは線の引いてある所だけを読んでください。

問4 もう一度（線が引いてある所を）読んでください。

問5 線が引いてある所のこことここは、声のたかひく（高低）の調子が同じだと思いますか。違うと思いますか。

問6 （「違う」と答えたたら）どんなふうに違いますか。

提示カード（レイアウトは上記例のとおり）

「風が吹く／音がする」(I・II), 「風が吹く／山が見える」(I・III), 「風が吹く／肩が痛い」(I・IV), 「風が吹く／雨が降る」(I・V), 「音がする／山が見える」(II・III), 「音がする／肩が痛い」(II・IV), 「音がする／雨が降る」(II・V), 「山が見える／肩が痛い」(III・IV), 「山が見える／雨が降る」(III・V), 「肩が痛い／雨が降る」(IV・V)

上記のカードを提示して、それぞれのカードごとに問1～6の質問を行ったのち、引き続いて次のカードに移る。下に示すカードは、上記のカードと文の配列を逆にしたものである。^{注3}

「音がする／風が吹く, 「山が見える／風が吹く, 「肩が痛い／風が吹く,
「雨が降る／風が吹く」……「雨が降る／肩が痛い」

以上に示したように、この〈B式〉は、各類から1語ずつを選び、各類のすべての組み合わせ（同類の組み合わせを除く）についての「比較発音」を試み、それぞれのペアについて短文4回（正順2回、逆順2回）、文節言い切り形4回（同）の発音を行って型の対立の有無とその安定の度合について観察しようとするものである（なお、話者にアクセントの異同についてたずねる問5と問6は、最初の4枚のカード（「風が／音が」「風が／山が」「風が／肩が」「風が／雨が」）についてのみ行った）。

③ 〈A式〉 ①と同じものをもう一度読んでもらう。すなわち、A式は計3回発音することになる。同じ形を何度も発音してもらうのは、アクセントの安定度を計るためにある。

④ 〈C式〉 ①と同じ短文・単語に「この」が付いた形をカードで示し、それぞれ1回ずつ読んでもらう（語の提示順序はA式と同じ異類混合配列）。

例 「この風が吹く／この風」「この音がする／この音」

⑤ 〈D式〉 調査語を含んだ短文を、話者に自由に方言に翻訳させて、なるべく自然な調子で言ってもらう。方言文の例はカードの形で示すが、その例文にこだわらず、自由な翻訳を求める。

提示文例 「だいぶきつい風が吹いているのう」「どっかで音がするのう」
「あっちに山が見えるぞ」

第1回調査においては、以上の〈A〉〈B〉〈C〉〈D〉の4方式について調査を行った。なお、このほかに、話者のアクセント意識やアクセントについての知識を探るため、調査の冒頭で、「橋」と「箸」を「なぞなぞ式」で発音させ、両者の音相の異同について話者に質問し、さらに、この二つの単語を「声のたかひく（高低）」によって区別する地方があることを知っているかどうかについてたずねた。

調査結果の記録・表示 調査時における話者の発音・発話はすべて録音し、後日、筆者がそのアクセントを聴取し、記録した。各調査者も調査時に記録したが、それは参考とするにとどめた。

アクセントの記録（聴取結果）は、拍間（一部に拍内間）の上昇あるいは下降を、次のように2段階に分けて行った。

- 〔↑〕 上昇大（明瞭な上昇の認められるもの）
- 〔↑〕 上昇小（同一の話者において、〔↑〕と比較して、より程度の小さい上昇の認められるもの）
- 〔↓〕 下降大（明瞭な下降の認められるもの）
- 〔↓〕 下降小（同一の話者において、〔↓〕と比較して、より程度の小さい下降の認められるもの）

具体的には、次に示すような種々の音相が記録されたが、小稿では、印刷の都合により、それらを原則として（ ）内の符号（表中では冒頭の符号）で表示する。

I. 2拍単位（2拍語）の表示

- | | |
|-------------|-------------|
| ↑ (○○) (○○) | ↑ (○○) (○○) |
| ○ (○○) (○○) | ○ (○○) (○○) |
| ● (○○) (○○) | ● (○○) (○○) |
| ♀ (○○) (○○) | |

II. 3拍単位（2拍語+1拍の助詞）の表示

- | | |
|---------------|---------------|
| ↑ (○○○) (○○○) | ↑ (○○○) (○○○) |
| ♀ (○○○) (○○○) | ♀ (○○○) (○○○) |

△	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)	▽	(<u>○○○</u>) (<u>○○○</u>)
△	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)	▽	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)
△	(<u>○○○</u>) (<u>○○○</u>)	△	(<u>○○○</u>) (<u>○○○</u>)
○	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)	○	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)
○	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)		
△	(<u>○○○</u>) (<u>○○○</u>)	△	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)
△	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)	△	(<u>○○○</u>) (○ <u>○○</u>)

上記の音相について、以下に若干のコメントを加えておきたい。

- ・ [○○] と [○○] は第2拍に拍内下降の認められるもので、後者は前者に比して上昇の程度の小さいものである。この種の音相には、ほかに [○○] のように第2拍への上昇がないままに2拍目が下降するものがありうるが、実際には認められなかった。
- ・ [○○○] や [○○○] のように記録した音声は、実際には [○○○] [○○○] [○○○] などのように、次第に下降していくものが大部分を占める ([○○○]) のように表示される東京語の頭高型なども、同様に3拍目に向って下降のあることは周知のことである)。ここでは煩雑さを避けて上記のような簡略表示を行った。ただし、 [○○○] のような第3拍への下降の全く認められない音相が現実に存在すれば、その音相は平板相([○○○])などとの関連を見る上で重視すべきものかもしれない。今後の課題としておきたい。
- ・ [━] と [━]、また [━] と [━] との差は連続的(量的)なものであり、耳による判定がいちじるしく主観的になることは避けられない。両者の差の表示は分析のための参考の一つとするためであり、後に述べるように、個々の話者のアクセントの性格(東京語アクセントの度合、三国アクセントの度合、無型アクセントの度合)を数量的に把握するにあたっては、[━] と [━] を一つにまとめ、また、 [━] と [━] を一つにまとめて処理した。
- ・ 無型アクセント地域や、その周辺の地域では、アクセントの「ゆれ」が頻発するばかりでなく、個々の音相のピッチ差が小さく、その判定に迷うケースも多い。そのような音相は録音を何度も聴いて(時間を置いて再び聴きなおすという方法も用いて)最終的に判定を下した。判定に迷ったもの

には「？」を付け、後日の検討に備えることにした。しかし小稿では「？」マークはあえて表示せず、筆者の最終判定のみを示した（これらの微妙な音相を複数の聴取者《アクセント研究者》がどのように聴くか、また、その聴取結果はそれぞれのサンプルの実験音声学的な分析結果とどのように関連するかは、今後の研究課題の一つとして興味深い）。

- ・小稿で聴取の対象とした諸事例において $\overline{\text{O}\text{O}}$ と $\overline{\text{O}\text{O}}$ との差は極めて明瞭であり、 $\overline{\text{O}\text{O}}$ と認定した事例についても、 $\overline{\text{O}\text{O}}$ との差の有無について迷ったケースはほとんどなかった。しかし、 $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ と $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ との差は極めて微妙であり、両者のいずれであるかの判定に迷うケースが多くかった（このため、その中間の段階の $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ を認めたケースは皆無に近かった。言いかえれば、小稿で $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ と記録・表示したものは、むしろ $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ に近いものとみなしうる）。小稿のデータを分析するにあたっては、この点に留意する必要がある。
- ・個々の音相について、わずかでも上昇または下降の認められるものには〔一〕や〔一〕として記録した。したがって、小稿で $\overline{\text{O}\text{O}}$ あるいは $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ と表示したものは、筆者の耳では完全な全平と判断したケースである。また、 $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ や $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ と表示したものは、第1拍と第2拍との間に上昇あるいは下降をいささかも認め得なかったケースである。
- ・ストレスについては原則として記録を行わなかった。しかし、たとえば $\overline{\text{O}\text{O}\nabla}$ (∇ はストレス) のようなケースはときに $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ のように聞こえることもあり、この種のものは（記録票の原簿では） $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ と記録した場合もある（しかし、小稿ではストレスを表示せず、単に $\overline{\text{O}\text{O}\text{O}}$ の符号で示してある）。アクセントの記述におけるストレス表示の意味については、今後の課題としたい。

1.3 調査結果の数量化

最初に述べたように、福井市方言の話者には、「無型アクセントの者」「東京アクセントの傾向を示す者」「東京アクセント以外の多型アクセントの傾向を示すもの」が存在すること、また、その「無型ア」「多型ア」の程度は話者

の年齢その他によりさまざまであることを予想して調査に臨んだ。そして、調査の結果、上記の仮説が立証され、さらに、「東京アクセント以外の多型アクセント」とは「三国式アクセント」であること、また、同一の話者が調査方式の違いによって「三国式ア」の度合をいちじるしく変える場合のあることが確かめられた。

そこで、小稿では、次に述べる方法によって、個々の話者の「無型ア」「三国式ア」「東京ア」の程度を計ることにした。

三国式アクセントの度合 後章で述べるように、坂井郡三国町の高年層のアクセントは、話者により、また、単語により多少とも「ゆれ」を示すものの、2拍名詞について基本的には次の体系を持つことが明らかになった。

/ $\overline{\text{O}}\text{O}$ /～/ $\text{O}\overline{\text{O}}\nabla$ / (I IVV類)

/ OO /～/ $\text{O}\text{O}\nabla$ / (II III類)

それぞれの型は次のような音相（音声学的音相）として実現する。

/ $\overline{\text{O}}\text{O}$ /型…… ($\overline{\text{O}}\text{O}$) ($\text{O}\overline{\text{O}}$)。

/ OO /型…… ($\text{O}\overline{\text{O}}$) ($\text{O}\overline{\text{O}}$) ($\text{O}\overline{\text{O}}$) ($\overline{\text{O}}\text{O}$) など。

/ $\overline{\text{O}}\overline{\text{O}}\nabla$ /型…… ($\text{O}\overline{\text{O}}\nabla$) ($\overline{\text{O}}\text{O}\nabla$) ($\text{O}\overline{\text{O}}\nabla$) ($\overline{\text{O}}\text{O}\nabla$) など。

/ $\text{O}\text{O}\nabla$ /型…… ($\text{O}\text{O}\nabla$) など。

さて、福井市の高年層話者「2f」を例として数量化の方法を述べよう。まず、この話者が〈A式〉（第1回調査）、〈E式〉〈e式〉（第2回調査）の方式で、それぞれの単語を「单語言い切りの形」で発音したときの全音相を表2に示す（それぞれの調査方式については、129ページ以降および203ページ以降を参照されたい）。「A1・A2・A3」「E1・E2」などは、その方式を数回くりかえしたときのそれぞれの音相である。また、同一欄に複数の記号があるときは、そのときに数回続けて発音した音相の種類と数を示す（たとえば、表2のE2で「風」が「III」とあるのは3回続けて〔カゼ〕と発音し、「音」が「 $\Theta\Theta\Theta$ 」とあるのは〔オト〕〔オト〕〔オト〕と続けて発音したことを示す）。

表2を見ると、〈A〉では大部分の語が/ $\overline{\text{O}}\text{O}$ /型 ($\overline{\text{O}}\text{O}$) ($\text{O}\overline{\text{O}}$) に発音され、わずかに/ OO /型 ($\text{O}\overline{\text{O}}$) ($\overline{\text{O}}\text{O}$) がある。 OO /型はII III類の語にのみ現れること（すなわち三国式の片鱗がうかがえること）が注目される。た

表2 福井市高年層 話者2f <単語>

		A 1	A 2	A 3	E 1	E 2	e 1	e 2
I	風	—	—	—	—	---	—	—
	顔	—	—	—	—	—	—	—
	庭	—	—	—	—	—	—	—
	鳥	—	—	—	—	—	—	—
	水	—	x	x	—	—	—	—
II	音	—	—	—	⊖	⊖⊖♀	♀	♀○
	胸	—	—	—	—	—	—	○○
	夏	—	—	♀	—	○	—	○○
	石	—	—	—	—	○	—	○○
	冬	—	—	—	—	—	—	♀○
III	歌	x	x	x	—	—	—	○
	山	—	—	—	⊖	—	○	♀
	池	—	—	—	⊖	—	—	○
	足	—	—	—	—	—	—	○
	犬	—	—	—	—	—	—	○
IV	耳	—	—	—	—	—	—	○
	色	x	x	x	—	—	—	○
	肩	—	—	—	—	—	—	—
	糸	—	—	—	—	—	—	—
	簪	—	—	—	—	—	—	—
V	針	—	—	—	—	—	—	—
	海	—	—	—	—	—	—	—
	息	x	x	x	—	—	—	—
	雨	—	—	—	—	—	—	○
	鮒	—	—	—	—	—	—	—
	蜘蛛	—	—	—	—	—	—	—
	春	—	—	—	—	—	—	—
	鶴	—	—	—	—	—	—	—
	汗	x	x	x	—	—	—	—

| (○○)

♀ (○○)

◎ (○○)

× 調査せず

| (○○)

○ (○○)

⊖ (○○)

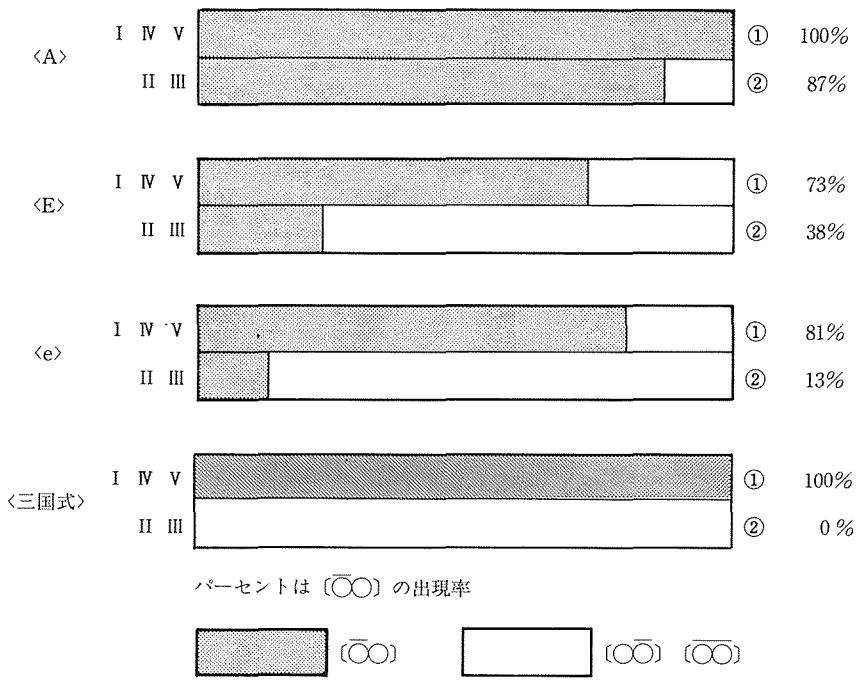


図2 三国式アクセント度のモデル

だし、3回の発音（A1・A2・A3）を通じて、安定して/O O/型を示した語はない。

<E>および<e>では、II III類における/O O/型 ((O O)) (O O) (O O) (O O)) の出現率がきわめて高くなる。すなわち、I IVV / II IIIという三国式の傾向が強まる。ただし、<E>ではII III類にも/O O/型が多く現れ、また、<E> <e>を通じて、IVV類（とくにIV類）にも/O O/型が現れる点で、完全な三国式とは言えない。

さて、<A> <E> <e>の各方式において、I IVV類とII III類のそれぞれに/O O/型が出現した割合（%）をグラフで示すと図2のようになる。完全な三国式はI IVV類が100%/O O/型、II III類が100%/O O/型に発音されると考えれば、表2の話者は<A>より<E>、さらに<e>において三国式に近づいたことになる。

そこで、①（I IVV類における/ $\bar{\circ}\circ$ /型の出現率）から②（II III類における/ $\bar{\circ}\circ$ /型の出現率）を減じた値をmとし、これを三国式アクセントからの距離（三国式アクセントの度合）をあらわすものとする。完全な三国式アクセントは、①が100、②が0であるから、 $m=100-0=100$ となる。表2の話者の場合、〈A〉では $m=100-87=13$ 、〈E〉では $m=73-38=35$ 、〈e〉では $m=81-13=68$ となる。

この方法によれば、典型的な無型アクセント話者の場合、すべての単語を同一型に発音すれば $m=0$ となり、また、そのときの気分で種々の音相を恣意的に発音すれば、①と②に現れる/ $\bar{\circ}\circ$ /型の出現率は確率的に同値であるから、やはり $m=0$ に近くなる。一方、もしI IVV類のすべてを/ $\circ\circ$ /型、II III類のすべてを/ $\bar{\circ}\circ$ /型と、三国式と完全に逆の型に発音すれば、 $m=-100$ となる。すなわち、この方法による値は、個人アクセント(idiolect)の無型化的度合と、特定方言のアクセント（ここでは三国式アクセント）からの距離（型の一一致度）とを同時に（またはそのいずれかを）示すものと言えよう。^{注4}

以上は「単語言い切りの形」における三国式アの度合であるが、文節（2拍名詞に1拍の助詞が付いた形）についても、同様の方法で「三国式アの度合」を計ることができる。

三国町の話者「2f」（151ページの表7参照）について見よう。

表7の右側に記したA1・A2・A3について見ると、I IVV類には/ $\circ\bar{\circ}\nabla$ /型（[$\bar{\circ}\circ\nabla$] [$\circ\bar{\circ}\nabla$] [$\circ\circ\bar{\nabla}$])が多く、II III類には/ $\circ\circ\nabla$ /型（[$\circ\circ\bar{\nabla}$] [$\bar{\circ}\circ\nabla$] [$\bar{\circ}\circ\bar{\nabla}$])が多く現れる。I IVV類における発音総数は49、そのうち/ $\circ\bar{\circ}\nabla$ /型の数は43であるから、/ $\circ\circ\circ$ /型の出現率は88%である。一方、II III類における発音総数は34、そのうち/ $\circ\bar{\circ}\nabla$ /型の数は5であるから、/ $\circ\bar{\circ}\nabla$ /型の出現率は15%である。したがって、 $m=88-15=73$ となる（完全な三国式アを、I IVV類が100%/ $\circ\bar{\circ}\nabla$ /型、II III類が100%/ $\circ\bar{\circ}\nabla$ /型、すなわちII III類の/ $\circ\bar{\circ}\nabla$ /型の出現率は0%であると想定すれば、 $m=100-0=100$ となる）。

東京アクセントの度合 東京アクセントの度合については、上記と異なる考え方によって、その値を計算した。これは、筆者が以前、無型アクセント

福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差、個人差、調査法による差 139
地域である栃木県宇都宮市や宮城県仙台市で、アクセントの共通語化（東京
アクセント化）^{注5}を計るために用いた方法で、このときの結果と比較するためにこの方法を用いることにした。

福井市の若年層（中学生）の話者19fおよび話者3mを例として見よう。それぞれの話者の〈A式〉における結果を表3と表4に掲げた。

表3の左側に記したA1・A2・A3は、話者19fが「単語言い切りの形」で、それぞれの語を3回発音したときの音相である。I II III類には平板相（〔○〇〕〔○〇〕），IVV類には頭高相（〔〇〇〕〔〇〇〕）が多く現れている。東京アクセントはI II III類の語が平板型、IVV類が頭高型であるから、この話者の発音はかなり東京ア的であると言える。しかし、「風」「音」「池」などのように頭高相と平板相との「ゆれ」を見せてている語もあり、「箸」のように、東京で頭高型の語をすべて平板相に発音している例もあるから、完全な東京アとは言えない。

そこで、それぞれの語について、3回とも平板相に発音している場合にはその語に〇の符号を与え、3回とも頭高相に発音している場合には|の符号を与える。それ以外は「ゆれ」とみなし×の符号を与えることにする。このようにして作成したものが表5である。

表5の例1は話者19fの「単語言い切りの形」の結果である。東京で平板型の語を（ゆれずに）平板相に発音したケースは〈顔・庭・鳥・水・胸・夏・石・冬・山・足・犬・耳〉の12語、東京で頭高型の語を（ゆれずに）頭高相に発音したケースは〈肩・糸・雨・鮎・蜘蛛・鶴〉の6語である。もし、単純にこれらの語を東京アと一致とみなして、調査語総数25語中の割合を求めると72%となる。しかし、もしこの方法で東京アクセントの度合を算出すると、仮にすべての語を同じ音相に発音した話者があると（無型アクセント話者はしばしばそのような発音をする）、すべてが平板相なら東京アとの一致率が $\frac{15}{25}=60\%$ 、すべてが頭高相なら $\frac{10}{25}=40\%$ になってしまう。したがって、この方法は採用しがたい。

そこで筆者は、完全な無型アクセント話者には0点、完全な東京アクセント話者には100点を与え、個々の話者の段階に応じて東京アからの距離と無型

アからの距離を同時に計る方法として、次の手順により東京アとの一致度(t)^{注6}を算出した。

- ① 個々の語について、「ゆれ」を示さずに発音された音相(すなわち×印以外の音相)を「安定相」とし、個々の語の安定相について東京アとの一致の有無を見る。
- ② 東京で同一の型をもつ語のグループごとに、各音相(平板相、中高相、頭高相)の出現率を計算し、出現率の合計の最も大きい音相は、その音相が東京アと一致していても、それは「見せかけの一一致」であるとみなし、「見せかけの一一致」の語が見られるグループは計算の対象から除外する。東京で同一の型をもつグループとは、「単語言い切り」の場合はI II III類とIV V類の2グループであり、「文節単位」の場合はI類とII III類とIV V類の3グループである。
- ③ 「単語言い切り」の場合には、上記の2グループのうちの残された1グループについて東京アとの一致率を計算し、その値を「東京アクセントの度合」(t)とする。「文節単位」の場合には、残された2グループのそれぞれについて東京アとの一致率を計算し、その平均値を t の値とする。
- ④ 出現率の合計の最も大きい音相が複数生じた場合(「単語言い切り」の場合は頭高相と平板相の出現率の合計が同値になった場合)には、それぞれの音相との「見せかけの一一致」が見られるグループを除いた形で東京アとの一致率を試算し、その値の小さい方を t の値とする(すなわち「東京アクセント度」の基準をより厳しく定める)。

以下、具体例(架空例を含む)について「東京アクセント度」(t)を計算してみよう(表5)。

例1 (福井市の若年層話者 19f)

平板相(円形符号)の出現率は $\frac{12}{15}$ (I II III類)+ $\frac{1}{10}$ (IV V類)=90(%), 頭高相(線符号)の出現率は $\frac{6}{10}$ (IV V類)=60(%)。ゆえに平板相との「見せかけの一一致」が見られるI II III類のグループは計算の対象から除外する。残るIV V類のグループで東京アと一致する音相は頭高相であるから、その一致率は $\frac{6}{10}$ =60(%)。ゆえに $t=60$ 。

例2 (福井市の若年層話者 3m)

安定相は頭高相のみであるから、頭高相との「見せかけの一致」の見られるIVV類を除外する。残る I II III類に東京アと一致する音相(平板相)は見られないからその一致率は0。ゆえに $t=0$ 。

例3 (無型アの典型。実例多数)

例2と同じ理由で $t=0$ 。

例4 (福井市の若年層話者 17f)

平板相の出現率は $\frac{1}{15}$ (I II III類) + $\frac{1}{10}$ (IVV類) = 17(%)、頭高相の出現率は $\frac{2}{10}$ (IVV類) = 20(%)。ゆえに頭高相との「見せかけの一致」が見られるIVV類を除外。残る I II III類のグループで東京アと一致するのは平板相であるから、その一致率は $\frac{1}{15} = 7\%$ 。ゆえに $t=7$ 。

例5 (架空例)

完全な東京アを示したケースである。平板相の出現率は $\frac{15}{15}$ (I II III類) = 100(%)、頭高相の出現率も $\frac{10}{10}$ (IVV類) = 100(%)。I II III類のグループとIVV類のグループのどちらを除いても残るグループの東京アとの一致率は100(%)。ゆえに $t=100$ 。

例6 (架空例)

1語に「ゆれ」が見られたほかは東京アに一致したケース。平板相の出現率は $\frac{14}{15}$ (I II III類) = 93(%)、頭高相の出現率は $\frac{10}{10}$ (IVV類) = 100(%)。ゆえに頭高相との「見せかけの一致」の見られるIVV類を除外。残る I II III類のグループで東京アと一致するのは平板相であるから、その一致率は $\frac{14}{15} = 93\%$ 。ゆえに $t=93$ 。

次に「文節単位」の場合について述べる。福井市の若年層話者 19f の〈A式〉における結果を記した表3に再び戻ろう。

表3の右側に記したA1・A2・A3は、話者 19f が、調査語に助詞「が」を付けた文節を冒頭に持つ短文を各3回発音したときの文節部分の音相である。^{注7} I類には平板相 ([○○▽]) ([○○▽]), II III類には中高相 ([○○▽]) ([○○▽]), IVV類には頭高相 ([○○▽]) ([○○▽]) が多く現れており、この話者のアクセントが東京アにかなり近いことがうかがえる。しかし、語によって

は「ゆれ」が激しく、また、「箸」は3回とも平板相に、「春」は3回とも中高相に発音するなど、完全な東京アとは言えない。

そこで、「単語言い切り」の場合と同じように、3回とも平板相に発音している場合にはその語に○の符号を与え、3回とも中高相に発音している場合には△の符号、3回とも頭高相の場合には|の符号を与える。この場合、平板相、中高相、頭高相とは、それぞれ下記の変種を含むものとし、それぞれは東京アの頭高型、中高型、平板型に対応するものと位置づける(たとえば、東京アで頭高型、中高型、平板型の語を3回とも頭高相、中高相、平板相に発音している場合には、東京アとの型の一致と認める。この場合、東京アのそれぞれの型がもつ音声学的音相の範囲と当該話者のそれとの間には一定の差がありうるが、ここではその点は考慮に入れない)。^{注8}

小稿で作業原則として設けたそれぞれの音相の範囲は次のとおりである。

平板相…… [○○▽] のほか、[○○▽] [○○▽] [○○▽] [○○▽] などを含む。

中高相…… [○○▽] のほか、[○○▽] [○○▽] [○○▽] [○○▽] などを含む。

頭高相…… [○○▽] のほか、[○○▽] [○○▽] [○○▽] などを含む。

このようにして作成したものが表5の例7以下である。先に記した手順に従って、例7以下の「文節単位」における東京語アとの一致度を計算してみよう。

例7 (話者 19f)

平板相の出現率は $\frac{4}{5}$ (I類)+ $\frac{1}{10}$ (IVV類)=90(%), 中高相の出現率は $\frac{7}{10}$ (II III類)+ $\frac{1}{10}$ (IVV類)=80(%), 頭高相の出現率は $\frac{4}{10}$ (IVV類)=40(%). ゆえに平板相との「見せかけの一一致」の見られるI類を計算の対象から除外する。残りの2グループのそれぞれについて東京アとの一致率を計算し、その平均値を出すと、 $[\frac{7}{10}(\text{II III類}) + \frac{4}{10}(\text{IVV類})] \div 2 = 55\%$ 。ゆえにt=55。

例8 (福井市の若年層話者 3m)

安定相は中高相のみであるから、中高相との「見せかけの一一致」の見ら

表3 福井市若年層 話者19f <A式>

<単語> <文節> (文中)

		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	フ	♀	○	風が	♀	○	○
	顔	♀	♀	○	顔が	♀	♀	○
	庭	♀	♀	○	庭が	♀	♀	△
	鳥	○	○	♀	鳥が	○	○	○
	水	○	○	♀	水が	○	○	♀
II	音	フ	♀	○	音が	♀	△	△
	胸	♀	♀	♀	胸が	△	△	△
	夏	♀	○	♀	夏が	△	△	△
	石	○	○	♀	石が	△	△	△
	冬	○	○	○	冬が	△	△	△
III	山	♀	♀	○	山が	○ △	△	△
	池	フ	♀	♀	池が	△	△	△
	足	♀	♀	○	足が	△	△	○
	犬	○	♀	○	犬が	△	△	△
	耳	○	♀	♀	耳が	△	△	△
IV	肩	フ	フ	フ	肩が	フ	フ	△
	糸	フ	フ	フ	糸が	フ	○	—
	簪	○ ♀	○	♀	簪が	○	△ △	—
	針	フ	フ	フ	針が	フ	—	フ
	海	フ	フ	○	海が	フ	—	フ
V	雨	フ	フ	フ	雨が	フ	フ	フ
	鮒	フ	フ	フ	鮒が	フ	フ	フ
	蜘蛛	フ	フ	フ	蜘蛛が	フ	フ	フ
	春	○	○	フ	春が	△	フ	△
	鶴	フ	フ	フ	鳥が	フ	フ	フ

フ [OO]

○ [OO]

フ [OO]

♀ [OO]

○ [OOO]

△ [OOO]

♀ [OOO]

△ [OOO]

フ [OOO]

フ [OOO]

表4 福井市若年層 話者3m<A式>

		<単語>				<文節> (文中)		
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	—	—	—	風 が	♀	△	△
	顔	—	—	—	顔 が	△	△	△
	庭	♀	—	—	庭 が	△	△	△
	鳥	—	—	—	鳥 が	△	△	△
	水	○	—	—	水 が	△	△	△
II	音	—	—	—	音 が	△	♀	△
	胸	—	—	—	胸 が	△	△	△
	夏	—	—	—	夏 が	○	△	△
	石	—	—	—	石 が	△	△	△
	冬	—	—	—	冬 が	△	△	△
III	山	—	—	—	山 が	△	△	△
	池	—	—	♀	池 が	△	△	△
	足	—	—	—	足 が	△	△	△
	犬	—	—	—	犬 が	△	△	△
	耳	—	—	—	耳 が	△	♀	△
IV	肩	—	—	—	肩 が	△ △	△	△
	糸	—	—	—	糸 が	△	△	△
	簪	—	—	—	簪 が	△	△	△
	針	—	—	—	針 が	△	△	△
	海	—	—	—	海 が	△	△	△
V	雨	—	—	—	雨 が	△	△	△
	鮒	—	—	—	鮒 が	○	△	△
	蜘蛛	—	—	—	蜘蛛 が	△	△	△
	春	—	—	—	春 が	△	△	△
	鶴	—	—	—	鶴 が	△	—	△

△ [○○○]

そのほかの符号は表3に同じ。

表5 「東京アクセント度(t)」の計算例

例	風 頤 庭 鳥 水	音 胸 夏 石 冬	山 池 足 犬 耳	肩 糸 箸 針 海	雨 鮎 春 鶴	蜘蛛	t
単語 い 切り	1 × ○ ○ ○ ○	× ○ ○ ○ ○	○ × ○ ○ ○	○ × ×	×		60
	2 × ×		×				0
	3						0
	4 × × × × ×	× × × × ×	× × × ○ ×	× × ○	× × × × ×		7
	5 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○				100
	6 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ×				93
文 節	7 ○ ○ × ○ ○	× △ △ △ △	× △ × △ △	× × ○ ×	× △		55
	8 × △ △ △ △	× △ × △ △	△ △ △ △ ×	△ △ △ △ △	△ × △ △ ×		0
	9 △ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △		0
	10 ○ ○ ○ ○ ○	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △				100
	11 ○ ○ ○ ○ ○	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △		○		95
	12 ○ ○ × × ×	△ △ △ △ △	△ △ △ × ×	○ ○ ○ ○ ×	× ×		35

○ 平板相 △ 中高相 | 頭高相 × ゆれ

れるII III類は除外する。残りのグループのI類にもIV V類にも東京アと一致する音相は見られないからその一致率は0。ゆえにt=0。

例9 (福井市の中年層話者 6f)

例8と同じ理由でt=0。

例10 (架空例)

完全な東京アのケースである。平板相の出現率は $\frac{5}{5}$ (I類)=100(%), 中高相の出現率も $\frac{10}{10}$ (II III類)=100(%), 頭高相の出現率も $\frac{10}{10}$ (IV V類)=100(%).上の3つのグループのどれを除いても, 残りの2つのグループのすべての語の音相が東京アと一致するから, t=100。

例11 (架空例)

1語が非東京アの音相を示したほかは東京アと一致したケースである。平板相の出現率は $\frac{5}{5}$ (I類)+ $\frac{1}{10}$ (IV V類)=110(%), 中高相の出現率は $\frac{10}{10}$ (II III類)=100(%), 頭高相の出現率は $\frac{1}{10}$ (IV V類)=10(%).ゆえに出現率の合計値が最大の平板相との「見せかけの一致」を示すI類を除外する。t= $(\frac{10}{10} \text{ (II III類)} + \frac{9}{10} \text{ (IV V類)}) \div 2 = 95$ 。

例12 (架空例)

平板相の出現率は $\frac{2}{5}$ (I類)+ $\frac{4}{10}$ (IV V類)=80(%), 中高相の出現率は $\frac{8}{10}$ (II III類)=80(%), 頭高相の出現率は $\frac{3}{10}$ =30(%).ゆえに, 出現率の合計が最も大きいものは平板相および中高相。仮に平板相との「見せかけの一致」を示すI類のグループを除外すると, t= $(\frac{8}{10} + \frac{3}{10}) \div 2 = 55$ (%).中高相との「見せかけの一致」を示すII III類を除外すると, t= $(\frac{2}{5} + \frac{3}{10}) \div 2 = 35$ (%).140ページの④の原則により, より小さい値を採り, t=35とする。

2. 福井市周辺のアクセント

2.1 三国町の高年層のアクセント

三国町では3名の高年層話者(いずれも女性)について調査を行った。そのうち, A式による調査の結果を表6~表8として掲げる。先に述べたように, A式は異類混合配列により調査しているが, 表ではこれを語類別に示し

た。A1・A2・A3は、それぞれ、1回目・2回目・3回目の発音である。原則として1枚のカードを提示するごとに1回の発音を求めたが、話者が自発的に言い直したり、調査者が言い直しを求めたりしたケースがあり、表ではそれを発音順に併用の形で記した。それぞれの符号のあらわす音相は、143ページ以下に掲げた表を参照されたい。

表6は3名のうち最も高齢の話者1f（1895年＝明治28年生れ）の発音である。

助詞を付けない「単語言い切りの形」の場合には、大部分が〔 $\overline{\text{O}}\text{O}$ 〕と発音され、語による差、語類による差はほとんど認められない。一方、助詞「が」の付いた文節（から始まる短文）の場合には、I IVV類が〔 $\text{O}\overline{\text{O}}\text{ガ}$ 〕（一部に〔 $\overline{\text{O}}\overline{\text{O}}\text{ガ}$ 〕）、II III類が〔 $\text{O}\text{O}\overline{\text{ガ}}$ 〕（一部に〔 $\overline{\text{O}}\overline{\text{O}}\text{ガ}$ 〕）に発音される傾向が顕著である。すなわち、この話者は、「 $\text{O}\text{O}\text{ガ}$ 」の場合に、I IVV類が/ $\overline{\text{O}}\text{O}\triangleright$ /型、II III類が/ $\text{O}\text{O}\triangleright$ /型という型の対立をもつと解釈される。型の安定度は比較的高いが、「石」と「冬」については/ OOO /型と/ $\overline{\text{O}}\text{O}\text{O}$ /型との「ゆれ」が認められる。

表7は2f（1906年＝明治39年生れ）の発音、表8は話者3f（1913年＝大正2年生れ）の発音である。

この2人の話者については、「文節」（「 $\text{O}\text{O}\text{ガ}$ 」）だけではなく、「単語言い切りの形」の場合にもI IVV類とII III類との間に型の対立が認められる。すなわち、「単語言い切りの形」の場合、I IVV類は〔 $\overline{\text{O}}\text{O}$ 〕や〔 $\text{O}\overline{\text{O}}$ 〕に、II III類は〔 $\text{O}\overline{\text{O}}$ 〕〔 $\text{O}\overline{\text{O}}$ 〕〔 $\overline{\text{O}}\text{O}$ 〕に発音される傾向が著しい（「文節」の場合には表1の話者と同様の型の対立が認められる）。この結果から、この2名の話者は、2拍名詞について、/ $\overline{\text{O}}\text{O}/\sim/\overline{\text{O}}\text{O}\triangleright$ /型（I IVV類）、/ $\text{O}\text{O}/\sim/\text{O}\text{O}\triangleright$ /型（II III類）の二つの型をもつと解釈される。

ただし、この2人の話者については、語によって若干の「ゆれ」が認められる。すなわち、「単語言い切り」の場合、話者2fは「風」「音」「石」「冬」「池」「足」「糸」「海」「蜘蛛」の語について、話者3fは「風」「石」「冬」「糸」「箸」「蜘蛛」について/ $\overline{\text{O}}\text{O}/$ 型と/ $\text{O}\text{O}/$ 型との「ゆれ」を示し、「文節」については、話者2fが「顔」「夏」「池」「足」「海」の語について、話者3fが「足」「犬」

「蜘蛛」の語について/ $\text{O}\bar{\text{O}}\nabla$ /型と/ $\text{O}\text{O}\nabla$ /型との「ゆれ」を示している。また、2fは、「冬」の語について[$\text{O}\text{O}\nabla$]のほかに[$\bar{\text{O}}\text{O}\nabla$]や[$\text{O}\bar{\text{O}}\nabla$]、「春」の語について[$\bar{\text{O}}\text{O}\nabla$]のほかに[$\bar{\text{O}}\text{O}\nabla$]のような「頭高相」を示し、話者3fも「水」の語について「中高相」と「頭高相」を示しているが、これも一種の「ゆれ」と認められる。なお、2fは第5類の「蜘蛛」を3回とも/ $\text{O}\text{O}\nabla$ /型に発音していることも注目される。また、「ゆれ」が認められる語については、ある程度の共通性が認められる点にも注意しておきたい。一方、「ゆれ」が認められる語についても、多くの場合、I IVV類の語は/ $\bar{\text{O}}\text{O}/$, / $\text{O}\bar{\text{O}}\nabla$ /型に、II III類の語は/ $\text{O}\text{O}/$, / $\text{O}\text{O}\nabla$ /型に発音される率が比較的高いことも指摘される。このことは、三国町の高年層において、/ $\bar{\text{O}}\text{O}/$ ～/ $\text{O}\bar{\text{O}}\nabla$ /型(I IVV類)と/ $\text{O}\text{O}/$ ～/ $\text{O}\text{O}\nabla$ /型(II III類)との対立が、「ゆれ」を見せつても依然として比較的安定した形で存在することを意味し、後に述べる、福井市などの他の地点における状況とは異なることを示すものである。

なお、3名の話者のうち、最も高齢の話者1fが、「単語言い切り形」について/ $\bar{\text{O}}\text{O}/$ と/ $\text{O}\text{O}/$ の対立を示していないが、その理由は不明である。他の2名の話者はいずれも両親とも三国生れで本人も三国以外の居住歴をもたないのに対し、話者1fの父親は富山県滑川市の生れ(母親は三国生れ)であり、本人も若い頃1年近く福井市に居住したことがある(その時期は不明)ことが、あるいは関係しているのかもしれない。

次に〈B式〉(比較発音)の調査結果について述べよう。3名の話者の〈B式〉による発音を表9～11に示す。

表9は話者1fの発音である。「文」の形で発音した場合には、それぞれの文節のアクセント型はきわめて安定しており、10通りの組み合わせのいずれについても、4回の発音(正順2回=B1・B2, 逆順2回=B3・B4)を通じて、I IVV類の語は/ $\text{O}\bar{\text{O}}\nabla$ /型、II III類の語は/ $\text{O}\text{O}\nabla$ /型に発音され、型の「ゆれ」は皆無である。しかるに、「文節言い切り」の形で発音した場合には、大部分の文節が[$\bar{\text{O}}\text{O}\nabla$] [$\text{O}\bar{\text{O}}\nabla$]のように発音され、語による型の区別が失われる。

表10は話者2fの発音である。「文」の形で発音した場合、4回の発音を通じ

福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差、個人差、調査法による差 149
て安定した「三国式」の型を示す組み合わせは「風が・音が」「音が・肩が」「音が・雨が」の3例であり、「風が・山が」「風が・肩が」「風が・雨が」「音が・山が」「山が・雨が」はそれに準ずる（4回のうち1回だけ「非三国型」を示している）。「文節言い切り」の場合には4回とも「三国型」を示すのは「音が・山が」のみであり、それに準ずるものが「風が・雨が」と「山が・肩が」の2例、他の7例は「ゆれ」がはなはだしい。

表11は話者3fの発音である。「文」の場合に安定した三国型を示したのは「風が・音が」「風が・山が」「風が・雨が」「音が・山が」「山が・雨が」の5例であり、他の5例は「ゆれ」がはなはだしい。「文節言い切り」の場合には、安定した三国型を示したのは「風が・雨が」「音が・山が」「山が・雨が」の3例であり、それに準ずるものが「風が・肩が」「音が・雨が」の2例である。

すなわち、全般的に見て、「文」の形で発音したときの方が、「文節言い切り」の場合よりも、その方言のアクセント型の区別をより安定した形で引き出せると言える（ただし、下に示すように、話者3fは〈B式〉における「文」と「文節」の「三国式アクセント度」に差がない）。これは、筆者が他の方言（無型アクセント方言、および、無型アクセント地域に隣接する型知覚が曖昧化している方言）について行った調査結果と一致する。^{注9}

以上、三国町における3名の話者の〈A式〉〈B式〉の結果について述べたが、先に記した方法による、それぞれの「三国式アクセント度」を示すと下記のとおりである（〈A式〉における「単」は「単語言い切りの形」、「文節」は「文節単位」（調査単位は「短文」）における数値を示す。また、〈B式〉における「文」は「文」の形で発音したとき、「文節」は「文節言い切り」の形で発音したときの数値である）。

話者1f…… 〈A式〉「単」=6、「文節」=93

〈B式〉「文」=100、「文節」=-2

話者2f…… 〈A式〉「単」=72、「文節」=73

〈B式〉「文」=80、「文節」=47

話者3f…… 〈A式〉「単」=82、「文節」=85

〈B式〉「文」=73、「文節」=73

表6 三国町高年層 話者1f <A式>

		<単語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風				風が	△	△	△
	顔				顔が	△	△	△
	庭				庭が	△	△	△
	鳥				鳥が	△	△	△
	水				水が	△	△	△
II	音	♀			音が	○	○	○
	胸				胸が	▢	▢	▢
	夏	♀			夏が	○	▢	○
	石				石が	▢	△	▢
	冬				冬が	△	♀	○
III	山				山が	▢	▢	▢
	池				池が	▢	▢	▢
	足				足が	▢	▢	▢
	犬				犬が	▢	▢	▢
	耳				耳が	▢	▢	▢
IV	肩				肩が	△	△	△
	糸				糸が	△	△	△
	箸				箸が	△	△	△
	針				針が	△	△	△
	海				海が	△	△	△
V	雨				雨が	△	△	△
	鮒				鮒が	△	△	△
	蜘蛛				蜘蛛が	△	△	△
	春				春が	△	△	△
	鶴				鶴が	△	△	△

▢ (○○○)

そのほかの符号は表3 (143ページ) に同じ。

表7 三国町高年層 話者2f <A式>

		<単語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風			○	風が	△ △	△	△ △
	顔	(顔が	△ ♀	△	△
	庭				庭が	△	△	△
	鳥				鳥が	△	△	△
	水	(水が	△	△	△
II	音		○	○	音が	♀ ♀	○	♀
	胸	○	○	○	胸が	♀	○	♀
	夏	♀	○	○	夏が	♀	△ △	♀
	石	○		○	石が	♀	♀	○
	冬	♀	(♀	冬が	♀	-	
III	山	○	○	○	山が	○ ○	○	♀
	池	○	○	♀	池が	○	○ ▲	○
	足	○		○	足が	○	△	△
	犬	◎	○	○	犬が	♀	♀	♀
	耳	○	○	○	耳が	○	○	○
IV	肩				肩が	△ △	△	△
	糸	♀			糸が	△	△	△
	箸	-			箸が	△	△	△
	針	-			針が	△	△	△
	海	(○	海が	♀	△	△
V	雨	(雨が	△	△	△
	鮒	-			鮒が	△	△	△
	蜘蛛	-		♀	蜘蛛が	♀	○	♀
	春	-			春が	△	△	-
	鶴	-			鶴が	△	△	△

◎ [○○]

♀ [○○○]

△ [○○○]

そのほかの符号は表3(143ページ)に同じ。

表8 三国町高年層 話者3f <A式>

<単語>

<文節> (文中)

		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風		○		風 が	△ △	△	△
	顔		-	-	顔 が	△	△	△
	庭		-	-	庭 が	△	△	△
	鳥		-	-	鳥 が	△	△	△
	水		-	-	水 が	△ △	-	-
II	音	○	○	○	音 が	○	○	○
	胸	○	♀	○	胸 が	♀	♀	♀
	夏	○	○	○	夏 が	♀	♀	♀
	石	-	♀	○	石 が	♀	♀	♀
	冬	○	-	○	冬 が	♀	♀	♀
III	山	○	○	○	山 が	♀	♀	♀
	池	○	○	○	池 が	♀	○	♀
	足	○	○ ○	○	足 が	♀	△	♀
	犬	○	○	○	犬 が	△	♀	♀
	耳	○	♀	○ ○	耳 が	♀	♀	♀
IV	肩	-	-	-	肩 が	△	△	△
	糸	-	○	-	糸 が	△	△	△
	簪	♀	-	-	簪 が	△	△	△
	針	-	-	-	針 が	△	△	△
	海	-	-	-	海 が	△	△	△
V	雨	-	-	-	雨 が	△	△	△
	鮒	-	-	-	鮒 が	△	△	△
	蜘蛛	♀	-	-	蜘蛛 が	♀	△	△
	春	-	-	-	春 が	△	△	△
	鶴	-	-	-	鶴 が	△	△	△

○ [○○]

♀ [○○○]

△ [○○○]

△ [○○○]

そのほかの符号は表3(143ページ)に同じ。

表9 三国町高年層 話者1f <比較發音>

	B 1	B 2	B 3	B 4		B 1	B 2	B 3	B 4
	<文節> (文中) (正順)					<文節> (言い切り) (正順)			
	(逆順)					(逆順)			
風が～	△	△	△	△	風が。	△	△	Y	Y
音が～	○	○	¤	○	音が。	△	△	Y	Y
風が～	△	△	△	△	風が。	¶	¶	¶	Y
山が～	○	○	¤	¤	山が。	¶	¶	Y	Y
風が～	△	△	△	△	風が。	¶	¶	Y	Y
肩が～	△	△	△	△	肩が。	¶	Y	Y	Y
風が～	△	△	△	△	風が。	¶	¶	Y	Y
雨が～	△	△	△	△	雨が。	¶	¶	Y	Y
音が～	○	○	○	○	音が。	¶	¶	Y	Y
山が～	¤	○	¤	¤	山が。	¶	¤	Y	Y
音が～	○	○	○	○	音が。	¶	Y	Y	Y
肩が～	△	△	△	△	肩が。	Y	Y	Y	Y
音が～	○	○	○	○	音が。	Y	Y	¤	Y
雨が～	△	△	△	△	雨が。	Y	Y	Y	Y
山が～	¤	¤	¤	¤	山が。	Y	Y	Y	Y
肩が～	△	△	△	△	肩が。	Y	Y	Y	Y
山が～	¤	¤	¤	¤	山が。	Y	Y	Y	Y
雨が～	△	¶	△	△	雨が。	Y	Y	Y	Y
肩が～	¶	△	¶	¶	肩が。	Y	Y	Y	Y
雨が～	¶	¶	△	△	雨が。	Y	Y	Y	Y
山が～	¤	¤	¤	¤	山が。	Y	Y	Y	Y
肩が～	△	△	△	△	肩が。	Y	Y	Y	Y
雨が～	△	△	△	△	雨が。	Y	Y	Y	Y

○ [○○○]

△ [○○○]

Y [○○○]

¤ [○○○]

¶ [○○○]

¶ [○○○]

¤ [○○○]

¶ [○○○]

¶ [○○○]

表10 三国町高年層 話者2f <比較発音>

	<文節> (文中)					<文節> (言い切り)			
	(正順)		(逆順)			(正順)		(逆順)	
	B 1	B 2	B 3	B 4		B 1	B 2	B 3	B 4
風が～	△	△	△	△	風が。	△	ꝝ	‘	‘
音が～	○	○	ꝝ	ꝝ	音が。	ꝝ	ꝝ	ꝝ	ꝝ
風が～	ꝝ	△	△	△	風が。	ꝝ	ꝝ	△	△
山が～	ꝝ	ꝝ	ꝝ	○	山が。	ꝝ	ꝝ	ꝝ	ꝝ
風が～	△	△	△	△	風が。	ꝝ	ꝝ	丨	γ
肩が～	△	△	△	γ	肩が。	△	△	△	△
風が～	△	△	△	△	風が。	ꝝ	△	△	△
雨が～	○	△	△	○	雨が。	△	△	△	△
音が～	○	○	ꝝ	△	音が。	ꝝ	ꝝ	ꝝ	ꝝ
山が～	ꝝ	ꝝ	ꝝ	ꝝ	山が。	ꝝ	ꝝ	ꝝ	ꝝ
音が～	○	○	ꝝ	ꝝ	音が。	ꝝ	ꝝ	γ	ꝝ
肩が～	△	△	△	△	肩が。	丨	丨	△	ꝝ
音が～	ꝝ	ꝝ	ꝝ	ꝝ	音が。	ꝝ	ꝝ	γ	γ
雨が～	△	△	△	△	雨が。	△	△	ꝝ	ꝝ
山が～	ꝝ	○	ꝝ	ꝝ	山が。	ꝝ	ꝝ	ꝝ	ꝝ
肩が～	○	○	△	△	肩が。	△	△	ꝝ	△
山が～	△	○	ꝝ	ꝝ	山が。	ꝝ	ꝝ	ꝝ	ꝝ
雨が～	△	△	△	△	雨が。	丨	丨	△	△
肩が～	△	△	△	丨	肩が。	ꝝ	△	ꝝ	丨
雨が～	△	‘	‘	‘	雨が。	丨	丨	ꝝ	ꝝ

○ (○○○) ꝝ (○○○) ꝝ (○○○) ꝝ (○○○)

△ (○○○) △ (○○○) △ (○○○) △ (○○○)

丨 (○○○) ‘ (○○○) γ (○○○) △ (○○○)

表11 三国町高年層 話者3f <比較発音>

	<文 節> (文中)					<文 節> (言い切り)			
	(正 順)		(逆 順)			(正 順)		(逆 順)	
	B 1	B 2	B 3	B 4		B 1	B 2	B 3	B 4
風が～	△	△	△	△	風が。	△	△	○	△
音が～	○	○	△	△	音が。	△	△	△	△
風が～	△	△	△	△	風が。	△	△	○	△
山が～	△	△	△	△	山が。	○	△	△	△
風が～	△	△	△	△	風が。	△	△	△	△
肩が～	△	△	△	△	肩が。	△	△	△	△
風が～	△	△	△	△	風が。	△	△	△	△
雨が～	△	△	△	△	雨が。	△	△	△	△
音が～	○	△	△	△	音が。	○	△	△	○
山が～	△	△	△	△	山が。	○	△	△	△
音が～	△	△	△	△	音が。	△	△	○	○
肩が～	△	△	△	△	肩が。	○	△	△	△
音が～	△	△	△	△	音が。	△	△	△	△
雨が～	△	△	△	△	雨が。	△	△	△	△
山が～	△	△	△	△	山が。	△	△	△	△
肩が～	△	△	△	△	肩が。	△	△	△	△
山が～	△	△	△	△	山が。	○	△	△	△
雨が～	△	△	△	△	雨が。	△	△	△	△
肩が～	△	△	△	△	肩が。	△	△	△	△
雨が～	△	△	△	△	雨が。	△	△	△	△

凡例は表10に同じ。

2.2 松岡町の高年層のアクセント

松岡町では3名の高年層話者（男性2名、女性1名）について調査を行った。松岡町は平山輝男氏の調査では無型アクセント（一型アクセント）とされている地点である（図1参照）。しかしながら、われわれの調査では3名のうち1名（話者1m、1911年=明治44年生れ）が、かなり明瞭な三国式アクセントを示した（他の2名の話者は無型アクセント的であった）。松岡町におけるA式による調査結果を表12～表14として掲げる。

表12は話者1mの発音である。「単語言い切りの形」の場合には、語によって「ゆれ」もあるが、I IVV類が〔 $\overline{\text{O}}\text{O}$ 〕または〔 $\text{O}\overline{\text{O}}$ 〕、II III類が〔 $\text{O}\overline{\text{O}}$ 〕〔 $\text{O}\overline{\text{O}}$ 〕〔 $\overline{\text{O}}\text{O}$ 〕に発音される傾向が著しく、「文節」の単位では、I IVV類が〔 $\text{O}\overline{\text{O}}\text{ガ}$ 〕、II III類が〔 $\text{O}\text{O}\overline{\text{ガ}}$ 〕〔 $\text{O}\overline{\text{O}}\text{ガ}$ 〕〔 $\overline{\text{O}}\text{O}\text{ガ}$ 〕に発音される傾向が見られる。すなわち、この話者は三国町と同様に/ $\overline{\text{O}}\text{O}/$ ～/ $\text{O}\overline{\text{O}}\nabla/$ （I IVV類）、/ $\text{O}\text{O}/$ ～/ $\text{O}\text{O}\nabla/$ （II III類）の体系をもつと考えられる。なお、話者1mの発音は「単語言い切り」の場合に、3回の発音を通じて「ゆれ」の認められる語が多いが、その内容を見ると、A1のときに非三国式の音相が多く、A2とA3では三国式の音相が多く現れていることが注目される。このように方言アクセントが調査の初頭では崩れやすいという現象は、調査地域の他の話者にも共通に認められるものであり、この事実は、曖昧アクセント地域（話者の型知覚が曖昧化しているために、同一語を種々の音相に発音する傾向の見られる地域）における調査のあり方を考えるときの示唆的材料と思われる（なお、210ページ参照）。

話者1mは〈B式〉（比較発話）においてもほぼ完全な三国式の姿を示した（表示は省略）。「文」の形で発音した場合には、10通りの組み合わせのいずれについても、4回の発音（正順2回=B1・B2、逆順2回=B3・B4）を通じて、I IVV類の語は/ $\overline{\text{O}}\text{O}\nabla/$ 型、II III類の語は/ $\text{O}\text{O}\nabla/$ 型に発音され、型の「ゆれ」は皆無である。「文節言い切り」の形で発音した場合には、「音が・雨が」の組み合わせで「雨が」が1回だけ/ $\text{O}\text{O}\nabla/$ 型になり、「山が・雨が」の組み合わせで「雨が」が4回とも/ $\text{O}\text{O}\nabla/$ 型に発音されたが、他の8通り

の組み合わせでは、4回とも三国式の区別を示している。このように、「比較発音」においても三国式アの型の区別が失われないということは、この話者の三国式アとしての型知覚がかなり強固なものであることを示すものと考えられる。

話者1mが三国式アの姿を示しているのに対して、他の2人の話者は三国式アの姿をほとんど示さず、無型アに近い状態である。

表13は話者2f(1911年=明治44年生れ)の〈A式〉における発音である。「文節単位」では語による区別なく大部分が[○○ガ]と発音されている。「単語言い切り」の場合には頭高相と平板相がランダムに現れ、完全な無型アと少し傾向が異なる。^{注10}しかし、3回の発音を通じて/○○▽/型と/○○▽/型との対立を示した例は皆無である。

表14は話者3m(1912年=明治45年生れ)の〈A式〉における発音である。「文節単位」では中高相のほかに平板相もかなり見られるが、その現れ方は一見不規則である。しかし、第III類の「山が」のみが3回とも平板相に発音されており、三国式アの片鱗がうかがわれる。「単語言い切り」の場合、平板相が頭高相よりも多く見られる点は話者2fと異なる。第5類の「蜘蛛」が3回とも頭高相に発音されている点は三国式ア的である。しかも、〈A3〉を見ると、I IVV類に頭高相が比較的多く現れ、II III類は大部分が平板相である。すなわち、この話者は、「単語言い切り」の場合に、調査の初頭では無型ア的であったが、調査が進行するにつれて次第に三国式アの傾向を示しはじめたと言える。この現象は、先に述べたように、話者1mにも認められたものである。

なお、話者2fと話者3mとは、〈B式〉(比較発音)ではきわめて無型ア的であり、三国式アの傾向は皆無であった(表示は省略)。すなわち、話者2fは「文」の形で発音した場合にも、「文節言い切り」の形で発音した場合でも、ほとんどが[○○ガ](一部に[○○ガ])、話者3mは大部分が[○○ガ](一部に[○○▽][○○▽][○○▽]など)であり、4回の発音を通して型の対立を示した例は皆無であった。

以上に述べたように、従来無型ア(一型ア)と言われていた松岡町において、高年層の話者の中に三国式アをもつ者が存在することが確認された。し

表12 松岡町高年層 話者1m <A式>

<單語>			<文節> (文中)					
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	◎	○	—	風が	△	△	△
	顔	○	—	—	顔が	△	○	△
	庭	◎	—	—	庭が	△	△	△
	鳥	○	—	—	鳥が	△	△	△
	水	—	—	—	水が	△	△	△
II	音	○	○	○	音が	△	○	○
	胸	○	○	○	胸が	△	○	○
	夏	○	—	○	夏が	○	○	○
	石	○	◎	○○	石が	○	○	○
	冬	○	○	○	冬が	○	○	○
III	山	○	○	—	山が	○	○	△
	池	○	○	○	池が	○	○	○
	足	○	○	—	足が	△	△	○△
	犬	○	○	○	犬が	○	○	○
	耳	◎	○	○	耳が	○	○	○
IV	肩	○	—	—	肩が	△	△	△
	糸	○	—	—	糸が	△	△	△
	簪	○	—	○	簪が	△	△	△
	針	—	—	—	針が	△	△	△
	海	—	—	—	海が	△	△	△
V	雨	○	—	—	雨が	△	△	△
	鮒	○	—	—	鮒が	△	△	△
	蜘蛛	○	—	—	蜘蛛が	△	△	△
	春	—	—	—	春が	△	△	△
	鶴	—	—	—	鶴が	△	△	△

◎ (○○○)

○ (○○○)

△ (○○○)

そのほかの符号は表3 (143ページ) に同じ。

表13 松岡町高年層 話者2f <A式>

<単語>

<文節> (文中)

		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	♀			風 が	○ △ △	△	△
	顔	♀	♀		顔 が	△	△	△
	庭				庭 が	△	○	○
	鳥		♀		鳥 が	△	△	△
	水				水 が	△	△	△
II	音				音 が	△	△	△
	胸		♀		胸 が	△	△	△
	夏	○	♀		夏 が	△	△	△
	石				石 が	△	△	△
	冬				冬 が	△	△	△
III	山				山 が	△	△	△
	池		○		池 が	△	△	△
	足		○		足 が	△	△	△
	犬				犬 が	△	△	△
	耳				耳 が	△	△	△
IV	肩	♀		♀	肩 が	△	△	○
	糸		○	♀	糸 が	△	△	△
	簪		○		簪 が	△	△	△
	針	♀			針 が	○	△	△
	海	♀	♀		海 が	△	△	△
V	雨	○	♀		雨 が	△	△	△
	鮒		♀		鮒 が	△	△	△
	蜘蛛				蜘蛛 が	△	△	△
	春	♀			春 が	△	△	△
	鶴				鶴 が	△	△	△

◎ [○○○]

△ [○○○]

そのほかの符号は表3(143ページ)に同じ。

表14 松岡町高年層 話者3m <A式>

		<単語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風		○		風が	△	△	△
	顔	♀	♀	♀	顔が	△	△	♀
	庭	○	♀	♀	庭が	○ ○	♀	♀
	鳥	○ ♀			鳥が	△ △	△	△ △
	水	○ ○	○		水が	△ △	△	△ △
II	音	○	○	○	音が	△ △	○	♀
	胸	○ ○	○	○	胸が	○ ○	△	△
	夏	○ ○	○	○	夏が	△ △	△	△
	石	○ ○	○	♀	石が	△ △	△	△
	冬	♀ ♀	♀	○	冬が	△ △	△ △	△
III	山	♀	♀	♀	山が	♀ ♀	♀	♀
	池	○ ○	○	○	池が	○ ○	△	△
	足	○ ○	○	○ ○	足が	○ ○	○	△ △
	犬	○ ♀	○		犬が	△ △	△	△
	耳	○ ○	○	○	耳が	△ △	○	○
IV	肩	♀	○	◐	肩が	△ ○	△	△ ♀
	糸	○ ○	○	◐	糸が	○ ○	△	△
	簪	○ ○	○	♀	簪が	△ ○	△	△
	針	♀ ♀	○		針が	△ △	△	△ △
	海	♀ ♀	♀		海が	♀ △	△	△
V	雨	♀ ○	♀	♀	雨が	△ ○	△	△
	鮒	○ ♀			鮒が	△ △	○	△
	蜘蛛				蜘蛛が	△ △	△	△
	春	♀ ♀		♀	春が	△ △	△ △	△
	鶴	○ ○	○	♀	鶴が	△ △	△	△

◐ [○○]

♀ [○○○]

△ [○○○]

そのほかの符号は表3(143ページ)に同じ。

福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差、個人差、調査法による差 161
かし、同じ年齢層の他の話者が（三国式アの片鱗を示しつつも）著しく無型ア的であることから、松岡町のアクセントは、かなり早い時期から無型化しつつあったのではないかと考えられる。

なお、3名の話者の〈A式〉の発音について、先に記した方法による「三国式アクセント度」を示すと次のとおりである（「単」は「単語言い切りの形」、「文節」は「文節単位」における「三国式アクセント度」を示す）。

話者 1m……「単」=64、「文節」=79

話者 2f……「単」=-18、「文節」=-11

話者 3m……「単」=-4、「文節」=15

2.3 坂井町の高年層のアクセント

坂井町では、同町上兵庫で3名の高年層話者（いずれも女性）を調査した。坂井町は平山輝男氏の調査では、ほぼ全域が「特殊音調」（三国式）とされている。上兵庫は図1（124ページ）の「針原」のやや南に位置し、「一型音調」（無型ア）にきわめて近い地点である。

調査の結果、3名のうち1名は、ほぼ完全な三国式アクセントであった。他の2名は著しく無型ア的であったが、両名とも発話の一部に三国式アの片鱗が見られた。そこで、そのうちの1人に、調査の場で臨機に工夫した〈なぞなぞ式〉によって発話を求めたところ、「単語言い切り」の形では、安定した三国式アの姿を示すに至った。ここでは、その調査の過程を少し詳しく述べよう。

まず、3名の話者の〈A式〉における結果を表15～表18に示す。

表15は話者 1f（1914年＝大正3年生れ）の発音である。「文節」の単位では、I IVV類は一部の語に「ゆれ」があるものの、多くの語が/○○▽/型（〔○○ガ〕など）を示し、II III類はすべての語が安定した/○○▽/型（大部分は〔○○ガ〕）を示している。また、「単語言い切り」の形では、I IVV類がほぼ/○○/型（大部分が〔○○〕）、II III類は安定した/○○/型（大部分が〔○○〕）を示している。

また、この話者は、〈B式〉（比較発音）においても、「文」の形での発話で

は、かなり安定した三国式を示した。表16が〈B式〉における結果である。「文」の形での発話では、「音が・山が」「音が・肩が」「山が・肩が」「肩が・雨が」の組み合わせでは、4回の発話を通じて「ゆれ」が生じたが、その他の組み合わせでは安定した三国式の型を示した。しかし、「文節言い切り」では「ゆれ」が激しくなり、4回の発話を通じて安定した三国式の姿を示した例は皆無となった。

表17は話者3f(1913年=大正2年生れ)の〈A式〉における発音である。「文節」の単位では「ゆれ」が大きいが、「風が」「顔が」「海が」「鮒が」「春が」は3回とも/ $\textcircled{O}\textcircled{O}\triangledown$ /型、また、「胸が」「石が」「山が」「箸が」「蜘蛛」は3回とも/ $\textcircled{O}\textcircled{O}\triangledown$ /型を示し、「箸が」と「蜘蛛が」は三国式の類の例外となるが、全体的には三国式アの姿を残している。「単語言い切り」の形では、大部分が頭高相に発音され著しく無型的である。しかし、わずかに見られる平板相($(\textcircled{O}\textcircled{O})$ $(\textcircled{O}\textcircled{O})$)がII III類にやや多いところに、三国式の片鱗がうかがえる。

表18は話者2f(1916年=大正5年生れ)の〈A式〉における発音である。「文節」の単位では大部分が $(\textcircled{O}\textcircled{O}\text{ガ})$ と発音され、型の対立は全く見られない。「単語言い切り」の場合も3回の発話を通じて型の対立を示した例は皆無である。しかし、〈A2〉と〈A3〉ではII III類に多くの平板相が現れ、調査の進行につれて三国式アの姿を示しはじめる。

なお、〈B式〉では話者2fも3fも、「文」「文節言い切り」のいずれについても大部分が $(\textcircled{O}\textcircled{O}\triangledown)$ と発音し、著しく無型ア的であった(表示は省略)。

上述のように、話者2fは、〈A式〉の「文節」の発話では完全な無型アと言つて良い状態であった。ところが、次に行った〈D式〉(方言的発話)では、大部分の語が何度発音しても $(\textcircled{O}\textcircled{O}\text{ガ})$ (または $(\textcircled{O}\textcircled{O}\text{ガ})$)となったが、「鮒」は「今日は鮒がようけ釣れたざ」の文脈で常に〔フチガ〕、「蜘蛛」は「蜘蛛が巣をかけてるわ」の文脈で常に〔クモガ〕、「夏」は「はよう夏が来んかのう」の文脈で常に〔ナツガ〕、「冬」は「はよう冬が来んかのう」の文脈で常に〔フユガ〕、「春」は「はよう春が来んかのう」の文脈で常に〔ハルガ〕、「犬」は「今日は犬に吠えられてようよわと注11うんた」の文脈で常に〔イヌガ〕と発音され、音相の「ゆれ」が全く認められなかった。すなわち、〈D式〉(方言

福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差、個人差、調査法による差 163
的発話)において、「蜘蛛」は例外となったが、「犬」「夏」「冬」(以上II類)
は〔○〇ガ〕、「鮒」「春」(V類)は〔○〇ガ〕という三国式の姿を安定した
形で示したことになる。

そこで調査語を少し増やし、春(V)・夏(II)・秋(V)・冬(II)・犬(II)・
牛(I)・猫・豚(この2語は類所属未詳)の各語について、季節名は「ハヨ
^{注12}ー〇〇ガコンカノー」、動物名は「キョーワ〇〇ニホエラレテヨーヨワトウン
タ」の文脈で何回も(各語5回以上)発話してもらったところ、少しの例外
もなく下記の対立を示した。〈「牛」(猫・豚)に吠えられて～〉は不自然な文
脈であるが、話者がこの文脈に慣れて、きわめて自然な方言的発話の様相を
示したので、同一環境における音相比較の意味もあって、あえて文脈を変え
ることをしなかった。

〔○〇ガ〕 夏(II)・冬(II)・犬(II)

〔○〇ガ〕 春(V)・秋(V)・牛(I)・猫・豚

話者のアクセントがきわめて安定した三国式を示す状態になったので、次
に「単語言い切り」の形で、新たに〈なぞなぞ式〉による調査を行った。た
とえば、「ぴゅーぴゅー吹くものは?」と質問して「風」を、「朝起きて洗う
ものは?」で「顔」を求めた。その際、「風」(I)・「音」(II)・「顔」(I)・
「山」(III)のような順序で、すなわち、対立する型が交互に現れるように質
問し、これを何度も(各語の発音回数がのべ5回以上になるように)くりか
えしたが、その結果、下に示すように、「蜘蛛」を除いて、II III類を〔○〇〕、
I・IV・V類を〔〇〇〕と三国式に発音し、数回の発音を通じて、同一の語
が〔○〇〕と〔〇〇〕にゆれるということが全くなかった。

〔○〇〕 音・胸・夏・石・冬・(以上II類)、山・池・足・犬・耳(以上III
類)、蜘蛛(IV類)

〔〇〇〕 風・顔・庭・鳥・水・(以上I類)、肩・糸・簪・針・海(以上IV
類)、雨・鮒・春・鶴(以上V類)

以上に述べたように、話者2fは、調査当初、とくに「読ませる調査」であ
る〈A式〉〈B式〉〈C式〉(〈C式〉については結果の記述は省略した)では
きわめて無型ア的であったが、調査票から離れて自由に発話させる〈D式〉(方

表15 坂井町高年層 話者1f <A式>

		<単語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風				風が	△	△	△
	顔	♀		♀	顔が	☒	△	△
	庭				庭が	△	△	△
	鳥				鳥が	△	△	△
	水				水が	△	△	△
II	音	○	○	○	音が	○	☒	☒
	胸	○	○	○	胸が	☒	☒	☒
	夏	○	○	○	夏が	☒	☒	☒
	石	○	○	◎	石が	☒	☒	☒
	冬	♀	○	○	冬が	☒	☒	☒
III	山	○	○	○	山が	☒	☒	☒
	池	○	♀	○	池が	☒	☒	☒
	足	○	○	○	足が	☒	☒	☒
	犬	○	○	○	犬が	☒	☒	☒
	耳	○	○	○	耳が	☒	☒	☒
IV	肩				肩が	○	△	△
	糸				糸が	△	△	△
	箸	♀		○	箸が	☒	△	△
	針				針が	△	△	△
	海				海が	△	☒	△
V	雨				雨が	△	△	△
	鮎				鮎が	△	△	△
	蜘蛛				蜘蛛が	☒	☒	△
	春				春が	△	△	△
	鶴				鶴が	△	△	△

○ (○○)

☒ (○○○)

☒ (○○○)

△ (○○○)

△ (○○○)

そのほかの符号は表3(143ページ)に同じ。

表16 坂井町高年層 話者1f <比較発音>

	<文 節> (文中)					<文 節> (言い切り)			
	(正順)		(逆順)			(正順)		(逆順)	
風が～	△	△	△	△	風が。	○	▽	♀	♀
音が～	♀	▢	▢	▢	音が。	γ	▢	▢	▢
風が～	△	△	△	△	風が。	△	▢	▢	γ
山が～	▢	▢	▢	▢	山が。	△	△	▢	▢
風が～	▽	△	△	△	風が。	△	△	△	γ
肩が～	△	△	△	△	肩が。	▢	▢	▢	γ
風が～	△	△	△	△	風が。	△	△	▢	△
雨が～	△	△	△	△	雨が。	γ	♀	▢	▢
音が～	▢	▢	△	▢	音が。	▢	▢	▢	△
山が～	▢	△	▢	▢	山が。	△	△	▢	△
音が～	▢	▢	▢	▢	音が。	▢	▢	▢	γ
肩が～	△	△	△	▢	肩が。	▢	γ	▢	▢
音が～	▢	▢	▢	▢	音が。	▢	▢	γ	γ
雨が～	△	△	△	△	雨が。	△	△	▢	▢
山が～	▢	▢	▢	▢	山が。	▢	▢	γ	▢
肩が～	△	△	○	△	肩が。	▢	γ	▢	△
山が～	▢	▢	▢	▢	山が。	▢	▢	△	γ
雨が～	△	△	▽	▽	雨が。	γ	△	△	△
肩が～	△	▢	△	△	肩が。	▢	▢	γ	γ
雨が～	γ	γ	△	△	雨が。	▢	♀	γ	γ

▽ [○○○]

△ [○○○]

▽ [○○○]

△ [○○○]

そのほかの符号は表10(154ページ)に同じ。

表17 坂井町高年層 話者3f <A式>

		<単語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風				風が	△	△	△
	顔				顔が	▲	▲	▲
	庭				庭が	▲	△	▲
	鳥				鳥が	▲	▲	○
	水				水が	△ ▲		△
II	音	○	○		音が	▲	△	△
	胸				胸が	▲	▲	○
	夏				夏が	○	○	
	石				石が	○	○	○
	冬	○		○	冬が	▽	○	▲
III	山				山が	▲	▲	▲
	池		○		池が	▽	○	▲
	足			○	足が	△	▲	▲
	犬			○	犬が	▲	▲	▲
	耳	— —	— —	○	耳が	▲	▽	▲
IV	肩				肩が	△	▽	▲
	糸				糸が	△	▲	▲
	簪	○			簪が	○	▲	▲
	針				針が			△
	海				海が	△	△	△
V	雨		○		雨が	▲	▲	▲
	鮒				鮒が	▲	▲	▽
	蜘蛛				蜘蛛が	○	○	▲
	春				春が	▲	△	△
	鶴				鶴が	△	△	▲

〔○○○〕

そのほかの符号は表3 (143ページ) ほかに同じ

表18 坂井町高年層 話者2f <A式>

<単語>

<文節>(文中)

		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	—	—	—	風が	△	△	△
	顔	—	—	—	顔が	△	△	△
	庭	—	—	—	庭が	△	△	△
	鳥	—	—	—	鳥が	△	△	△
	水	—	—	—	水が	△	△	△
II	音	—	—	○	音が	△	△	△
	胸	—	◎	○	胸が	△	△	△
	夏	—	○	○	夏が	△	△	△
	石	—	○	○	石が	△	△	△
	冬	—	—	—	冬が	△	△	△
III	山	—	—	○	山が	△	△	△
	池	—	◎	○	池が	△	△	△
	足	—	○	—	足が	△	△	△
	犬	—	○	○	犬が	△	△	△
	耳	—	○	○	耳が	△	△	△
IV	肩	—	—	—	肩が	△	△	△
	糸	—	—	—	糸が	△	△	△
	簪	—	○	—	簪が	○	△	△
	針	—	—	—	針が	△	△	△
	海	—	—	—	海が	△	△	△
V	雨	—	—	—	雨が	△	△	△
	鮒	—	—	—	鮒が	△	△	△
	蜘蛛	—	—	○	蜘蛛が	△	△	△
	春	—	—	—	春が	△	△	△
	鶴	—	—	—	鶴が	△	△	△

凡例は表3(143ページ)ほかに同じ。

言的発話) や <なぞなぞ式> に進むにつれて、明瞭な多型ア(三国式)をいわば「想起」するに至ったと言える。この経験は、後に福井市内で実施した「第2回調査」での調査方式を検討する際に役立った。

なお、以上に述べた3名の話者の<A式>における「三国式アクセント度」は、話者1fが91(単語)と87(文節)、話者2fが46(単語)と-2(文節)、話者3fが23(単語)と53(文節)であった。

3. 福井市のアクセント (第1回調査について)

3.1 高年層のアクセント

最初に述べたように、福井市内で対象としようとした高年層の話者は、中学生の祖父母にあたる20名であった。しかし、実際に調査のできた中学生の祖父母は17名であった。そのほか、祖父母以外に1名を追加して18名の調査結果を得た。しかし、そのうちの1名は福井市に隣接する武生市(ここも無型ア地域とされている)の出身であった。その話者を除き、ここでは、まず、17名の調査結果について述べる。

結論から言うと、この調査を計画した折に抱いた期待(杉藤美代子氏の資料から推測した仮説)に反して、試みたすべての調査方式について、どの話者もかなり無型ア的であった。とくに「文節」の単位の発話の場合、無型アの傾向が著しかった。しかしながら、<A式>の「単語言い切り」の形では、三国式ア、または東京アの片鱗をうかがわせる話者が数名存在した。

最初に無型アの典型を示した話者の例について見よう。

表19は話者8f(1921年=大正10年生れ)の<A式>における結果である。「文節」の単位では大部分の語が中高相([○〇ガ]など)に発音され、まれに平板相([○〇▽])も見られるものの、3回の発音を通じて平板型として安定している語は皆無である。「単語言い切り」の形では大部分が[○〇]に発音され、型の対立は認められない。

表20は話者17m(1915年=大正4年生れ)の<A式>における結果である。

「文節」の単位では中高相と平板相が、また、「単語言い切り」の形では頭高相と平板相が見られるが、その現れ方は不規則であり、特定の類に特定の相が集中する傾向は見られない。「文節」の場合、〈A1〉の段階ではもっぱら中高相であったものが、調査の途中（〈A2〉の途中）から急に平板相に変るが、このように、「読ませる調査」の途中で、それまでの音相を他の音相に一変させるのも無型アクセント話者に良く見られる特徴の一つである。

なお、この話者は、「文節」の場合に、「風が」「胸が」「雨が」を3回とも中高相に、「肩が」を3回とも平板相に発音しているが、これがこの話者の多型アとしての特徴を示すものかどうかは不明である。しかし、この話者の〈B式〉における「風が吹く・肩が痛い」の4回の比較発音の結果は〔カゼガ・カタガ〕〔カゼガ・カタガ〕（以上、正順2回）、〔カタガ・カゼガ〕〔カタガ・カゼガ〕であって〈A式〉における〔カタガ〕とは音相を異にするから、一見安定型のようにもとれる〔カタガ〕は（3回の発音における）偶然の一一致である可能性が大きい。また、「単語言い切り」の場合にも、「池」「糸」の語が3回とも平板相を示し、他の頭高相と対立しているが、各語類における頭高相と平板相との分布に偏りがほとんど見られないから、これも多型アとしての徵候を示すものではないと考えておきたい（事実、この話者は、「第2回調査」におけるどの調査方式でも多型アの傾向をほとんど見せていない。この点については207ページの表43の話者番号8=話者17mを参照）。

次に、三国式アの片鱗が見られた話者の例を示そう。

表21は話者10f（1911年＝明治44年生）の〈A式〉における結果である。「文節」の単位では大部分が中高相に発音されている。しかし、「単語言い切り」の場合には、頭高相のほかに平板相（〔○○〕〔○○〕）が多く現れ、しかも、それがII III類に集中する傾向が認められる。すなわち、I IV V類では総発話数46のうちの平板相が4(9%)にすぎないのでに対し、II III類では32の発話中、平板相が9(28%)であり、この数値の差は三国式アの微徴を示ものと考えておきたい。なお、この話者の「単語言い切り」の形について、最初に述べた方法により「三国式アクセント度」を計算すると、 $m=19$ となる。

次に、東京アクセント化の傾向の認められた話者の例を示そう。

表22は話者 14f (1908年=明治41年生れ) の〈A式〉における結果である。「文節」の単位では中高相が多く見られるが、そのほか、「雨が」「春が」を3回とも頭高相に発音していることが注目される。三国式アではV類は中高型であるから、この頭高相については東京アクセントの影響も考慮される（ただし、この話者はI類の「文節」の中にも頭高相が認められるから、これだけでは、V類に見られる頭高相を東京アの影響と断じることはできない）。一方、「单語言い切り」の場合には頭高相と平板相の両方が認められ、平板相はI IV V類よりもII III類により多く現れる傾向が認められる（平板相の出現率はI IV V類では $\frac{17}{46} = 37\%$ 、II III類では $\frac{24}{32} = 75\%$ となる）。3回とも平板相に発音された語は「風」「音」「胸」「冬」「山」であって、「風」以外はII III類であり、一方、3回とも頭高相に発音された語は「顔」「海」「鮒」「春」であって、いずれもI IV V類である。すなわち、この話者は、「单語言い切り」の場合には、語によっては「ゆれ」も認められるものの、/○○/型（I IV V類）と/○○/型（II III類）という三国式アと同じ型の対立がある程度認められる（「单語言い切り」における「三国式アクセント度」は38）。しかし、「单語言い切り」の場合、東京アでもIV V類が頭高型、II III類が平板型であり、I類を除いて東京アと型が一致するから、先に述べた「文節」の場合、および、後に述べる〈B式〉（比較発音）におけるこの話者の発音と合わせて見ると、「单語言い切り」の場合を含めて、この話者の発音は三国式アの残存というより、むしろ東京アクセント化の徵候と認めるべきかと思われる（ちなみに、完全な東京ア話者について「单語言い切り」における「三国式アクセント度」を計算してみると、 $m=67$ になる）。なお、この話者の「文節」における「三国式アクセント度」は-28であって（表23参照）、この数値は、この話者が三国式アと逆のタイプの有型ア（たとえば東京ア）の傾向を持つことを示すものである（完全な東京ア話者の場合、「文節」の単位では、すべての類の語が非三国型に発音されるから、その「三国式アクセント度」は-100になる）。

以上、〈A式〉における結果について、17名の高年層話者の大部分が無型アクセント的であり、ごく一部の話者が三国式アの傾向、あるいは東京アの傾向をわずかに示したことを述べた。

表19 福井市高年層 話者8f <A式>

		<単語>			<文節>（文中）			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	—	—	—	風が	△	△	△
	顔	—	—	—	顔が	△	△	△
	庭	—	—	—	庭が	△	◐◆	△
	鳥	—	—	—	鳥が	△	○	△
	水	—	—	—	水が	○	△	△
II	音	—	—	—	音が	△	△	△
	胸	—	—	—	胸が	△	△	△
	夏	—	—	—	夏が	△	△	△
	石	〔	〔	—	石が	△	○	△
	冬	—	—	—	冬が	▽	△	△
III	山	—	—	—	山が	△	△	△
	池	—	—	●—	池が	△	△	△△
	足	—	—	—	足が	△	△	△
	犬	—	—	—	犬が	△	◆	△
	耳	—	—	—	耳が	△	△	△
IV	肩	—	—	—	肩が	△	△	△
	糸	—	—	—	糸が	○	△	△
	簪	—	—	—	簪が	△	△	◆
	針	—	—	—	針が	△	△	△
	海	—	—	—	海が	△	△	△
V	雨	—	—	—	雨が	▽○	△	△
	鮒	—	—	—	鮒が	△	△△	△
	蜘蛛	—	—	—	蜘蛛が	△	△	△
	春	—	—	—	春が	△	△	△
	鶴	—	—	—	鶴が	△	◆	△

● (○○)

△ (○○○)

▽ (○○○)

◐ (○○○)

そのほかの符号は表3(143ページ)に同じ。

表20 福井市高年層 話者17m <A式>

		<単語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風				風 が	△	△	△
	顔	♀	♀	‘	顔 が	△	△	△
	庭				庭 が	△	○	○
	鳥		♀		鳥 が	△	○	○
	水				水 が	△	♀	○
II	音			♀	音 が	△	○	△
	胸			‘	胸 が	△	△	△
	夏	‘	‘	♀	夏 が	△	○	○
	石	‘	♀	♀	石 が	△	△	○
	冬				冬 が	△	△	○
III	山	♀	‘	♀	山 が	△	○	○
	池	♀	‘	♀	池 が	△	○	○
	足	‘	‘		足 が	△	○	○
	犬			‘	犬 が	△	△	○
	耳	♀	‘		耳 が	△	△	○
IV	肩	♀	‘	‘	肩 が	○	○	○
	糸	♀	○	◎	糸 が	△	△	○
	箸	‘	‘		箸 が	△	○	○
	針				針 が	△	○	○
	海				海 が	△	♀	○
V	雨	♀			雨 が	△	△	△
	鮒	‘	‘	♀	鮒 が	△	♀	○
	蜘蛛			‘	蜘蛛 が	△	○	○
	春				春 が	△	○	○
	鶴				鶴 が	△	○	○

◎ [○○]

そのほかの符号は表3・表19に同じ。

表21 福井市高年層 話者10f <A式>

		<単語>			<文節>（文中）			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	‘	—	—	風が	△	△	△
	顔	—	—	—	顔が	△	△	△
	庭	—	—	—	庭が	△	△	△
	鳥	—	♀	—	鳥が	△	△	△
	水	—	—	—	水が	△	△	△
II	音	—	♀	—	音が	△	△	△
	胸	—	—	—	胸が	△	△	△
	夏	—	—	♀	夏が	△	△	△
	石	—	○	○	石が	△	○	△
	冬	—	—	—	冬が	△	△	△
III	山	—	—	—	山が	△	△	△
	池	♀	○	○	池が	△	△	△
	足	—	—	—	足が	△	△	△△
	犬	—	—	♀ ♀	犬が	△	△	△△
	耳	—	—	—	耳が	△	△	△
IV	肩	—	—	—	肩が	‘	△△	△
	糸	—	○	○	糸が	△	△	△
	簪	—	—	—	簪が	△	△	△
	針	—	—	—	針が	△	△	△
	海	—	—	—	海が	△	△	△
V	雨	—	—	—	雨が	△	△	△
	鮒	—	♀	—	鮒が	△	△	△
	蜘蛛	—	—	—	蜘蛛が	△	△	△
	春	—	—	—	春が	△	△	△
	鶴	—	—	—	鶴が	△	△	△

凡例は表3(143ページ)ほかに同じ。

表22 福井市高年層 話者14f <A式>

<単語> <文節> (文中)

		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	○	○	○	風 が	△	○	△
	顔	一	一	一	顔 が	△	△	△
	庭	○	一	○	庭 が	○	△	一
	鳥	♀	一	—	鳥 が	○	△	△
	水	—	一	—	水 が	—	—	—
II	音	♀	○	○	音 が	△	△	○
	胸	○	○	○	胸 が	△	△	○
	夏	○	一	○	夏 が	○	△	△
	石	—	♀	○	石 が	△	△	○
	冬	○	♀	○	冬 が	△	△	△
III	山	♀	○	○	山 が	△	△	△
	池	○	一	○	池 が	△	△	△
	足	—	○	—	足 が	△	△	△
	犬	—	○	—	犬 が	△	△	○
	耳	—	○	○	耳 が	△	△	△
IV	肩	♀	(○	肩 が	△	○	△
	糸	—	—	—	糸 が	○	△	—
	箸	♀	—	—	箸 が	△	○	△
	針	○	—	—	針 が	△	△	△
	海	—	—	—	海 が	△	△	△
V	雨	—	—	○	雨 が	—	—	—
	鮒	—	—	—	鮒 が	△	○	○
	蜘蛛	—	—	—	蜘蛛 が	△	△	—
	春	—	—	—	春 が	—	—	—
	鶴	○	—	○	鶴 が	○	—	—

凡例は表3(143ページ)ほかに同じ。

表23 三国式アクセント度（高年層・A式）

話者	単	文	話者	単	文	話者	単	文
4m (04)	0	2	10f (11)	19	-1	23f (16)	15	3
11f (05)	3	1	20f (11)	4	3	7f (18)	10	10
14f (08)	38	-28	15m (15)	1	-7	18f (20)	22	-11
13m (09)	16	5	17m (15)	11	-10	8f (21)	3	-7
1f (10)	12	4	19f (15)	-2	0	3f (22)	0	10
2f (11)	13	-2	12f (16)	15	-1			

これらの話者の〈A式〉における「三国式アクセント度」を個別（年齢順）に示すと表23のとおりである（表の「話者」の欄には話者符号および、話者の生年（括弧内に西暦の下2桁を示す）を記す。また、「単」は「单語言い切り」、「文」は「文節」の略である）。

仮にm（三国式アクセント度）の値が20以上の者を三国式アの傾向ありと認めると「14f」「18f」の2人がそれに該当し、それに準ずる者は「10f」の話者である。

以上、〈A式〉の結果について述べたが、〈B式〉（比較発話）でも、高年層話者の発音はきわめて無型的であり、どの組み合わせでも、ほとんどを中高相（〔○○ガ〕など）に発音するか、たまたま、たとえば〔ヤマガ・アメガ〕のように一見三国式に発音することがあっても、4回の発音の中には〔ヤマガ・アメガ〕が混り、4回とも安定して三国式アの型の区別が認められた例は皆無であった。すでに述べたように、福井市において三国式アの片鱗が認められることがあるのは「单語言い切り」の形で発音した場合に限られているから、「文節」の単位のみを調査した〈B式〉で三国式アの徵候が見られなかったのは、いわば当然のことである。

なお、第1回調査で、「单語言い切り」の形での「比較発音」を行わなかつたことは反省材料の一つとなった。これは、筆者が、これまでに行ってきた仙台市周辺、山形市周辺、埼玉県の一部などの「曖昧アクセント地帯」における調査結果から、「单語言い切り」よりも「文節」（さらに「短文」）の形で

調査した方が型の区別を引き出しやすいという知見を得ていたためであり、後述する「第2回調査」で明らかにされたように、福井市の話者の大部分が「单語言い切り」の単位にのみ型の区別の認められるアクセントをもつことを予想していなかったためであった。したがって、「第2回調査」では「单語言い切り」の形での「比較発音」を調査方式の一つに加えた。

〈B式〉の結果の一例として、話者13m（1909年＝明治42年生）と話者11f（1905年＝明治38年生）の結果を表24・表25に掲げる。話者によって、また、同一の話者でも「文」の形での発話と「文節言い切り」の形の発話とでは著しく音相の異なることが分かる。

なお、高年層話者の中に1名だけ〈B式〉において東京式アクセントの傾向をわずかに示した者が存在した。先に述べた話者14fがそれである（表26）。表26に示したように、この話者は「短文」の形での発音の場合、「風が～・雨が～」と「山が～・雨が～」の組み合わせで、4回の発音を通して安定した東京式アの型の対立（非三国式）を示し、「風が～・音が～」「風が～・山が～」の組み合わせでも、それに準ずる対立（1回のみユレ）を示した。また、「文節言い切り」の場合、「風が。・雨が。」の組み合わせで同様の対立を示した。

以上に述べたように、当初の予想に反して、福井市内の高年層話者の大部分は著しく無型ア的であり、ごく一部の話者に三国式ア、あるいは東京アの片鱗が認められたにすぎなかった。

しかし、それでは杉藤氏の調査結果（冒頭の表1）と矛盾すると考え、杉藤氏と連絡をとって、氏が調査された5人の高年層話者の住所を教えていただき、それらの話者に面接することにした。結局5人のうちの3人に会うことができたが、そのうちの2人は生育地が松岡町であった（松岡町であれば三国式アクセントを示しても不思議ではない）。残る1人は福井市出身の人＝話者24fであった。

話者24f（1903年＝明治36年生）は福井市の中心部（豊島町）で生育し、

市外の居住歴は22歳から1年間、隣接する足羽郡に住んだだけである。幼少から祖父母に育てられたが、この祖父母も福井市内の人であったという。

話者24fの〈A式〉における結果を表27に示す。「文節」の形では、「風が」と「耳が」が3回とも平板相に発音されているものの、全体として、かなり無型ア的である。しかし、「単語言い切り」の形では、一部に「ゆれ」があるものの、II III類が/○○/型、I IV V類が/○○/型という三国式アの傾向が明瞭である（「三国式アクセント度」は75）。

ところで表27に見られるように、「単語言い切り」でも3回の発音を通じて「ゆれ」の認められる語が若干ある。そこで、調査法を少し工夫し、三国式で対立する型を示す2つの単語（たとえばI類対II類、III類対V類）を、「風と音」「音と風」「山と雨」「雨と山」のように、相互に比較する形で発音してもらったところ、〔カゼトオ下〕〔オ下トカゼ〕、〔ヤマトアメ〕〔アメトヤマ〕のように、助詞が付かない形では、すべての単語についてII III類が〔○○〕（一部〔○○〕）、I IV V類が〔○○〕となり、〈A式〉で見られた「ゆれ」はほとんど消えた（「○○と」の部分はどの類もほとんど〔○○ト〕と一型になった）。

上の結果から、助詞が付かない形にのみ区別がある話者にあっては、短文—単語—短文—単語の順に発音させる〈A式〉よりも、単語のみを比較させる方式の方が安定して型の区別を引き出せるのではないかと考え、次に、「風・音」「音・風」のような単語言い切りの「比較発音」を試みた。すると、何回発音しても〔カゼ・オ下〕〔オ下・カゼ〕のように、I IV V類を〔○○〕、II III類を〔○○〕と発音した。さらに、〔カゼ〕と〔オ下〕はどのように違うかと質問してみると、当初はとまどっていたが、やがて話者自身が「風」は「下がる感じ」、「音」は「上がる感じ」と意識するようになった（ただし、「下がる」「上がる」という表現は筆者の誘導による）。そこで、一つ一つの単語について「下がる感じ」か「上がる感じ」かをたずねたところ、すべての語について、I IV V類を「下がる感じ」、II III類を「上がる感じ」と判別した。

以上に述べたように、話者24fによって、福井市内に有型ア（三国式ア）の話者が存在することが確認された。また、福井市方言の話者から型の区別を引き出すためには、調査法（質問法）を改善する必要のあることが分かった。

表24 福井市高年層 話者13m <比較発音>

	<文節> (文中)					<文節> (言い切り)			
	(正順)		(逆順)			(正順)		(逆順)	
風が～	△	△	△	○	風が。	△	○	○	☒
音が～	フ	○	フ	フ	音が。	△	フ	フ	フ
風が～	○	△	○	△	風が。	♀	△	○	フ
山が～	△	○	☒	○	山が。	フ	△	○	○
風が～	△	△	○	○	風が。	☒	フ	フ	フ
肩が～	△	フ	○	○	肩が。	△	フ	フ	フ
風が～	△	△	△	△	風が。	○	○	フ	フ
雨が～	フ	フ	△	○	雨が。	フ	フ	フ	フ
音が～	△	△	フ	フ	音が。	フ	♀	フ	フ
山が～	△	△	△	△	山が。	○	♀	☒	☒
音が～	△	△	フ	フ	音が。	フ	フ	フ	フ
肩が～	フ	△	△	○○	肩が。	☒	○	フ	フ
音が～	フ	△	△	△	音が。	フ	フ	フ	△
雨が～	△	△	△	△	雨が。	フ	フ	フ	フ
山が～	○	○	△	△	山が。	フ	フ	フ	○
肩が～	△	フ	△	△	肩が。	フ	フ	フ	フ
山が～	○	○	△	△	山が。	☒	○	△	△
雨が～	△	△	△	△	雨が。	フ	フ	フ	フ
肩が～	△	○	△	△	肩が。	フ	フ	フ	○
雨が～	フ	○	△	△	雨が。	フ	フ	フ	フ

† [○○○]

そのほかの符号は表10（154ページ）に同じ。

表25 福井市高年層 話者11f 〈比較発音〉

	<文 節> (文中)				<文 節> (言い切り)			
	(正 順)	(逆 順)	(正 順)	(逆 順)				
風が～	△	○	♀	♀	風が。	△△	△	△
音が～	△	○	♀	♀	音が。	△	△	△
風が～	♀	♀	♀	♀	風が。	△	△	△
山が～	♀	♀	♀	♀	山が。	△	△	♀
風が～	△	○	♀	♀	風が。	△	‘	‘
肩が～	△	○	‘	♀	肩が。	‘	‘	△
風が～	‘	♀	♀	♀	風が。	‘	‘	‘
雨が～	‘	♀	‘	‘	雨が。	‘	△	‘
音が～	♀	♀	♀	♀	音が。	△	△	‘
山が～	♀	♀	♀	♀	山が。	△	△	△
音が～	♀	♀	♀	♀	音が。	△	△	‘
肩が～	♀	♀	♀	♀	肩が。	△	△	△
音が～	♀	♀	♀	♀	音が。	♀	△	‘
雨が～	♀	♀	♀	♀	雨が。	‘	‘	‘
山が～	♀	♀	♀	♀	山が。	△	‘	△
肩が～	♀	♀	♀	♀	肩が。	‘	‘	△
山が～	♀	♀	♀	♀	山が。	‘ ‘	‘	‘
雨が～	♀	♀	♀	♀	雨が。	‘ ‘	‘	♀
肩が～	♀	♀	♀	♀	肩が。	‘	‘	‘
雨が～	△	♀	♀	♀	雨が。	‘	‘	‘

凡例は表10 (154ページ) に同じ。

表26 福井市高年層 話者14f <比較発音>

	<文節> (文中)					<文節> (言い切り)			
	(正順)		(逆順)			(正順)		(逆順)	
	B 1	B 2	B 3	B 4		B 1	B 2	B 3	B 4
風が～ 音が～	○ △	○ △	○ ○	○ △	風が。 音が。	△ 	△ 	○ △	○ △
風が～ 山が～	○ 	○ △	○ △	○ △	風が。 山が。	○ △	○ △	○ △	△ ○
風が～ 肩が～	○ △	○ △	○ ○	○ △	風が。 肩が。	○○ △△	○ △△	○ △	○ △
風が～ 雨が～	○ 	○ 	○ 	○ 	風が。 雨が。	○ 	○ 	○ 	○
音が～ 山が～	△ △	○ △	○ △	○ △	音が。 山が。	○ △	○ △	△ △	○ △
音が～ 肩が～	○ △	○ △	○ △	○ △	音が。 肩が。	○ △	○ △	○ △	○ △
音が～ 雨が～	○ 	○ 	○ 	○ 	音が。 雨が。	○ 	○ 	○ △	○
山が～ 肩が～	△ ○	△ △	△ ○	△ ○	山が。 肩が。	△ ○	△ ○	△ △	△ △
山が～ 雨が～	△ 	△ 	△ 	△ 	山が。 雨が。	○ ○	△ 	△ △	△
肩が～ 雨が～	△ 	△ 	△ 	△ 	肩が。 雨が。	○ 	○ 	△ 	△

凡例は表10(154ページ)に同じ。

表27 福井市高年層 話者24f <A式>

		<単語>			<文節>			(文中)
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風				風 が*	○	♀	○
	顔				顔 が*	△	♀	♀
	庭				庭 が*	△	△	△
	鳥				鳥 が*	△	△	○
	水				水 が*	—	—	♀
II	音		○		音 が*	○	△	△
	胸	○	○	○	胸 が*	△	△	△
	夏	○	○		夏 が*	♀	△	○
	石		○	○	石 が*	—	—	♀
	冬	♀	♀		冬 が*	△	△	—
III	山	○		○	山 が*	△	△	△
	池	○	○		池 が*	△	—	
	足	○	○	○	足 が*	△	△	△
	犬	○	○	○	犬 が*	△	△	△
	耳	○	○	○	耳 が*	♀	♀	♀
IV	肩				肩 が*	△	△	○
	糸				糸 が*	—	—	—
	箸				箸 が*	△	△	△
	針				針 が*	△	△	△
	海				海 が*	△	—	—
V	雨				雨 が*	△	○	—
	鮎				鮎 が*	△	—	—
	蜘蛛			♀	蜘蛛 が*	△	△	△
	春		♀		春 が*	△	△	△
	鶴				鶴 が*	△	△	

凡例は表3(143ページ)に同じ。

3.2 中年層のアクセント

福井市における中年層は、中学生の父母18名を含む計20名の話者について調査した。そのうちの2名（話者「3中f」と話者「6中f」）は松岡町の出身だったので、この2名を除いた16名について分析する。結果は高年層話者と同様に大部分の話者が無型ア的であり、ごく一部の話者が「単語言い切り」の場合にわずかに三国式アの姿を示した。また、1人の話者は東京式アの傾向も見せた。

それぞれの話者の〈A式〉における「三国式アクセント度」(m)を表28に示す(表の見方は表23と同じ)。mの値が20以上の者を三国式アの傾向ありと認めると、話者14fと話者22fがそれに該当し、話者7mがそれに準ずる。ただし、話者14fの場合、「文節」の場合の値が-39で、三国式とは逆のタイプの有型アの傾向を見せている。

無型アクセントのタイプの一つとして、話者20fの〈A式〉における発音を表29に示す。「単語言い切り」の場合には大部分の語を平板相に発音している。また、「文節」の場合には、1回めの発音(A1)では各相が入り乱れて現れ、2回めの発音(A2)ではそのうちの平板相が消え、さらに3回めの発音(A3)ではすべて頭高相に発音された。無型ア話者の場合、2拍単位(2拍語の単語言い切り、あるいは1拍名詞プラス1拍の助詞)では頭高相、3拍単位(2拍名詞プラス1拍の助詞、または3拍語の単語言い切り)では中高相が現

表28 三国式アクセント度(中年層・A式)

話者	単	文	話者	単	文	話者	単	文
9m (31)	16	8	19m (39)	0	-12	17f (42)	7	-6
22f (31)	29	16	1m (40)	11	-12	18f (42)	-3	-9
4m (33)	0	-17	11m (40)	-8	-11	21f (43)	0	0
2m (34)	10	-7	16f (46)	1	-17	15f (46)	-2	-2
12f (36)	10	6	7m (42)	19	-13	20f (46)	-1	-15
13m (38)	2	-12	14f (42)	35	-39	8f (47)	0	6

れることが多く、この話者のようなタイプは比較的珍しい。

次に、三国式アの傾向を見せた例として、話者 22f の〈A式〉における発音を表30に示す。「単語言い切り」では頭高相 ([$\overline{\text{O}}\text{O}$] [$\text{O}\overline{\text{O}}$]) と平板相 ([OO] [$\overline{\text{O}}\text{O}$]) のほか、[$\text{O}\overline{\text{O}}$] [$\overline{\text{O}}\text{O}$] のような第2拍に拍内下降が認められるものもここに含める) の両方が入り乱れて現れる。しかし、頭高相の出現率は I IVV 類が $\frac{28}{45} = 62\%$ 、II III 類が $\frac{10}{30} = 33\%$ (したがって $m = 62 - 33 = 29$) であって、I IVV 類が頭高型、II III 類が平板型という三国式アの姿をわずかに見せている。「文節」の場合にも I IVV 類が中高型という三国式アの姿がかすかにうかがえる (ただし、「文節」では表28に示したように $m = 16$ にすぎず、かなり無型ア的である)。

次に、東京アの傾向を見せた話者 14f の発音を表31に示そう。表を一見して分かるように、「単語言い切り」では II III 類 (とくに II 類) に平板相が多く現れ、三国式ア的かつ東京ア的である (三国式アクセント度は 35)。しかし、「文節」の場合には IVV 類に頭高相、II III 類に中高相が比較的多く現れ、東京ア的、かつ非三国ア的である。したがって、先に述べた高年層の話者 14f の場合と同様に、「単語言い切り」の場合も、三国式アの残存ではなく、むしろ東京ア化の傾向を見せていているものと解釈した方が良さそうである (表28に示したように、「文節」におけるこの話者の m の値が -39 であること、すなわち三国式アと型所属の異なる多型アの傾向を見せていることもこの裏付けとなる)。また、この話者は〈B式〉でもわずかに東京アの姿を示した (表32)。この中年層話者 14f は、先に述べた高年層 14f の実の娘であるが、興味深いことに、表26 (180ページ) と表32をくらべてみると、二人の話者の音相は、「ゆれ」を示す組み合わせ (たとえば、「風が～・音が～」「風が～・山が～」など)についても、「ゆれ」を示さない組み合わせ (たとえば「風が～・雨が～」「音が～・雨が～」など) についても、各発話ごとにふしぎなほど似かよっている。一つ屋根の下に住む実の母娘とはいえ、多くの「ゆれ」を示す話者の「ゆれかた」が、かくも一致するものであろうか。興味深いことである (なお、この中年層話者 14f の娘=中学生の〈B式〉におけるアクセントは、その母や祖母のアクセントと著しく異なり、「文」では、すべての音相が中高相、「文節

表29 福井市中年層 話者20f <A式>

		<單語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風		○	♀	風が	♀		Y
	顔	-	○	♀	顔が	△	△	YY
	庭	○	○	♀	庭が	♀	-	YY
	鳥	♀	○	♀	鳥が	-	-	YY
	水	○	○	♀	水が	-	-	YY
II	音		○	♀	音が	♀	-	Y
	胸	-	○	○	胸が	△	-	YY
	夏	-	○	○	夏が	-	-	YY
	石	○	○	♀	石が	-	△	YY
	冬	♀	○	♀	冬が	△	△	YY
III	山	○	○	♀	山が	♀	-	Y
	池	○	○	♀	池が	♀	△	YY
	足	○	○	♀	足が	△	△	YY
	犬	○	○	○	犬が	-	△	YY
	耳	○	○	○	耳が	-	△	YY
IV	肩	♀	○	♀	肩が	♀	-	Y
	糸	○○	○	○	糸が	♀	-	YY
	簪	-	○	♀	簪が	△	-	YY
	針	♀	○	♀	針が	-	△	YY
	海	○	○	○	海が	-	-	YY
V	雨	○	○	♀	雨が	♀	-	Y
	鮒	♀○	○	○	鮒が	△	-	YY
	蜘蛛	○	○	○	蜘蛛が	-	-	YY
	春	○	○	♀	春が	-	-	YY
	鶴	-	♀	♀	鶴が	-	△	YY

◎ (○Ö)

¤ (OÖO)

Y (ÖOO)

そのほかの答号は表3 (143ページ) に同じ。

表30 福井市中年層 話者22f <A式>

		<単語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	—	○	—	風が	♀	♀	♀
	顔	♀	（	（	顔が	♀	♀	♀
	庭	—	●	（	庭が	♀	△	○
	鳥	—	（	（	鳥が	♀	○	○
	水	—	—	—	水が	♀	○	♀
II	音	（	—	♀	音が	♀	♀	♀
	胸	●	●	（	胸が	♀	♀	♀
	夏	♀	♀	（	夏が	♀	△	○
	石	—	♀	○	石が	♀	△	♀
	冬	—	♀	○	冬が	♀	○	♀
III	山	—	●	●	山が	♀	♀	○
	池	●	♀	○	池が	♀	○	○
	足	—	—	♀	足が	♀	♀	○
	犬	●	●	○	犬が	♀	△	○
	耳	—	●	○	耳が	♀	▽	○
IV	肩	—	—	♀	肩が	♀	♀	♀
	糸	—	●	♀	糸が	♀	○	○
	簪	○	○	（	簪が	○	▽	○
	針	♀	●	♀	針が	♀	▽	○
	海	●	●	●	海が	♀	△	♀
V	雨	—	—	—	雨が	♀	▽	○
	鮒	（	（	（	鮒が	△	▽	△
	蜘蛛	—	—	—	蜘蛛が	♀	♀	○
	春	—	●	●	春が	♀	△	▽
	鶴	—	●	—	鳥が	△	△	△

● (○○)

● (○○)

♀ (○○○)

△ (○○○)

♀ (○○○)

▽ (○○○)

△ (○○○)

そのほかの符号は表3 (143ページ) に同じ。

表31 福井市中年層 話者14f <A式>

		<単語>			<文節> (文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	○	♀	○	風 が	△	○	○
	顔	—	—	—	顔 が	△	△	△
	庭	♀	—	○	庭 が	○	△	—
	鳥	♀	—	—	鳥 が	○	—	△
	水	—	—	—	水 が	○	—	—
II	音	♀	○	○	音 が	○	△	○
	胸	○	○	○	胸 が	△	△	○
	夏	○	—	○	夏 が	○	△	△
	石	—	♀	○	石 が	△	△	○
	冬	○	♀	○	冬 が	△	△	△
III	山	○	○	○	山 が	△	△	△
	池	♀	—	—	池 が	○	△	△
	足	—	○	—	足 が	△	△	△
	犬	—	○	—	犬 が	△	△	○
	耳	—	○	○	耳 が	△	△	△
IV	肩	♀	—	○	肩 が	○	○	△
	糸	—	—	—	糸 が	○	△	—
	箸	○	—	—	箸 が	△	○	△
	針	○	—	—	針 が	△	△	△
	海	—	—	—	海 が	○	—	—
V	雨	—	—	○	雨 が	—	—	—
	鮒	—	—	—	鮒 が	△	○	○
	蜘蛛	—	♀	♀	蜘蛛 が	△	▽	▽
	春	—	—	—	春 が	—	—	—
	鶴	○	—	○	鶴 が	○	○	—

凡例は表3・表30に同じ。

表32 福井市中年層 話者14f <比較発音>

	<文 節> (文中)					<文 節> (言い切り)			
	(正 順)		(逆 順)			(正 順)		(逆 順)	
	B 1	B 2	B 3	B 4		B 1	B 2	B 3	B 4
風が～	○	○	○	○	風が。	△	△	○	○
音が～	△	△	○	△	音が。	一	一	△	△
風が～	○	○	○	○	風が。	○	○	○	△
山が～	一	△	△	△	山が。	△	△	△	○
風が～	○	○	○	○	風が。	◎	○	△	○
肩が～	△	△	○	△	肩が。	△	△	△	△
風が～	○	○	○	○	風が。	○	○	○	○
雨が～	一	一	一	一	雨が。	一	一	一	一
音が～	△	○	○	○	音が。	○	○	○	○
山が～	△	△	△	△	山が。	△	△	△	△
音が～	○	○	○	○	音が。	○	○	○	○
肩が～	△	△	△	△	肩が。	△	△	△	△
音が～	○	○	○	○	音が。	○	○	○	○
雨が～	一	一	一	一	雨が。	一	一	▽	一
山が～	△	△	△	△	山が。	△	△	△	△
肩が～	○	○	○	○	肩が。	○	◎	△	△
山が～	△	△	▽	△	山が。	○	△	△	△
雨が～	一	一	一	一	雨が。	♀	一	△	一
肩が～	△	△	△	△	肩が。	○	○	△	△
雨が～	一	一	一	一	雨が。	一	一	一	一

凡例は表10(154ページ)に同じ。

言い切り」では、ほとんどの音相が頭高相になり、完全な無型アの状態であった。これもまた興味深いことである)。

なお、中年層話者の〈B式〉(比較発音)の結果は、上述の話者14fを除いて、ほとんど無型アの状態であった。しかし、話者4mは、「文節言い切り」における「音が・肩が」の組み合わせについてのみ〔オトガ・カタガ〕〔オトガ・カタガ〕〔カタガ・オトガ〕〔カタガ・オトガ〕と発音し、4回の発音を通じて、平板型(音が)と中高型(肩が)の対立という三国式の姿をかすかに示した。

3.3 若年層のアクセント

最初に述べたように、福井市では20名の中学生(男9名、女11名)を調査した。結果は、当初に予想したように、若年層の中には無型ア的な者と東京ア的な者の両方が存在した。しかし、東京ア的な姿を示した者は予想以上に少なく、男性はすべて無型ア的であり、女性の一部が東京ア的な姿を見せたにすぎなかった。

〈A式〉の発音について冒頭(138ページ以下)に記した方法により「東京アクセント度」を計算した結果を表33(単語言い切り)と表34(文節)に示そう。

両表を一見して分かるように、「単語言い切り」「文節」とも男性のtの値(東京アクセント度)はいずれも5以下であり、完全な無型アの状態であるのに対して、女性の数値の高さが目立つ。すなわち、女性話者11名のうち「単語言い切り」と「文節」のいずれもが20未満の者は話者12・15・17・18・20の5名にすぎず、他の6名は多少とも東京ア的な値を示している。とくに話者10・11・19の3人は「単語言い切り」と「文節」の両方でtの値がかなり高い。

「単語言い切り」と「文節」とのtの値に大きな差の認められる者もある。たとえば、話者13fは「単語」では40、「文節」では15であり、話者14fは20と0、話者16fは30と5であって、いずれも「文節」の場合はほぼ無型アの状態である。個々の話者については例外もあるが、全体としては「単語言い切

表33 福井市若年層話者の東京アクセント度 <A式、単語(言い切り)>

話者	性	風 風 庭 鳥 水	音 胸 夏 石 冬	山 池 足 犬 耳	肩 糸 箸 針 海	雨 鮎 春 鶴	蜘蛛	t
1	m	x x x x	o x x	x x	x x x			0
2	m	x x x o	o o o x	x o x o	x x o x	x x x x x		0
3	m	x x		x				0
4	m				x			0
5	m							0
6	m	x x x x x	x x x x x	x x x x x	x x x x x	x x x x x		0
7	m		x		x	x		0
8	m	x x	x x	x x x x	x x x	x		0
9	m	x	x	x				0
10	f	o o o o o	o x o o x	o x x o x	x x	x		69
11	f	o o x o o	o o o o x	o o o o o	o x			80
12	f	o o x o o	x x x x x	o x x x o	x x x x	x x x x x		0
13	f	o o o x o	o x o o x	o x o o o	x o o x	x x		40
14	f	x o o x x	x o x x	x x x	x x x	x x x x x		20
15	f	x x x o	x o x o o	x o x o o	o o x o o	o x x o o		0
16	f	o o o x o	o o o x o	o x o o o	x o o x	x x x		30
17	f	x x x x x	x x x x x	x x x o x	x x o	x x x x x		7
18	f	o o o o o	o o o o o	o o o o o	x x o o o	o o x o o		0
19	f	x o o o o	x o o o o	o x o o o	o x x	x		60
20	f	o o o o o	o o o o o	o o o o o	x x x o o	x x x x o		0

凡例は表5 (145ページ) に同じ。

表34 福井市若年層話者の東京アクセント度 <A式、文節(文中)>

話者	性	風 頤 庭 鳥 水	音 胸 夏 石 冬	山 池 足 大 耳	肩 糸 箸 針 海	蜘蛛 鮎 春 鶴	t
1	m	x △ △ x △	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △	x △ △ △ △	△ x △ x △	0
2	m	o o x o x	x △ △ x x	x x x x x	△ x △ x x	x o x x △	5
3	m	x △ △ △ △	x △ x △ △	△ △ △ △ x	△ △ △ △ △	△ x △ △ x	0
4	m	o x o o o	o o x o o	o o x o o	x o x o o	o o o o o	0
5	m	x x x x x	x △ x x △	x x x x △	x x x x △	x x x x x	0
6	m	x x x △ x	x △ x x x	x △ △ x x	x x △ △ x	x x △ x x	0
7	m	o o o o o	o x o o o	o o x x x	o o △ x o	o o o x x	0
8	m	x x x △ o	△ △ △ x △	x x △ x o	x x x △ x	△ x △ △ x	5
9	m	x △ o x o	x x o o o	o o x x x	△ x x x x	o x x o x	0
10	f	o o o o x	△ △ △ △ △	x △ △ △ △	x x		80
11	f	o o x x o	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ x	x	65
12	f	x o x o x	x x x x △	x x x x x	x x x x x	x x x x x	5
13	f	o o △ x x	o △ x x △	x x △ o x	x o △ △ x	x x x △ x	15
14	f	o o o o o	o o o o o	o o o o o	o o o o o	o o x o o	0
15	f	o o o o o	x x o x x	o x x o o	o o o o x	o x o o o	0
16	f	o x o o x	x x x o o	x x △ x x	x x x x o	x o x x x	5
17	f	o o o o x	x x △ x o	o o x x o	o x x o o	o o o o o	5
18	f	o o x x x	x x x x x	x x x △ △	o x x x x	x x x △	15
19	f	o o x o o	x △ △ △ △	x △ x △ △	x x o x	x △	55
20	f	o x x o o	o x o o x	x x o x x	x x x x x	x x x x x	0

凡例は表5 (145ページ) に同じ。

り」の場合の方が「文節」（〈A式〉では「山が見える」のように、調査語を含む文節を文頭に置いた短文における発音）の場合よりも t の値が高い（20人の話者の t の平均値は「単語」が15.2、「文節」が12.8であり、女性のみの平均値を見ると、「単語」が27.7、「文節」が22.3である）。

東京アクセント度の最も大きかった話者の例として、話者 10f と話者 11f の〈A式〉における発音の全音相を表35・表36に掲げよう。

表35は話者 10f の発音である。「単語言い切り」の場合、I 類の語はすべて平板型に、II III 類の語は「胸」「冬」「池」「足」「耳」に「ゆれ」が見られるが、他の語は安定した平板型に、IVV 類の語は「箸」「針」「鶴」以外の7語が安定した頭高型に発音されている。「文節」の場合には、I 類は「水が」を除いて安定した平板型に、II III 類は「山が」以外は中高型に、IVV 類は「箸が」「針が」以外は頭高型である。

表36は話者 11f の発音である。「単語言い切り」では、I II III 類は「庭」と「冬」を除いてすべて安定した東京ア型（平板型）に、IVV 類は「箸」が非東京ア型に発音され、「海」がわずかに「ゆれ」を示したほかは、すべて東京ア型（頭高型）に発音されている。「文節」では、「庭が」「鳥が」「海が」「鮒が」がゆれ、「箸が」が非東京ア型に発音されたほかは、すべて東京ア型である。

以上に示した2人の話者については、一部に「ゆれ」が認められるものの、少くとも調査した2拍名詞に関しては、かなりの程度に東京アクセントを獲得していると言えよう。

〈B式〉（比較発音）については、〈A式〉の場合とほぼ並行的な結果が得られた。すなわち、〈A式〉で東京アクセント度の大きい話者は〈B式〉でも東京アの傾向を強く示した。

〈A式〉で t の値の大きかった話者 10f と話者 11f の〈B式〉における結果を表37・38に示す。

表37の左側は話者 10f の「短文の形」での発音の結果である。「音が～・山が～」「音が～・肩が～」「音が～・雨が～」「山が～・肩が～」「肩が～・雨が～」の組み合わせについては、4回の発音を通じて見ると「ゆれ」が認められるが、「風が～・音が～」「風が～・山が～」「風が～・肩が～」「風が～・

雨が～」「山が～・雨が～」の組み合わせについては、4回とも安定して東京アと同じ型の対立を示している。一方、表37の「文節言い切り」の場合には「ゆれ」が激しくなり、4回とも東京アの型を保持した組み合わせは「山が～・雨が～」だけである（しかし、「ゆれ」の見られる組み合わせについても、たとえば、「風が～・音が～」「風が～・山が～」のように、4回のうちの1回の1つの語だけが非東京アの音相を示した組み合わせが多く、1つ1つの音相について東京アとの一致・不一致を見れば全体としてはかなり東京ア的と言える）。

表38は話者11fの発音である。この話者の〈B式〉における発音は話者10fよりもさらに安定した東京アクセント型を示している。すなわち、「短文」「文節言い切り」を通じて、「ゆれ」の認められる組み合わせは「音が～・山が～」「山が～・肩が」「肩が～・雨が～」（以上「短文」）と「肩が～・雨が」（「文節言い切り」）の3ペアにすぎず、他の16ペアについては、すべて東京アクセント型に発音されている。一般にアクセントの型知覚の曖昧な話者にあっては、短文などを読ませたときよりも、「比較発音」のときの方が「ゆれ」が多発することが多く、この話者のように、「比較発音」の方がより安定した型の対立を示す話者は、その型知覚がかなり明瞭であることを示すものと筆者は解釈している。

以上2名のほか、4名の女性話者が20のペア（「短文」10ペア、「文節言い切り」10ペア）のうちのいくつかについて安定した東京アの型の対立を示した（男性話者については「ゆれ」を示さぬペアは皆無であった）。多少とも東京アの型の対立を見せた6名の話者のそれぞれについて、安定して東京ア型を見せた組み合わせの数を示すと次のとおりである。

話者11f……「短文」7・「文節言い切り」9

話者10f……「短文」5・「文節言い切り」1

話者12f……「短文」4・「文節言い切り」0

話者19f……「短文」2・「文節言い切り」1

話者18f……「短文」1・「文節言い切り」0

話者20f……「短文」1・「文節言い切り」0

表35 福井市若年層 話者10f < A式 >

		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	○	○	♀	風が	○	○	○
	顔	○	○	○	顔が	○	○	○
	庭	○	○	○	庭が	○	○	○
	鳥	○	○	○	鳥が	○	○	○
	水	○	○	○	水が	△	○	○
II	音	○	○	○	音が	△	△	△
	胸	○	—	—	胸が	△	△	△
	夏	○	○	○	夏が	△	△	△
	石	○	○	○	石が	△	△	△
	冬	○	○	—	冬が	△	△	△
III	山	○	○	○	山が	△	△	○
	池	—	○	—	池が	△	△	△
	足	○	—	○	足が	△	△	△
	犬	○	♀	○	犬が	△	△	△
	耳	—	○	—	耳が	△	△	△
IV	肩	—	—	—	肩が	—	—	—
	糸	—	—	—	糸が	—	—	—
	箸	—	○	—	箸が	△	△	—
	針	○	○	—	針が	△	—	—
	海	—	—	—	海が	—	—	—
V	雨	—	—	—	雨が	—	—	—
	鮒	—	—	—	鮒が	—	—	—
	蜘蛛	—	—	—	蜘蛛が	—	—	—
	春	—	—	—	春が	—	—	—
	鶴	○	—	—	鶴が	—	—	—

凡例は表3(143ページ)に同じ。

表36 福井市若年層 話者11f 〈A式〉

		〈単語〉			〈文節〉(文中)			
		A 1	A 2	A 3		A 1	A 2	A 3
I	風	♀	♀	♀	風が	♀	♀	♀
	顔	◎	○	○	顔が	♀	○	○
	庭	♀	○	—	庭が	○	○	—
	鳥	○	♀	♀	鳥が	△	♀	—♀
	水	○	○	○	水が	○	○	♀
II	音	♀	○	♀	音が	△	△	△
	胸	○	○	○	胸が	△	△	△
	夏	○	○	♀	夏が	△	△	△
	石	○	○	○	石が	△	△	△
	冬	○	—	○	冬が	△	△	△
III	山	♀	○	♀	山が	△	△	△
	池	○	♀	♀	池が	△	△	△
	足	○	○	♀	足が	△	△	△
	犬	○	○	○	犬が	△	△	△
	耳	○	○	○	耳が	△	△	△
IV	肩	—	—	—	肩が	—	—	—
	糸	—	—	—	糸が	—	—	—
	簪	○	♀	♀	簪が	△	△	△
	針	—	—	—	針が	—	—	—
	海	♀	—	—	海が	△	—	—
V	雨	—	—	—	雨が	—	—	—
	鮒	—	—	—	鮒が	—	—	—
	蜘蛛	—	—	—	蜘蛛が	—	—	—
	春	—	—	—	春が	—	—	—
	鶴	—	—	—	鶴が	—	—	—

凡例は表3 (143ページ) ほかに同じ。

表37 福井市若年層 話者10f <比較発音>

	<文節> (文中)					<文節> (言い切り)			
	(正順)	(逆順)				(正順)	(逆順)		
風が～	○	○	○	○	風が。	○	○	○	一
音が～	△	△	△	△	音が。	△	△	△	△
風が～	○	○	○	○	風が。	○	○	○	○
山が～	△	△	△	△	山が。	△	△	○	△
風が～	○	○	○	○	風が。	○	○	○	○
肩が～	一	一	一	一	肩が。	△	一	一	一
風が～	○	○	○	○	風が。	○	○	一	一
雨が～	一	一	一	一	雨が。	一	一	△	△
音が～	△	△	△	△	音が。	△	△	○	○
山が～	△	△	△	○	山が。	△	△	△	○
音が～	△	△	△	△	音が。	△	△	○	○
肩が～	△	一	一	一	肩が。	一	一	一	一
音が～	△	△	○	○	音が。	△	△	○	△
雨が～	一	一	一	一	雨が。	一	一	一	一
山が～	△	△	△	○	山が。	△	△	○	○
肩が～	一	一	一	一	肩が。	一	一	一	一
山が～	△	△	△	△	山が。	△	△	△	△
雨が～	一	一	一	一	雨が。	一	一	一	一
肩が～	一	一	一	一	肩が。	△	一	△	△
雨が～	△	一	一	一	雨が。	一	一	一	一

凡例は表10(154ページ)に同じ。

表38 福井市若年層 話者11f <比較発音>

	<文節> (文中)					<文節> (言い切り)			
	(正順)	(逆順)	(正順)	(逆順)		(正順)	(逆順)	(正順)	(逆順)
風が～	♀	♀	♀	♀	風が。	♀	♀	♀	♀
音が～	△	△	△	△	音が。	△	△	△	△
風が～	♀	♀	♀	♀	風が。	♀	♀	♀	♀
山が～	△	△	△	△	山が。	△	△	△	△
風が～	♀	♀	♀	♀	風が。	♀	♀	♀	♀
肩が～					肩が。				
風が～	♀	♀	♀	♀	風が。	♀	♀	♀	♀
雨が～					雨が。				
音が～	△	△	△	♀	音が。	△	△	△	△
山が～	△	△	△	△	山が。	△	△	△	△
音が～	△	△	△	△	音が。	△	△	△	△
肩が～					肩が。				
音が～	△	△	△	△	音が。	△	△	△	△
雨が～					雨が。				
山が～	△	△	○	△	山が。	△	△	△	△
肩が～					肩が。				
山が～	△	△	△	△	山が。	△	△	△	△
雨が～					雨が。				
肩が～			△		肩が。			△	△
雨が～					雨が。				

凡例は表10 (154ページ) に同じ。

これらの話者の〈A式〉における「文節」の形の東京アクセント度（表34）を見ると、話者18fと話者19fについては〈A式〉と〈B式〉との関係が並行的であるが、話者12fは〈A式〉におけるtの値が5にすぎず、ほとんど無型アの状態であるのに〈B式〉の「短文」（これは〈A式〉の「文節」に対応する）ではかなり東京ア的であり、また話者20fは〈A式〉では「文節」（表34）「単語言い切り」（表33）のいずれもt=0であるが、〈B式〉ではわずかながら東京アの姿を示している。

なお、〈B式〉における「短文」と「文節言い切り」とを比較すると、話者11fのような例外はあるが、全体としては「短文」の方がより東京ア的な姿を示していることが分かる（話者11fのようなケースは、やはりこの話者の型知覚の明瞭さを反映するものであろう）。

高年層話者と中年層話者については、先に、ごく一部の話者（高年層話者14fおよび中年層話者14f）がわずかに東京ア的な姿を示したことを述べたが、それらの話者の「東京アクセント度」を表39～42に示す。

表39および41を見ると、上記の2名の話者のほかに、高年層話者の12f・24fおよび中年層話者の12f・17fの「単語言い切り」のtの値が比較的大きいが、これは、すでに述べたように、「単語言い切り」についてはI類を除く他の類は東京アと三国式アの型が同じであるためであって、これらの話者のtの値の大きさは、東京アの姿ではなく、三国式アの反映であると考えられる（表40・42に見られるように、これらの話者の「文節」におけるtの値が小さいこともその裏付けとなる）。

以上、若年層については、女性話者の一部に東京アの傾向を示す者が存在することを述べたが、これは、すでにいくつかの報告で明らかにされているように、主としてテレビの普及による全国各地のアクセントの共通語化の現れであると考えられる。しかしながら、福井市におけるアクセントの共通語化の程度は、これまでに報告された東日本各地の無型アクセント方言の共通語化の例にくらべるとはるかに小さく、とくに男性話者の中にはっきりした東京語アクセント（共通語アクセント）の姿を示す者が皆無であったことが

^{注14}

表39 福井市高年層話者の東京アクセント度（A式、単語（言い切り））

話者	性	風 頤 庭 鳥 水	音 胸 夏 石 冬	山 池 足 犬 耳	肩 糸 箸 針 海	雨 鮎 蜘 蛛 春 鶴	t
1	f		x	x x	x	x	0
2	f		x	x x x			0
3	f						0
4	m						0
7	f	x x	x x x	o	x x x x	x x	7
8	f			x			0
10	f	x	x x x	o x	x	x	7
11	f		x				0
12	f	x x x o	o x o	x o x x o	x o o x o	x x	30
13	m		o x	x x	x	x x	7
14	f	o x x	o o x x o	o x x x x	x x x x	x x x	30
15	m		x		x		0
17	m	o x	x x x	x o x	x o	x x	13
18	f	x	x x x	x o x	x x	x	7
19	f					x	0
20	f	x x	x x	x			0
23	f		x	x x	x		0
24	f		x o x x x	x x o o o			30

凡例は表5（145ページ）に同じ。

表40 福井市高年層話者の東京アクセント度 <A式、文節(文中)>

話者	性	風 風 庭 鳥 水	音 胸 夏 石 冬	山 池 足 犬 耳	肩 糸 箕 針 海	雨 鮎 春 鶴 蛛	t
1	f	x x △△△△	x x △△△△	x x △△△△	△ x △△△△	△ x x △△△	0
2	f	△△△△△△	△△△△△△	△△△△△△	△△△△△△	x △△△△△	0
3	f	△△x△x	△x△x△	x x x x x	△x△x x	△x△△△△	0
4	m	x x x x o	x x △ x △	x o x △ x	o o x △△	△ x x △△△	10
7	f	△△x△x	x x x x △	x△x△△△	△x x x △△	△△x x	5
8	f	△△x x x	△△△ x △	△△△△△△	△x△△△△	x△△△△△	0
10	f	△△△△△△	△△△ x △	△△△△△△	△x△△△△	△x△△△△	0
11	m	△x△x△	x x △△△ x	△x△△△△	△x△△△△	x△x△x	0
12	f	x△△x△	△x△△△△	x△△△△△	△△△△△△	x△△△△△	0
13	m	△x x x△ x	△△△ x x	x x x△ x	△x x x△△	△x x x△△	0
14	f	x△x x x	x x x x △	△△△ x △	x x x △△	x △ x	10
15	m	△△△△△△	△△△△△△	△△△△△△	△x△△△△	△x△△△△	0
17	m	△△x x x	x△x x x	x x x x x	o x x x x	△x x x x	0
18	f	x x △ x x	x x x x △	△x x △△△	x x x x x	x x x x x	0
19	f	△x△△ x	△△x x △	x△△△△△	△△△△△△	△△△△△△	0
20	f	x x x x x	x x x△ x	x△△ x x	x△ x△ x	x△ x x x	0
23	f	△△△△△ x	△△x△△△	△x△△△△	△△△△△△	△△x△△△	0
24	f	o x△ x x	x△x x x	△x△△△○	x △△ x	x x△△ x	15

凡例は表5（145ページ）に同じ。

表41 福井市中年層話者の東京アクセント度 <A式、単語(言い切り)>

話者	性	風 風 頤 庭 鳥 水	音 胸 夏 石 冬	山 池 足 犬 耳	肩 糸 箸 針 海	蜘蛛 鮎 春 鶴 蛛	t
1	m		x x		x		0
2	m	x x	x	x x x x	x	x x	0
3	f						0
4	m	o o o o o	o o o o o	o o o o o	o o o o o	o o o o o	0
6	f	x x	x o	x	x x	x x	7
7	m	x x x o	x o o x x	o o o o x	x o o x o	o x x o x	0
8	f						0
9	m		o x	x	o		7
11	m	x x	x		x x		0
12	f	x x x o	o x o	x o x x x	x o x x o	x x	27
13	m	x	x	x x	x x	x	0
14	f	o x x	o o x x o	o x x x x	x x x x	x x x	30
15	f					x	0
16	f	x x x x	x x x x x	x x	x	x x x x	0
17	f	x x o x x	x o x x	x x o x	x x x	o x x	20
18	f	x x o x x	o o o x o	x x x x x	x o x x x	o o o o x	0
19	m						0
20	f	x x o o o	x x x o o	o o o o o	o o x o o	o o o o x	0
21	f						0
22	f	x x x	x x x x x	x o x o x	x x x o o	x x	13

凡例は表5 (145ページ) に同じ。

表42 福井市中年層話者の東京アクセント度 <A式、文節(文中)>

話者	性	風 頤 庭 鳥 水 音 胸 夏 石 冬	山 池 足 犬 耳	肩 糸 箸 針 海	蜘蛛 雨 鮎 蛛 春 鶴	t
1	m	○ × × × × × × × △ × △	× × △ △ △	× × △ △ ×	○ × × △ △	10
2	m	△ △ × △ △ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ △ △ × △	× △ △ △ △	0
3	f	× × △ △ △ × △ × △ △	× × △ △ △	△ × △ △ △	△ × △ × △	0
4	m	△ △ × △ × △ △ △ △ △	× × △ △ △	× × △ △ △	× × × × △	0
6	f	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △	0
7	m	× × × × △ × × △ △ △	× × △ △ △	× △ △ × △	△ × × △ △	0
8	f	× × △ △ △ × △ × × △	× × △ × △	△ × × △ △	× × △ × ×	0
9	m	△ × △ △ △ △ × △ △ △	× × △ △ △	× × △ △ △	△ △ △ △ △	0
11	m	× × △ △ △ △ △ △ △ △	△ × △ △ △	△ △ △ ×	× × △ △ △	5
12	f	× △ △ △ △ △ × △ △ △	× △ △ △ △	× △ △ △ △	△ △ △ △ △	0
13	m	× ○ × × × × × × × ×	× × × × ×	× ○ × × ×	× ○ ○ × △	0
14	f	× △ × × × × × × × △	△ × △ × △	× × × △ ×	× △ ×	10
15	f	△ △ △ △ △ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ △ △ △ △	△ △ △ △ ×	0
16	f	× × × × × × × ×	× △ ×	× ×	×	5
17	f	× × × × × × × × × ×	× × × × ×	× × × × ×	× × × × ×	0
18	f	× ×	× × × × ×	×	×	0
19	m	× △ △ △ △ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △	× × △ △ △	× △ △ △ △	0
20	f	× × × × × × ×	× × × × ×	× × × ×	× × ×	0
21	f	× × × × × × × × × ×	× × × × ×	× × × × ×	× × × × ×	0
22	f	○ ○ × ○ ○ ○ ○ × × ○	○ ○ ○ × ×	○ ○ × × ×	× △ ○ × △	0

凡例は表5(145ページ)に同じ。

^{注15} 注目される。その理由については今後の調査結果について明らかにしていきたいが、一つの仮説としては、福井市方言が大別すれば西日本方言の系列に属し、現在でも地理的・文化的に関西方言の影響の大きいことが考えられる。すなわち、社会的交流（人と人との接触による交流）による京阪式アクセントとマスメディアによる東京式アクセントの影響を同時に受けるため、体系の大きく異なる二つのアクセントが互いに干渉し、それがアクセントの共通語化を遅らせる一因になっているのではないかと考えられる。さらに福井市の高年層の一部に残存する三国式アクセントや、福井市の周辺に存在する東京アと異なる体系をもつアクセントの影響も大きいであろう。この仮説については、九州各地や愛知県の一部など、西日本各地の無型アクセント地域におけるアクセントの共通語化の状態を調査・分析することによって検証してみたい。

4. 福井市のアクセント (第2回調査について)

4.1 調査の内容

以上に述べたように、第1回調査では、中学生の祖父母にあたる20名の高年層話者については、ごく一部に三国式アの片鱗が認められたものの、明確な三国式アの保持者を発見することができなかった。しかし、最後に追加調査を行った話者24fによって、福井市内に明確な三国式アをもつ話者が存在することが確認され、また、福井市方言の話者から型の区別を引き出すためには、調査法(質問法)を改善する必要のあることが判明した。そこで、これらの20名の話者について、調査法を変更して再調査を実施することにした(調査時期・調査者については既述)。

再調査の対象となった20名のうち、調査することのできたのは14名であった。これらの話者のほか、第2回調査では新たに12名の高年層話者を追加した。新たに加えた12名の話者は次のとおりである(以下、①は話者記号、②

福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差、個人差、調査法による差 203
は話者の生年（西暦の下二桁）、②は外住歴（外住時の年齢）をあらわす）。

(a)	(b)	(c)
福25高 f	07	なし
" 26 " m	10	なし
" 27 " m	07	東京（40—44）、博多（44—48）
" 28 " f	09	東京（18歳以降時期不明、4年）、博多（同、4年）
" 29 " f	02	敦賀（18—20）、名古屋（26—28）、東京（38—43）
" 30 " f	08	なし
" 31 " f	13	なし
" 32 " f	09	敦賀と大野（40—51）
" 33 " f	06	なし
" 34 " m	12	兵役で2年間各地。
" 35 " m	05	敦賀（30—35、45—50）、大野（50—54）
" 36 " f	08	大野（37—41）

調査語は前回の25語のほか、新たに「首」（I類）、「歌」（II類）、「色」（III類）、「息」（IV類）、「汗」（V類）の5語を加えて、2拍名詞各類6語ずつ計30語とし、それぞれの単語について、次的方式で調査した。

- ① <E式> 「風と音」「音と風」（I：II）、「顔と山」「山と顔」（I：III）のように異類の単語を助詞「と」でつなないだ句を何度も読んでもらう。
- ② <e式> 「風と顔」「顔と風」のように、同類の単語を助詞「と」でつなないだ句を何度も読んでもらう（I類の単語が全部終了してからII類に進む）。
- ③ <F式> 「風・音」（I：II）のような異類の二つの単語を、单語言い切りの形で、交互に比較しつつ何度も（少くとも「風・音」の形で2回、「音・風」の逆順で2回）発音してもらう。すなわち、この方式は第1回調査における<B式>（「短文」および「文節言い切り」の形での比較発音）を「单語言い切り」の形で行うものである。
- ④ <G式> 風（I類）・音（II類）・顔（I類）・山（III類）・雨（V類）・胸

- (II類)・糸(IV類)……のように、「单語言い切り」の形で1語ずつ発音してもらう。調査語の提示順序は上記のような異類混合配列。なお、調査語を最後まで読んでもらってから最初に戻り、もう一度くりかえす(すなわち、各語を2回発音してもらうことになる)。
- ⑤ 〈g式〉 〈G式〉と同じことを同類連続配列で行う。すなわち、風・顔・庭・鳥・水・首(以上第I類)、音・胸・夏・石・冬・歌(以上第II類)……の順序で発音してもらう。
- ⑥ 〈H式〉 各調査語を〈なぞなぞ式〉で質問し、「单語言い切り」の形で答えてもらう。これは第1回調査において坂井町の話者2fについて試み、効果の認められた方式である(000ページ参照)。

4.2 「单語言い切り」におけるアクセント

結果の概要について述べると、第1回調査の結果とは異なり、再調査を実施した14名の話者のうちの多くが、三国式アの傾向を示した。ただし、その度合は調査方式によって大きく相違し、同一の話者が、無型ア的な姿を示したり、三国式ア的な姿を示したりした。ただし、三国式アの姿を示した話者でも、多くの場合、「单語言い切り」の形にのみその傾向が現れ、「文節」の単位でも三国式アの姿を示した話者はごく少數であった。

ここでは、まず、「单語言い切り」の結果について述べる。それぞれの話者の各方式(第1回調査の〈A式〉、および第2回調査の〈E〉～〈F〉)による「三国式アクセント度」(m)を表43に示す。なお、表では、再調査を行った話者に新たに1～14の話者番号を付し、追加した12名に15～26の話者番号を与えた。話者番号は1～14、15～26のグループごとに、年齢の高い者から順に与えた。以下の記述はこの番号によって行う。新たに与えた話者番号と、冒頭(127ページ)、および、203ページに記した話者記号との関係は次のとおりである(点線の左側は新たに与えた話者番号、右側は冒頭および203ページに記した話者記号、括弧内の数字は話者の生年(西暦の下2桁)をあらわす)。

1 ……福4高m (04)	2 ……福11高f (05)	3 ……福14高f (08)
4 ……福13高m (09)	5 ……福1高f (10)	6 ……福2高f (11)

7 ……福20高 f (11) 8 ……福17高m (15) 9 ……福19高 f (15)
 10……福12高 f (16) 11……福23高 f (16) 12……福7高 f (18)
 13……福18高 f (20) 14……福3高 f (22)

15……福29高 f (02) 16……福35高m (05) 17……福33高 f (06)
 18……福25高 f (07) 19……福27高m (07) 20……福30高 f (08)
 21……福36高 f (08) 22……福32高 f (09) 23……福28高 f (09)
 24……福26高m (10) 25……福34高m (12) 26……福31高 f (13)

表43でまず注目されるのは、第1回調査(A)に比べて第2回調査(E~f)の方がmの値が大きくなる話者が多いことである。第1回調査の〈A式〉ではどの話者も無型的であるが、1・3・4・5・6・7・10・11・12・の話者は、第2回の少くとも一つ以上の調査方式におけるmの値が、第1回(A式)の値を大きく上回っている。とくに目立つのは話者5で、第1回(A式)ではどの類の語もほとんど頭高相([O]) ([O])と発音してm=12となったが、第2回では〈e〉を除いてどの方式のmの値もきわめて大きく、とくに〈G〉と〈g〉では100%三国式に発音した。これはまさに驚異的な変化と言えよう(話者5の各方式における全音相を表44に示す)。また、話者3は第1回でも三国式の傾向を少し見せた(m=38)が、第2回ではどの方式の値も第1回を大きく上回り、とくに〈G〉では、I IV V類の97% (36回中の35) が頭高相、II III類中の96% (24回中の23) が平板相に発音され、ほぼ完全な三国式の姿(m=93)を示した。

次に指摘されるのは、第2回の中でも、調査方式間のm値のばらつきが大きいことである。たとえば、話者6は、mの値が〈e〉では68であるが、〈F〉では1という無型アの状態である。1・10・12の話者も、調査方式によってはわずかに三国式の傾向を見せているが、別的方式では著しく無型ア的である。

新たに追加した15~26の話者についても、1~14の話者と同様、個人差ならびに調査方式間の差が大きい。18・20・24の話者についてはどの調査方式をとっても無型的であるが、話者15は〈G〉と〈F〉で、話者25は〈g〉で100%三国式に発音し、話者21もそれに近い値を示している。調査方式間のばら

つきが大きいことも同様で、100%三国式を見せることがある話者15は、〈e〉ではわずかにm=14であり、ほとんど無型アと言って良い状態である（話者15の各方式における全音相を表45に掲げる）。

このように調査方式間の変動が大きい話者については、三国式アを保有するとは言っても、その型意識は曖昧であると言えよう。話者3・17・21・25のように、どの調査方式でも比較的mの値が高い話者は、三国式アの型意識がそれなりに明瞭であると言える。

さて、どの調査方式が型の区別を引き出すのに有効であろうか。表43に見られるように、これについても個人差があるが、26名を通してみると一定の傾向が認められる。すなわち、調査方式ごとに26名の平均値をとってみると、まず、〈G〉と〈g〉のような「単語言い切り」の形での発音の方が、〈E〉や〈e〉のような方式（「風と音」「音と風」のような句の形での発音）よりもmの平均値が大きいことが指摘される（個々の話者について見ても、無型アに近い話者の場合を除いて、〈G〉と〈g〉の合計点が〈E〉と〈e〉の合計点よりも大きい話者が大部分である）。〈G〉と〈E〉は異類混合配列、〈g〉と〈e〉は同類連續配列であるが、両者を比べると、わずかの差ではあるが、いずれも前者の方がmの値が大きい。

その理由についてここで断定することは避けたいが、一応の仮説を述べると、まず、福井市の大部分の話者は「〇〇と」のような文節単位には型の区別が認められないという事実と関係があるのでないかということが考えられる。すなわち、型の区別のない文節が先行する形での発音（〈E〉と〈e〉）では、単語言い切りの場合に比べて型意識が乱されるのではないかという考え方である。しかし、後に述べるように、ごく一部の話者（話者5・15・21・25）は、「〇〇と」の単位についてもI IVV対II IIIという三国式の型の区別を保持しているが、表43を見ると、これらの話者についても〈G〉と〈g〉の値が〈E〉と〈e〉のそれよりも大きいことから、この仮説は否定しておきたい。むしろ、「〇〇と〇〇」のような句を連續して読ませる形は不自然であること、「風と音」「音と風」のような形の発音は一種の「比較発音」であって、型意識の曖昧な話者は、これまでに述べてきたように、「比較発音」が「苦

表43 福井市高年層話者の三国式アクセント度（各方式とも単語言い切り）

	A	E	e	G	g	H	F
1	0	- 1	0	39	18	/	0
2	3	18	3	0	0	2	4
3	38	64	54	93	72	65	83
4	16	8	32	61	36	16	14
5	12	83	35	100	100	79	89
6	13	35	68	35	65	36	1
7	4	7	0	22	35	10	2
8	11	- 8	- 8	12	8	- 11	20
9	- 2	- 1	- 6	1	- 4	- 4	- 4
10	15	27	33	43	47	19	- 5
11	15	36	11	27	11	11	10
12	10	30	31	0	0	3	3
13	22	28	26	3	1	1	3
14	0	17	0	- 6	8	12	3
15	/	39	14	100	75	75	100
16	/	39	11	39	11	3	88
17	/	43	71	77	78	46	37
18	/	0	0	14	0	- 1	- 17
19	/	64	6	43	87	24	27
20	/	16	19	0	0	0	- 2
21	/	78	48	97	75	95	65
22	/	23	32	45	54	26	12
23	/	33	42	65	41	49	27
24	/	7	0	17	8	4	- 5
25	/	81	69	92	100	92	99
26	/	- 1	0	4	32	- 17	7
平均	11.2	29.4	22.7	38.7	36.8	25.4	25.4

1～26は話者番号。他の数字はmの値。/は調査せず。

表44 福井市高年層 話者5f <各方式とも単語言い切り>

		A	E	e	G	g	H
I	風	-	-	-	-	-	-
	顔	---	-	-	-	-	-
	庭	-	○○ ○	-	-	-	-
	鳥	-	-	-	-	-	-
	水	-	-	-○	-	-	-
	首	×	-	-	-	-	-
II	音	-	○○	-○○	○○	○○	-○ ○○
	胸	○ ○	○○	○○ ○	○○	○○	○○
	夏	-	-○	-○	○○	○○	-○
	石	-	○○	-○	○○	○○	-○ ○○
	冬	-	-○○○	-	○○	○○	-○○
	歌	×	○○	-○	○○	○○	-○○
III	山	○ ○ ○	○○	○○	○○	○○	○ ○○○
	池	○○	○○	○○	○○	○○	-○○
	足	-	○○	-○	○○	○○	-○○
	犬	-	-○	○○	○○	○○	-○○
	耳	-	-○	-○	○○	○○	-○○
	色	×	○○	○○	○○	○○	-○○
IV	肩	-	-	-	-	-	-
	糸	○	-	○○	-	-	-
	箸	-	-	-○	-	-	-
	針	-	-	-	-	-	-
	海	-	-	○○○○	-	-	-
	息	×	-	○○○○	-	-	-
V	雨	-	-	-	-	-	-
	鮒	-	-○	-	-	-	-
	蜘蛛	○ ○	-	○○	-	-	-
	春	-	-	-	-	-	-
	鶴	-	-	-○	-	-	-
	汗	×	-	-○	-	-	-

凡例は表3(143ページ)ほかの「単語」の部分に同じ。×は調査せず。

表45 福井市高年層 話者15f <各方式とも単語言い切り>

		E	e	G	g	H
I	風	「 」	「 」	「	「	「 」
	顔	「 」	「 」	「	「 」	「 」
	庭	「 」	「 」	「	「	「 」
	鳥	「 」	「 」	「	「	「 」
	水	「 」	「 」	「	「	「 」
	首	「 」	「 」	「	「	「 」
II	音	「 ♀○	「 」	○	「 ♀	○○
	胸	○○	♀○○○	♀	♀	♀○
	夏	「 」	「 」	♀♀♀	「	♀「」
	石	「 」	「 」	♀	♀	♀♀♀♀
	冬	「 」	「 」	♀♀	♀	♀♀♀
	歌	「 ♀○」	「 」	○	「 ♀○	○○○○○
III	山	「 」	「 」	○	♀♀	○○○○
	池	♀○○○	♀○	○	○	○○○
	足	「 」	「 」	♀○	「	○○○○
	犬	○○○	「 」	♀	♀	♀○
	耳	○○○	♀○○○○	○	♀	○○○
	色	○○○	♀○○○○	♀	♀	○○
IV	肩	「 」	「 」	「	「	「 」
	糸	「 」	「 ♀○」	「	「	「 」
	箸	「 」	「 」	「 」	「	「 」
	針	「 」	「 」	「 」	「	「 」
	海	「 」	「 」	「 」	「	「 」
	息	「 」	「 ♀○」	「 」	「	「 」
V	雨	「 」	「 」	「 」	「 」	「 」
	鮒	「 」	「 」	「 」	「 」	「 」
	蜘蛛	「 」	「 」	「 」	「 」	「 」
	春	「 」	「 」	「 」	「 」	「 」
	鶴	「 」	「 」	「 」	「 」	「 」
	汗	「 」	「 」	「 」	「 」	「 」

凡例は表3(143ページ)ほかの〈単語〉の部分に同じ。

手である」こと、すなわち、「比較」を試みることによって、話者の型意識がますます乱されること、などの要因が考えられる。また、「異類混合」と「同類連続」との相違については、前者が型を想起しつつ発音するのに有利であるのに対して、同じ音相が連続する後者の場合には、「読み調子」とも言うべき一種の文のアクセントの影響を受けやすいのではないかと思われる。

〈H式〉と〈F式〉は単語言い切りの発音で、しかも異類混合配列であるにもかかわらず、平均値がそれほど大きくない。〈H式〉は〈なぞなぞ式〉で質問したものであるが、録音を聴いてみると、話者が質問の意味をなかなか理解せず、答えに迷っている場合が多かった。このような話者に緊張を強いる環境が型意識を混乱させたのではないだろうか。また、〈F式〉のように「風。音。」などの一組の単語をくりかえして発音してもらう「比較発音」が、型意識が曖昧な話者にとっては発話時の音相を混乱させる要因の一つになりうるのではないかという点は、すでに述べたとおりである。くりかえして発音するときに一定の読み調子をつける傾向も、この方式には認められた。

なお、〈F式〉の値が大きい話者は、各調査方式を通じてm値が大きい傾向がある（話者3・5・15・21・25）。これは、型意識が明瞭な話者は「比較発音」という内省の能力がすぐれているためであろう。ただし、話者16のように、他の方式では無型の傾向が強いのに、〈F式〉のみがとくに大きい値を示すケースも例外的に見られる。

さて、mの平均値の最も小さいのは、第1回調査の〈A式〉である。これは「風が吹く。風。」のように、調査語を文頭に置く短文とその語の言い切りの形とを続けて発音してもらったものである。これは、標準語の文を読ませるという不自然さに加えて、この〈A式〉が調査票の冒頭に置かれていたために、初対面の調査者に対する話者の緊張が強かったことも結果的にひびいたのではないかと考えられる。〈A式〉では同じ語をのべ3回（以上）発音してもらっているが、調査が進むにつれて次第に無型アから多型ア（三国式ア）にわずかずつ変化していった話者が何例か見られたこと（136ページの表2、173ページの表21など）、先に述べた坂井町の話者2f（167ページの表18）や松岡町の話者1m（158ページの表12）のように、調査の進行につれて、より明

^{注16}

注¹⁷

瞭な三国式アを示すに至った例のあることもこれを裏づける。

以上に述べたように、福井市内の高年層話者のうち、かなりの数の者が調査方式によっては多少とも三国式のアクセントを示した。かりに、いずれかの方式で30点以上を獲得した話者を三国式アの傾向ありと認めると、1・3・4・5・6・7・10・11・12・15・16・17・19・21・22・23・25・26の18名、すなわち、全体の69%が多少とも三国的であったことになる。このうち、70点以上を得た話者は、3・5・15・16・17・19・21・25の8名、全体の31%である。なお、ある程度三国式アの姿を示した話者については、調査票を工夫しつつ、さらに時間をかけて調査すれば、一層三国式アに近い姿を示す可能性が十分に予想される。

表46 三国式アクセント度（高年層・各方式・文節）

	A	E	e		E	e
1	2	20	0	15	67	50
2	1	-2	1	16	17	33
3	-28	0	3	17	3	16
4	5	20	4	18	-8	22
5	4	100	80	19	8	77
6	-2	-7	0	20	-6	0
7	3	-9	-3	21	50	33
8	-10	32	8	22	12	44
9	0	-1	-5	23	44	20
10	-1	20	11	24	26	21
11	3	-8	16	25	93	95
12	-10	-15	4	26	16	-2
13	-11	21	14			
14	10	19	6			

4.3 文節および3拍名詞のアクセント

先に述べたように、第1回調査における〈A式〉の文節の単位（○〇が～）については、17名の話者の大部分が無型ア的（1名がわずかに東京ア的）であった（000ページの表23参照）。また、第2回調査における〈E式〉および〈e式〉の文節の単位（〇〇と～）についても26名の話者の大部分が無型ア的であったが、そのうち数名の話者については、それぞれ程度の差はあるが、I IVV類を中高相（[〇〇ト] [〇〇ト]など）、II III類を平板相（[〇〇下] [〇〇下] [〇〇ト]など）のように区別して発音する傾向、すなわち、/〇〇〇/型（I

IVV類) 対 /○○○/型 (II III類) という三国式アと同じ体系が認められた。

第1回調査と第2回調査の両方を行った14名の話者の〈A式〉〈E式〉〈e式〉、および、第2回調査で追加した12名の話者の〈E式〉〈e式〉の「文節」における三国アクセント度 (m) を表46に示す。かりに、いずれかの方式においてmの値が30以上の者を三国式アの傾向ありと認めると、5・8・15・16・19・21・22・23・25の9名がそれぞれに該当する。また、mが70以上の者を三国式アの傾向大とすると、5・19・25の3名がそれにあたり、話者15がそれに準ずる。

もっとも顕著な三国式アの姿を見せた話者25の全音相を表47に示す。〈E式〉〈e式〉のいずれについても I IVV類の大部分を中高相 ([○○ト] など)、II III類の大部分を平板相 ([○○下] [○○ト] など) に発音し、例外は〈E式〉の「箸と」のみ、「ゆれ」が認められたのは、〈E式〉の「蜘蛛と」、〈e式〉の「肩と」「汗と」の3例にすぎない。この話者は、さらに3拍名詞についても、[○○○] (一部に [○○○]) ~ [○○○ト] [車・形・着物・縁・二人・東・鳥・苺・薬など] 対 [○○○] ~ [○○○下] [小麦・力・頭・油・狸など] という型の対立を示した。この体系は鹿児島アクセントなどに類似する二型アクセントであり、注目される。

先に話者5が第1回調査と第2回調査の「単語言い切り」におけるアクセントの姿が激変していることを述べたが、この話者は「文節」の単位でも同様の変化を見せている。すなわち、第1回の〈A式〉では $m=4$ にすぎず、完全な無型アの状態であるが、第2回調査の〈E式〉〈e式〉(とくに〈E式〉)では典型的な三国式アの姿を示した。話者5が〈A〉〈E〉〈e〉の各方式で示した全音相を表48に掲げておく。

5. 結 章

5.1 結 論

以上、2回の調査を通じて、調査に先立って立てた仮説は、ほぼ全面的に立証された。その概要は次のとおりである。

表47 福井市高年層 話者25m

(文節 (○○と))

表48 福井市高年層 話者5f

<文節 (文中)> <文節 (○○と)>

		E	e		A	E	e	
I	風	△△△	△△	I	風	♀△△	△△	△△△
	顔	△△△	△△		顔	♀△△△	△△	△△△
	庭	△△△	△△		庭	△△△	△△△△△	△△
	鳥	△△△	△△		鳥	△△△	△△	△△
	水	△△△	△△		水	△△△	△△	△△
	首	△△△	△△		首	*	△△	△△△△△
II	音	¤¤¤	¤¤	II	音	△△♀	○○	○○○○
	胸	¤¤¤	¤¤		胸	△△○	○○	○¤¤¤
	夏	○○¤	¤¤		夏	△△△	♀♀♀	△¤
	石	¤♀¤	¤¤		石	△△△	♀○	△¤
	冬	¤○¤	¤¤		冬	△△△	♀○○○	△¤
	歌	¤¤¤	¤¤		歌	*	○○○	○¤
III	山	¤¤¤	¤¤	III	山	○△△♀	○○	△¤
	池	¤¤¤	¤¤		池	○○△	○○	△¤
	足	○○¤¤	¤¤		足	△△△	♀○	○¤
	犬	¤○¤	¤¤		犬	△△△	○○	○¤
	耳	¤○¤	○○		耳	△△△	○○	○¤
	色	¤¤¤	○○		色	*	○○	○¤
IV	肩	△△△	△○	IV	肩	△△△	△△△△△	△△
	糸	△△△	△△		糸	△△△	△△	○△
	簪	¤¤¤	△△		簪	△△△	△△	△△
	針	△△△	△△		針	△△△	△△	△△
	海	△△△	△△		海	△△△	△△	△△△△△
	息	△△△	△△		息	*	△△	△△△
V	雨	△△△	△△	V	雨	△△△	△△	△△
	鮒	△△△	△△		鮒	♀△△	△△	△△
	蜘蛛	△¤△	△△		蜘蛛	△♀△	△△	△△
	春	△△△	△△		春	△△△	△△△△△	△△
	鶴	△△△	△△△△△		鶴	△△△	△△	△△
	汗	△△△	○△		汗	*	△△	△△

凡例は表3(143ページ)ほかの<文節>の部分に同じ。×は調査せず。

- (1) 福井市内の高年層話者の中には無型アクセントの者、三国式アクセントの者、その中間的な姿を示す者が存在した。また、同一の話者が調査方式を変えることによって無型ア的な姿を示したり、多型ア的な姿を示したりした。また、高年層の中のごく一部に、わずかに東京アの姿を見せた話者が存在した。
- (2) 福井市内の中年層話者の大部分は無型アであった。ごく一部にわずかに三国式アの姿を見せた者と、わずかに東京アの姿を見せた者が存在した。
- (3) 福井市内の若年層話者の中には無型アの者と、東京ア的な姿を示す者が存在した。東京ア的な姿を示した者は女性(の一部)に限られていた。また、その東京アクセント化の程度は、これまでに報告された東日本各地の無型ア地域の東京ア化に比べて、その度合は比較的小さかった。
- (4) これまで無型ア地域とされていた松岡町の高年層話者の中に三国式アをもつ者が存在することが確認された。また、坂井町の高年層の中にも三国式アの姿をある程度示す者が存在した。
- (5) 調査方式間の差については、個々の話者についてはさまざまであるが、全体的に見て、「短文」(例「山が見える」)や句(例「風と音」)の形で調査したときよりも、「単語言い切り」の形で調査したときの方が、より多型ア(三国式ア)的な姿を示した。とくに、助詞「が」をつけた文節を文頭にもつ短文(例「山が見える」)を読ませる調査(A式)は、他の調査方式に比べて著しく無型ア的な姿を示した。また、複数の短文・文節・単語を比較しつつ発音させる方式は、他の方式に比べて型の区別を引き出しにくく、とくに「文節言い切り」の「比較発音」(例「風が・音が」)の場合にその傾向が著しかった。調査語の配列に関しては、「異類混合配列」の方が「同類連續配列」よりも音相が安定し、より明瞭な型の対立を示した。「なぞなぞ式」については、他の方式に比べて型の対立を引き出すのに、それほど有効ではなかった。

なお、以上に述べてきた結果から見て、福井市のアクセントは、今回調査した話者の幼年時代、すなわち、明治末期から大正初期にかけては、三国式

アクセントが優勢であったと考えられる。そして、まず3拍名詞および2拍名詞の文節から型の区別を失い、かろうじて2拍名詞の単語言い切りの形について型の区別を保っている話者が（高年層については）多数見られるのが現状と言えよう。

5.2 今後の課題

このたびの調査結果を踏まえて、さらに研究すべき課題のいくつかについて述べ、また、調査を行ったが報告できなかつたことがらを記しておく。

- (1) 高年層話者については、調査方式を変えた第2回調査によって、第1回調査では無型ア的な姿を示した話者の一部が三国式アに変化した。同様の調査を中年層話者についても行えば、その中に三国式アを保持する者が発見される可能性がある。
- (2) これまで無型アとされてきた福井市周辺地域には、松岡町以外にも三国式アをもつ者が多数存在する可能性が強い。その分布について詳しく調査することによって、三国式アが無型化していく過程が明らかになるであろう。
- (3) 三国式アをもつ者については動詞・形容詞などを含む多数の語を調査し、その性格を明らかにしたい。
- (4) 三国式アの周辺に分布する体系の異なる種々のアクセント（大野式、今庄式など）を比較することによって、それらの成立過程を明らかにするとともに、三国式アが無型化していった要因をも探りたい。
- (5) 福井市内の三国式アの保持者は、一定の調査方式によってのみ多型アの姿を見せる。彼等の日常の方言談話の中に果して三国式アの姿が観察されるのかどうか知りたい。もし、方言談話の中には現れないとすれば、それは何を意味するのだろうか。
- (6) 福井市およびその周辺地域の若年層のアクセントの変化の動向に関する種々の語について調査し、全国各地の無型ア地域におけるそれと比較考察すべきである。
- (7) 武生市、鯖江市、今庄町の調査結果についてはこのたびは報告すること

ができなかった。また、第1回調査で試みた種々の調査方式のうち、〈C式〉（それぞれの単語に「この」が付いた形を、短文、および、言い切りの形で読んでもらう方式）、および〈D式〉（調査語を含んだ短文を、話者に自由に方言に翻訳させて発音させる方式）については触れることができなかつた。これらの結果については、機会をあらためて報告したい。また、「比較発音」の際に行つた、話者のアクセント意識に関する調査（比較の対象とした単語・文節に音の高低についての違いがあるかどうか、あるとすれば、それはどのような違いか、という質問）についても、話者自身の発音との関連で興味深い結果が得られたが、その分析も今後の課題の一つである。

[付 記]

調査に際しては、福井大学名誉教授の佐藤茂先生をはじめ、多くの方々のお世話になった。以下におなまえを記し、感謝の意を表する。なお、この調査結果については、第7回一型アクセント研究会（1983年5月、同志社大学）、および、『国語学研究 23』（1983）で中間報告を行つた。その際に多くの方々から貴重な御意見を賜つた。厚く御礼を申し上げる。

また、国立国語研究所の外から調査に参加して下さつた、加藤和夫、真田信治、山口幸洋の各氏に、あらためて御礼を申し上げる次第である。

なお、以下の方々の肩書きは調査当時のものである。

福井市：佐藤茂（福井大学名誉教授）、高橋輝男（県教育庁指導課指導主事）、

山品二郎（市立明道中学校長）、野村 勇（明道中学校教諭）

三国町：室美英子

坂井町：川岸幸男（県坂井農業改良普及所長）、高岡喜代子（生活科学センター坂井相談室）、本田一子

松岡町：中村三男雄（老人会副会長）

鯖江市：植田命寧（県立鯖江青年の家所長）

武生市：加藤定治

今庄町：井美善一（町立今庄中学校長）

話 者

三国町高年層：坂井歌子、山本ゆき、渡辺キタ

松岡町高年層：大谷 清、中村三男雄、渡辺サダエ

坂井町高年層：内江すず江、北川澄子、宮沢きわら

武生市高年層：加藤久子、下出ツギ、下出豊治

鯖江市高年層：岸本志津江、窪田信松、斎藤正六

今庄町高年層：安藤初栄、北村シズ子、西山与平

福井市高年層：石川ツヤ子、岩井貞志、大橋喜代、岡 美枝、笠松 保、加藤たけを、加藤吉松、川端芳子、北川澄子、北川秀尾、木米喜代子、坂井歌子、坂口善子、佐々川英次郎、杉田隆敏、高田喜代子、谷口 勇、中本つな子、花木静子、花木外二、平森志ず子、福岡嘉子、藤本芳子、古橋とみ子、宮川生子、山内百合子、山田茂一、山本すさを、山本ふさの、山本ゆき、吉野まさを、渡辺キタ、渡辺サダエ

福井市中年層：稻木信子、大橋二六、川端嘉鶴雄、北川修正、木米喜美子、小林典子、坂口昭子、佐々川悠、杉田春海、高田訓子、谷口ちず子、角原瑠美子、友田和恵、中本英雄、松尾まつえ、山内まさ子、山田栄子、山本伊久男、山本皓一、吉野啓子

福井市若年層(中学生)：今川恵美子、大橋清司、川端範和、北川聰子、木米加奈恵、坂口豊和、佐々川裕子、杉田 隆、高島寿守、高田明妃子、谷口尚美、角原督章、友田晶子、中本修寛、松尾輝一、山内淑江、山田哲子、山本彩子、山本哲司、吉野佳美

注1 図1に記した文献(平山, 1953)によれば、この調査は昭和28年の8月から9月にかけて、若年層(16~18歳前後)を中心とする話者を対象に行われた。この年齢層は筆者が調査を行った1982年(昭和57年)に50歳近くの中年層に達しており、このことは、平山氏と筆者とのこの地域における調査結果の相違を検討する上で重要な意味をもつ。

注2 馬瀬良雄「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」(『国語学』125, 1981), 佐藤亮一「無型アクセント地域におけるアクセントの共通語化——宇都宮市における小調査の結果から——」(平山輝男博士古稀記念会編『現代方

- 言学の課題・第2巻』1984)など。
- 注3 逆順に読ませるのは、無型アクセントの話者に二つの語を並べて示し、それを発音させたとき、そこに書かれた単語が何であっても、たとえば〔○○, ○○〕, [○○, ○○]のように語の位置によって音相を変えることがあり、これをアクセントの型の区別と誤認する恐れがあるためである。
- 注4 この方法では、完全な多型アの話者であっても $m=0$ となりうることに注意しなければならない。すなわち、(小稿で対象とした地域には存在しないが) I IVV類中の半数の単語群がゆれずにA型に、また、II III類の半数の単語群がゆれずにB型になるような明瞭な多型アが存在すれば、その話者も $m=0$ となる。 m の値が100未満であるときに、それが、ある多型ア(たとえば三国式ア)の無型化の程度を示すものか、それとも安定した多型アとしての位置(基本アからの距離)を現すものは、調査結果の具体的な内容(個々の語の安定度)によって判定することができる。
- 注5 注2の文献(佐藤, 1984)。ここに述べる方法は、その説明のしかたが上の文献における表現と若干異なっているが、基本的な考え方(方法)は同一である。
- 注6 以下に述べる方法では、すべての語が東京アと別の型になるような有型アがあれば、その話者の t の値は0になる。したがって、この方法では東京アからの距離を見ることができても、無型アからの距離を見ることがあるとは限らない。この点は注4で述べた三国式アクセント度を計る場合と同じである。したがって、厳密には当該地域においても t の値が0である(0に近い)話者は、無型アである(無型アに近い)蓋然性が大きいといるべきである。
- 注7 厳密には「第2拍のあとに下降のある相」と呼ぶべきであるが、小稿では、この種の音相を便宜的に「中高相」と呼ぶことにする。
- 注8 たとえば〔○○▽〕の音相を東京アの中高型(の音声学的変種)と一致すると認めたり、〔○○▽〕の音相を東京アの平板型(の音声学的変種)と一致すると認めたりすることには問題もある。しかし、音声学的音相には無限のバラエティーがあり、東京アのバラエティーの範囲が明確にされていない現状では、とりあえず、この程度の作業原則を立てて処理せざるをえない。
- 注9 佐藤亮一「アクセント調査法についての一実験」(『国語学研究』10, 1970), 同「アクセントの『ゆれ』をめぐって——曖昧アクセント地域を中心に——」(『青山語文』4, 1974)。
- 注10 完全な無型アの話者は、「单語言い切り」の発音が連続する場合、しばらく

は一定の音相が続き、何らかのきっかけで別の音相に変ると、こんどはその音相がしばらく続くというパターンが多い。

注11 「よわとうんた」は [jowatnta] とでも表記すべき音声で、この形は福井市一円で聽かれる。話者は多く「ヨワテモタ」と発音していると意識している。これは「～(して) シモータ」の縮約形であろう。

注12 平山輝男編『全国アクセント辞典』(東京堂1960)によれば、「猫」「豚」は、東京 [ネコ] [ブタ]、京都 [ネコ] [ブタ]、鹿児島 [ネコ] [ブタ] とあり、対応の乱れが認められる。

注13 注9の文献参照。

注14 注2の文献参照。

注15 表33および表34に示したように、福井市の中学生の東京語アクセント度の平均値は、「単語言い切り」が15、(短文の文頭に位置する)「文節」が13である。これに対して、宇都宮市の中学生の場合は、それぞれ55と42であり(佐藤1984、注2参照)、仙台市の中学生では(短文の文頭に位置する)「文節」で69という高率であった(佐藤亮一「地域社会の共通語化」国書刊行会『方言研究の問題』1986)。

注16 福井方言では「が」「を」「に」「で」などの助詞の部分が「うねり音調」(「ゆすり音調」とも)と呼ばれる特殊な音調で発話されることが多い。しかし、この音調は標準語文を読ませた場合には決して現れない。この事実と標準語文を読ませたときの方言ア(三国ア)の現れにくさとは何らかの関係があるものと思われる。

注17 平山輝男氏は、仙台市高砂の話者について、調査開始時点ではきわめて無型ア(一型ア)的であったが、「数時間経て、十分に寛いだ談話が自由にできる心のゆとりを話者に見出したとき」(下線は佐藤)、型の区別が現れたという興味深い報告をしておられる(平山輝男『日本語音調の研究』1957、496~497ページ)。

通信調査法の再評価

小林 隆

1. 目的

方言調査、とりわけ俚言の分布を明らかにする方言地理学的調査における通信調査法の利用を、あらためて評価してみたい。

通信調査法は、方言地理学的調査の初期のころに比較的活発に利用され、わが国では、国語調査委員会の全国調査（1903年）や藤原与一氏の中国・四国地方の調査（1933・34年）、小林好日氏の東北地方の調査（1938～41年）などの成果をあげてきた。^{注1}しかし、その後、面接調査法の普及とともに、通信調査法は二次的な手段とみなされるようになり、この方法を用いての大規模な調査は影をひそめた。^{注2}その最大の理由は、通信調査法が面接調査法に比べ、調査の種々の点における確実性において劣ると考えられたためであろう。たしかに、通信調査法は、回答の質的な面などにおいて、面接調査法に及ばないところがあるのは事実と思われる。

しかし、俚言の衰退が急速に進む今日、方言の歴史的変遷を明らかにすという伝統的な方言地理学的研究を継続してゆくために、一刻を争って全国的な方言分布調査を行っておく必要があるとすれば、大がかりな面接調査を企てる他に、通信調査法による資料収集の道も十分検討されてよい。広い領域を短期間に、しかも少ない費用で調べることのできる通信調査法の特質は、現在のような急激な方言崩壊の時代において、ふたたび魅力的なものとして認識されてこよう。

そもそも、これまで通信調査法の性格が詳細にわたって検討されたことは、

ほとんどなかったように思われる。したがって、通信調査法が面接調査法に比べ、どのような点でどのくらい問題なのか、なによりも具体的な資料に基づいた検討が必要なのである。また、ひとくちに通信調査法と言っても、様々な方式がありうるわけで、それらの結果を比較して長所や短所を明らかにすることも必要となる。そのような考察を経ることにより、通信調査法の限界を認識し、一方で、方言地理学的調査にとってより適切な通信調査法を工夫してゆくことが可能だと考えるわけである。

本稿では、1984年から1985年にかけて岡山県津山市と岡山県全域を対象に行った通信調査法の実験的研究の結果を報告し、以上に述べたような課題について考察を加えたいと考える。なお、この調査に関しては、すでに、

小林 隆「方言通信調査法の検討」(『言語生活』411, 1986年2月)

として結果の一部を報告しているが、ここではそれも含めて結果の全体にわたって論じるつもりである。

さて、本稿で扱う通信調査法に関する調査は、大きく2種類に分けられる。一つは、調査方式による結果の差ならびに面接調査法との違いを見るために岡山県津山市で行った調査であり、もう一つは、協力機関による結果の違いを探り、通信調査による実際の分布の概観を把握しようとして岡山県全域で行った調査である。以下、その2つに分けて論述する。

2. 津山調査

2.1 津山通信調査の概要

2.1.1 目的

通信調査法に関わる検討課題の中でも最も基本的と思われる、調査方式の違いによる結果の差を明らかにしようとした。ここで言う調査方式とは、調査票の形態、質問法、参考語形の有無、項目の分量の4点である。また、2.2に述べる津山面接調査の結果と比較するための資料を、この通信調査によって得ることも同時にめざした。

2.1.2 調査方式の種類

表1に掲げるようすに、調査票の形態、質問法、参考語形の有無、項目の分量の4つの観点から、AからIまでの9種類の方式を用意した。まず、

① 調査票の形態の面では、冊子型の調査票を封書で郵送するか、それとも葉書に調査内容を印刷して郵送するかで違いをもたせた。次に、

② 質問法の面では、共通語を示してそれを方言に翻訳してもらうのか、それとも謎々式で回答を求めるのか、2つの方式を試みた。続いて、

③ 参考語形については、岡山県内の使用が予想される語形を提示して回答の助けとするか、またはそのような参考を全く示さずいわば自力で答えてもらうかで結果の違いを見ようとした。最後に、

④ 項目の分量の面では、語彙の35項目のみにしばったものと、それに文法15項目・アクセント10項目を加え合計60項目に増やしたものとで差を設けた。

以上の4つの観点を組み合わせて、表1のAからIまでの9種類の方式を用意した。

なお、文法項目とアクセント項目は表1の分類からははずれる面がある。つまり、文法項目については質問法で謎々式をとることが難しいため、B・D・

表1 津山通信調査の方式の種類

観点 方式	調査票の形態	質問法	参考語形	項目の分量
A	冊子(封書)	共通語翻訳式	無	少
B	〃	〃	〃	多
C	〃	〃	有	少
D	〃	〃	〃	多
E	〃	謎々式	無	少
F	〃	〃	〃	多
G	〃	〃	有	少
H	〃	〃	〃	多
I	葉書	共通語翻訳式	無	少(3回に分けた)

F・Hすべて共通語翻訳式とし、質問法による違いを見ることはしなかった。アクセント項目は末尾に掲げる調査票をごらんいただければわかる通り、問題の文節を発音したときに高く発音される拍に回答者自身で傍線を引いてもらう方式（B・F）と、あらかじめそのような傍線を付した文節を2つ提示し、自分の発音に近い方を選択してもらう方式（D・H）の2種類を試みた。

また、調査票の形態のうち、葉書のものは、共通語翻訳式・参考語形無し・項目の分量少の1種類（I）のみに限った。しかも、冊子形態と同じ分量の項目を盛り込むため、葉書は3回に分けて発送した。

2.1.3 調査票・依頼状

322ページ以下に、実際に用いた調査票を掲げる。ただし、紙数の都合でB方式とH方式のみ示す。他の方式の調査票は、B・H方式の調査票と次のような関係にある。

A方式…B方式から文法・アクセント項目を除き、語彙項目のみにしたもの。

C方式…B方式から文法・アクセント項目を除き、語彙項目に参考語形を添えたもの。

D方式…B方式の語彙・文法項目に参考語形を添え、アクセント項目をH方式に変えたもの。

E方式…H方式から文法・アクセント項目を除き、語彙項目の参考語形を取り去ったもの。

F方式…H方式の語彙・文法項目から参考語形を取り去り、アクセント項目をB方式に変えたもの。

G方式…H方式から文法・アクセント項目を除き、語彙項目のみにしたもの。

なお、冊子型調査票の表紙にあたるフェイスシートは、AからHのすべての方式に共通である。同じく冊子型調査票の表紙見返しには、記入上の注意を示した「記入のしかた」を位置させたが、参考語形に関する注意が加わるかどうかでこれには2種類がある。ここでは、C・D・G・H方式の調査票

のものを掲げるが、そこから、4の参考語形の注意を除いたものが、A・B・E・F方式の「記入のしかた」である。調査票の実物は、B5版で15級活字を使用、それぞれの調査票のページ数（フェイスシートおよび「記入のしかた」は除く）は、次の通りである。

A方式—3ペ B方式—5ペ C方式—6ペ D方式—9ペ
E方式—6ペ F方式—8ペ G方式—7ペ H方式—10ペ

また、葉書のI方式については3回分の葉書を掲げる。いずれも、往復葉書の返信用の裏面に調査内容と記入欄を印刷した。ただし、1回目についてのみ卒業小学校を記入してもらうことにした。葉書の表は3回とも共通で、氏名・住所・電話番号の記入欄を設けた。

以下に、フェイスシートと記入上の注意について少し説明を加える。

まず、フェイスシートは、冊子型の調査票で322ページに掲げるよう、回答者の氏名・生年・住所・電話番号・職業・居住歴について尋ねる欄を設けた。このうち、居住歴については、特に言語形成期の居住地が重要と考え、小学校卒業までの生育地を別欄にし、^{あざ}字単位まで答えてもらうことにした。もちろん、この程度の居住歴の聞き方しかしていない点、および学歴や父母の出身地などについての質問が省かれている点などは、一般の面接調査票に比べてこのフェイスシートが簡略なものになっていることを示すが、それは、この調査票が回答者自身の手で記入されるものであるため、繁雑な、あるいは私事に立ち入る質問を設けて調査拒否にあうことを恐れたためである。また、この程度のフェイスシートでも、回答者の属性について基本的に知るべきことは満たされるとも考えた。

これに対して、葉書型の調査票ではいわゆるフェイスシートにあたるものにつけることはせず、339ページに示すように氏名・住所・電話番号（以上葉書表）・卒業小学校（葉書裏）についてのみ記入欄を設けた。卒業小学校は居住歴を聞く代わりに尋ねたものである。さらに詳しく回答者の属性を知るために、フェイスシートのみの葉書を別に発送するなどの方法も考えられたが、今回はとらなかった。

次に、記入上の注意については、冊子型のもので323ページに掲げた通りの

指示を与えた。まず、最初に、回答者としてこちらが指定した本人が記入するよう特に指示した。これは通信調査法では、依頼された以外の人、例えば家族などが回答を肩代わりする可能性が十分予想されたためである。次に、回答者が子供のころ使用していた方言を記入するよう指示しているが、これは、共通語化などにより現在ではあまり俚言を口にしなくなっていると思われる回答者の記憶を呼び覚まし、しかもできればなるべく古い俚言を知りたいと意図したためである。したがって、新しい俚言の回答を抑えたり、幼児語的回答をねらったものではない。続いて、語形の表記のしかたについての指示を与えたが、例を示し、一般の人がとりうる範囲での発音に忠実な表記をお願いした。さらに、2つ以上の方言がある場合、その違いについてわかるかぎり内省を行うよう指示した。最後に、C・D・G・H方式の場合には、参考語形を提示してあるため、それに関する説明を行った。

これに対して、葉書型の調査票ではほとんど記入上の注意を行うことはせず、339ページにあるように回答者自身の方言を答えるよう指示したのみである。後に掲げるよう、同じ葉書の往信の部分に印刷した依頼状には、回答者自身が子供のころ使っていた方言を答えてほしいという冊子型同様の注意ももりこまれているが、それ以上の指示はない。

次に、調査依頼状について述べる。一般に通信調査では役場なり学校なりの協力を得て、そこを通じて回答者と連絡をとるのが普通であるが、この実験的調査では調査票の種類による違いを見ようとするので、確実に回答者の手元に調査票が渡ることが前提となる。そのため、この調査では、津山市役所のご理解によりあらかじめ住民票から該当者の住所を知り、直接回答者に調査票を送付することにした。いわゆるダイレクトメールの形をとったわけである。

したがって、調査依頼状の内容も直接回答者に協力をお願いするものとなっている。227ページと228ページに依頼状を掲げる。冊子型(A~H方式)の調査票に同封したものは1種類でB5版である。葉書型(I方式)のものは3回分3種類の文面があり、それぞれ往復葉書の往信欄に入る大きさに印刷した。なお、葉書型の2回目、3回目の依頼状は、前回の回答に対する礼状

国研庶第 179 号
昭和59年 9月27日

様

国立国語研究所長
野 元 菊 雄

公 印

方言調査についてのお願い

拝啓 突然のお手紙で失礼いたします。
さて、国立国語研究所は、日本語についての国の研究機関ですが、その仕事の一つとして全国の方言についての調査研究を行っております。このたび、津山市中心部にお住まいの大正4年～13年生まれの男性のみなさま全員を対象に、こちらから質問用紙をお送りし、ご自分の方言について回答していただくことになりました。
つきましては、ご多忙中とは存じますが、同封の「方言記入票」の説明にしたがって、ご自身が子供のころ使っていた方言を記入し、同封の返信用封筒に入れてご返送ください。結果は研究の資料にさせていただき、それ以外には使用しませんのでご安心ください。
それでは誠にぶしつけなお願いですが、なにとぞよろしくご協力ください。

敬 具

調査依頼状（A～H方式）

国研庶第 179 号
昭和59年 9月27日

様

国立国語研究所長
野 元 菊 雄

公 印

方言調査についてのお願い

拝啓 突然のお手紙で失礼いたします。
国立国語研究所は、日本語についての国の研究機関ですが、このたび、津山市中心部にお住まいの大正4年～13年生まれの男性のみなさま全員を対象に、おはがきを今回を含めて3回お送りし、ご自分の方言について回答していただくことになりました。

つきましてはご多忙中とは存じますが、返信はがきに印刷されている11個の言葉について、ご自身が子供のころ使っていた方言を記入し、ご返送ください。結果は研究以外には使用しませんし、個人のお名前を公表することもいたしませんのでご安心ください。

それでは、誠にぶしつけなお願いですが、なにとぞよろしくご協力ください。

敬 具

調査依頼状（I方式、1回目）

国研庶第 179 号
昭和59年10月24日
様

公 印 略
國立國語研究所長 野 元 菊 雄

方言調査のお札とお願ひ、

拝啓 このたびは突然のお願いにもかかわらず、こころ
よくご回答をお寄せください、誠にありがとうございます。
た。引き続き第2回目の質問をお送りいたしますので、前
回と同様に、ご自身が子供のころお使いになっていた方言
をご記入のうえ、ご返送ください。なお、前回の回答をま
だお寄せっていない方は、今回の分といつしょにご
返送ください。
それでは、なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。

敬 具

公 印
略
國立國語研究所長 野 元 菊 雄

方言調査のお札とお願ひ、

拝啓 このたびもさっそくご回答ください、まことにあ
りがとうございました。引き続き最後の質問をお送りいた
しますので、これまでと同様に、ご自身が子供のころお使
いになっていた方言をご記入のうえ、ご返送ください。な
お、前回までの回答をまだお寄せくださいたい方は、
今回の分といつしょにご返送ください。
それでは、なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。

敬 具

調査依頼状（1方式、2回目）

調査依頼状（1方式、3回目）

および催促状の意味も兼ねている。

2.1.4 調査地域

調査地域は、岡山県津山市の中心部を対象として選んだ。それは以下のような理由による。

まず、何種類もの調査法を試みるために、方言に関して等質的な回答者が大勢必要となるが、そのためには調査地域が広範囲にわたるのではなく1地点に多くの人々が集まっているところが適當である。それは、すなわち都市ということになるが、大都市では方言の均質性に問題があるため、中小都市が望ましい。この点は、調査員の数など調査者側の能力からみてもそうである。また、近くに方言境界線の何本も走るようなところではなく、一つの方言圏として比較的安定している地域の中にある都市が求められる。さらに、調査の性格上俚言形の得られやすい地域でなければならず、その点からは東京をはじめとした大都市からの共通語化の影響が及びにくいところが適當と言える。以上のような条件を比較的よく満たす地域の一つとして、岡山県津山市中心部を選んだのである。

さて、ここで津山市中心部というのは、古くから津山の市街地となっていた区域のことである。具体的には、明治22年町制施行による津山町に明治33年津山東町を編入した範囲であり、次の44の町内を含んでいる。

上之町・大手町・桶屋町・鍛冶町・勝間田町・上紺屋町・茅町・河原町・
北町・京町・小姓町・細工町・材木町・堺町・山下・下紺屋町・城代町・
新魚町・新茅町・新職人町・船頭町・田町・椿高下・坪井町・鉄砲町・
戸川町・中之町・二階町・西今町・西新町・西寺町・林田町・橋本町・
東新町・吹屋町・福渡町・伏見町・本町2丁目・本町3丁目・南新座・
美濃町・宮脇町・元魚町・安岡町

この市街地は、南北1km・東西2kmにわたるが、一応この範囲に住む特定の年齢層のことばは、居住歴を別にすれば方言的にはほぼ等質であるとみなしたことになる。

2.1.5 回答者

回答者としては、今述べた津山市街地に在住の1915（大正4）年1月1日から1924（大正13）年12月31日までに生まれた男性、664人全員を対象とした。この人々は、調査を行った1984年に60歳から69歳までの間に入る人々である。年齢的には10歳の開きがあるが、一応この範囲の年齢差ならば、居住歴の問題を除いて方言上ほぼ均質的であると考えた。

回答者として60歳代の人々を選んだのは、ここで実験しようとする調査の目的が俚言の収集ということであり、その点で老年層を対象とすべきこと、しかし、あまり高齢では自己記入方式という制約上調査が難しい恐れがあることなどの理由による。^{注3}また、男性に限ったのは、女性に比べて男性に生え抜きの人が多いという、これまでの俚言調査で言われている理由に従ったまでである。

なお、これらの調査対象者の氏名・住所などは、津山市役所の『津山市世帯別一覧表』（1984年4月1日現在）から抜き出した。この一覧表は住民票の主な内容を簡潔にまとめたもので、閲覧にあたっては国立国語研究所長名の依頼状を津山市長あてに提出し、許可をえた。とりわけ、民生部市民生活課の鳥越豊治氏と鈴木佐光氏には種々の便宜をおはからいいただいたことを付記する。

さて、この調査では9種類の方式を試みたことを先に述べたが、次のように、各方式に調査対象者の664人を均等になるように割り当てた。A～FおよびI方式一各74人、G・H方式一各73人。なお、割り当てにあたっては、調査対象者の居住地に偏りが出ることを避け、各方式に各町内の対象者がまんべんなく含まれるよう配慮した。

2.1.6 調査時期

調査票の発送は、1984年10月4日に各方式一斉に行った。葉書のI方式については、さらに2回目の調査票を10月24日に、3回目の調査票を11月14日に発送した。回収は1週間後の10月11日から始まっている。

なお、この通信調査に先立ち、住民票の閲覧や調査項目の選定など準備の

ため、7月16日～21日に小林が津山市に赴いた。

2.1.7 調査項目

調査項目は、先にも述べた通り、A・C・E・G・I方式が語彙項目のみ、B・D・F・H方式がそれに加えて文法項目とアクセント項目を取り上げた。

まず、語彙項目について紹介する。語彙項目は調査項目の中心をなすもので、名詞項目23、形容詞項目8、動詞項目4の35項目からなる。これらの項目の選択にあたってはいくつかの観点を設けたので、以下にはその観点別に項目を掲げる。もちろん、一つの項目でもいくつかの観点を含みうるわけだが、ここでは代表的な観点のところに項目を掲げた。なお、各項目に付した丸で囲んだ数字は、調査票における項目番号を表すので、ご参照いただきたい。

〔語彙項目〕

1. 名詞項目

1.1 細かな意味の差をもつ項目

⑯下あご・⑯下あごの先・⑯下あごの角・⑯上あご・⑯あご全体、⑯
ひざがしら・⑯ひざのさら

1.2 混同を起こしやすいと思われる項目

②おにごっこ・③かくれんぼ、⑩すみれ・⑪おおばこ、⑫指にささ
る竹や木のとげ・⑬いばらやさんじょうのとげ

1.3 抽象的な概念の項目

⑯しかえし

1.4 共通語形と俚言形の形態が類似する項目

⑤かかし、⑭よだれ

1.5 より口語的な省略形の出現が期待される項目

④せともの、⑧とうもろこし、⑯くものす

1.6 その他

①たこ、⑥ふすま、⑦かぼちゃ、⑨きのこ

2. 形容詞項目

2.1 細かな意味の差をもつ項目

- ②すっぱい（梅干が）・②すっぱい（夏みかんが），②おそろしい（犬が）・②おそろしい（墓場が）・③おそろしい（先生が）・③おそろしい（病気が）

2.2 転訛形の出現が期待される項目

- ⑤しおからい

2.3 その他

- ④くすぐったい

3. 動詞項目

3.1 細かな意味の差をもつ項目

- ③こおる（水が）・③こおる（ぬれた手拭が）・④こおる（大根が）

3.2 抽象的な概念の項目

- ⑤からかっていじめる

これらの項目の詳しい解説は、結果の分析の際に一緒に行うこととして、ここでは簡単な説明を加える。

まず、方言地理学的な調査では、質問の趣旨に合った的確な俚言形が回答されることが望まれるわけで、その点、微妙にずれた意味の項目をセットにして提示した場合、回答者がその細かな区別を内省し正確な回答を行うことが可能かどうかが問題となる。1.1と2.1、3.1はそうした観点から選んだ項目であり、これらは、面接調査と異なり調査時に回答者とのやりとりの中から的確な答えを引き出すことの困難な通信調査において、特に問題となるものである。

1.2の混同を起こしやすい項目も、上と似た趣旨によるものであり、2つのことがら、例えば「おにごっこ」と「かくれんぼ」とを混同することなく回答し分けられるかどうかを見ることになる。

1.3と3.2は、具体的な事物に比べてより質問が難しいと考えられる抽象的概念の項目が、通信調査で可能かどうかを知ろうとしたものである。これらの質問の意図が回答者に正確に伝わり、例えば「しかえし」ならば「いじわる」や「やつあたり」など微妙に意味のずれた項目と混同されないかどうか

という点は、これらの項目をペアーにしてはいないものの、上で述べた細かな意味の差をもつ項目や混同を起こしやすい項目と共通の注目点である。

以上が意味的な観点から選んだ項目であるのに対して、1.4と1.5および2.2は俚言形の形態に注目して取り上げた項目である。まず、1.4は、カカシに対してカガシ、ヨダレに対してヨーダレというように、共通語形と俚言形とが類似している場合に、俚言形が共通語形に影響されることなくどの程度回答されるかを明らかにしようとしたものである。

また1.5では、カラツモノに対してカラツ、ナンバキビに対してナンバ、クモイギに対してイギというように、省略された形で、より口語的な語形の出現を問題にしようとした。

さらに、2.2は、カライに対してカレーなど連母音の融合形が、どの程度回答されるかを見ようとして選んだ項目である。

その他、1.6や2.3の項目は、とりわけ意味や形態の面で注目点があるという項目ではなく、それぞれ有力な俚言形が津山に存在するため、通信調査による俚言形の回答状況を一般的に見ると都合がよいと考えて取り上げたものである。

なお、以上の語彙項目は、多く『日本言語地図』からとっており、意味的に関連する項目は、予備調査の結果に基づいて新たに設けたものである。また、㉚「しかえし」と㉛「からかっていじめる」の2項目は、広戸惇『中国地方五県言語地図』によっている。

次に文法項目とアクセント項目を掲げる。

〔文法項目〕

1. 活用

㉜来ない・㉝来い・㉞来よう、㉟高い物、㉞買った

2. 助詞

㉠酒を、㉡雨ばかり、㉢皮ごと、㉣降っているから

3. 可能表現

㉤着ることができない（能力）・㉥着ることができない（状況）

4. 命令・依頼表現

④7起きなさい（やさしく）・④8起きろ（きびしく），④9とってくれ（ぞんざいに）・⑤0とってください（ややていねいに）

[アクセント項目]

1. 2拍名詞

⑤1雨が・⑤4海が（頭高型），⑤2山が・⑤5石が（尾高型），⑤3風が・⑤6糸が（平板型）

2. 3拍名詞

⑤7テレビが（頭高型），⑤8めがねが（中高型），⑤9男が（尾高型），⑥0うさぎが（平板型）

文法項目は、比較的回答の簡単なものとして活用と助詞項目を、より内省力の必要なものとして、可能表現と命令・依頼表現を取り上げた。③7「来い」と③8「来よう」では、前者に kœ:，後者に ko: のような形が聞かれ、その区別がどう回答に現れるか注目される。また、③9「高い物」はタケモノなど連母音の融合形の出現が、④1「酒を」はサキョーという名詞と助詞部分の融合した形の出現が問題となる。さらに、④5④6の可能表現では、能力可能と状況可能の区別が、④7～⑤0の命令・依頼表現では場面差による切り替えがうまく回答されるかどうかを見ようとした。なお、これらの項目は、国立国語研究所の『方言文法の全国調査第1・2調査票』（1984年）からとったものである。

アクセント項目は、2拍名詞と3拍名詞のみについて取り上げたが、各アクセント型が現れるよう配慮し、かつ最小限度の語数におさえておいた。

以上の語彙・文法・アクセント項目の選定は、津山市であらかじめ300項目からなる予備調査を2名について実施し、その結果に基づいて行ったものである。ここにそのインフォーマントのお名前を記し、謝意を表したい。

平井源七 1916（大正5）年生れ 津山市宮脇町在住

春井 明 1922（大正11）年生れ 津山市山北在住

2.2 津山面接調査の概要

2.2.1 目的

先に述べた津山通信調査の結果と比較すべく行った。一般に方言地理学的

調査は面接調査によって行われており、その面接調査に比べて通信調査がどの程度有効かを見るのがこの実験の一つのテーマであるから、通信調査の結果と対比するための面接調査による資料を得ておく必要があった。

2.2.2 インフォーマント・調査地域

通信調査で回答のあった人と同じ人に、もう一度面接調査を実施することとした。ただし、全員では多すぎるため、文法・アクセント項目を含むB・D・F・H方式の回答者の中からランダムに70名を抽出した。

これらの70名については、あらかじめ国立国語研究所長名の調査依頼状を送った。それをここに掲げることは省略するが、2度にわたる調査の理由として、通信調査の結果整理の過程で、さらに詳しく聞いてみたいことが生じ今度は面接を行いたいという趣旨を文面の中で述べておいた。また、この依頼状の後、実際の調査の前日には面接時間打ち合わせのための連絡を、各インフォーマントと電話で行っている。

調査地域は、したがって通信調査の範囲と同じ津山市街地ということになる。調査員が各インフォーマントの家を訪問して面接を行った。

2.2.3 調査時期・調査員

1985年3月14日から19日にかけて津山に赴き、15日から18日の4日間にわたり面接調査を実施した。通信調査と同種の質問を行うため、インフォーマントに通信調査の質問内容の印象が残らない程度の期間を置くべきであり、そのための十分な間隔とは言えないが、面接調査は通信調査票の発送日から約半年後ということにしたのである。

調査員は次の者である。

佐藤亮一（言語変化研究部第一研究室長）、小林隆（同研究員）、真田信治（大阪大学文学部助教授）、加藤和夫（当時東京都立大学人文学部助手・現在和洋女子短期大学講師）、渋谷勝巳（当時大阪大学文学部大学院生・現在同助手）

2.2.4 調査項目

通信調査と同じ語彙35項目、文法15項目、アクセント10項目を取り上げた。さらに、同じ項目のみではインフォーマントに調査に対する不審感をいたかせる恐れがあるため、次の30項目も追加した。これらは、通信調査の項目の関連項目、および特徴的な俚言が存在するためインフォーマントに調査に対する興味を起こさせるような項目である。

〔語彙項目〕

かたつむり, へび, まむし, どくだみ, つくし, まつかさ, さといも, もみがら, とりおどし, つむじ, まゆげ, ほお, もも, ふくらはぎ, かかと, じゃんけん, じゃんけんのかけ声, くすぐる, からい, すっぱい, 魚の煮汁が固まる

〔文法項目〕

来るだろう, 高いだろう, 出した (以上活用), 柿を (助詞), 着ることができる (能力)・着ることができる (状況), 散っている (進行)・散っている (結果)・今にも散りそうだ (将然態)

結局、通信調査の60項目に以上の30項目を加え、合計90項目を調査票に載せた。ただし、これらの追加項目は、実際の面接時の状況、例えばインフォーマントが通信調査の内容を全く覚えていないようだとか、調査に時間がかかりすぎるとかいう場合には、適当に省略してもかまわないこととした。

調査項目の順序は、通信調査の項目と追加した項目とがはっきりわからなないように混ぜて配列し、通信調査の項目も通信の際の順序とは入れ替えた。なお、面接調査票をここに掲げることは省略する。

2.2.5 調査方式

質問法は、語彙項目では方言地理学的調査で広く採用されている謎々式によった。通信調査と同じ項目については質問文も同じものを用い、通信調査票で絵も付した項目には、面接でも同じ絵を提示した。文法項目も、通信調査同様、共通語文を示し方言に翻訳してもらう方式をとった。アクセント項目は、カードに記した「雨が」「山が」などの文節を2回発音してもらい、調

査員がアクセントを記録した。

また、語彙項目と文法項目については、上の方で得られなかった語形を提示し、いわゆる誘導方式によりその語形を使用するかどうかを確認した。その語形とは、通信調査で10%以上的人が回答した語形である。誘導の結果は、①使う、②使わないが知っている、③聞いたこともない、の3段階に分けて記録した。

さらに、インフォーマントごとに、通信調査の際には回答されたのに面接では現れない語形があれば、それについても使用の確認を行った。

その他、複数の回答について、意味の差や使用頻度・新古の違いなどを尋ねたのは、一般の方言地理学的調査と同じである。

2.3. 結果と考察

2.3.1 回収率

通信調査において、それが成功したかどうかはまず調査票の回収率にかかっている面が大きい。回収率が低いということは、十分な資料の収集ができなかったということであり、それは次の段階に来る分析の精度を落とすことになる。面接調査と異なり、直接インフォーマントから情報を引き出すことのできない通信調査では、回答が得られるかどうかは回答者の態度に相当の部分ゆだねられていると言える。したがって、通信調査においては、回答者の調査に応ずる気持ちを喚起し回収率を高めるような工夫がぜひとも必要になる。

津山調査では、9種類の調査方式を試みたのであり、したがってここでは、調査方式の違いが回収率にどう影響を及ぼすかを見てみることにする。

図1は、調査方式ごとの回収率を示したものである。葉書式のI方式は、3回に分けて結果を示した。なお、実際の各方式の対象者数と回答者数は次の通りである（回答者数／対象者数）。

A方式…36／74 B方式…36／74 C方式…35／74 D方式…36／74

E方式…36／74 F方式…38／74 G方式…48／73 H方式…46／73

I方式（1回目）…38／74 （2回目）…35／74 （3回目）…31／74

まず、質問項目の分量の点では、A対B、C対D、E対F、G対Hを比較すれば明らかに通り、項目数の少ない方式と多い方式の間に違いはほとんど見られない。35項目と60項目程度の差では、回答者に与える負担の印象はそれほど変わらなかったと考えられる。項目数をどのくらい減らしたり、逆に増やしたりすると回収率に影響が出るのかは、これだけの結果からは明らかではない。ただし、「耳垢」の1項目のみを質問した法水正文氏の全国通信調査⁴では71%の回収率であり、外国の例だが、逆に157回7,000項目を扱ったA. グリエラの『カタロニヤ方言辞書』⁵のための調査では各回30%以下の回収率であったというのは参考になろう。

次に、質問法と参考語形をどうするかという点については、G・H方式のように謎々式と参考語形有りという条件を組み合わせた場合のみ他の方式より12%から18%も回収率が高くなることがわかった。謎々式でもE・F方式のように参考語形を

示さなかったり、逆に、参考語形を示してもC・D方式のように共通語翻訳式であったりする場合には効果が現れていない。これは、謎々を読み解こうとする好奇心と、参考語形が与えられていることによる答えやすさとが相乗作用をもたらし、ちょうどヒントつきのクイズに対するのと似た興味を回答者に引き起こさせ

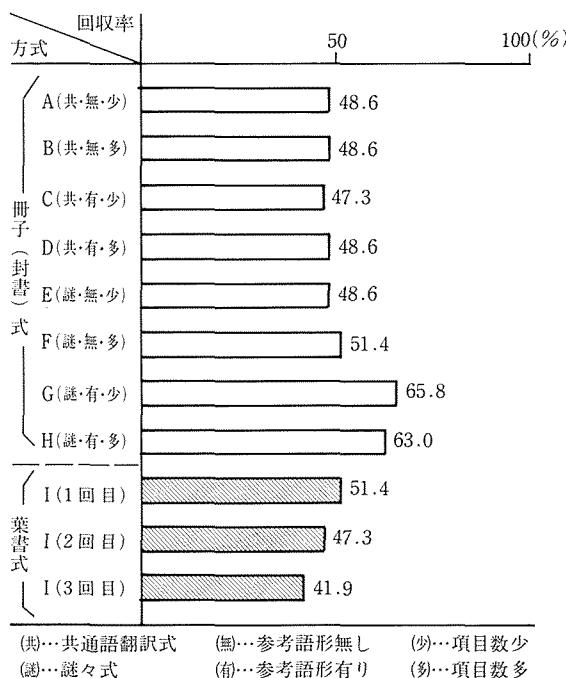


図1 回収率

たことが一つの理由ではないかと考えられる。

続いて、冊子形式の調査票を封書で送付するか、それとも葉書に質問を印刷して送るかという点では、前者の方がよい結果が得られた。葉書のI方式では1回目が51.4%とやや高めの回収率を示したもの、2回目、3回目と回を重ねるごとに回収率を下げている。また、2回目のみとか、3回目のみ送ってくるといった回答者もあり、3回を通じて回答した人の割合はさらに下がる。これは、葉書1枚分程度の項目ならともかく、それ以上の分量を調査するのに、葉書で何回にも小分けにすると、次第に回答者の興味をそぎ面倒がられてしまうということが大きな理由と考えられる。また、当初、葉書方式は簡便だから冊子（封書）方式より回収率も高いはずだと予想したにもかかわらず、それがはずれたのは、冊子型に比して葉書型の調査票を扱う簡便さがそれほど好意をもって迎えられず、むしろ封書に比べて葉書は依頼の丁寧さに欠けるという印象をもった回答者がいたためではないかと考えられる。回答者への依頼状が、封書形式の場合には調査票とは別に添えてあるのに対して、葉書形式では同じ往復葉書の一面に印刷されているという違いも、丁寧さの印象という点で、葉書形式にマイナスにはたらいたと推測される。

ところで、面接調査の結果を参考までに示すと、70人に調査協力依頼を行ったうち、58人に面接し回答を得ることができた。これを回収率としてみると、82.9%ということになり、通信調査の結果を大きく上回っている。もちろん、面接調査のインフォーマントは一度通信調査を経験している人たちであるから、その分はさしひいて考えなければならない。筆者が行った方言地理学的面接調査で、調査者が調査地に到着してから適当なインフォーマントをじかに探す方式では、協力率はそれほど高いものではなかった。ただし、何件かを訪問し協力を依頼することにより、1地点1名のインフォーマントはほぼ確実に得ることができた。したがって、通信調査において方言地理学的調査を行う場合にも、1地点数名の人に調査票を送ることにより、各地点の回答を確保することができるということになる。今回の通信調査法の回収率からすると、1地点2名を対象とすれば1人は回答を寄せてくれるという計算になる。

その他、通信調査において回収率を高めるためには、ここで検討した調査票の方式の違いとともに、調査票を対象者に渡しまた回収する経路の問題もひじょうに重要であると言える。この問題の一つとして、調査の仲介をしてくれる協力機関について、後で取り上げるつもりである。

2.3.2 回答率

回収率に続いて、回答率、つまり回答者から送り返されてきた調査票の回答欄がどの程度埋まるかということも重要な問題である。たとえ、調査票の回収率が高くとも、回答欄に空欄が目立つようではしかたがない。面接調査の場合には、調査者が質問を補足するなどして回答者から何とか回答を得ようと努力することができるが、通信調査ではそれは難しい。したがって、回答者が答えやすいように質問や回答の形式を工夫しておくことが、通信調査では特に大切となる。

さて、今回試みた各種の調査方式の回答率について、検討を加えてみよう。語彙項目・文法項目・アクセント項目では内容が大きく異なるので一緒に扱うことはせず、別々に結果を提示する。また、文法・アクセント項目を含んだ大調査票における語彙項目と、語彙項目のみの小調査票における語彙項目とで、回答率に違いが出ることも予想されたが、実際には大きな違いは出なかったので両者をまとめて処理することにした。

まず、語彙項目の結果から見てゆく。図2をごらんいただきたい。そこには、回答・無回答の割合だけではなく、回答の場合、単用か併用かの割合も示した。葉書型のI方式は、3回分がそろって返ってきてはおらず、つまり全項目がそろっているわけではないので、他の冊子(封書)型の方式と正確には比較できないが、参考のため図に結果を示した。

さて、無回答の割合は冊子(封書)型の中ではA Bの共通語翻訳一参考語形無しの方式が最も多く、C D, E Fの順に減り、G Hの謎々一参考語形有りの方式が一番少なくなっている。G H方式の回答率が高い点は、先にみた回収率の高さとも平行しており、理由も同様に考えることができる。すなわち、謎々質問に対する興味と参考語形による答えやすさとが、回答率の面でも有

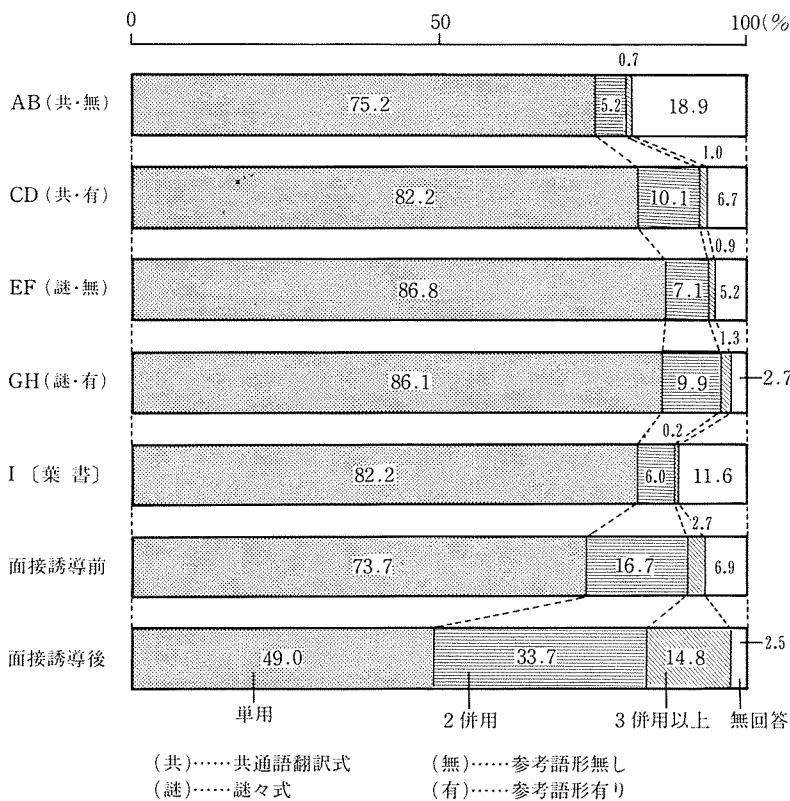


図2 語彙項目の回答率

利にはたらいたということである。これに対して、A B方式で無回答が2割近くも出たのは、そうした2つの条件がまったく備わっていなかったからであろう。また、共通語のみを提示しただけでは、そもそもその共通語の意味の理解が不十分な場合、答えることが難しいということもあったのではないかと思われる。A B方式と同じく共通語翻訳一参考語形無しという方式をとった葉書のI方式もやはり無回答の割合が多くなっている。

ところで、図2には面接調査の結果も誘導前と誘導後に分けて掲げた。誘導前を通信調査法の参考語形無しに、誘導後を通信調査法の参考語形有りに対比して考えることができる。さて、面接調査において、誘導（すなわち調査者側の予想する語形が最初の質問の段階で得られなかつた場合、その語形

を回答者に提示して使用するかどうかの確認を行うこと)に移るタイミングは調査員間で多少の個人差はあるものの、今回の調査では誘導前で6.9%の無回答が出た。それが、誘導の結果2.5%まで無回答を減らすことができたわけである。この6.9%から2.5%への減り方は、通信調査におけるE F方式とG H方式の5.2%と2.7%という割合と平行的であると言える。また、面接調査法においても結局は2.5%の無回答が出ており、G H方式の2.7%がほぼそれと等しいということは、通信調査法を用いても方式によっては面接調査法と同程度の回答率を確保することが可能だということになる。

単用・併用回答の割合、すなわち、1項目に1語形のみが回答されているか、それとも2語形以上が回答されているかの割合について次に見ると、参考語形をあげたC D・G H方式が、あげないA B・E F方式に比べて併用回答の割合が多くなっていることがわかる。これは、回答者が参考語形を見ることにより使用することを忘れていた語形に思い当たるケースが出てくるためと考えられる。したがって、通信調査において、多くの語形を回答してもらうためには、参考語形を付すことが有効だということになる。もちろん、共通語形やよその土地の俚言形の回答が増えただけではしかたないが、この点については次節で検討したい。

さて、併用回答の割合では、面接調査が通信調査をかなり上回っている。誘導後では特に併用回答の割合が多く、ほぼ単用と肩を並べるまでになっている。さらに、誘導前でも2割近い併用回答が見られるが、これは調査員が回答者に向かい合い会話を交わし質問を進めるという行為自体が、回答者が紙の調査票に一人で対するより答えをいくつも出しやすい状況をつくりあげているものと解釈される。そして、その状況とは、おそらく、回答者の視覚よりも聴覚を通じることによる質問理解の容易さとか、紙より人間に對していることからくる回答への積極さとか、さらには調査員との雑談による緊張の緩和などいくつかの要因が複合したものと考えられよう。

次に文法項目について見る。文法項目では、併用回答の割合は語彙項目よりも少なく、方式による単用・併用回答の割合に顕著な差が見られなかったので、ここでは回答率の違いのみについて見てゆくことにし、表2に結果を示

す。なお、文法項目の質問法はすべて共通語翻訳式であり、B・Fは参考語形をあげない方式、D・Hはあげる方式である点が異なる。

この表によれば、文法項目においても語彙項目同様、参考語形を示した方式(D・H)の方が、示さない方式(B・F)よりも無回答の割合が少なく、回答率の向上に効果をあげていることがわかる。なお、同じ参考語形を示さないB方式とF方式に差が現れているのは、調査票で文法項目の前に置かれた語彙項目が影響を与えている可能性がある。つまり、B方式の語彙項目は共通語翻訳式でF方式の謎々式より回答率が相当に低く、それがそのまま文法項目に尾を引いたかっこうになっている。

最後に、アクセント項目については、回答者に直接アクセントを記入させる方式(B・F)か、それとも選択肢を設けて選ばせる方式(D・H)かで違いを見ようとした。前者が語彙・文法項目で参考語形を示さない方式、後者が参考語形を示す方式に対応する。

結果を、表3に掲げる。概して選択方式の回答率がよいが、Fの直接記入方式が最高の値を示している。しかし、同じ直接記入方式でもBの回答率は他を相当地下まわっている。BがFより低い回答率を示したのは、文法項目のところで指摘したように、同じ調査票内の語彙項目の回答率の低さがここでも影響しているものと思われる。アクセントについて、これだけの結果からは、直接記入方式と選択方式のどちらが回答率向上に有効か、明らかなことが言えない。

表2 文法項目の回答率

方 式	回答率(%)
B (参考語形無し)	85.7
F (〃)	93.7
D (参考語形有り)	96.7
H (〃)	98.6

表3 アクセント項目の回答率

方 式	回答率(%)
B (直接記入方式)	70.8
F (〃)	96.1
D (回答選択方式)	94.4
H (〃)	90.9

2.3.3 倣言形の回答率

回答欄がすべて埋まり、多くの語形が回答されたとしても、共通語形が答えられたり、その土地では使わないよその土地の偣言形が報告されたり、あるいは質問の趣旨に添わない見当はずれ的回答が行われたのではしかたがない。通信調査においても当然のことながら、その土地の偣言形が正確に回答される必要がある。むしろ面接調査に対して、回答者との直接のやりとりができるない通信調査において、この点はより問題になると言える。

さて、この問題について、試みた方式の中ではどれがその土地の偣言形を引き出すのに有効であるか見てゆくことにしたい。もちろん、その土地の偣言形というのは、十分調査した後でなければわからないものである。しかし、幸い津山については今回予備調査や面接実地調査を行っており、また『日本言語地図』でも調査地点として津山をとっている。したがって、それらの調査結果を総合的に判断して津山の偣言形と認められるものを選び、それが各種の通信調査法でどの程度回答されたかを見てゆくことができる。

ところで、この通信調査の回答者の中には、現在は津山に住んでいるが、もともとは津山の出身でない人や、あるいは津山の出身でも長い間よその土地で暮らした経験をもつ人が含まれている。それらの人の回答には、津山以外の土地の偣言形がまじる恐れがあり、したがって、それらの人は津山の偣言形がどの程度回答されるかということでの考察の対象からは除くべきであろう。ここでは津山生え抜き、またはそれに近い回答者のみを取り上げ、次のような人は対象から除外することにした。①言語形成期と目される6歳から15歳までの10年間に津山旧市内以外の土地で生活した人(ただし、2,3年程度ならよい)。②その後の在外歴が極端に長く合計で30年以上にのぼる人。その結果、考察の対象者は次の人数になった(考察の対象者数/全体の回答者数)。

A方式…22/36 B方式…21/36 C方式…19/35 D方式…15/36

E方式…15/36 F方式…22/38 G方式…27/48 H方式…29/46

なお、葉書のI方式は、回答者の居住歴について十分な情報を得ていないので、ここでの考察の対象からははずした。

さて、まず語彙項目について検討を加える。対象とした24項目と津山の俚言形と認めた語形は次の通りである。

たこ〔イカ〕、おにごっこ〔オニゴト〕、かくれんぼ〔カクレゴト〕、せともの〔カラツ・カラツモノ・カラツモン〕、かかし〔カガシ〕、ふすま〔カラカミ〕、かぼちゃ〔トーナス〕、とうもろこし〔ナンバキビ・ナンバ〕、きのこ〔タケ〕、すみれ〔スマートリバナ〕、おおばこ〔オバコ・スマートリグサ〕、指にささる竹や木のとげ〔ソゲ〕、よだれ〔ヨーダレ〕、下あご〔オトガイ〕、下あごの先〔オトガイ〕、ひざがしら〔スネボーズ・スネボンサン・スネ〕、ひざのさら〔サラ・オサラ・スネノサラ〕、くものす〔クモイギ・クモノイギ・イギ〕、くすぐったい〔コソバイ・クスバイ〕、しおからい〔カライ〕、すっぱい（梅干が）〔スイー〕、おそろしい（犬が）〔キョートイ〕、こおる（大根が）〔シミル〕、からかっていじめる〔ヘベス〕

これらの語形の中には、例えば、キョートイにキョーテー・キヨトイを含めるなど方言分布上問題のないと思われるかぎり、いくつかの変種をまとめて扱った場合がある。なお、結局、共通語形しか得られなかったり、あるいは、語彙体系上複雑な問題がからみ、その項目における津山の俚言をはっきり認定しかねた11項目は除いた。例えば、極端な場合として「いばらやさんしようのとげ」のゲイは、そうしたとげをもつたつる草の総称だと答える人もおり、このようなものは対象としなかった。

結果を図3に示す。語彙項目について見るので調査票の大小は無視し、AとB、CとD、EとF、GとHの回答をまとめて扱った。また、面接調査の結果も掲げた。

まず、共通語を俚言形に翻訳させるか、それとも謎々で質問するかという点では、ABに対してEFを、CDに対してGHを比べてみればわかる通り、やや謎々式の方が俚言形の回答率が高いが^{注6}、しかし、その差は顕著とは言えないようである。『日本言語地図』の検証調査でも、面接調査において共通語翻訳式と謎々式の結果が比較されたが、俚言形の回答率はやはり両者同程度であった。従来、共通語翻訳式では提示した共通語に引かれて共通語回答が

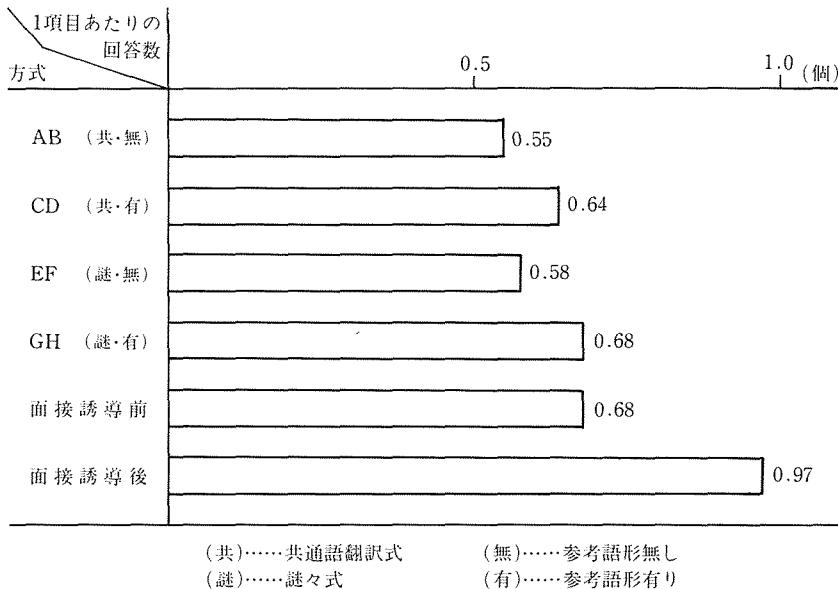


図3 語彙項目の俚言形の回答率

増える恐れがあるため、謎々式を用いるのがよいとされているが、以上の結果は、それがそうとも言えないことを示している。共通語翻訳式の場合には、共通語をそのまま答えようという意識に対して、共通語を何とか俚言形に置き変えようという意識も強く働くのではないかと考えられる。もちろん、図3の結果では、わずかであっても、共通語翻訳式より謎々式の俚言回答率が高いことは明らかなのであり、少しでも多くの俚言を集めようとするならば謎々式によるのが妥当ということになる。ただ調査票のスペースなどが問題になった場合、俚言形の回答率という点のみについていえば、共通語翻訳式をとるか謎々式をとるかはそう神経質にならなくてもよいということなのである。

これに対して、参考語形をあげるかあげないかという点については、明らかな差が現れている。図3で、ABとCD、EFとGHの結果を比較すればわかる通り、いずれも参考語形をあげた方があげない方に比べて明らかに俚言形の回答率が高くなっている。参考語形の提示は、回答者から俚言形を引

き出すのに有効に作用したと言える。

これは、回答者が質問のみでは思い出せなかつた自分の俚言を、参考語形を見ることにより、それに助けられて思い出すことがあるためと解釈される。現在では共通語化が進み、一時代前と違つて純粹に俚言で言語生活を送る人はほとんどいなくなつた。自分がかつて使用し、あるいは現在も用いる俚言であつても、調査の場面では共通語形に記憶をじゃまされて、なかなか思い出せない回答者がいる。そのような回答者から俚言形を引き出すために、参考語形をそえて記憶を刺激してやることは、ある程度効果があつたということになる。もちろん、俚言形を思い出せないということも、それはそれで現在の方言の状態をありのままに反映している事実ではあるが、方言地理学的調査で求めたいのは、共通語に侵食される以前の方言の状態なのであり、それを探し出すためには、参考語形の提示も一つの有効な手段と考えられるわけである。

次に、通信調査の結果を面接調査の結果と比較してみる。面接調査では誘導前に、すでに通信調査で最高の値をとつたG H方式と同じ回答率を示しており、誘導後には格段に回答率を伸ばしている。この結果は、俚言形を聞き出すことにおける面接調査の優位性を認識させてくれる。方言地理学的調査において、通信調査法のG H方式をとるとした場合、誘導つき面接調査と同程度の結果を得るためにには、今回の結果からは約1.5倍の回答者を用意する必要があることになる。ただし、面接調査法に通信調査法が及ばないであろうことは最初から予想されたことであり、それからすると、むしろ、この通信調査法の結果はかなり高い値を示しているとみなすこともできる。今回の結果のように、通信調査でも面接調査の3分の2程度の成果をあげうるすれば、それは、回答者の人数を増やすなどの処置を講ずることにより、通信調査法を俚言収集の手段に十分利用しうることを意味するとも言えよう。

ところで、今回行った面接調査では、質問に通信調査と同じ謎々を用いた。また、誘導語形は通信調査の参考語形に含まれているものと同じである。したがつて、それらの点では通信調査の結果と面接調査の結果に大きな違いの出ることは考えにくい。にもかかわらず、このような差が認められたという

ことは、調査員が回答者と顔を合わせ、対話形式で質問を進めるという行為の中に、俚言形を出現させやすくする鍵がひそんでいることになる。

これについては、2.3.2でなぜ面接調査で多くの語形が回答されやすいのか理由を考えてみたが、それがそのまま俚言形の回答率についてもあてはまるであろう。さらに、例えば、質問の謎々で回答者が首をかしげるようなら、通信調査では不可能でも、面接調査ではさらに質問文を補足するということがあるわけで、それが俚言形を回答されやすくしているのかもしれない。また、通信調査における参考語形はただ漫然と回答者に提示されるだけだが、面接調査の誘導では一語一語とりたてて回答者の内省をうながすという違いもある。こうした、両者の違いをいちいち洗い出してゆき、それが俚言形の出現に有効だという確認が得られれば、それを何とか通信調査に生かす工夫が望まれる。

次に、文法項目について見てみる。文法項目では15項目すべてを対象とした。それぞれ津山の俚言形と認めた語形は次の通りである。表現法に係わる項目では、数種の表現形を認めた。これらの語形が津山の俚言であることの判断には、予備調査や面接調査の結果の他、国立国語研究所で行っている方言文法の全国的地域差に関する研究（1977年～）の調査結果などを参考にした。

- 来ない [コン]
- 来い [コエ, コエー, ケー (koe, koε:, kœ:)などの連母音の融合を写したと認められる表記])
- 来よう [コー]
- 高い(物) [タカエ, タカアエ, タカアエ, タカー, タケー (takaε, takæε, takæ:, take:)などの連母音の融合を写したと認められる表記])
- 買った [コーダ]
- 酒を [サキョー, サキョ]
- (雨)ばかり [バー]
- (皮)ごと [ゴメ, ナリ]
- (降っている)から [ケン]

- 着ることができない(能力) [ヨーキン]
- 着ことができない(状況) [キレン]
- 起きなさい(やさしく) [オキンサイ, オキンチャイ, オキーヨ]
- 起きろ(きびしく) [オキー, オキニヤー, オキニヤーオエンゾ, オキニヤーイケンゾ, オキニヤーイケンカナ]
- とってくれ(ぞんざいに) [トッテンカ, トッテン]
- とってください(ややていねいに) [トッテツカーサイ, トッテツカーサランカ, トッテクレンサイ, トッテクレンサランカ]

さて、以上の津山の俚言と認めた語形が、通信調査法の各方式によってどの程度回答されたかを図4に示す。文法項目については、すべて共通語翻訳式によったので、参考語形を付したDHと付さなかったBFとで参考語形の有無による違いのみを見ることになる。面接調査（これも共通語翻訳式）の結果もあわせて示す。

図3の語彙項目の結果と比較して明らかな通り、文法項目も語彙項目と類似の傾向を示している。つまり、通信調査で調査票に参考語形を載せたもの(DH)は、参考語形を載せないもの(BF)に比べてその土地の俚言形の回答率が高く、その差は1.6倍にも及んでいる。回答者からその俚言形を引き出すことに参考語形の提示が有効にはたらくことを、文法項目においても確認できたと言える。

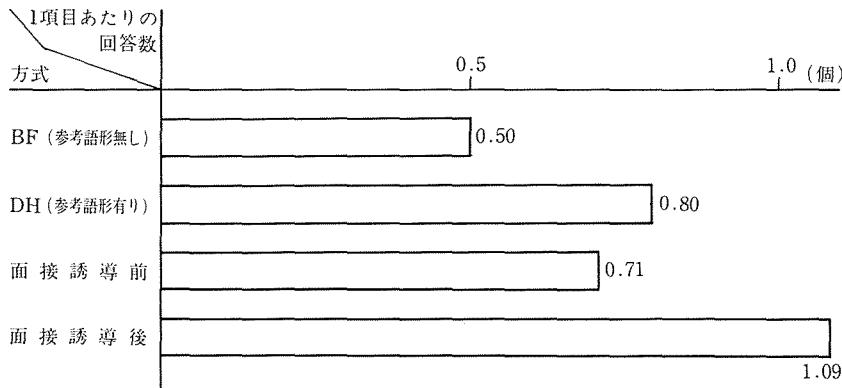


図4 文法項目の俚言形の回答率

面接調査と比較してはどうか。面接調査は誘導前にすでに通信調査の参考語形を付す方式（DH）に近い数値を示しており、誘導後にはさらに一段と回答率を伸ばしている。誘導後が1を上回る数値を示しているのは、一つの項目に複数語形の回答があるためである。DHの参考語形を付した通信調査法と比べると、約1.4倍多く俚言形を引き出している。俚言形の回答率を高めるという点において、同じ通信調査法の中では、参考語形をあげる方式があげない方式に比べて断然有効であるが、それでも誘導つきの面接調査には及ばないという、語彙項目と同じ結果が文法項目でも得られたことになる。もちろん、ここでも、通信調査が面接調査に比べて問題にならないほど低い値を示しているというわけではなく、むしろ、意外とよく俚言をとらえていることには注目すべきであろう。

次にアクセント項目について見る。アクセント項目では、その土地のアクセントが正確に回答されるかどうかは、アクセントの型の種類によってかなり違이がありそうで、今回の調査では、頭高型の正答率が高く、それ以外の型の正答率は低いという結果が現れている。その点は別の機会に問題にすることにして、ここでは全体の傾向を見る。

予備調査および面接調査の結果から、それぞれの項目について津山アクセントと認めたものは、次の音相である。高低の2段階で音相をとらえ、高く発音された拍に傍線を付した。

雨が [アメガ], 山が [ヤマガ], 風が [カゼガ], 海が [ウミガ], 石が [イシガ], 糸が [イトガ], テレビが [テレビガ], めがねが [メガネガ], 男が [オトコガ], うさぎが [ウサギガ]

末尾に掲げた調査票を参照していただきたいが、アクセント項目を盛りこんだ調査票のうち、BFでは、それぞれの語を発音したとき高く発音すると感じられる拍に回答者自身で傍線を引いてもらう自己記入方式をとった。一方、DHでは、あらかじめ高く発音する拍に傍線を引いた選択肢を1項目につき2つずつ用意し、自分の発音に近いと思う方を選んでもらうこととした。

結果を図5として掲げる。10項目全体について上に認めた津山アクセントと同じ音相が記入された、あるいは選択された割合を示したものである。面

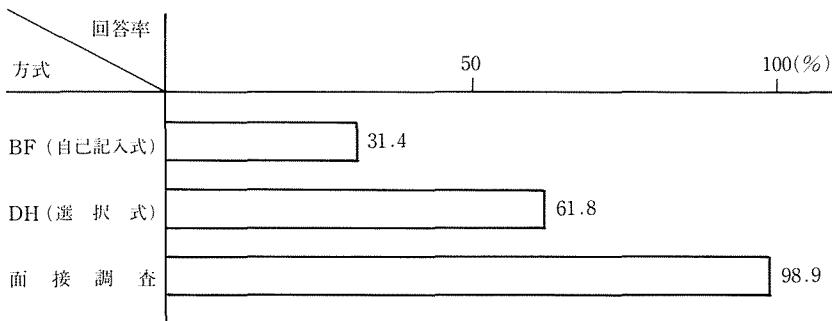


図5 津山アクセントの回答率

接調査の結果もあわせて掲げた。

これを見ると、面接調査ではほぼ10割に近く津山アクセントが採集されているのに対し、通信調査では、選択方式で6割、自己記入方式だと3割しか回答されていない。自己記入方式の場合、回答者により様々な傍線の引き方が見られたが、音韻論的に上の津山アクセントの音相と同じ型のアクセントを表現していると判断される次のものを含めても、その割合は41.4%であった。

アメガ(頭高型), ヤマガ(尾高型), カゼガ(平板型), ウミガ(頭高型),
イシガ(尾高型), イトガ(平板型), テレビガ(頭高型), メガネガ・メガ
ネガ(中高型), オトコガ・オトコガ(尾高型), ウサギガ・ウサギガ・
ウサギガ(平板型)

語彙や文法形態に比べて、超分節的要素であるアクセントを内省することは、一般に難しいと言われている。無アクセント地域の人だけでなく、有アクセント地域の人でも、アクセント教育を受けないかぎりは、拍の高低関係などを正確に回答することは困難であろう。しかも、アクセント項目のように体系的に要素の数の限られた分野においては、百パーセント正確な回答が要求される。今回の調査の結果は、アクセント調査を通信で行うことは無理であるとする従来の常識を、ほぼ裏づける結果となつたと言える。

ただし、DHの選択式で津山アクセントの回答が6割に及んだということは、上の常識からすればむしろ驚くべきことである。また、BFの自己記入

方式の回答に音韻論的解釈を加えた場合の4割という正答率も、確率的に得られる平均値を上回っており、一般の人がアクセントの内省能力をまったく持たないということではないことがわかる。今回の調査でもアクセントの回答があった156人のうち、10問全部にわたって津山アクセントを正確に回答した人が8人いた。このように、多勢の中にはアクセントの判断力の鋭い人もいるのであり、そのような人を、今回のような実験的調査を通じて探し出し、以降、本調査の相手として協力してもらうならば、アクセントの通信調査も全く不可能ではないかもしれない。

2.3.4 項目別考察

先の節では、俚言形の回答状況について、項目全体を対象として調査方式による違いを見てきた。しかし、項目によって回答状況に異なる傾向の認められることも確かである。したがって、この節では語彙項目について、個々の項目ごとに、検討を加えてみたいと考える。調査項目は、いくつかの観点から選んだものであることは、2.1.7のところで述べた通りであるが、そうした項目の性格により結果に違いが現れるかどうか、特徴的な傾向を示した項目について以下に見てゆきたい。

(1) 細かな意味の差をもつ項目

(1-1) 「下あご」「下あごの先」「下あごの角」「上あご」「あご全体」

まず、「あご」のグループを見てみる。「あご」に関しては、上の5つの部位に分けて質問を行った（調査票参照）が、あらかじめ、『日本言語地図』や予備調査により、予想していた津山の名称の体系は、以下の通りである。

下あご—オトガイ(アゴ)、下あごの先—オトガイ(アゴ)、下あごの角—エラ、上あご—ウワアゴ、あご全体—アゴ

このうち、「下あご」と「下あごの先」については、オトガイがアゴにその地位を奪われつつあると認めた。また、その場合、「下あごの先」の方がオトガイをよく保ち、「下あご」の方が早くオトガイを失いつつあるため、アゴ(下あご)/オトガイ(下あごの先)という組合せをもつ人もいると考えた。

結果は、オトガイが死滅に近い状態で、ほとんど回答されなかった。また、エラは比較的新しいことばのようだ、古くは、「下あごの角」のみを指す名称は、特にもたなかつたらしいことがわかつてきた。したがって、どの部位でもアゴが答えられることが多く、細かな意味差をもつ項目において、それらを表す様々な語形が正確に回答し分けられるかという課題には、この「あご」をめぐる一連の項目は、かならずしも適切であったとは言えない。

ここでは、俚言では行わない細かな名称の区別を、共通語に引かれて回答してしまうとか、あるいは質問の部位と全くずれた部位の名称が答えられてしまうとか、そういう現象を中心に、「あご」の調査結果を見ることにする。

表4～8に、「あご」の一連の調査結果を示した。まず、表4「下あご」について見てみる。オトガイの回答は、ごらんのようにわずかで、ほとんどアゴにとって代わられてしまっている。シタアゴという回答も目立つが、これはシタアゴという形を見出しに立てたり、参考語形に含ませたりした方式(A B・C D・G H)において、全然シタアゴという形を示さなかった方式(E F)より回答率がやや高くなっている。シタアゴのような分析的な表現は、おそらく文章語的な共通語表現で、日常的な言い方ではなかろう。それが、調査という場面において、この語形が見出しや参考語形として示されたために、それに引かれて回答が増えたものと思われる。また、後出てくる「あご全体」を何と言うかとの質問との対比で、ここではより分析的なシタアゴが、共通語から臨時的に採用されたのではないかと考える。

こうした現象は、通信調査だけでなく、面接調査においても同様に見られる。すなわち、表4で、面接の誘導前と誘導後を比べると、誘導後のシタアゴの回答率が極端に増えているのは、上で述べた理由と同じことだと思われる。ただし、面接調査の場合には、アゴの回答率も誘導前からかなり高く、ほとんどの人がアゴを答えており、アゴとシタアゴとが併用の形になっている。これならば、ふだんはシタアゴを使わず、アゴとだけ言っているのではないかということが推測される。ところが、通信調査の場合、先に見た通り、1つの質問に2つ以上語形を回答することが少なく、この場合もシタアゴを答えた人はアゴを答えない傾向にあるため、問題が残るわけである。

表4 下あご

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
ア ゴ	41.9	70.6	73.0	75.0	90.6	98.1
シ タ ア ゴ	16.3	17.6	10.8	23.2	5.7	30.2
ウ ワ ア ゴ	—	—	—	1.8	—	—
ア ゴ タ	—	14.7	2.7	7.1	—	—
ア ゴ ベ タ	—	—	—	—	1.9	1.9
オ ト ガ イ	2.3	—	—	1.8	—	—
エ ラ	—	—	—	5.4	—	—
ホ 一 ゲ タ	—	—	—	—	1.9	1.9
ホーベッタノシタ	2.3	—	—	—	—	—
ク チ	—	—	2.7	—	—	—
ク チ モ ト	—	—	2.7	—	—	—
ク チ ビ ル	—	—	8.1	—	—	—
ベ 口	—	—	2.7	—	—	—
無 回 答	34.9	5.9	2.7	3.6	—	—

(共)……共通語翻訳式

(無)……参考語形無し

(謎)……謎々式

(有)……参考語形有り

表5 下あごの先

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
ア ゴ	18.6	29.4	51.4	26.8	41.5	58.5
シ タ ア ゴ	—	35.3	13.5	48.2	11.3	32.1
ア ゴ タ	—	11.8	—	3.6	3.8	3.8
アゴノサキ	14.0	—	8.1	1.8	9.4	9.4
アゴノトッサキ	4.7	—	—	—	5.7	7.5
シタゴノサキ	7.0	—	—	—	—	—
アゴノハシ	2.3	—	—	—	—	—
オ ト ガ イ	2.3	—	2.7	8.9	1.9	7.5
シャクシアゴ	—	—	—	1.8	—	—
そ の 他	7.0	—	2.7	—	3.8	3.8
無 回 答	44.2	26.5	24.3	12.5	11.3	11.3

表6 下あごの角

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
ア ゴ	7.0	14.7	16.2	14.3	24.5	45.3
シタアゴ	—	5.9	—	—	—	—
ウワアゴ	—	11.8	2.7	3.6	3.8	3.8
ア ゴ タ	2.3	—	—	3.6	1.9	1.9
ア ギ ト	—	—	—	1.8	—	—
アゴノヨコ	2.3	—	—	—	—	—
ヨコアゴ	—	—	—	1.8	—	—
シタアゴノカド	4.7	—	—	—	—	—
シタアゴノヘリ	2.3	—	—	—	—	—
オトガイ	—	—	—	1.8	—	—
エ ラ	30.2	44.1	32.4	55.4	32.1	41.5
ホーボネ	7.0	—	13.5	3.6	3.8	5.7
ホーゲタ	—	—	2.7	—	—	—
ホーベタ	—	—	2.7	—	—	—
ホーベッタノシタ	2.3	—	—	—	—	—
ホーダマ	—	2.9	5.4	—	—	—
カクアゴ	—	—	—	—	1.9	1.9
そ の 他	—	—	2.7	1.8	7.5	7.5
無 回 答	46.5	20.6	24.3	14.3	15.1	15.1

表7 上あご

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
ア ゴ	9.3	23.5	—	—	7.5	7.5
ウワアゴ	23.3	44.1	73.0	91.1	75.5	84.9
ウエアゴ	4.7	—	—	—	—	—
アゴノウエ	—	—	—	—	1.9	1.9
ア ゴ タ	—	2.9	—	—	—	—
エ ラ	2.3	—	—	—	—	—
ハ グ キ	—	—	—	1.8	—	—
ハ ジ シ	—	—	5.4	1.8	—	—
クチントコ	—	2.9	—	—	—	—
そ の 他	—	—	—	—	5.7	5.7
無 回 答	60.5	29.4	21.6	5.4	9.4	9.4

表8 あご全体

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
ア ゴ	37.2	67.6	37.8	53.6	58.5	62.3
アゴゼンタイ	4.7	—	—	—	—	—
シタアゴ	—	2.9	—	—	—	—
ウワアゴ	—	—	—	5.4	—	—
ア ゴ タ	—	2.9	—	8.9	—	—
オトガイ	—	—	2.7	3.6	—	—
チョーツガイ	2.3	—	—	—	—	—
ホ一ゲタ	—	—	2.7	—	—	—
ガンコツ	—	—	2.7	—	—	—
ク チ	—	—	2.7	—	—	—
クチモト	—	—	—	—	1.9	1.9
そ の 他	2.3	—	2.7	—	9.4	9.4
無 回 答	53.5	26.5	51.4	28.6	24.5	24.5

以上と同様のことは、表5「下あごの先」のシタアゴ・アゴノサキ・シタアゴノサキ、表6「下あごの角」のシタアゴノカド、表8「あご全体」のアゴゼンタイなどについても言える。これらの語形も質問の見出しや参考語形にこれらの形を掲げたために、それに引きずられた回答と思われる。また、表5のアゴノハシ、表6のアゴノヨコ・ヨコアゴ・シタアゴノヘリなどは、質問の見出しや参考語形として掲げたわけではないが、やはり、調査という場面において、特にその部位を取り立てて尋ねられたために、臨時に作り出された語形ではないかと考えられる。

身体部位の中でも、この「あご」の質問の各部位のように、実際の身体に明瞭な境界が存在せず、しかも、「下あごの先」が「下あご」に含まれ、さらに「下あご」が「あご全体」に含まれるというような包接関係にある部位の場合、その調査はなかなか難しい。ある回答者は、どの部位を尋ねても、みな「あご」には違いないとの判断からすべてにアゴと答えたり、逆に、詳細に考えた回答者は、その部位特有の名称を何とか言おうとするあまり、ふだんほとんど用いない語形を回答してしまったり、さらには、細部を取り立てて呼ぶ名称などはないから回答欄に何も記入しない回答者も現れてくる。こ

のような、言語事実自体には違いはないのに、回答者の態度によって結果に差が生じることを避けるために、名称の包接関係に配慮した質問方法が、通信調査では特に必要となろう。「あご」の細部に特有の名称を尋ねているのか、それとも、その部位もアゴという包括的な名称で呼びうるのか、そういう質問の観点の違いだけでも、回答者にはっきり伝わるようにしておかなければならなかつた。もちろん、こういう点は、面接調査でも方言地理学的な調査においては、これまでかならずしも十分であったとは言えない。

次に、質問の部位とは異なつた部位の名称が誤って回答されたらしいものについて見てみる。まず、表4「下あご」では、E F方式のクチ・クチモト・クチビル・ベロがそうであり、A B方式のホーペッタノシタ、G H方式のウワアゴ・エラもその可能性が強い。面接調査でも、ホーゲタは頬骨のことと思われる。次に、表5「下あごの先」ではG H方式のシャクシアゴが、特にしゃくれた形のあごを指すと認められるという点で誤答である。次に、表6「下あごの角」では、まずいろいろな方に現れているホーボネが頬骨のことと思われるので、質問の部位からははずれている。また、ウワアゴ的回答も目立つが、この質問の部位からみれば誤答の可能性が高い。その他、A B方式のホーペッタノシタ、C D方式のホーダマ(頬を指すはず)、E F方式のホーゲタ・ホーペタ・ホーダマ、面接調査のカクアゴ(角ばつたあごを指すはず)も、やはり誤答と考えられる。続いて、表7「上あご」では、A B方式のエラ、C D方式のクチントコ、E F方式のハジシ(歯茎を指すはず)、G H方式のハグキ・ハジシが誤答の可憇性が高く、表8「あご全体」では、A B方式のチョーツガイ、CD方式のシタアゴ、E F方式のホーゲタ・ガンコツ(頬骨のことか)・クチ、G H方式のウワアゴ、面接調査のクチモトが質問の趣旨をはずれた回答と認められる。

通信調査の4つの方式を比べると、共通語翻訳式(A B・C D)より謎々式(E F・G H)の誤答の割合が2倍以上多く、中でも謎々一参考語形無しの方式(E F)の誤答が多い。これは、「あご」の各部位を尋ねるのに、参考語形を示さぬ謎々では回答者がどこの部位を聞かれているのかわかりにくかったことを意味するものかもしれない。逆に、共通語翻訳式の方が誤答が少

なかったのは、回答者が共通語を容易に理解し、どの部位を尋ねられているか比較的よく判断できたからではないかとも思われるが、一方、どの項目においても共通語翻訳一参考語形無しの方式（A B）で無回答の割合が極端に高いのは、質問の理解が不十分な回答者が無回答に逃げたとも考えられるので、一概に判断はできない。

この「あご」をめぐる一連の項目は、通信調査法でいかにも各部位の名称が回答時に混同されやすい項目のように思われた。たしかに、今見たように、E F・G H方式など面接調査に比べて多くの誤答が見られた。しかし、その割合は全体からすれば、実はそれほどおおげさにあげつらう必要のない程度のものであるとも言える。もちろん、そういう誤答をなくすべく工夫すること（例えば今回はすべての方式に「あご」のさし絵を入れたのでそれが効果を発揮したと考えられる）は必要であるが、こういう複雑な調査項目でも、通信調査は誤答が多すぎて使えない、ということはなさそうである。

（1-2）「ひざがしら」「ひざのさら」

表9と表10に結果を示した。予備調査や面接調査の結果で判断すると、「ひざがしら」にスネボーズ・スネポンサン、「ひざのさら」にスネノサラ・オサラなどが使われ、両者の意味が言い分けられるのが津山の語彙体系と考えられた。そして、この区別は、表9・10からわかる通り、通信調査の各方式においても比較的よくとらえることができたと言える。ただし表10「ひざのさら」のA B・E F方式において、スネボーズ・スネポン・スネポンサン・ポンサン・スネ・ヒザコゾー・スネコゾーという「ひざがしら」にあたる語形が回答されてしまっているのは、A B・E F方式が参考語形を示さない方式であることを考えると、そのために質問の意図するところの理解が不十分であった回答者がいたことを物語るものかもしれない。

なお、細かな意味差が的確に回答し分けられるかという観点からははずれるが、「ひざのさら」を取り上げたついでに、次のことを指摘しておきたい。すなわち、表10「ひざのさら」では、サラという語形がC D・G H方式よりA B・E F方式で多く回答されている。この語形は、面接調査でも相當に回答されており、津山で使用する言い方であることは確かであるが、予備調査

表9 ひざがしら

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘導前	誘導後
ヒザガシラ	2.3	—	—	—	1.9	1.9
ヒザコゾー	—	—	—	—	7.5	7.5
ヒザボーズ	9.3	—	2.7	1.8	—	—
スネボーズ	39.5	73.5	24.3	73.2	45.3	94.3
スネボンズ	2.3	—	—	—	—	1.9
スネボ一	—	2.9	2.7	—	3.8	3.8
スネボン	2.3	2.9	2.7	—	1.9	1.9
スネボーサン	4.7	—	—	—	—	—
スネボンサン	23.3	20.6	35.1	26.8	34.0	77.4
ボンサン	—	—	2.7	1.8	—	—
スネネ	27.9	—	18.9	—	—	—
サ ラ	—	—	—	1.8	—	—
そ の 他	2.3	—	10.8	—	5.7	5.7
無 回 答	4.7	5.9	5.4	—	—	—

表10 ひざのさら

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘導前	誘導後
ヒザガシラ	2.3	—	—	—	—	—
ヒザコゾー	—	2.9	2.7	—	—	—
スネコゾー	—	—	2.7	—	—	—
スネボーズ	2.3	2.9	2.7	—	—	—
スネボン	7.0	—	—	—	—	—
スネボンサン	2.3	—	8.1	—	—	—
ボンサン	2.3	—	—	—	—	—
スネネ	2.3	—	—	—	—	—
サ ラ	27.9	8.8	32.4	14.3	69.8	73.6
オ サ ラ	4.7	23.5	10.8	32.1	5.7	22.6
スネノサラ	14.0	41.2	27.0	48.2	26.4	71.1
そ の 他	4.7	5.9	5.4	—	1.9	1.9
無 回 答	32.6	17.6	10.8	5.4	1.9	1.9

では気がつかなかったものである。このサラがCD・GH方式で回答が少なかったのは、CD・GH方式が参考語形をあげる方式であり、しかもその参考語形の中にこの語形が含まれていなかつたために、他の参考語形として掲げた語形に回答が集中してしまったからではないかと思われる。つまり、「ひざのさら」の場合には、オサラやスネノサラが参考として示されているため、日常的にはただサラとだけ言う人でもオサラやスネノサラを回答してしまったという事情のようである。このように、参考語形を提示することにより、それに影響されて実際に使用する形が報告されにくくなる場合があることがわかる。

なお、表9「ひざがしら」において、スネがAB・EF方式で回答されているのは、面接調査でこの語形が全く現れていないことからすると、「すね」と混同された疑いが考えられる。しかし、平山輝男編『全国方言基礎語彙の研究序説』(1979年・明治書院) 583・585ページによれば、岡山県では「ひざがしら」をスネと呼ぶ地域も存在するようであるから、表9のスネも誤答とは言い切れない。むしろ、上で見た「ひざのさら」のサラ同様の事情により、実際には使用されているスネの回答が、CD・GH方式で抑えられてしまった可能性が残る。

(1-3) 「すっぱい(うめぼし)」「すっぱい(夏みかん)」

結果を表11・表12として示した。2つの表を見比べていただければわかる通り、両者の回答結果にそれほど目立った差はない。特に、面接調査では、うめぼしの場合も、夏みかんの場合も、スッパイとスイーの類がほぼ同程度に回答されており、違いは見られない。ところが、詳細に見ると、通信調査の中でもCD・GH方式、特に前者において、うめぼしの方がややスイーの類の回答が多く、逆に夏みかんの方がスッパイの回答が多くなり、両項目で差の現れていることに気づく。

面接調査の結果を最も方言の実態をとらえたものとみなすならば、スッパイとスイーとで意味的な使い分けが、津山では存在しないということになろう。しかし、この場合はかならずしもそうではなく、通信調査のCD・GH方式がとらえたように、スッパイとスイーとで意味差が存在しているのでは

表11 すっぱい（うめぼし）

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
スッパイ	7.0	11.8	13.5	19.6	34.0	52.8
ス イ	2.3	—	—	1.8	—	—
ス イ 一	81.4	73.5	81.1	78.6	96.2	100
ス イ イ 一	2.3	11.8	—	10.7	1.9	18.9
ス 一 イ	2.3	—	—	1.8	—	—
スーイー	2.3	—	2.7	—	—	—
ショーパイ	2.3	—	—	—	1.9	1.9
無 回 答	2.3	8.8	2.7	—	—	—

表12 すっぱい（夏みかん）

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
スッパイ	—	26.5	10.8	23.2	32.1	50.9
ス イ	2.3	—	5.4	1.8	—	—
ス イ 一	86.0	58.8	81.1	71.4	94.3	98.1
ス イ イ 一	4.7	14.7	—	10.7	—	13.2
ス 一 イ	2.3	—	—	—	—	—
スーイー	2.3	—	—	—	1.9	1.9
無 回 答	2.3	5.9	2.7	1.8	—	—

ないかと思われる。もちろん、その差は、数字の上からは微妙なものであることは明らかだが、うめぼしと夏みかんとでスイーとスッパイを使い分けたり、あるいはそれが完全なものでなくどちらにもスイーとスッパイの両方を使うとしても、うめぼしにはスイーをよく用いるが夏みかんとなるとスイーは使いやすくスッパイを多く使用する、という人たちが、津山にもいるのではないかと考えられる。

ただし、こうした実態を、なぜ通信調査のC DやG Hの方式が把握し、面接調査も含めて他の方式がとらえられなかったのかはよくわからない。C D・G H方式はスッパイとスイーを参考語形としてあげてあり、回答者がそれを比較して両語形の意味的な違いを内省することが、A BやE F方式より容易

であったのかもしれない。また、面接調査は通信調査に比べれば、回答に至る内省の時間が十分与えられているとは言えず、スッパایとスイーの微妙な意味差が内省しきれなかったことも考えられよう。

以上のように見えてくると、細かい意味差をもつ項目を調べるときには、かえって通信調査の方が適切な場合もあるのではないかと思われてくる。

(1-4) 「こおる(水が^リ)」「こおる(手拭が^リ)」「こおる(大根が^リ)」

細かな意味差をもつ項目として、「こおる」の一連の項目についても一瞥しておこう。表13・14・15に結果を示した。

「こおる」については水・濡れた手拭・大根の3つの場合を調べている。津山では、それぞれの項目に別々の語形が使い分けられるのではなく、およそ次のように重なりあった語形の使用がなされていると、予備調査・面接調査や『日本言語地図』から判断された。

水—コール・コゴル、手拭—コゴル・シミル、大根—シミル

通信調査の結果を見ると、表13の水の場合、CD方式のシミルの割合が他の方式と比較すると目立ち、また表15の大根の場合、AB・CD方式のコゴルの割合がやはり他より高くなっている。これらの点は、上で認めた使用状況からはややはざれる部分である。しかし、全体として見れば、通信調査法の結果も、上に示したようなコール・コゴル・シミルの使われ方をよくとらえており、その点は面接調査法に劣るとは言えない。

むしろ、表14と表15のシミルの割合を比較していただければわかる通り、面接調査法の場合、誘導後の数値がともに100%に近く、手拭と大根とでシミルの使われやすさの違いがかき消されてしまっている点は問題と思われる。誘導は、特定の意味においてある語形が使用されるか否かのみを確認しようとするものであり、その使用頻度までは問題にしないことが多い。したがって、微妙な意味差をもつ複数の項目にその語形が使用されたとしても、どの項目で使われやすく、どの項目では用いられにくいかというような点は、このシミルのケースのように、かえって誘導によって不明になってしまう場合がありうると考えられる。

表13 こおる(水が)

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
コ 一 ル	48.8	64.7	51.4	57.1	64.2	94.3
コ ゴ ル	27.9	32.4	27.0	46.4	45.3	77.4
シ ミ ル	2.3	14.7	5.4	1.8	3.8	3.8
イ テ ル	2.3	—	—	5.4	—	—
コーリガハル	9.3	—	8.1	—	—	—
そ の 他	2.3	—	5.4	—	3.8	3.8
無 回 答	11.6	2.9	5.4	—	—	—

表14 こおる(手拭が)

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
コ 一 ル	16.3	26.5	10.8	16.1	15.1	39.6
コ ゴ ル	18.6	26.5	18.9	33.9	26.4	60.4
シ ミ ル	55.8	52.9	64.9	46.4	77.4	94.3
イ テ ル	2.3	2.9	—	3.6	1.9	1.9
ボーニナル	—	—	5.4	3.6	—	—
カチカチニナル	4.7	—	—	5.4	1.9	1.9
そ の 他	4.7	—	2.7	—	—	—
無 回 答	9.3	8.8	2.7	—	—	—

表15 こおる(大根が)

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
コ 一 ル	7.0	14.7	5.4	7.1	1.9	1.9
コ ゴ ル	16.3	14.7	2.7	5.4	1.9	1.9
シ ミ ル	74.4	67.6	86.5	89.3	92.5	98.1
イ テ ル	2.3	2.9	2.7	3.6	—	—
そ の 他	2.3	—	10.8	—	3.8	3.8
無 回 答	4.7	5.9	—	—	1.9	1.9

(2) 混同を起こしやすいと思われる項目

(2-1) 「おにごっこ」「かくれんぼ」

結果を表16・17として示した。『日本言語地図』および予備調査・面接調査から、「おにごっこ」と「かくれんぼ」の2つの意味は津山では区別され、前者がオニゴト、後者がカクレゴトというのが古い言い方、新しくは、オニゴッコとカクレンボであると判断した。そして、表16・17から明らかに、「おにごっこ」と「かくれんぼ」の名称の区別は、通信調査においてもとらえることができ、両者を混同するケースはほとんどなかった。表16「おにごっこ」でA B方式にシンヤトリ、C D方式にカクレンボが誤答されているが、その割合はわずかである。また、表17「かくれんぼ」でE F方式にオニゴッコ・オニゴト、G H方式にオニゴトが見られるが、この割合もわずかである。ただし、「かくれんぼ」については、それを「おにごっこ」の一種とみなし、総括的には「おにごっこ」と同じ名称で呼ぶ地域も全国的に見れば存在し、表17のオニゴッコ・オニゴトもその現れではないかという疑いもあるが、この点ははっきりしない。

(2-2) 「指にささる竹や木のとげ」「いばらや、さんしょうのとげ」

結果を表18・19として示した。『日本言語地図』や予備調査・面接調査をもとに、津山では、「指にささる竹や木のとげ」をソゲ、「いばらや、さんしょうのとげ」をグイないしはイガと呼ぶのが俚言の体系であると考えた。そして、この区別は、表18・19を見る限り通信調査でもほぼとらえられており、両者の意味が混同されることはありませんでした。表18で、A B方式にグイ、C D方式にイガ、表19でC D・G H方式にソゲが見られるが、それら混同例と思われるものはわずかにすぎない。

ところで、質問として立てた2つの「とげ」の間ではほとんど混同がなかったものの、「いばらや、さんしょうのとげ」については、面接調査で注意すべき情報が得られた。すなわち、この意味に対応する津山の俚言と考えたグイおよびイガという語形は、別の意味を表すと答えたインフォーマントが大勢いたことである。

まず、グイについては、「とげ」そのものではなく、「とげ」をもった植物

表16 おにごっこ

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
オニゴッコ	34.9	70.6	54.1	58.9	66.0	73.6
オニゴト	41.9	38.2	51.4	44.6	39.6	52.8
シンヤトリ	2.3	—	—	—	—	—
カクレンボ	—	2.9	—	—	—	—
その他の	9.3	—	—	3.6	5.7	5.7
無回答	16.3	2.9	—	—	—	—

表17 かくれんぼ

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
カクレンボ	46.5	82.4	67.6	78.6	67.9	75.5
カクレンゴ	—	—	—	1.8	—	—
カクレゴト	23.3	17.6	24.3	16.1	30.2	45.3
カクレゴッコ	2.3	5.9	—	1.8	—	—
カクレヤイコ	4.7	—	—	1.8	—	3.8
オニゴッコ	—	—	2.7	—	—	—
オニゴト	—	—	2.7	7.1	—	5.7
その他の	2.3	—	2.7	—	—	1.9
無回答	23.3	5.9	—	—	—	—

表18 指にささる竹や木のとげ

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
ト ゲ	37.2	58.8	51.4	55.4	58.5	69.8
ソ ゲ	30.2	61.8	51.4	57.1	45.3	83.0
グ イ	2.3	—	—	—	3.8	3.8
イ ガ	—	2.9	—	—	1.9	1.9
サ サ ラ	—	8.8	—	—	—	—
サ サ ル	11.6	—	—	—	—	—
タ ツ	2.3	—	—	—	—	—
その他の	—	—	—	1.8	1.9	1.9
無回答	20.9	2.9	—	—	—	—

表19 いばらや、さんしょうのとげ

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
ト ゲ	37.2	32.4	62.2	57.1	64.2	84.9
ソ ゲ	—	5.9	—	3.6	—	—
グ イ	23.3	55.9	32.4	32.1	34.0	62.3
イ ガ	9.3	20.6	8.1	21.4	22.6	34.0
イ ラ	—	—	2.7	—	—	—
サ サ ル	9.3	—	—	—	—	—
無 回 答	23.3	8.9	—	—	—	—

である「いばら」のことをグイと呼ぶというインフォーマントが全体の24.5%いた。また、イガについては、いばらやさんしょうではなく、「栗のいが」ならイガと呼ぶという回答をした人が30.2%にも及んだ。これらのインフォーマントは、「いばらや、さんしょうのとげ」については、トゲを用いると回答している場合が多かった。表18と19の面接調査におけるトゲの回答率を比較して後者にトゲの割合が高いこと、および表19内でのトゲの回答率がグイやイガを上回ることが、その事情を反映している。もし、トゲが共通語化によるものではなく、古くから「いばらやさんしょうのとげ」を指すことばとして使用されており、またグイは「いばら」を、イガは「栗のいが」を指すのが本来の体系であるとしたら、通信調査でその体系を最もよくとらえているのは、トゲの回答が多く、グイ・イガの回答が少ないという点で、E F方式であると言える。C D方式のグイ・イガ、およびG H方式のイガの回答率が高いのは、参考語形の影響によるものと思われるが、上で見たように、グイ・イガが本来この質問から意味的にはずれた語形であるとしたら問題であろう。この参考語形と意味のずれの問題については、後ほど「しかえし」を例に詳しく考えたい。

質問項目として示した2つの「とげ」の混同ということではないが、それぞれの項目の意味が十分理解されなかった場合があるという点について、最後に触れておく。すなわち、表18・19を見ると両項目ともA B方式において、ササル（ササッタ・サシタを含む）・タツという、とげがどうするの部分にあ

たる動詞を答えている回答者が1割ほどいることがわかる。これらの項目は、共通語翻訳式の場合、両者の区別が明確に理解されるようにとの配慮から「指にささる竹や木のとげ」「いばらや、さんしょうのとげ」のように説明的な表現をとった。しかし、調査票をご参照いただければわかる通り、原則として共通語の単語を掲げそれを翻訳してもらう形式の連続の中で、突然このような長い表現が現れることになり、それが回答者の理解をさまたげたのではないかと考えられる。同じ共通語翻訳式でもCD方式の場合は参考語形が付されているため、そうした誤解はおこりにくかったと思われる。

ただし、先にグイという語形の意味のずれのことを取り上げたが、CD方式でグイの回答率がとりわけ高いのは、「いばらや、さんしょうのとげ」という質問の前半部分に注目した回答者が、これを「いばら」の名称を回答すればよいととりちがえ、かつ参考語形のグイに目がとまることにより、いきおいそれを答えてしまったという事情があったのかもしれない。もしそうならば、読点の使い方をはじめ質問の表現のまざさが、回答者の誤解を生んだことになる。

(3) 抽象的概念の項目

(3-1) 「しかえし」

結果を表20として示す。最初は、予備調査などの結果からアテグレやアタリガケという言い方が、「しかえし」を表す津山の俚言と認めた。したがって、通信調査の参考語形にも、アテグレとアタリガケを加えておいた。その結果、表20から明らかな通り、参考語形をあげるCD・GH方式では、アテグレとアタリガケが回答に現れ、特にアテグレは3人に1人が答える結果となった。これは、参考語形をあげないAB・EF方式で、アテグレとアタリガケが全くといってよいほど回答されていないと対照的である。参考語形の提示が俚言を引き出すのにいかに有効に働くか、それを示す一例と表面的には思えた。

面接調査においても、誘導によりアテグレやアタリガケを使うという回答がいくらか得られた。ところが、これらの語形を誘導した際に、アテグレや

表20 しかえし

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
シカエシ	32.6	38.2	45.9	50.0	56.6	84.9
カタキウチ	14.0	11.8	5.4	17.9	11.3	39.6
シッペガエシ	14.0	—	—	—	3.8	5.7
ヤリカエシ	4.7	—	—	—	3.8	5.7
フクシュー	—	—	2.7	—	—	—
ア ダ	—	5.9	2.7	3.6	1.9	1.9
アテグレ	2.3	32.4	—	32.1	—	18.9
アタリガケ	—	11.8	—	14.3	—	5.7
シカエシオスル	—	—	10.8	—	—	—
カタキオウツ	4.7	—	2.7	—	—	—
カタキオトル	4.7	—	18.9	1.8	5.7	5.7
ヤリカエス	2.3	—	2.7	—	5.7	5.7
ヤリアゲル	—	—	2.7	—	—	—
ヤツツケル	—	—	2.7	—	—	—
ヤッチャル	—	—	—	1.8	—	—
そ の 他	—	8.8	5.4	—	—	—
無 回 答	20.9	5.9	2.7	—	3.8	3.8

アタリガケの意味が、質問の「しかえし」からはややすれられているのではないかということに気がついた。つまり、アテグレやアタリガケを、「しかえし」の意味では使わないが、「やつあたり」の意味ならば用いるというインフォーマントが現れてきたのである。そのようなインフォーマントは、集計の結果、アテグレで全体の56.6%，アタリガケで13.2%にも及ぶことがわかった。

これは、結局、アテグレやアタリガケが津山では「やつあたり」の意味を中心に使用されており、「しかえし」という調査項目とは意味がずれていることを表す。にもかかわらず、通信調査のC D・G H方式でこれらの語形が多く回答されたのは、その意味が「しかえし」から全くはずれるわけではないという微妙な位置にあるために、参考語形を見せられた回答者が、それについてこれらの語形を選んでしまったためと考えられる。それらの回答者の中には、必ずしも質問の「しかえし」とぴったり一致しないという意識をい

だきながらも、参考語形としてあがっているのだからかまわないのでないかとの判断から、アテグレやアタリガケを回答した人たちがいるはずである。こうした事情が、通信調査票の上に記されることはほんんどないため、C D・G H方式では、アテグレやアタリガケをそのままこの質問の意図に見合う語形として処理してしまう恐れが十分あったと言える。

参考語形は、回答者に忘れかけていた俚言を思い出させ、その土地の俚言の回答率を高めるのに効果があるが、「しかえし」の場合のように、意味のずれた語形が回答されてしまう危険性があることも、十分承知しておかなければならぬことがわかった。語形 x が a 地域においては調査項目の意味と対応する語形であっても、b 地域においては意味がずれているということは、方言の世界によく認められる現象である。したがって、調査地域が a b 両地域にまたがる場合、語形 x を参考語形として掲げるとしたら、b 地域の回答者にその意味のずれを明確に認識してもらうような工夫が、通信調査では特に必要ということになろう。

さて、表20を見てわかる通り、この項目では実に多種類の語形が答えられている。これは、「しかえし」にちょうど対応するような俚言形が津山にないため、関連する様々な語形が回答されたためと考えられる。特に E F 方式の場合には、こちらの期待する名詞形ではなく、カタキオトル、ヤリカエス、ヤリアゲルなど動詞の形が目立った。E F 方式は謎々で尋ね参考語形は示さない方式であり、使用した謎々は、

ひどい目に、あわされた人が、こんどは逆に相手を同じような目にあわせることを何と言いますか。

というものであったが、この質問のみでは名詞形を答えるのか動詞形を答えるのか、回答者にとってはっきりしなかったらしい。したがって、通信調査において謎々のみで質問しようとする場合には、語彙的な意味の他に、品詞性についても回答者がよく理解できるようにしておかなければならぬことになる。あるいは、こうした問題を避けるためには、必ず参考語形を掲げたり、謎々に共通語形を併用した質問をつくるのも効果があるのではないかと考えられる。

(3-2) 「からかっていじめる」

抽象的概念の項目として、もう一つの「からかっていじめる」の場合を見てみる。この質問で聞こうとしたのは、暴力的に弱者をいためつけることではなく、言語行為によって精神的なダメージを与えるようないじめであり、『中国地方五県言語地図』や予備調査によれば、津山にはこの意味に対応する俚言として、ヘベスが存在すると考えられた。

結果は表21に示した。参考語形を付したC D・G H方式と付さないA B・E F方式を比較してみてわかる通り、参考語形がヘベスの回答を引き出すに相当の効果をあげていることがわかる。この場合には、先の「しかえし」のアテグレやアタリガケと異なり、面接調査の際にもヘベスは質問と意味がずれているというような指摘は受けず、参考語形の効果をそのまま評価してよいものと考えられる。

それにしてもA B・E F方式のヘベスの回答率はC D・G H方式に比べて極端に低いが、これは抽象的概念の項目において、質問のポイントを回答者

表21 からかっていじめる

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
カラカウ	11.6	2.9	—	1.8	1.9	3.8
イジメル	7.0	8.8	18.9	7.1	41.5	43.4
カラカッティジメル	11.6	—	—	—	—	—
ヘベス	14.0	73.5	18.9	75.0	37.7	98.1
イタメル	—	5.9	2.7	10.7	—	26.4
セビラカス	—	—	—	3.6	—	—
セリヤウ	2.3	—	2.7	—	—	—
アラソウ	9.3	—	13.5	—	—	—
トリアウ	11.6	—	13.5	1.8	—	—
ヒョータグル	4.7	—	8.1	—	1.9	1.9
ヤッチャル	4.7	—	2.7	—	1.9	1.9
ソビオカウ	4.7	2.9	—	3.6	3.8	3.8
チョッカイオダス	4.7	—	2.7	—	1.9	1.9
そ の 他	11.6	2.9	18.9	5.4	11.3	15.1
無 回 答	16.3	5.9	8.1	—	—	—

に伝えることがいかに難しいかを示すものであろう。A B・E F方式の回答では実に様々な語形が回答された。それらの語形の意味の違いについて詳しく吟味する資料はもちあわせていないが、遊び半分に相手の気を引こうとしてちょっかいを出すというような意味のものから、力づくで虐待したりけんかをするというような意味のものまで、幅広い語形が回答されているようである。本調査を行ってみて判明したことだが、現実には、いじめるということに関して、複数の語形が微妙な意味差を伴って使用されているのが津山の実態と思われる。そして、そのような状況の場合、よほど注意して質問文を作らないと、こちらの意図した内容に的確に対応する語形が得にくいということがわかった。その際、参考語形を添えるということが相當に効果のあることは、このヘベスの事例からも知られるが、しかし、もし別な地域ではヘベスをやや異なる意味で使用するという場合、今度は、その地域で意味がずれているにもかかわらず、参考語形に引かれてヘベスが回答されてしまうという危険が生じてくることは、先の「しかえし」の項目での検討から、予想されることである。

なお、以上のような抽象的な概念の調査が難しいことは、面接調査についても同様である。表21の面接調査の結果を見て明らかに、誘導前にはヘベスの回答率はそう高くなく、またヘベス以外のいろいろな語形が回答されてしまっていることがわかる。もちろん、その程度が通信調査ほど問題にならないものであることも確かだが、面接調査が直接インフォーマントと接するという利点を生かして回答語形の意味の取扱いに慎重に調査を進めないかぎり、事情は同じであろう。

(4) 共通語形と俚言形の形態が類似する項目

(4-1) 「かかし」

表22に結果を掲げた。「かかし」を表す津山の俚言は、『日本言語地図』や今回の予備調査・面接調査からカガシと判断された。オドシは、津山では、「かかし」を含めた鳥威しの総称か、あるいは「かかし」を除くその他の鳥威しの意味に使われることが多いと考えられるが、それはさておき、ここではカ

表22 かかし

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
カ カ シ	14.0	2.9	5.4	—	3.8	3.8
カ ガ シ	65.1	88.2	91.9	87.5	96.2	98.1
オ ド シ	4.7	5.9	2.7	10.7	15.1	30.2
そ の 他	—	—	2.7	1.8	1.9	1.9
無 回 答	16.3	5.9	—	7.1	—	—

カシとカガシの関係に注目したい。

さて、カガシは通信調査のC D・E F・G H方式のいずれにおいてもよくとらえられており、その回答率は、面接調査の値にせまるほどの高成績を示している。ところが、A Bの共通語翻訳一参考語形無しの方式のみ、他より20%以上回答率が低いことがわかる。これは、一つには無回答の割合が他より高いためと考えられるが、カカシと濁らない形を答えた回答者が多いことも関係であろう。

すなわち、この項目の場合には、津山の俚言形であるカガシと共通語形であるカカシとが、形態的にきわめて類似している。この程度の微妙な差は、言語感覚の特に鋭い人でもないかぎり、普段から気がついているということは少ないであろう。したがって、共通語翻訳式であるA B方式の場合、「かかし」という質問を示された回答者が、実際にはカガシを使用するにもかかわらず、質問に引かれてカカシを答えてしまったということは、十分考えられることである。同じ共通語翻訳式のC D方式がそうならなかったのは、参考語形としてカガシがあげられていたためと考えられる。

このように、俚言形が共通語形に近い形態のときは、共通語形のみを提示し俚言に置き換えてもらう方式には、若干の危険があることが指摘できる。

なお、これと同様の傾向は、表は省略するが「おおばこ」についても見られ、津山の俚言形オバコに対する共通語形オーバコの割合が、A B方式では他の方式よりやや高くなっている。また、後に取り上げる表24「しおからい」において、津山の俚言であるカライに対して共通語形シオカライの割合がA

B方式においてとりわけ高くなっているのも、同じ事情によるものと思われる。

(4-2) 「よだれ」

俚言形と共通語形とが類似しているにもかかわらず、上で見てきた項目と異なる傾向を示すのが「よだれ」である。表23に結果を掲げたように、共通語翻訳—参考語形無しのA B方式でヨダレが最も少なく、謎々一参考語形無しのE F方式において最も多くなっている。

その理由については明確なことは言えないが、次のような事情が考えられる。つまり、表23の面接調査の結果を見ると、「かかし」のカカシの場合とは異なり、ヨダレはその回答率が誘導前で3割を越え、共通語形と言っても日常の言語生活で実際に用いられることのある語形と思われる。したがって、この場合には回答者が、「よだれ」の名称としてヨーダレとヨダレの両方があることに気づいている可能性があろう。そのような状況において、A B方式ではヨダレの方を質問として掲げたために、回答者はそれを別な形に直そうと努力し、結果としてヨダレの回答率が低くなったものと考えられる。一方、E F方式においては、他の方式と異なり、ヨダレ・ヨーダレの両方とも回答者の前には提示されないため、ヨダレを答える回答者も相当現れることになったのだと思われる。C DやG Hの参考語形を掲げる方式では、それによってヨダレとヨーダレのどちらが方言的かを内省する契機が与えられ、ヨーダレの回答が多くなったが、E F方式ではその点の内省が十分ではなかったものと考えられる。

表23 よだれ

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
ヨ ダ レ	11.6	20.6	37.8	28.6	32.1	50.9
ヨーダレ	76.7	79.4	64.9	73.2	71.7	88.7
ユ ダ レ	—	2.9	—	—	—	—
ユーダレ	2.3	—	—	—	—	—
そ の 他	2.3	—	—	—	3.8	3.8
無 回 答	7.0	2.9	2.7	—	—	—

このように、俚言形と共通語形とが類似する項目でも、その使用状況によっては、共通語翻訳一参考語形無しの方式で、必ずしも共通語形に引かれた回答が増えるというわけではないこともわかる。

(5) 転訛形の出現が期待される項目

「しおからい」

表24に「しおからい」の結果を掲げた。面接調査その他から、津山の俚言形はカライであると認められたが、ここではそのライの部分の連母音の融合について問題にしてみたい。

岡山県の場合、連母音 ai については南部では融合が起るが、津山を含む北部は融合を起こさない地域と言われている。『日本言語地図』第39図「しおからい」においても、南部が KAREE や KARYAA であるのに対して、北部は KARAI とされている。ところが、今回の予備調査では、ai に軽い融合が確認され、これはカライのみでなく、タカイ（高い）やダイタ（出した）にも見られた。したがって、津山にも融合現象が存在することが予想され、それが通信調査でどの程度まで回答されるか調べてみることにしたわけである。実際、面接調査では、表24から明らかな通り、カレー ([karæ:] [kare:]) と

表24 しおからい

方 式 語 形	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
シオカライ	39.5	11.8	10.8	3.6	17.0	49.1
シオガライ	—	26.5	—	23.2	3.8	41.5
カライ	20.9	44.1	81.1	60.7	81.1	92.5
シオカレー	—	2.9	—	—	1.9	1.9
シオガレー	—	5.9	—	3.6	1.9	1.9
カラ一	2.3	11.8	—	8.9	—	—
カレ一	—	2.9	—	5.4	9.4	11.3
カリヤ一	—	—	—	1.8	—	—
ショッパイ	9.3	—	5.4	—	11.3	11.3
そ の 他	14.0	—	2.7	1.8	1.9	1.9
無 回 答	20.9	5.9	2.7	—	—	—

発音する人が確認された。

さて、通信調査の A B · E F 方式においては、融合形はカラーの 1 例を除いて全く回答されていない。一方、C D · G H 方式においては、カラー・カレー・カリヤーの他シオカライの融合形まで含めると 2 割ほどの人たちが融合形を回答していることがわかる。C D · G H 方式では、カラー・カレー・カリヤー・シオガレーを参考語形として掲げてあり、これが融合形的回答を引き出すのに効果があったものと考えられる。ただし、回答がカラーとカレーとに割れたのは、実際の発音が [karæ:] [kare:] のようなアとエの中間的な発音であるためと考えられるが、このような微妙な母音を回答者が、例えば「アエ」「エア」のようにより詳しく記してくれることを期待することは、難しいと言えよう。

ところで、このような転訛形を問題にするには、津山はかならずしも適切な調査地点であったとは言えないようである。というのは、面接調査の結果を見ていただけわからぬ通り、ai の融合形はあまり回答されておらず、結局従来の指摘通り津山はそれほど ai の融合の活発な地域ではなかったと言える。転訛形の回答状況を詳しく見るためには、転訛の活発な地域であらためて実験的な調査を行う必要がある。

なお、「高い(物)」の調査結果についても一言しておけば、「しおからい」同様 C D · G H 方式において、タケーなどの転訛形的回答が見られ、その割合は「しおからい」の場合よりも多く、3 割に及んだ。これは、実際の連母音の融合の起こりやすさが、語によって異なることの現れかもしれない。

(6) より口語的な省略形の出現が期待される項目

「せともの」

結果を表25として示した。表中の語形のうち、津山の俚言と認められるのは、カラツモノ（カラツモンを含む）とカラツである。両者の違いの一つは文体差にあるようで、カラツモノは多少上品な言い方、それに対してカラツは日常ふだんに用いる話しことばと考えられる。

このカラツという語形の回答率を見ると、A B の共通語翻訳－参考語形無

表25 せともの

方 式 語 形 \	通 信 調 査				面 接 調 査	
	A B (共・無)	C D (共・有)	E F (謎・無)	G H (謎・有)	誘 導 前	誘 導 後
セトモノ	14.0	47.1	21.6	35.7	43.4	73.6
カラツモノ	11.6	17.6	16.2	21.4	20.8	62.3
カラツ	76.7	58.8	37.8	55.4	75.5	96.2
ヤキモノ	2.3	2.9	13.5	8.9	7.5	11.3
トーキ	2.3	—	5.4	1.8	3.8	3.8
ドンブリ	—	—	2.7	—	—	—
ドビン	—	—	2.7	—	—	—
その他	—	—	2.7	1.8	1.9	1.9
無回答	2.3	5.9	8.1	—	—	—

しの方式が通信調査法の中では最も高い値を示していることがわかる。参考語形をあげた C D · G H 方式が、参考語形をあげない A B 方式に及ばない点は、他の多くの項目と大きく異なる点である。

こうした結果となった理由の一つとしては、面接調査のカラツの回答率からも明らかな通り、カラツが現在も活発に用いられている生きた俚言であり、回答者が「せともの」という共通語形を示されたときに、それをカラツに置き換えることが容易であったためと考えられる。これに対して、参考語形を掲げた C D · G H 方式では、カラツモノやセトモノに注意がうぶわれ、結果として回答が分散し、カラツの回答率が A B 方式より低くなったものと理解される。もちろん、カラツモノも津山の俚言であることにかわりはなく、これは参考語形をあげた C D · G H 方式で A B 方式よりやや回答率が高くなっている。しかし、日常最も普通に使うカラツを、いちばんよくとらえたという点では、やはり A B 方式が有効であったと言える。

ところで、同じく参考語形をあげない E F 方式では、A B 方式と異なりカラツの回答が最も少なくなっている。これは、E F 方式が A B 方式のように共通語形を示さず謎々で尋ねる方式であるため、A B 方式に比べてセトモノを答える人がやや多かったことが一つの理由と考えられる。また、ヤキモノ・トーキなど文章語的な言い方が答えられてしまったり、質問の内容がよく理

解されず、ドンブリ・ドビンなど具体的な名称の答えが目立ったためもある。

以上によれば、日常有力な俚言については、参考語形を掲げず、共通語形のみを示すという直接的な聞き方の方が、俚言を採集しやすい場合もあることがわかる。もちろん、調査地域が広範囲にわたり全地域の俚言の状況が不明の場合は、各地に日常有力な俚言が存在しているとは限らないため、この方式が必ずしも適当とは言えない。

なお、表は省略するが、より口語的な語形の出現が期待される項目として、もう一つ調査票にいれておいたものに「とうもろこし」があった。ナンバキビよりナンバが口語的な形と考えたわけだが、結果は「せともの」の場合とは異なり、顕著な差が現れなかった。理由は明確ではないが、面接調査においてナンバとナンバキビが同程度に回答されている点、ナンバキビよりナンバが特に日常的な表現だというわけでもないらしく、それがカラツの場合とは異なる回答傾向を示させたのかもしれない。

(7) その他の項目

「きのこ」と「たこ」

表26に「きのこ」の結果を、表27に「たこ」の結果を示した。この2つを比較することにより、参考語形の有無と俚言形の回答状況との関係についてあらためて考えてみたい。

まず、「きのこ」の場合、津山の俚言形はタケであり、これが現在でも活発に使用されている俚言であることは、面接調査の結果が示す通りである。通信調査法の結果に目を転じてみても、タケはどの方法においても面接調査と同程度によくとらえられており、方式間の差はほとんど見られないと言ってよい。

一方、「たこ」の場合、現在では津山でも共通語形タコを使うことが多いようであり、タコの回答率は相当に高くなっている。このタコに対して、今では衰退しつつあるが、少なくとも回答者の子供時代やその親の世代が使用していたと考えられるのがイカである。昭和30年代調査の『日本言語地図』の

表26 きのこ

方式 語形	通信調査				面接調査	
	AB (共・無)	CD (共・有)	EF (謎・無)	GH (謎・有)	誘導前	誘導後
キノコ	2.3	—	5.4	7.1	9.4	9.4
タケ	95.3	94.1	89.1	96.4	94.3	98.1
ゾータケ	2.3	—	5.4	1.8	17.0	18.9
クソタケ	—	—	—	2.7	—	—
その他	4.7	—	—	1.8	3.8	3.8
無回答	—	5.9	—	1.8	—	—

表27 たこ

方式 語形	通信調査				面接調査	
	AB (共・無)	CD (共・有)	EF (謎・無)	GH (謎・有)	誘導前	誘導後
タコ	62.8	85.3	73.0	87.5	96.2	98.1
イカ	14.0	20.6	10.8	26.8	24.5	47.2
その他	4.7	8.8	21.6	3.6	—	—
無回答	23.3	2.9	—	3.6	—	—

津山がイカを載せ、面接調査の際の回答者の内省でもイカが古く、タコを新しいと判断している。つまり、調査によって知りたい津山の俚言は、イカということになる。

さて、そのイカの回答率はタコに比べるとかなり低い値を示している。しかし、通信調査の4つの方式を比較してみると、CD・GHの参考語形をあげた方式の方が、AB・EFの参考語形をあげない方式よりイカの回答率が2倍ほど高くなっているのがわかる。これは、やはり、回答者が参考語形を見ることによって、忘れかけていた俚言形を思い出したことが大きな理由と考えられ、参考語形が有效地に働いた事例と認めることができる。

以上の「きのこ」と「たこ」との比較からは、次のようなことが言えると思う。つまり、タケのように現在も生活語として生き、使用されることの多い俚言形は、どのような方式によってもよくとらえることができる。参考語形としてその俚言形を示すか示さないかということにもあまり結果が左右されない。それに対して、イカのように衰退の途上にある俚言や、今まさに忘

れ去られようとしている俚言の場合には、参考語形としてその俚言を回答者の前に提示することが、その語形を回答されやすくするという点において大きな効果を発揮する。したがって、少なくとも、文献上の語と対応するような古い語を方言の中に求めたり、あるいは、事物自体の衰退によりその名称も忘れられようとしているといった項目の場合には、参考語形を掲げるのが適当と考えられる。

2.4まとめ

以上、俚言の採集を目的とした通信調査法について、各種方式間の結果の差、および面接調査法の結果との違いを考察してきた。

まず、面接調査法と比較すると、通信調査法は今回試みたいずれの方式によっても、従来の常識通り俚言の回答率をはじめいろいろな面で及ばなかった。しかし、それも程度の問題であり、通信調査法が全く無効ということではなかった。むしろ、難しいと思われた細かな意味差をもつ項目のセットでも意外とよく語形が回答し分けられるなど、当初の予想に反して、俚言の把握は通信調査法によってもかなりの程度可能であることが明らかになったと言える。したがって、通信調査法を最初から顧みないのではなく、今後は、面接調査法との比較を通して洗い出された問題点に少しでも改良を加え、必要に応じて利用してゆくべきであろう。

次に、今回試みた方式の中では、冊子(封書)形式をとり、謎々で尋ね、参考語形をあげる調査票が、回収率・回答欄の埋まり方・俚言の回答率のいずれからみても面接調査の結果に一番近く、最も有効であると認められた。ただし、日常有力な俚言は共通語形のみを示すだけで十分回答されるとか、参考語形の提示は意味の微妙にずれた語形まで回答されやすくなってしまう傾向が見られるなど、俚言や項目の性格によっては、他の方式の方が適当な場合もある。したがって、例えば、あらかじめ項目ごとに求める俚言が定まっているときはその性格に応じて調査方式を変えてみる、などということも工夫されてよいかもしれない。

なお、以上のような調査方式と回答結果との関係については、この実験的

調査の結果によってのみ結論を下すのではなく、今回とは全く別の項目を取り上げた場合や、項目数をさらに増やした場合などで、追試を行ってみる必要があることは言うまでもない。^{注7}

3. 岡山県調査

3.1 岡山県通信調査の概要

3.1.1 目的

先に見た津山通信調査では、調査票の方式による結果の違いを明らかにするために、直接回答者に調査票が届くダイレクトメールの形をとった。しかし、方言地理学的な通信調査で広範囲にわたる方言分布を調べようとするときに、あらかじめ適切な回答者の情報を得ておくことは難しいであろう。したがって、実際には各地の公的機関などを通して調査を行う必要がある。そのような協力機関としてどこが適当であるのか、また協力機関を通すことによりどんな問題が生じてくるのか、岡山県通信調査ではそうした点を探ってみたいと考えた。

また、通信調査によって得られる方言分布とはどのようなものであり、面接調査により把握される分布と比べていかなる点に問題が見られるのか、それらの点の概観を得たいとも考えた。

3.1.2 調査方式

今回試みた調査方式は、岡山県内各地の公的機関に調査票を送り、こちらが指定した条件に合う適当な回答者を選定してもらった上、その人から回答をいただくという方式であった。その場合、公的機関内の高齢者職員を回答者とするもの（方式I）と、公的機関外に適当な老人を見つけてもらうもの（方式II）の2つを試みた。

協力を依頼した機関は、次の3つである。市町村役場（住民課）、中学校（国語科）、特定郵便局。

最初に、役場は各地に存在する公的機関の中では、このような調査に協力してもらえる可能性の最も高い機関として、まず候補に登ったものである。役場の中では住民課あてに調査票を送付した。教育委員会を選ばなかったのは、教育委員会には学歴の高い人が多く方言を答えてもらうにはやや不適当と判断したためである。^{注8} それ以外の部署ならどこでもよかったが、一応、住民と接触する機会の多そうな住民課に送ることにした。

次に、学校は、これまで小林好日氏の調査をはじめいろいろな通信調査を利用されてきているので、今回も取り上げた。中学校を選んだのは、県内の学校の総数の点で、調査対象として適当と考えたためである。また、国語科へ送付したのは、国語の先生がこのような調査に最も理解を示してくれるだろうと判断したからである。

最後に、郵便局は、法水正文氏が最近全国の「耳垢」の方言分布を調査するのに利用し一定の成果をあげているため、^{注9} 一つの候補として取り上げてみる必要があると考えた。郵便局の中でも特定郵便局は数が豊富で各地に分散し、しかも地元出身者が局長を勤めるケースが多いため、方言地理学的な調査には協力機関として適している可能性があると認めたのである。

さて、これら3つの機関すべてに、上で述べた職場内の高齢者職員を回答者とする方式Iを試みた。また、中学校については、生徒の祖父の中から回答者を選定してもらう方式IIも、別に試みた。

各協力機関には、調査票・返信用封筒（切手付き）とともに依頼の内容を記した、国立国語研究所長名の手紙を同封した。また、方式IIの場合には、機関あての依頼状の他、回答者あての依頼状も同封し、それと調査票・返信用封筒を回答者に渡してもらうことにした。使用した機関あて依頼状と回答者あて依頼状を282ページと283ページに掲げる。

調査票は1種類のみを用いた。先の津山調査で使用したG方式の調査票とそっくり同じものである。すなわち、形態は冊子形式で、質問法は謎々式をとり、各質問ごとに岡山県内で使用すると思われる語形を参考として示してある。項目も同じで、語彙35項目を収めている。詳しくは、津山通信調査のG方式のところをご参照いただきたい。

国研庶第 195 号
昭和59年10月11日

御中

国立国語研究所長
野 元 菊 雄



拝啓 時下ますますご清栄の段、お慶び申し上げます。さて、国立国語研究所では全国の方言について調査・研究を行っておりますが、このたび岡山県内数百地点について郵便による方言調査を計画いたしました。

つきましては、突然で失礼とは存じますが、同封の「方言記入票」の説明にしたがって、ご当地（貴職場周辺）の方言、それもなるべくご年配の方々の昔ながらの方言をお教えくださいますようお願い申し上げます。例えば、同じ職場の中でご当地出身のご年配の方がいらっしゃれば、その方から回答していただければ幸いです。方言集などは見ずに、なまの方言をご回答ください。

なお、記入がすんだ「方言記入票」は、お手数でも同封の返信用封筒に入れてご返送ください。誠にぶしつけなお願いで恐縮ですが、なにとぞご協力くださいますようよろしくお願い申し上げます。
敬 具

国研庶第 195 号
昭和59年10月11日

中学校国語科 御中

国立国語研究所長
野 元 菊 雄



拝啓 時下ますますご清栄の段、お慶び申し上げます。さて、国立国語研究所では全国の方言について調査・研究を行っておりますが、このたび岡山県内数百地点について郵便による方言調査を計画いたしました。

つきましては、お忙しい中恐縮ですが、お手数でも下記の条件に合う適当な方1名を、例えは生徒さんのご祖父などの中からご選定いただき、その方に同封の「方言調査についてのお願い」・「方言記入票」・返信用封筒の3点をお渡しくださいますようお願い申し上げます。

- ご当地（貴校周辺）に生まれ育ち、現在までよそに出たことのない方
- 男性の方
- 60歳以上の方

それでは、誠にぶしつけなお願いですが、なにとぞご協力くださいますようよろしくお願い申し上げます。

敬 具

機関あて依頼状（方式I）

機関あて依頼状（方式II）

方言調査についてのお願い

昭和59年10月11日

ご協力くださる皆様へ

国立国語研究所
言語変化研究部 第1研究室

拝啓 突然のお手紙で失礼いたします。

さて、国立国語研究所は、日本語についての国の研究機関ですが、その仕事の一つとして全国の方言についての調査研究を行っております。このたび、岡山県内数百地点の皆様に、こちらから質問紙をお送りし、ご自分の方言について回答していただきたいことになりました。

つきましては、ご多忙中とは存じますが、同封の「方言記入票」の説明にしたがって、ご自分が子供のころ使っていた方言を記入し、同封の返信用封筒に入れてご返送ください。結果は研究の資料にさせていただき、それ以外には使用しませんのでご安心ください（個人のお名前を公表することもいたしません）。

それでは誠にぶしつけなお願いで申しわけありませんが、なにとぞご協力くださいますようよろしくお願ひ申し上げます。

敬 具

回答者あて依頼状（方式II）

まず、役場については、津山調査すでに協力を得ている津山市役所を除く、岡山県内すべての市町村役場を対象とした。なお、岡山市と倉敷市は面積が広く、市役所の支所や出張所が置かれているのでそこも対象とした。それらを合わせると、調査票を送った役場の数は92となる。

次に、特定郵便局については、その数が相当にのぼるため、県内各地からの回答が均等に集まるようなバランスを考慮して、95地点を選定した。

最後に、中学校は、方式Iと方式IIの2種類を試みるため、県内の学校全体を2つに分け、それぞれ93校ずつとした。2分にあたっては、当然、地域のバランスを考え、方式Iと方式IIで偏りが生じないようにした。なお、津山市街地の中学校は対象から除いた。

調査票の発送は、1984年10月26日に、各機関あてに一斉に行った。

3.2 結果と考察

3.2.1 回収率

回答の回収は、1984年10月29日、すなわち調査票の発送から3日後に始まった。最終的に年を越した回答が数件あったものの、ほとんどの回答は同年の11月中に行われた。

各協力機関別の回収率を表28に掲げる。なお、送られてきた調査票がどの機関からの回答か不明なものが6件あったが、それは以下の分析からは除くことにした。また、協力機関のご誠意により、未記入の調査票を複写して複数の人たちから回答を集めてくださった地点があったが、それは1件と数えることにした。

表28から明らかな通り、各協力機関の回収率には、特にきわだった差は見られなかったものの、ある程度の違いは現れている。すなわち、方式Iでは、市町村役場からの回収率が7割を

表28 回収率

方式	協力機関	対象数	回収数	回収率(%)
I	役 場	92	67	72.8
	特定郵便局	95	59	62.1
	中 学 校	93	54	58.1
II	中 学 校	93	62	66.7

越え最も高く、それより10%以上低く特定郵便局、中学校の順となっている。また、方式IIも試みた中学校の場合を見ると、方式IIの方が方式Iより成績がよく、役場に次ぐ回収率を上げていることがわかる。

なお、公的機関を通じた場合の以上の平均回収率は約65%であるから、その点では、ダイレクトメールの形をとった津山調査のG方式の回収率とは、あまり違いがないことになる。

3.2.2 実際の回答者

まず、回答者の年齢について見てみる。図6に、協力機関別の回答者の年齢分布を示した。各方式とも生年不明の回答が数件あったが、それは除いてある。なお、生年の下に示した年齢は、調査を行った1984（昭和59）年のもとのである。

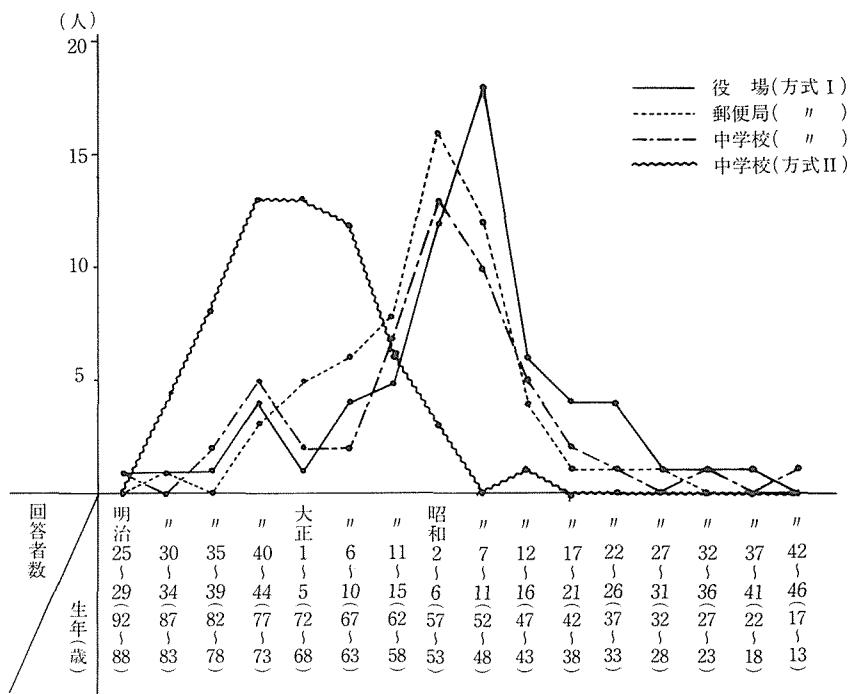


図6 回答者の年齢分布

一見してわかる通り、方式Iをとった役場、特定郵便局、中学校は似たようなパターンを示し、方式IIによった中学校の場合が、それとは大きく異なる傾向を見せている。このような違いが現れたのは、方式Iの方が、回答者の年齢条件として、職場内の「年配の方」という程度の指定しかしなかったのに対して、方式IIでは、「60歳以上の方」という具体的な条件を示したからではないかと考えられる。方式Iの年齢分布の山は、昭和一けた生まれのあたりにきているが、平均年齢を示せば、次の通りである。

役場—52.9歳　　特定郵便局—56.7歳　　中学校—55.8歳

これら公共機関の公務員の退職年齢を考えれば、たしかに、職場内の年配者として、これくらいの年齢の人たちが回答者に選ばれるのは当然と言える。最初は、こちらの意図に反してかなり若い人たちが回答者になったという印象を受けたが、それは公務員の退職年齢などを十分考慮に入れなかつたためである。

そして、方式Iのグラフが昭和一けた生まれのあたりをピークにしながらも、左右に相當に開いているのは、同じ職場内で適当な年配者が見つからなかつた場合、そこの退職者をはじめとして職場外に高齢の適任者を探したという協力機関の配慮の現れであつたり、あるいは、逆に、若くてもよいからとにかく同じ職場内で回答者を調達しようとした結果であると考えられる。

これに対して、方式IIをとった中学校の場合には、回答者の平均年齢は、70.1歳であった。「60歳以上」という条件にはずれる人は、回答者62人中わずかに5人であり、それらの人も、45歳の1名を除けばすべて50歳台の人たちである。こちらの指定した年齢条件は、方式IIにおいてはよく配慮していただいたと言える。

以上、回答者の年齢についてまとめれば、協力機関内の職員に回答者になってもらう方式では、その平均年齢が50歳台であり、これは俚言について回答を求める対象者としては、やや若すぎる感がある。一方、年齢を指定して職場外に適当な高齢者を探してもらう方式では、十分こちらの目的にそった回答者が得られることがわかつた。

次に、回答者の在外歴について見てみる。在外歴については、調査票のフ

エイスシートで、小学校卒業までの生育地と、それ以降の生活地について質問を行っている。

このうち、回答者の方言形成に特に大きな影響を及ぼすと認められるのは、小学校卒業までの生育地である。この機関をよその土地で過ごした回答者の報告には、その土地の俚言が混入してしまう恐れが強いので、回答者として適当ではない。また、小学校以降の在外歴も、あまり長期間では同じような恐れが生じる。

表29に、各協力機関の回答者の在外歴を示す。小学校以後の在外歴は、小学校まで現住所に生活していた人についてのみ集計する。なお、同じ市町村内での居住地の変更は、ここでは在外歴には数えなかった。

これを見ると、まず、小学校までよその市町村で生育した人の割合は、特定郵便局と中学校（方式I）で高く、役場と中学校（方式II）で低いことがわかる。役場での割合が低いのは、その職員に地元出身者の多いことが一つの理由と思われる。中学校の方式IIの場合には、「ご当地に生まれ育ち」というこちらの指定した条件に合う回答者を、中学校が生徒の祖父の中から努力して探してくれた結果であろう。

小学校卒業後の在外歴をもつかどうかという点でも、役場の回答者にはその割合が低い。市町村役場の職員に他の市町村への転勤がないことと関係がありそうであるが、詳しいことはよくわからない。

現代のように、人間の移動のはげしい時代に、在外歴を全くもたない人を探すことがなかなか困難であることは、下の表からもうかがえるが、試みた協力機関の中では、機関内の職員から回答を得る場合、役場がその理想に最

表29 回答者の在外歴

方式	協 力 機 関	回答者数	小学校卒業までよその市町村で生育した人	小学校卒業後の在外歴をもつ人		
				人 数	平均年数	10年以上の人数
I	役 場	67人	4人	18人	1.4年	2人
	特定郵便局	59人	9人	29人	4.0年	7人
	中 学 校	54人	12人	26人	3.6年	7人
II	中 学 校	62人	5人	29人	3.6年	8人

も近いことがわかった。また、協力機関の外から回答者を探してもらう方式も、それほど不満な結果を示したとは言えない。もちろん、これら在外歴に問題のある人の回答を、結果の地図化や分析の際に、どう扱ってゆくかは検討を要する。

最後に、回答者の職業と性別について一瞥する。方式IIにおいて、機関外から選定された回答者の場合には、当然その職業も様々である。一方、方式Iにおいて機関内の職員から回答を得ようとした場合は、やはりその職場の職業が多いが、しかし、1割から2割の回答者は、その他の職業であった。これは、方式Iにおいても、かならずしも機関内の職員だけが回答者となつたわけではなく、外部の適当な人が回答者として選ばれたためと考えられる。

性別については、質問欄を設けなかったので、明らかなことは言えないが、名前から判断するかぎり、男性を指定した中学校の方式IIの場合には、ほとんどの回答者が男性であり、こちらの希望を十分配慮していただけた。また、特に性別について注文をつけなかつた方式Iにおいても男性の割合が高く、役場と特定郵便局では約8割が男性であった。ただし、中学校の場合には、女性が約4割と、他の機関よりは女性の回答者が多かった。これは、各機関における職員の男女比を反映しているものかもしれない。

3.2.3 回答地点の分布

協力機関別に、回答のあった地点がどのような分布を示すかを、298ページ以下の地図1から4として掲げた。それぞれ、回答者の現住所を回答地点とし、現住所が不明の場合には機関の所在地を回答地点としてプロットしてある。なお、回答地点が重なるときは、1つの点で代表させた。

ここから読みとれることのうち、方言地理学的調査にとって問題となることは、やはり回答地点の分布に偏りが認められることであろう。まず、地図1の市町村役場の場合には、やや海岸部に回答地点の集中が見られる。また、地図2の特定郵便局では、そのような集中はないものの、逆に、県の中央部に回答地点のない空白地帯が生じている。さらに、中学校の場合には、回答地点の集中地域と空白地域に著しい差が現れてしまっている。

このうち、中学校の回答が海岸部に集中したのは、そこが人口密集地帯であり、もともと中学校の数自体が多いことが一つの理由と考えられる。したがって、学校を協力機関とする場合には、人口密集地について適当に間引いて対象地点を設定すればよいことになる。

そもそも、回答が特定地域から多く集まることは、整理の煩雑さを除けばマイナスになるようなことではない。一方、回答の空白地帯が生じることは、方言分布調査にとってどうしても問題とせざるを得ない点であろう。この空白地帯を埋めるために、例えば、機関あてに催促状を送るとか、あらためて調査票を送付するなど、何らかの方策を考える必要がある。もちろん、これは調査地域の規模にもより、もし日本全土が対象とされ、全国的な視野からながめるのであれば、この岡山県内に現れた空白などは、大した問題にはならないのかもしれない。

3.2.4 方言分布

最後に、通信調査の資料から描いた方言分布図と、『日本言語地図』の分布図とを比較することにより、通信調査による方言分布の特徴を知るとともに、その問題点などを探ってみたい。

ここでは、回答者の在外歴や回答地点の分布から見て、資料上最も適當と思われる、市町村役場を協力機関とした場合の回答結果を取り上げる。その回答結果のうち、『日本言語地図』と共に22項目について、方言分布図を作製した。なお、言語形成期の居住地に問題がある4人の結果も、方言分布上特に問題はなさうなので、除外することはしなかった。

通信調査による分布図は、300ページ以下に地図5bから26bとして掲げた。また、同項目の『日本言語地図』の分布を地図5aから26aとして示した。前者が同じページの右側に、後者が左側にくるように配置し、同一項目について比較しやすいようにした。

さて、両図を見比べてゆくとわかる通り、どの項目においても通信調査は岡山県下の方言分布をかなり的確にとらえていると言える。特に、地図6b「おにごっこ」、地図11b「かぼちゃ」、地図12b「とうもろこし」、地図21b「くす

ぐったい」、地図 26b「こおる（手拭）」などは、複雑な分布をよく把握しているのがわかる。また、地図 24b「おそろしい」におけるキヨートイとキヨーテーの二大勢力の境界も非常にきれいに現れている。このような結果によれば、方言地理学的な調査を通信調査法で行うことが、予想以上に有効であると言えよう。

ただし、地図 a・b を比較すると、そこにはいくつかの違いが見られることも確かである。以下では、それらの点について検討を加えたい。

まず、どの項目においても程度の差こそあれ、共通語形の分布が増え、その分俚言の分布が減っていることに気がつく。とりわけ、それが激しく現れたのは、地図 5b「たこ」であり、地図 5a と比較すると、かつては岡山県全域に分布していたイカの勢力が大幅に退縮してしまっているのがわかる。同様に、地図 7b「かくれんぼ」ではカクレンゴの分布の、地図 14b「すみれ」ではスマートリバナの退縮が著しい。

ただし、これらの項目は、地図 5a, 7a, 14a で共通語形の併用が目立つことから明らかな通り、もともと共通語化の進んでいた項目であり、今回俚言形の回答が少なかったのは、通信調査法の不備というよりは、『日本言語地図』の調査時（1957～64年に平均1894（明治27）年生まれの人々を調査）以降の急激な共通語化によるところが大きいのではないかと考えられる。『日本言語地図』で、同じく岡山県下全般に分布していた俚言形でも、地図 13b「きのこ」のタケ、地図 17b「よだれ」のヨーダレ、地図 23b「すっぱい」のスイーなどは今回の通信調査でもほぼそのままの分布勢力としてとらえられており、それは、これらの俚言が現在においても共通語化せず、日常使用されている語形であるからだと考えられる。もちろん、津山調査で明らかになったように、通信調査の俚言形の回答率は、概して面接調査に及ばない。したがって、この「たこ」の場合も、面接調査法を用いれば、さらにイカの回答を引き出すことができたかもしれない。イカのような衰退中の俚言をいかによくとらえるかは、やはり通信調査法の課題であろう。

なお、共通語化という点では、地図 8b「せともの」や地図 10b「ふすま」のように、俚言の勢力はそのままで、セトモノやフスマという共通語形が併用

の形で回答されてきているものがある。これらは分布からその共通語形を除けば、『日本言語地図』とほぼ変わらない分布を示すことになる。

次に、細かな意味差を伴う複数の項目については、それらの区別がややあいまいになる傾向が見られる。例えば、今回の調査では、「こおる」という概念について、対象が水の場合と濡れた手拭の場合とに分けて尋ねている。このうち、手拭の場合は地図 26a と 26b を比較すればわかる通り、両者の分布はほとんど一致するが、一方、水の場合については、地図 25a と 25b を比べて、今回の通信調査でシミルやイテルの回答が多くなっていることがわかる。シミルやイテルは岡山県下では、単に水が氷になることではなく、手拭や大根、土などの物にしみこんでいる水が凍りつくことを指すのが普通のようであるから、地図 25b にシミルやイテルが現れてしまっているのは、回答者がその点の内省に不十分であった疑いがある。

ただし、地図 26b の質問が手拭という事物を示して具体的であるのに、地図 25b の「水が氷になること」という質問は、あまりに抽象的にすぎたかもしれない。水が氷になるということの中には、手拭にしみこんだ水も含まれるわけであるし、また手拭でなくとも、例えば、湿った土が厳寒にあって凍りつくことをシミルやイテルと言うならば、それらの語形がこの「水が氷になること」という質問の際に回答される可能性は十分ありうる。地図 25b を見て、シミルやイテルに併用としての回答が多いのは、その可能性を裏づけるものかもしれない。したがって、この点は、調査者側の質問文にも問題があったと言えよう。

もちろん、以上のこととは、少々細かいことを問題にしすぎたのかもしれない。大局的に見れば、地図 25b と 26b の分布関係は、地図 25a と 26a の関係によく対応している。また、『日本言語地図』を離れて、今回の通信調査の結果である 2 枚の地図のみを比較すれば、意味による方言分布の違いはかなり明瞭にとらえられているともみなしうる。

その他、意味に関わることがらでは、地図 20b 「くものす」にクモイギやクモエギの分布が濃くなっているが、これは「くもの糸」との区別がややあいまいであったためであろう。今回は「くもの糸」について調査を行わなかっ

たが、『日本言語地図』235図「くもの糸」では、クモイギやクモエギの分布が強くなっている。

また、地図19b「下あごの先」でシタアゴという回答が多くなっているのは、今回の通信調査で「あご」について、「上あご」とか「あご全体」など詳しく尋ねる質問体系をとっているため、先の津山調査で見たように、回答者が分析的な回答を行ったことが一つの理由と考えられる。なお、地図18a「下あご」にないアゴタが地図18bに現れているのは、前者の項目が調査の途中から加わったものであるため県の南部に調査地点が少ないとすることによるのかもしれないが理由がよくわからない。一定の分布を示すことを重視すると、単なる誤答ではなかろう。

最後に、地図23b「すっぱい」について見ておく。地図23aと比較してスイイーの回答が目立っている。しかも、ある程度まとまった領域をもっているので、これも誤答とは言えないであろう。むしろ、津山調査で、津山にもスイイーと発音する人が何割かいたことを考えると、これらの地域は、実際にスイイーを用いる人がスイーを使う人より優勢な地域であることも考えられる。スイーとスイイーとの発音上の境目はかなり微妙であり、何拍分伸びているのかは、現実の発音からは判断が難しい面があろう。したがって、面接調査では話者の意識がスイイーであっても、調査者がスイーと記録してしまう恐れがありうる。その点、通信調査は、話者の内省によるため、回答者の意識しているラング的な形がそのまま回答されやすく、この場合には、スイイーが報告されたのだと認められる。

3.3 まとめ

以上、現実の通信調査に近い形として、いくつかの公的機関の協力を得た通信調査を試み、そのいろいろな側面について考察してきた。また、その資料をもとに描いた方言分布の概観についても検討を加えた。

まず、回収率は、協力機関の種類と回答者の選定方法などによって違いが現れるが、ほぼ6割から7割の回答が戻り、良好な成績を上げうることがわかった。また、協力機関の職場内部から求めた回答者は俚言の採集にとって

はやや年齢が若すぎ、一方、職場外に高齢の回答者を探してもらった場合には、ほぼ条件に合う適当な回答者が得られることも明らかになった。ただし、いずれの場合の回答者にも、居住歴に不都合なところのある人がいくらか含まれ、それらの人の回答をどう扱うかは、さらに吟味を行わなければならぬ。

次に、通信調査法によって把握した方言分布では共通語形が増え、隣接意味の俚言がまぎれこむことがあるなどいくつかの問題点も存在するものの、概して面接調査によるものとよく一致し、俚言の分布がかなり的確にとらえられていることが明らかになった。したがって、面接調査法には及ばないにしても、方言の分布調査は通信調査法によっても十分可能であるという希望をもつことができたと言える。

4. む す び

方言地理学的調査における通信調査法について、実験的調査によって検討を行ってきた。その結果、いくつかの問題点を指摘しながらも、この方法の有効性は相当評価しうるという結論に達した。

ただし、検討し残したことがらは多く、さらに様々な角度から通信調査法を吟味していかなければならない。例えば、回答者の表記法についての分析は、今回の資料からは特に大きな問題点は見られず、ここでは省略してしまっているが、琉球をはじめ共通語とは音韻体系や音声実態の大きく異なる地域で、回答者の音声のとらえ方とからめて問題にしてみる必要がある。

また、ここで試みた方式にとらわれず、いろいろな通信調査法を考案してみたいものである。面接調査法との折衷的な方式から電話を利用した調査まで、まだまだアイデアが浮かびそうである。そのためにも、これまで行われてきた通信調査の具体例を十分学び反省すべきであるが、過去の通信調査には方法が明示されていない場合が多いこともあって、今回はその点に考察を及ぼすことができなかつた。これから課題としたい。

今後は、今回考察を加えてきたような調査法自体の検討・工夫を積み重ね

ると同時に、実際に通信調査法を用いた全国的な方言分布調査を行っていきたいと希望する。最初にも述べた通り、現在、共通語化による地方語の崩壊は著しく、方言地理学的な分布調査を含めて俚言の採集に残された時間は、そう長くないと危惧するからである。

そのような全国調査は、報告の順序は逆になるが、本報告の成果を踏まえることによりすでに1986年に着手した。その内容については、以下の報告をご参照いただければ幸いである。

小林 隆「『日本言語地図』関連意味項目の全国方言調査——語史構成を目的とした、文献国語史との対照における意味的視野からの必要に基づいて——」(国立国語研究所『研究報告集』8, 1987年3月)

最後になりましたが、調査にご協力いただいた回答者と協力機関の皆様、および研究所外から参加してくださった調査員の方々に、あらためて御礼申し上げます。また、このテーマについて、加藤正信先生をはじめ多くの方々からご教示をいただきましたが、十分生かしきれなかったことをおわびするとともにご厚意に感謝申し上げます。

注1 国語調査委員会『音韻調査報告書』(1905年)、同『口語法調査報告書』(1906年)。藤原与一『A Dialect-geographical Study of the Japanese Dialects』(『Folklore Studies』15, 1956年)。小林好日『方言語彙学的研究』(1950年・岩波書店)、なお、小林氏の通信調査法については、真田信治「東北地方における「いなご」と「ばった」の方言分布とその解釈——故小林好日博士の調査資料を地図化して——」(『国語学研究』12, 1973年)などに紹介されている。

注2 例えば、1953年に刊行された東条操編『日本方言学』では、柴田武「方言調査法」の中に通信調査についての一節が設けられているのに対し、最近発行になった講座方言学2『方言研究法』(1984年)の吉田則夫「方言調査法」では、通信調査に関する記述が見られない。なお、井上史雄・荻野綱男『新しい日本語・資料図集』(1984年)における新方言の全国分布調査は、久しぶりに現れた大規模な通信調査と言えようか。

- 注3 この実験的調査の成果を基にして行った全国通信調査（4「むすび」参照）では、回答者の年齢条件についての考えを多少改めた。つまり、そこでは、回答者の年齢を65歳以上回答可能なかぎり高齢の人とした。それは、『日本言語地図』との対比という目的などからみて、できるだけ古い俚言を知る必要があったこと、また、現代の平均寿命を考慮した場合、年齢の条件を高くしても調査可能だろうと考えたことなどによる。
- 注4 法水正文「耳垢の方言——通信調査による全国的分布について——」（『日本方言研究会第41回発表原稿集』1985年）
- 注5 柴田武「方言調査法」（東条操編『日本方言学』1953年・吉川弘文館）418ページ。
- 注6 加藤正信「被調査者の人数・条件・質問方法による差——高知市における調査から——」（国立国語研究所『方言の諸相—『日本言語地図』検証調査報告一』1985年・三省堂）45・46ページ。
- 注7 例えは、国立国語研究所第二資料研究室が、1970・71年に福島県北部で行った面接調査とアンケート調査では、語彙項目と文法項目において、むしろアンケート調査の方が俚言形が答えられやすかったという報告がなされており（飯豊毅一「面接調査とアンケート調査と自然会話——福島県北部地域を例として——」『都立大学方言学会会報』61, 1975年），今回の調査との比較・検討が望まれる。なお、福島調査の調査票は、飯豊毅一『言語使用の変遷(1)』（国立国語研究所、1974年・秀英出版）に掲載されている。
- 注8 注3に示した調査では、市町村教育委員会を協力機関とした。ただし、その職員に回答してもらうのではなく、機関外から適当な老人を選んでもらい、その人から回答が得られるようにした。
- 注9 注4と同じ。

[付 記]

この研究の一部について、国立国語研究所研究発表会（1987.12.12）で報告したところ、何人かの方々から貴重なご意見・ご質問をいただきいた。すでに本文に生かすことはできないので、ここにそのことについて記すことにした。

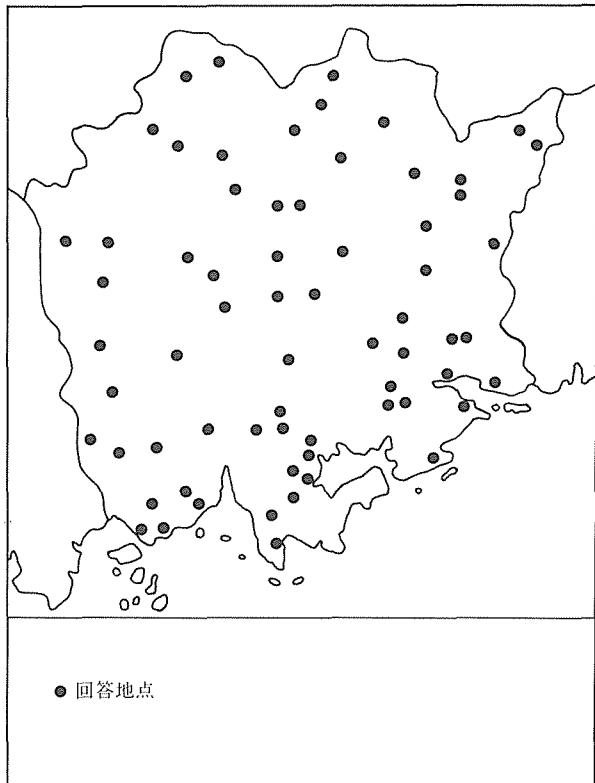
- (1) 参考語形について：調査地域が津山市や岡山県のような狭い範囲なら参考語形も少なくてよいが、全国にわたるような広範囲の場合、参考語形は多量になり、掲載が難しくなるのではないかという心配があった。たしかに、この点は問題で、俚言の数が多い項目になると、参考語形が調査票のスペースをとり、かつ回答者にそれを読み通す負担をかけることになるので、とてもすべてをあげ

るわけにはいかない。この場合、俚言の細かな変種は無視し、代表的な形のみ掲げるということが一つの方法だと考えるが、それに伴う問題もあるので、さらに工夫が必要である。これらの点については、「4. むすび」に示した拙論の47ページで触れるところがあったので、参照していただきたい。

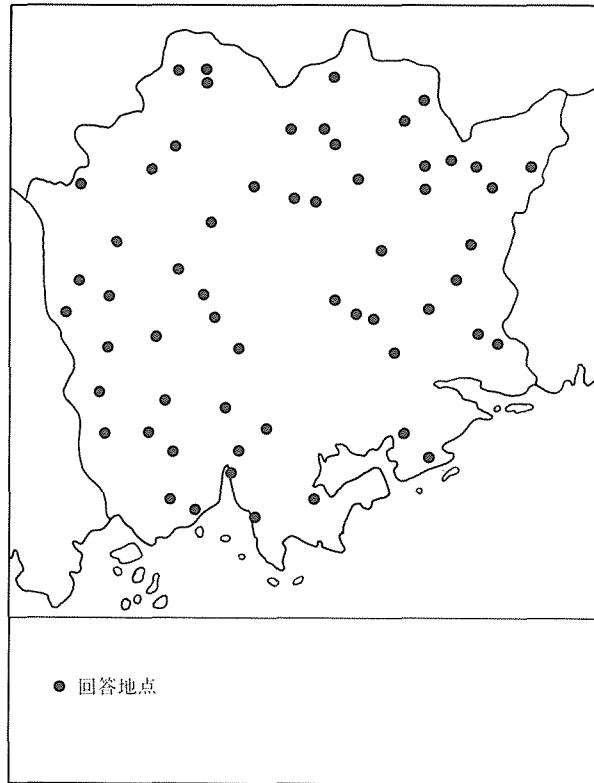
- (2) 付加情報について：面接調査では、複数の語形が回答された場合、その意味の違い・新古・使用頻度などについてインフォーマントからの情報を得ることができるが、通信調査では難しいのではないかという質問があった。なるほど、今回の調査では、できるかぎりそのような情報を注記の形で付すよう回答者に指示したにもかかわらず、結果はあまり得られなかった。通信調査で複数語形の差異について知りたいときには、あらかじめ調査項目の一部としてその点についての質問を盛り込んでおく必要があるということになろう。通信調査においては、面接調査で調査員の裁量にまかされるような質問でも、一々調査項目の体系の中に明確に位置づける配慮が要求される。
- (3) 通信調査法の長所について：面接調査法に比べ、通信調査法には次のような利点もあるという指摘があった。まず、通信調査法では調査員というものがいるため、調査員の個人差によって結果に違いが生じてしまう恐れがなく、その点で等質的な資料を集めることができる。次に、今日一般に調査ということ自体が社会的に難しくなってきており、そのような状況下では、面接調査より通信調査の方が拒否に合うことは少なく、インフォーマントに受け入れてもらいややすいという利点もある。以上の2つの意見はなるほどと思った。後者については、通信調査法が良い悪いという問題ではなく、われわれ調査者がいやおうなしに通信法によらざるをえない社会状況に置かれつつあると考えた方がよいかもしれない。ただし、本当に面接調査より通信調査の方がインフォーマントの納得を得やすいのか、調査といふいとなみにおける調査員とインフォーマントとの相互理解というような精神面まで考慮すると、一概には判断しかねるようと思われる。
- (4) 調査の理想と現実について：調査は、よく訓練された研究者の組織によりインフォーマントと面接して行われるべきであり、通信調査法はあくまで二次的手段であることを肝に銘じておくべきだという意見もあった。この考えが理想的なものである以上、当然従わなければならぬし、反論の余地はないと思う。ただ、今回の実験を通して述べたかったのは、通信調査法が従来考えられているほど粗悪な方法ではなく、面接調査法に比べははだしく資料の質を落すことなく俚言の収集が可能であるため、今後利用する方向で検討してもよいのではないかということなのである。また、急激な共通語化により俚言がこの先

いつまでも存在してくれるという保障のない状況下においては、早急な調査が必要とされるという点も、用いるべき調査法を選ぶ一つの条件として、考慮すべきことがらではないかと考える。

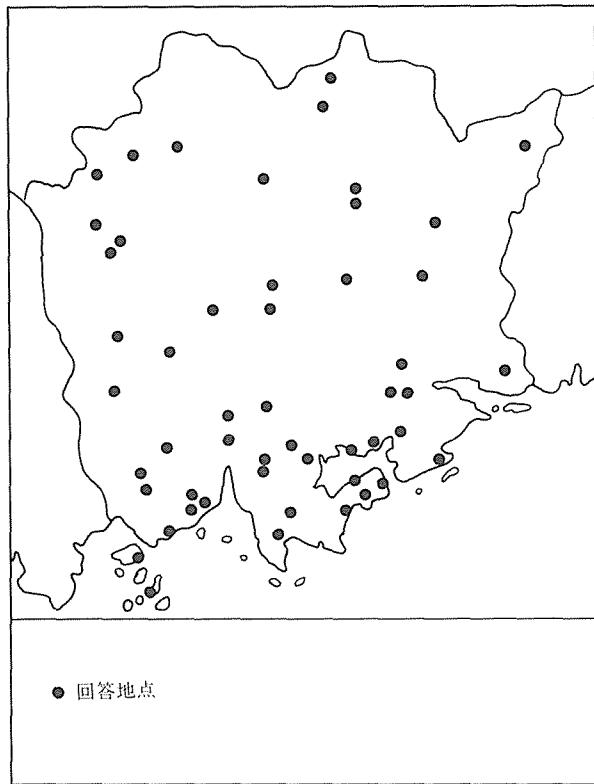
地図1 回答地点—市町村役場



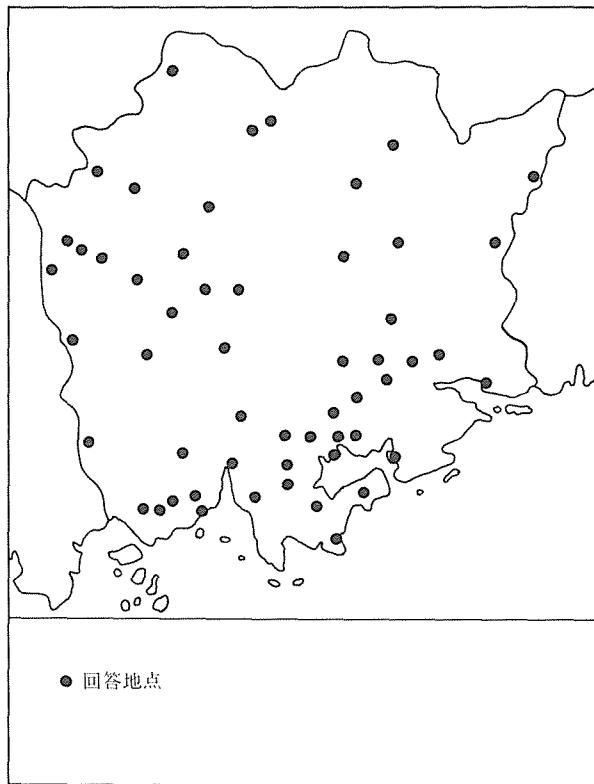
地図2 回答地点—特定郵便局



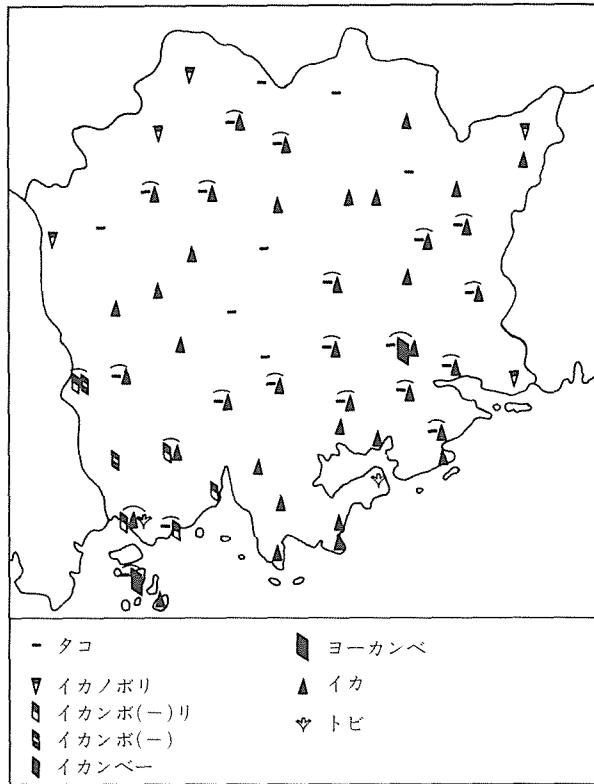
地図3 回答地点—中学校（方式I）



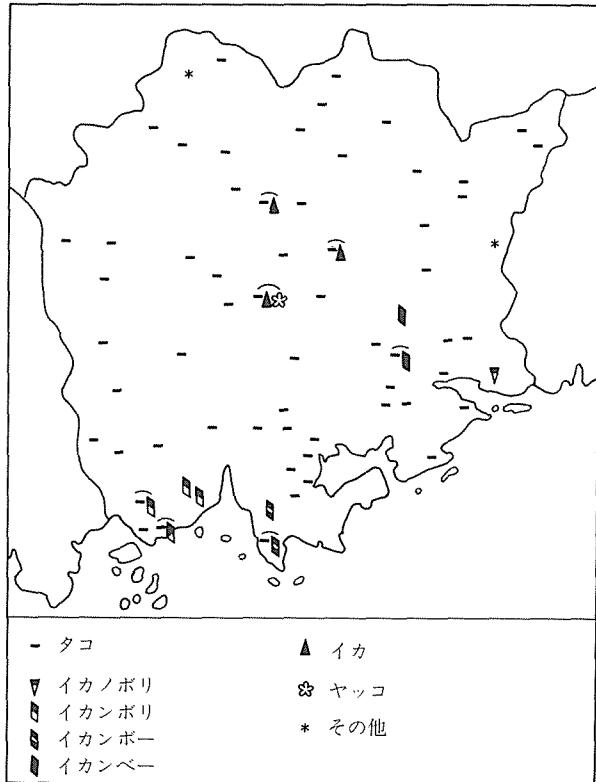
地図4 回答地点—中学校（方式II）



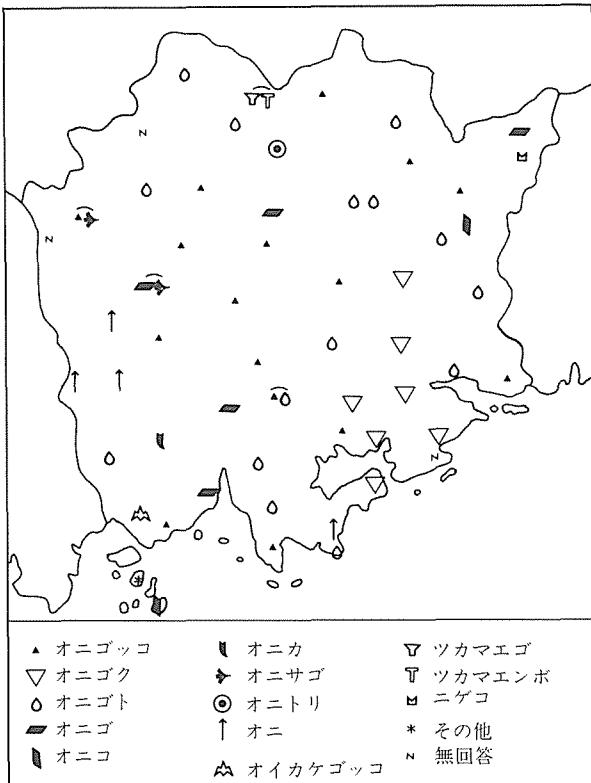
地図5a たこ LAJ143図より



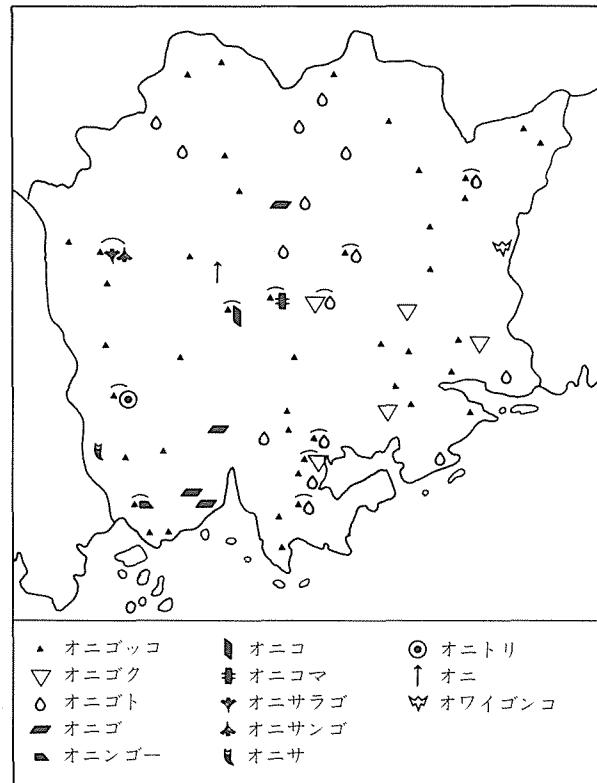
地図5b たこ 通信調査による



地図6a おにごっこ LAJ147図より

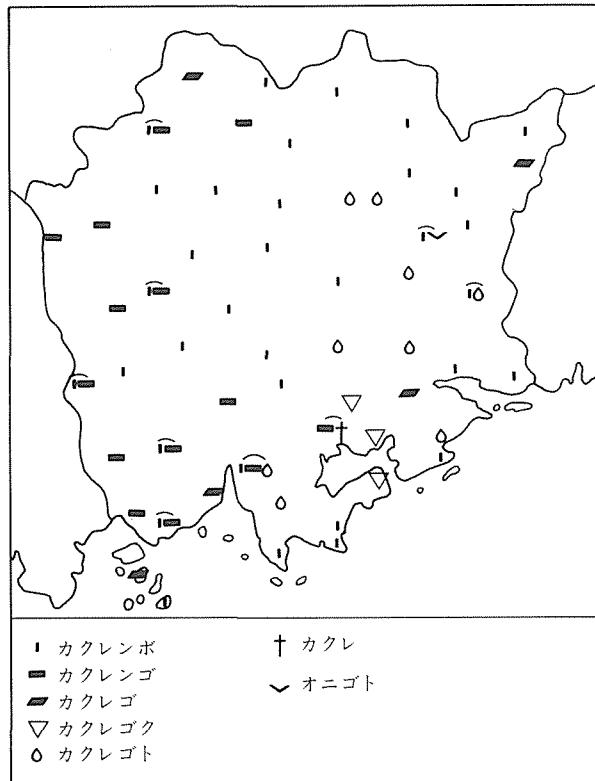


地図6b おにごっこ 通信調査による



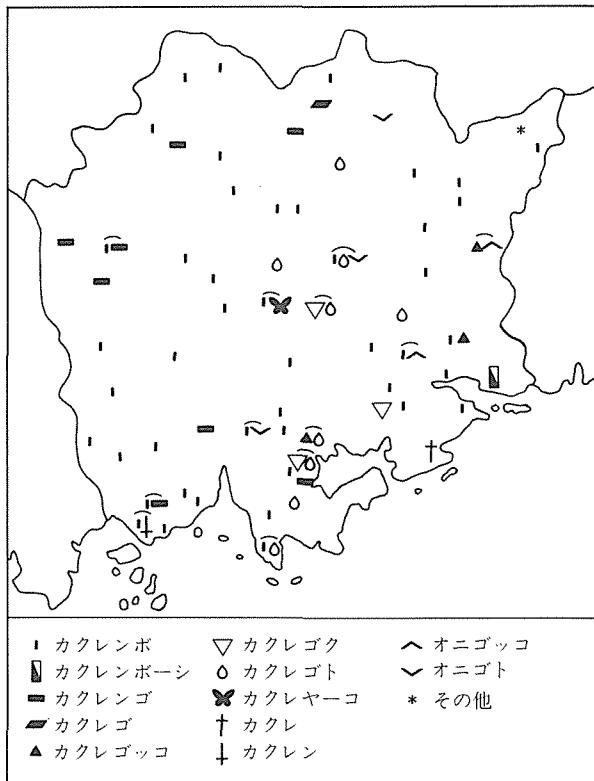
地図7a かくれんぼ

LAJ148図より



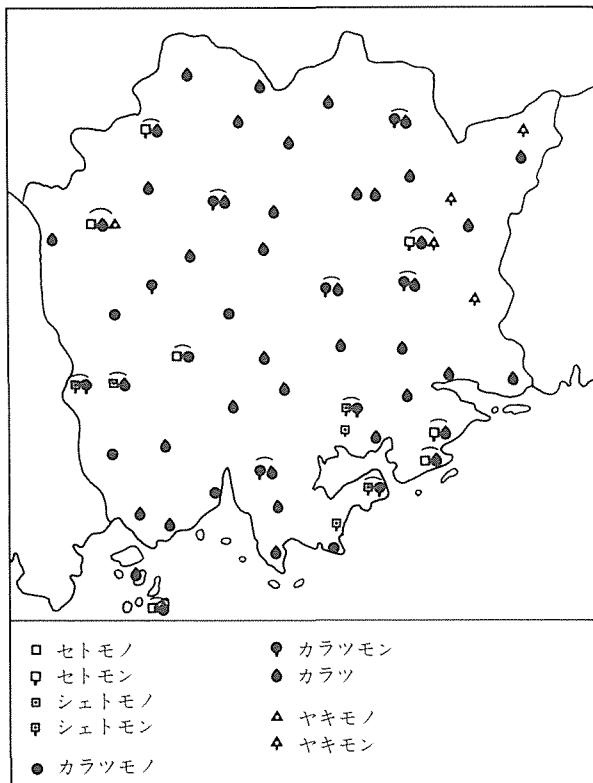
地図7b かくれんぼ

通信調査による



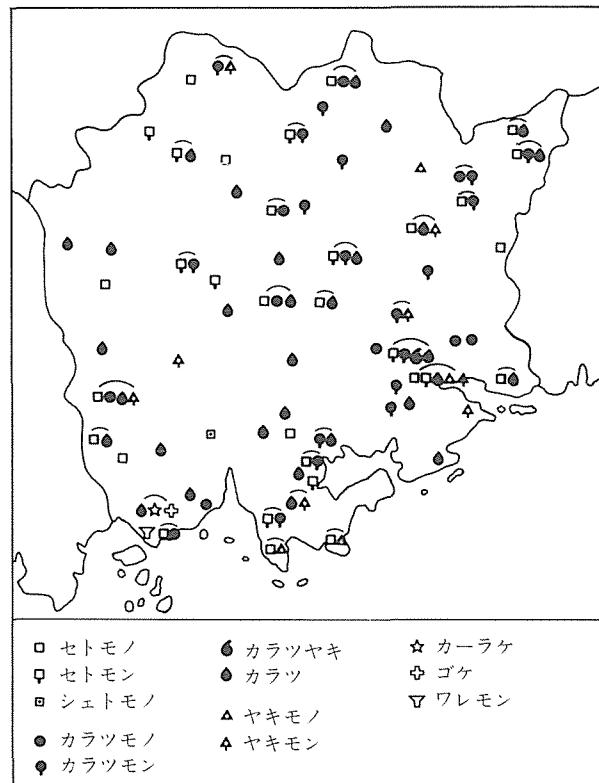
地図8a せともの

LAJ161図より

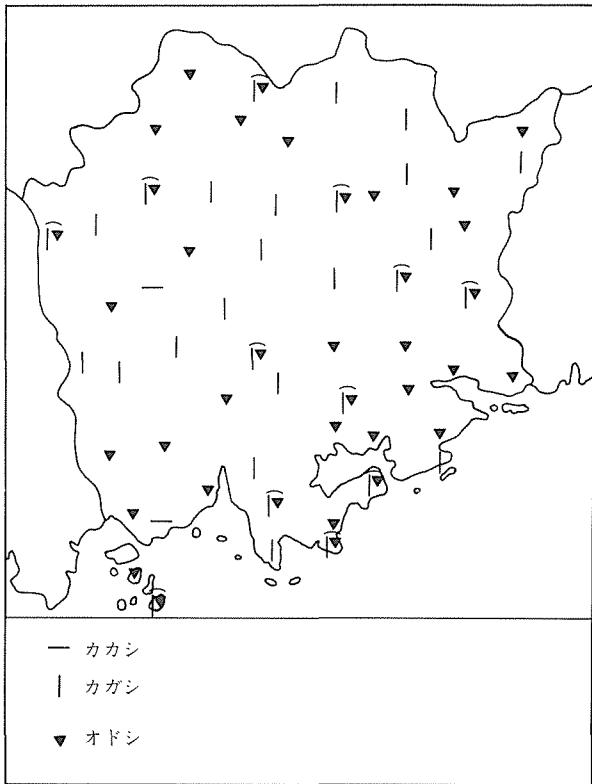


地図8b せともの

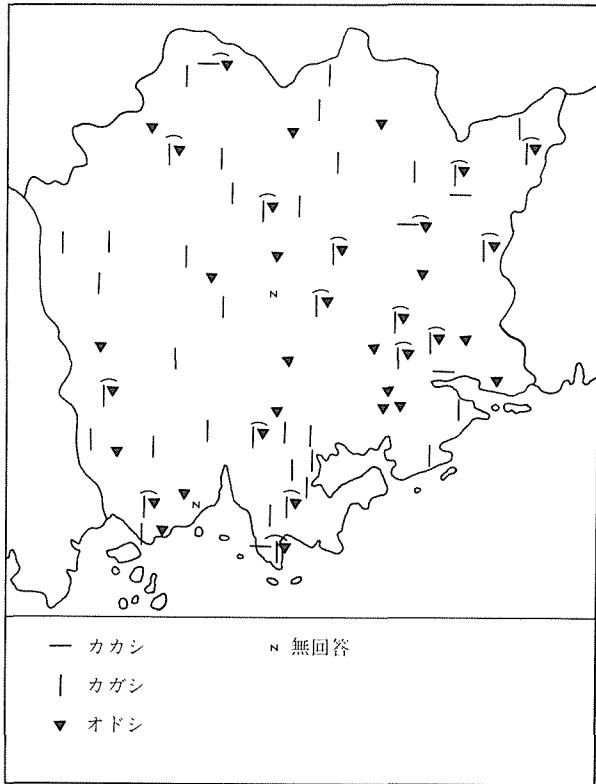
通信調査による



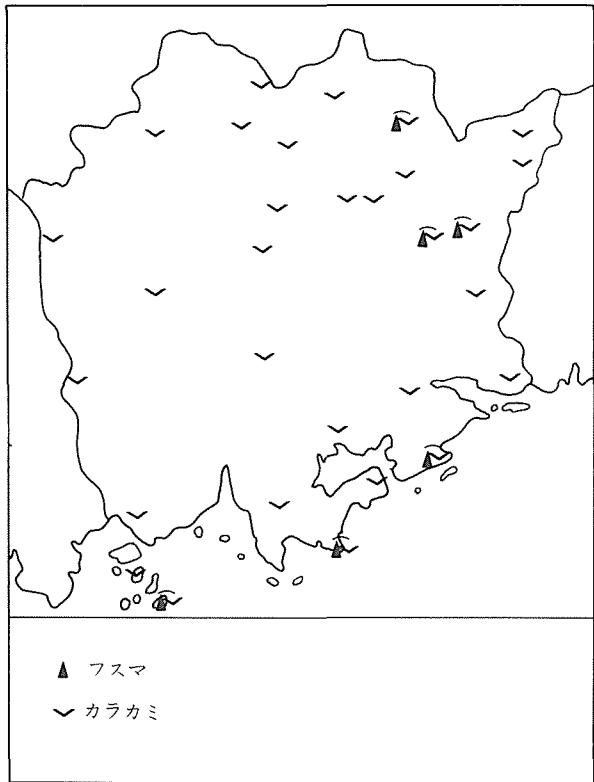
地図9a かかし LAJ190図より



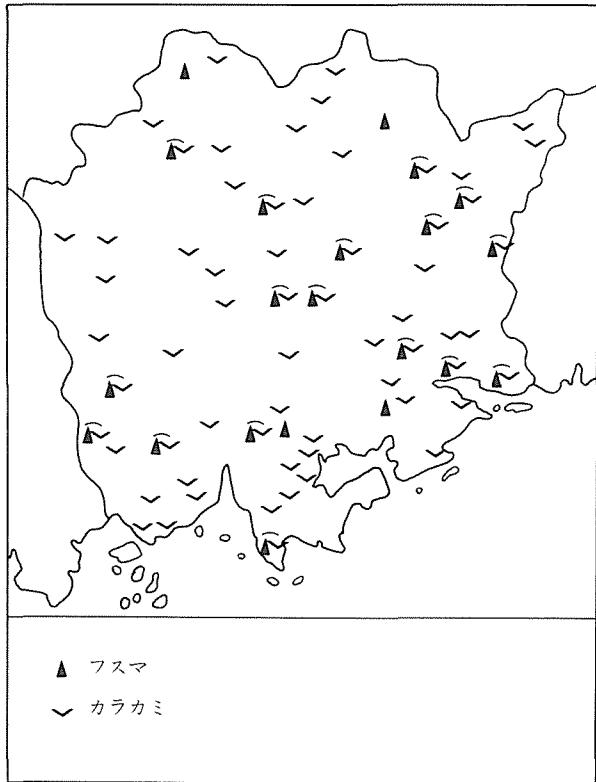
地図9b かかし 通信調査による



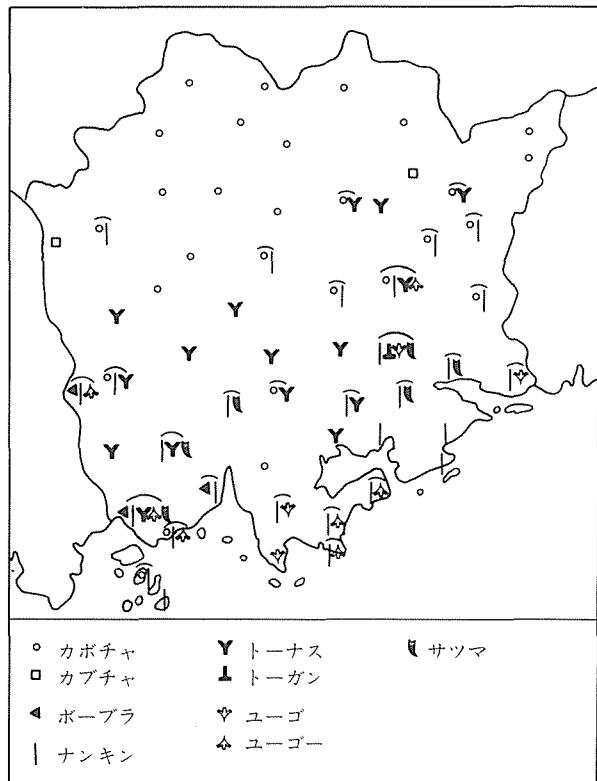
地図10a ふすま LAJ192図より



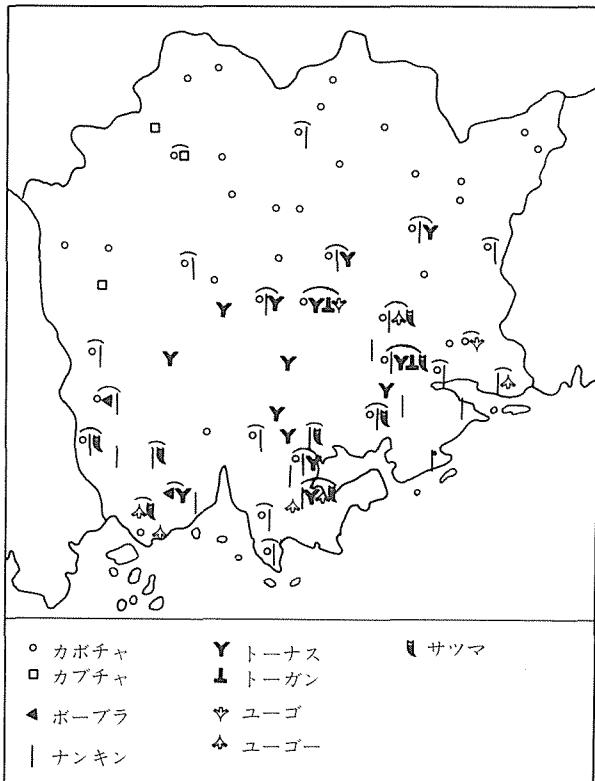
地図10b ふすま 通信調査による



地図11a かぼちゃ LAJ180図より

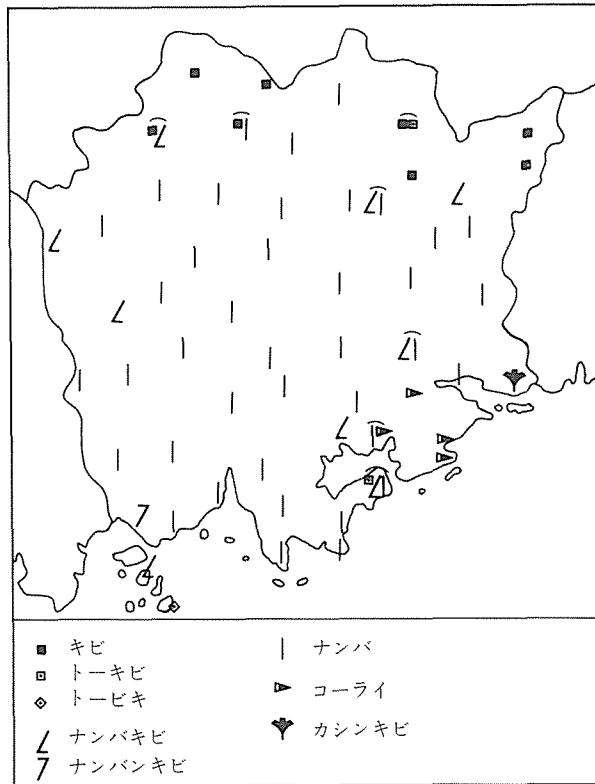


地図11b かぼちゃ 通信調査による



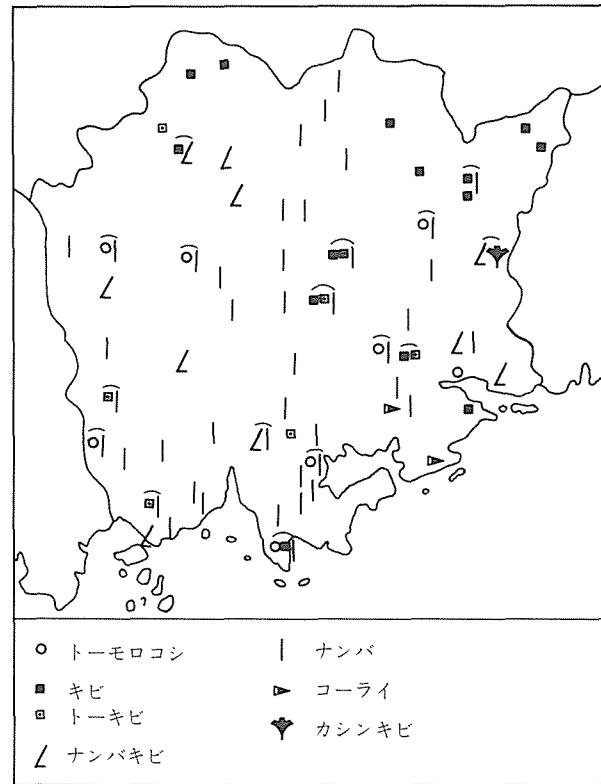
地図12a とうもろこし

LAJ182図より

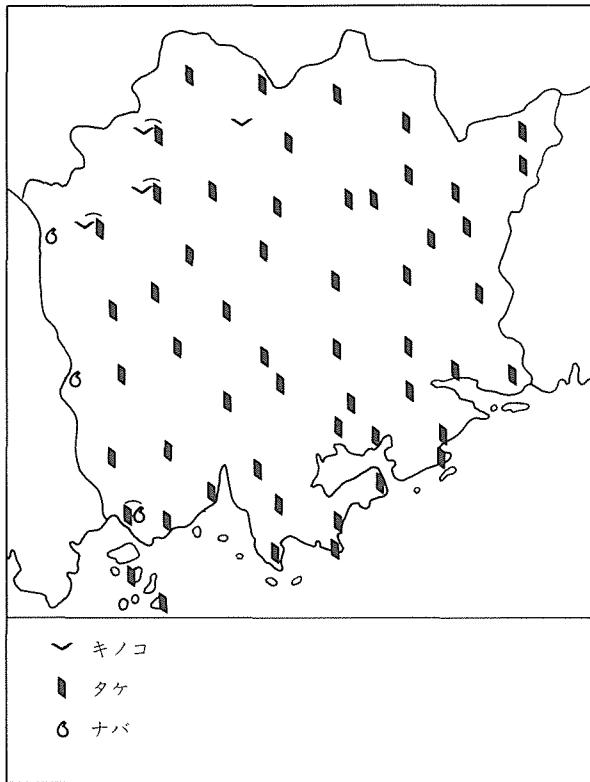


地図12b とうもろこし

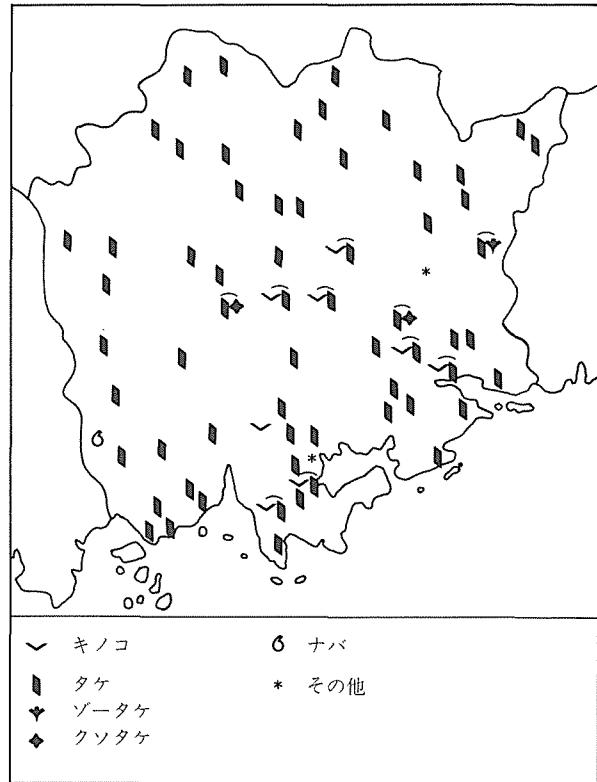
通信調査による



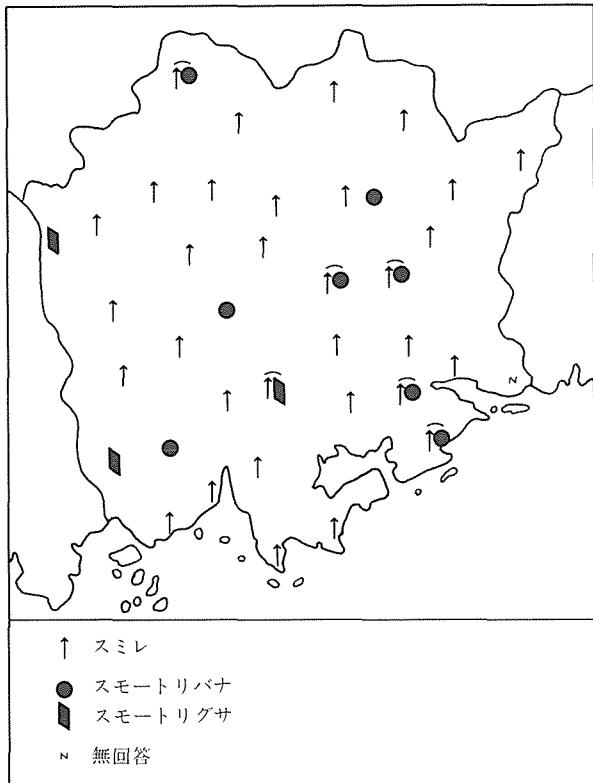
地図13a きのこ LAJ245図より



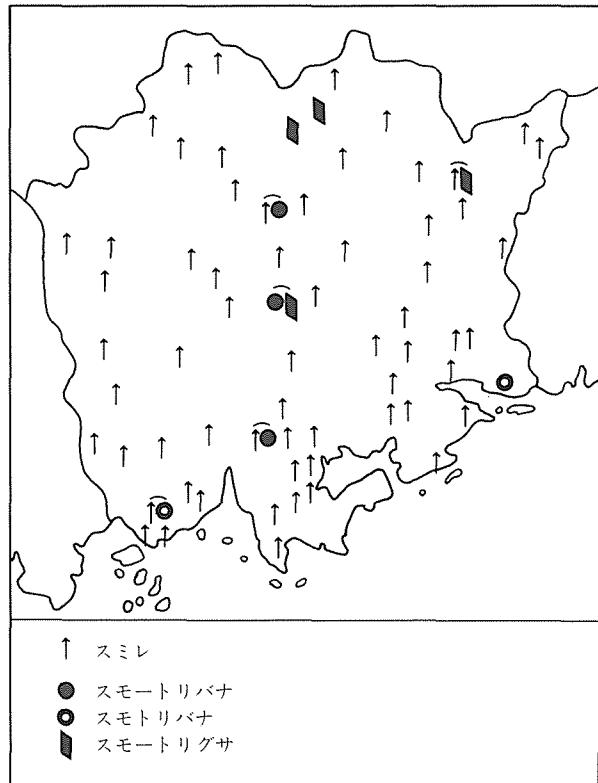
地図13b きのこ 通信調査による



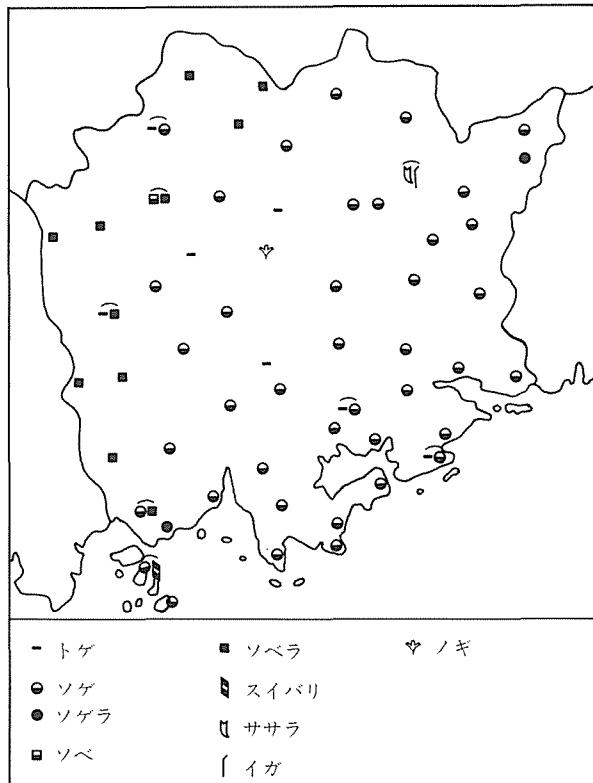
地図14a すみれ LAJ240図より



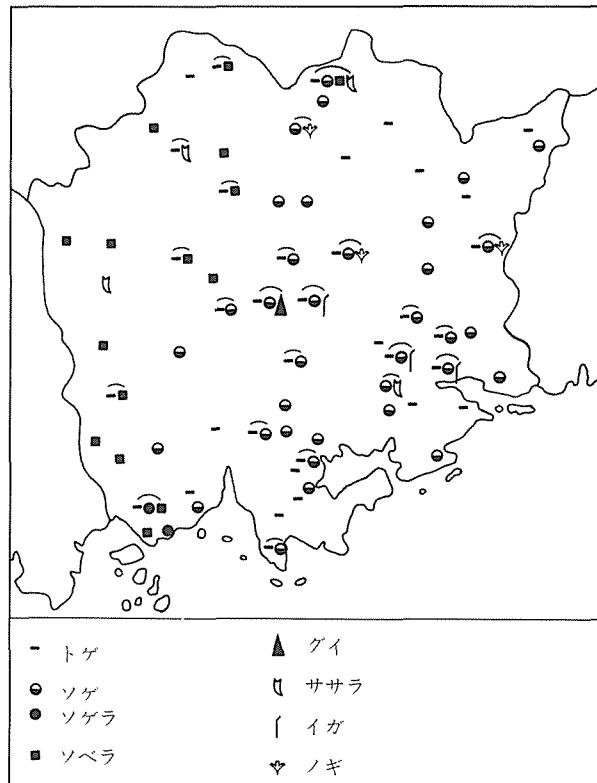
地図14b すみれ 通信調査による



地図15a 指にささる竹や木のとげ LAJ249図より

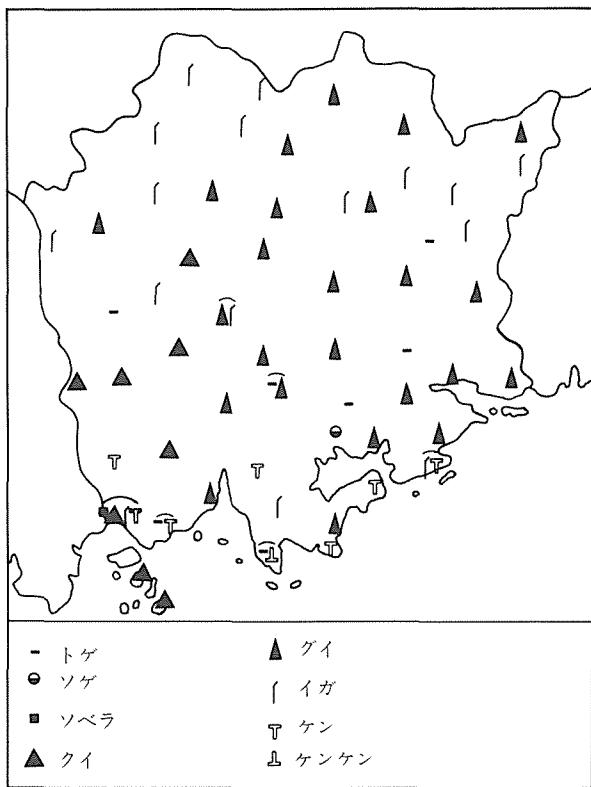


地図15b 指にささる竹や木のとげ 通信調査による



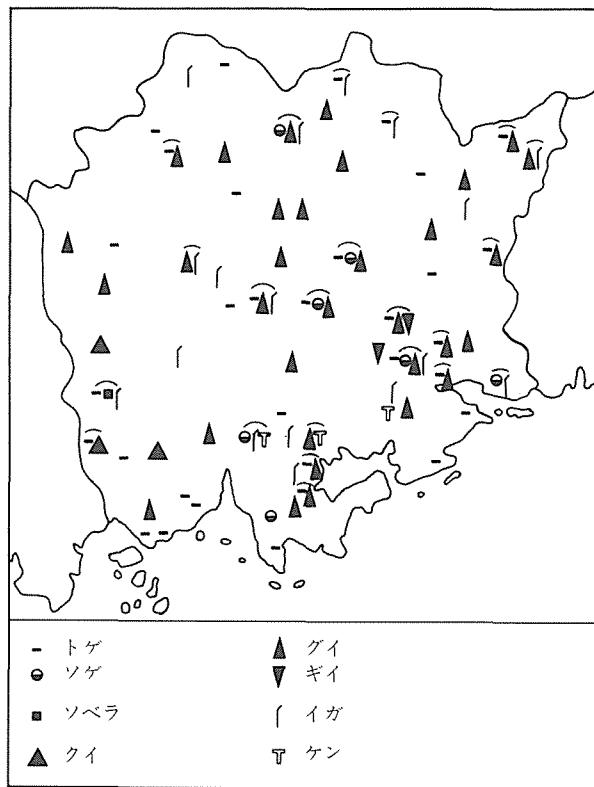
地図16a いばらやさんしょうのとげ

LAJ250図より



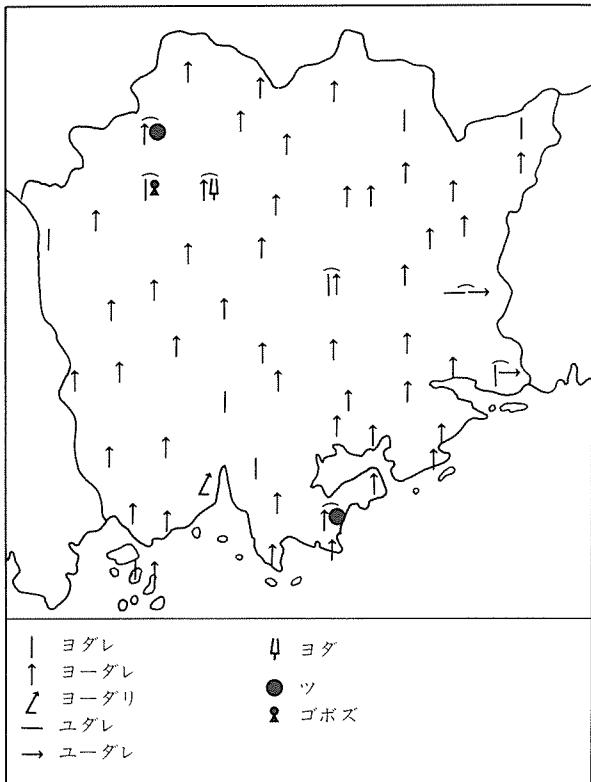
地図16b いばらやさんしょうのとげ

通信調査による



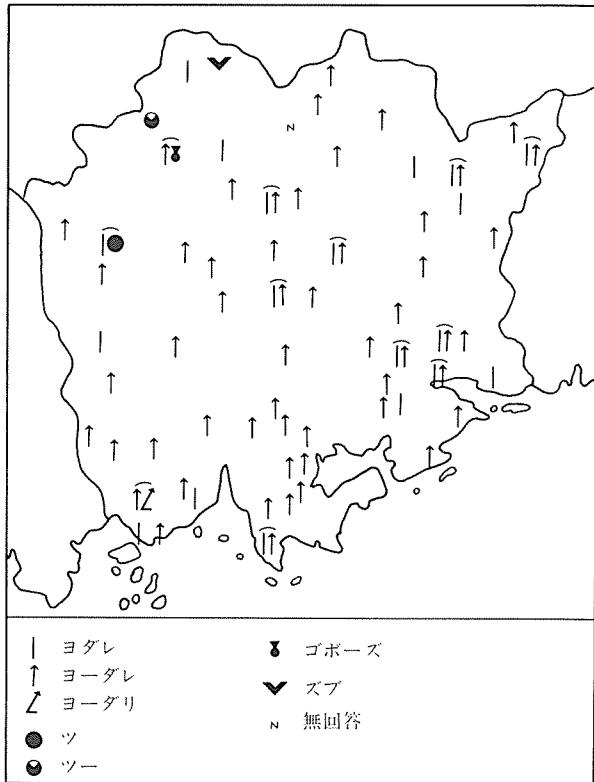
地図17a よだれ

LAJ119図より

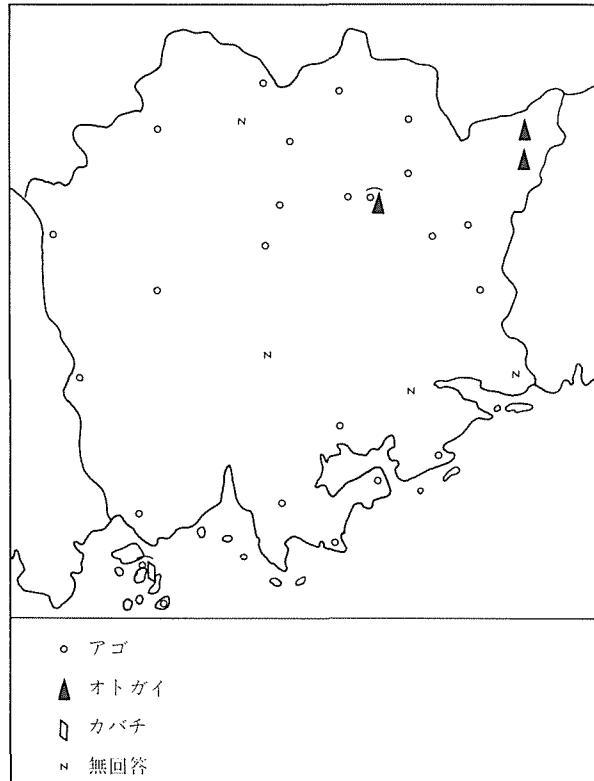


地図17b よだれ

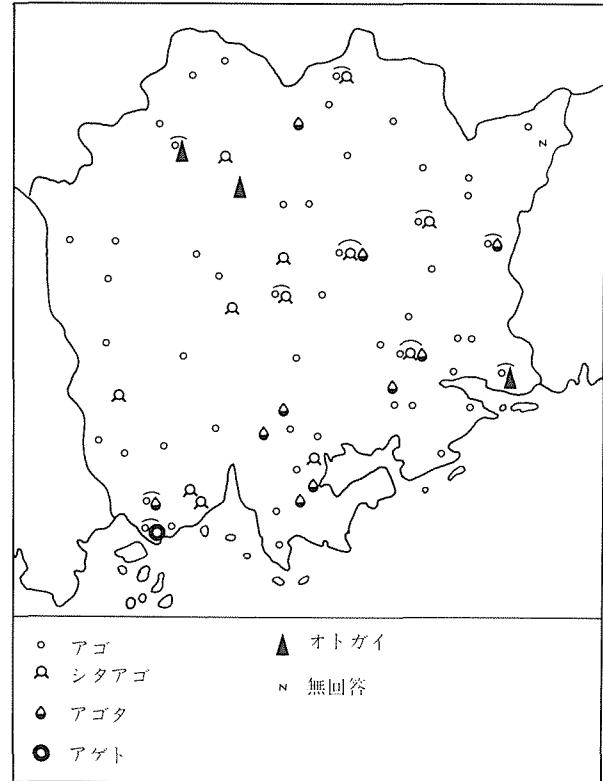
通信調査による



地図18a 下あご LAJ109図より

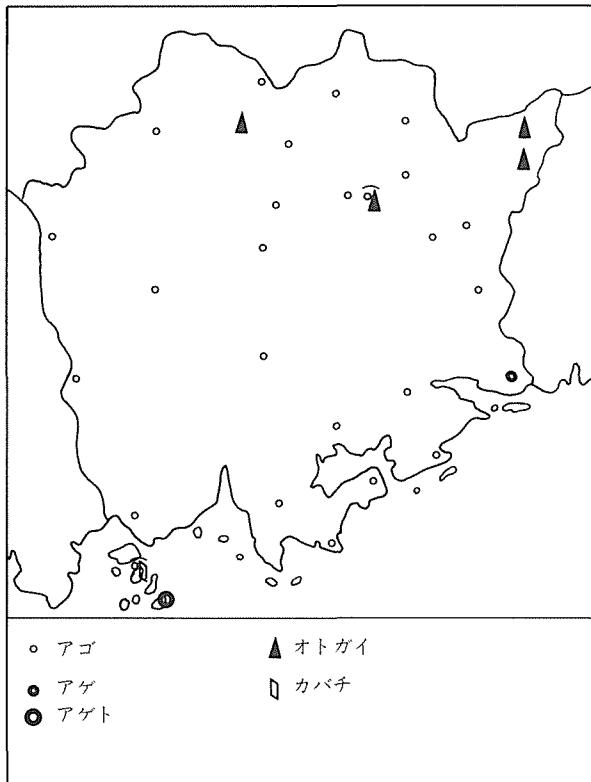


地図18b 下あご 通信調査による



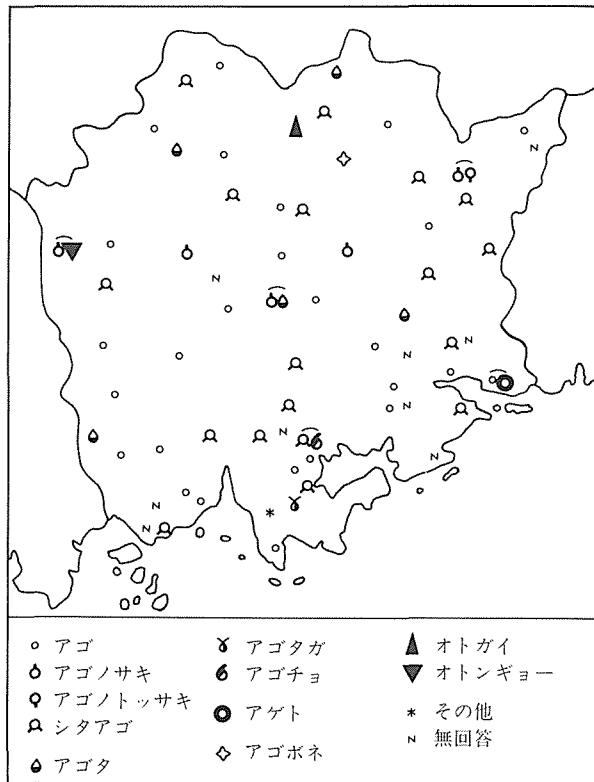
地図19a 下あごの先

LAJ108図より

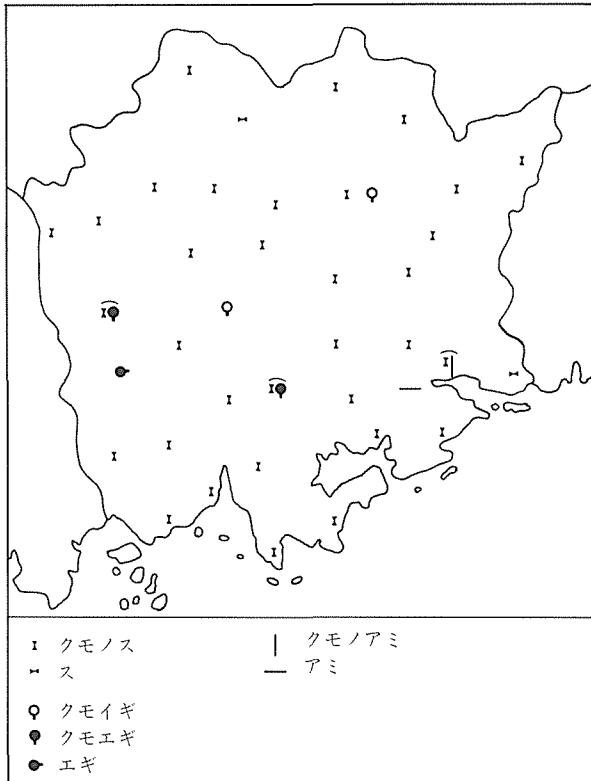


地図19b 下あごの先

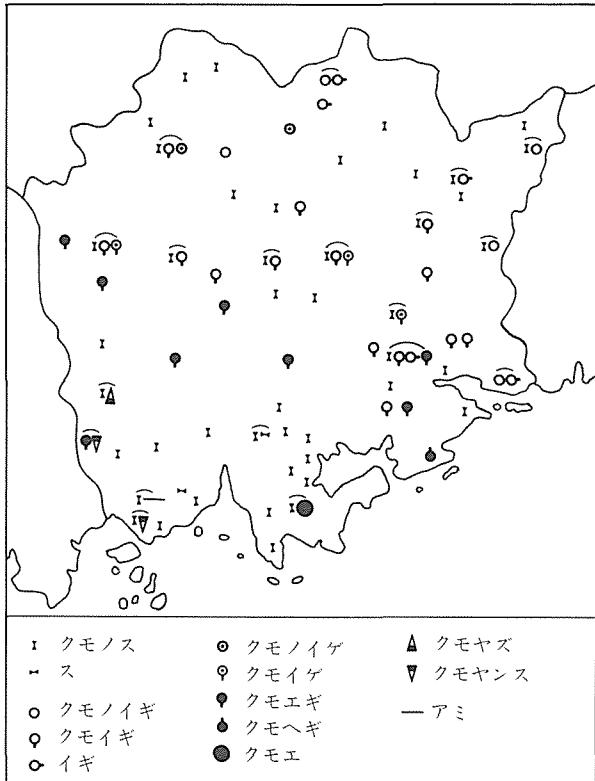
通信調査による



地図20a くものす LAJ234図より

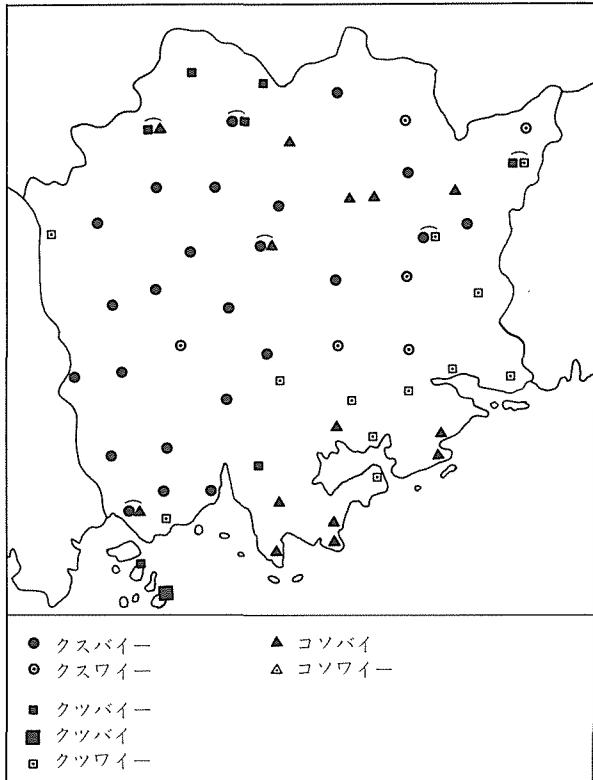


地図20b くものす 通信調査による



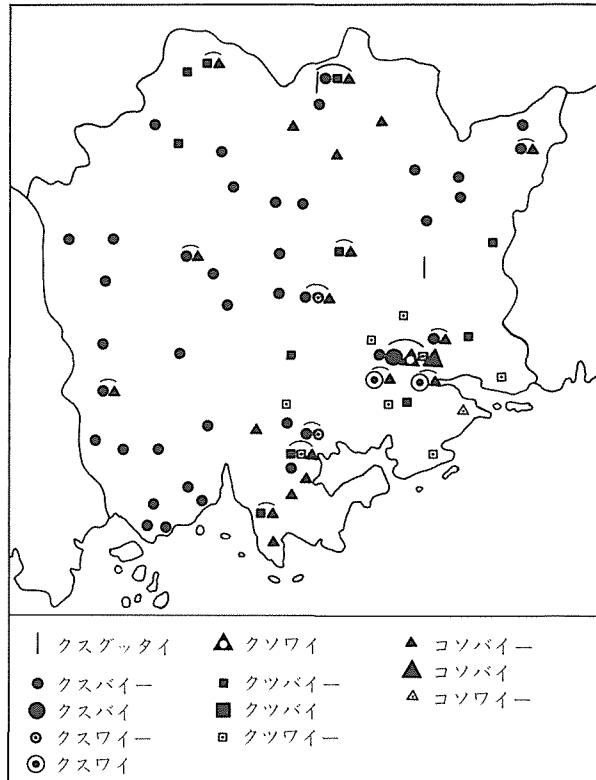
地図21a くすぐったい

LAJ32・33図より

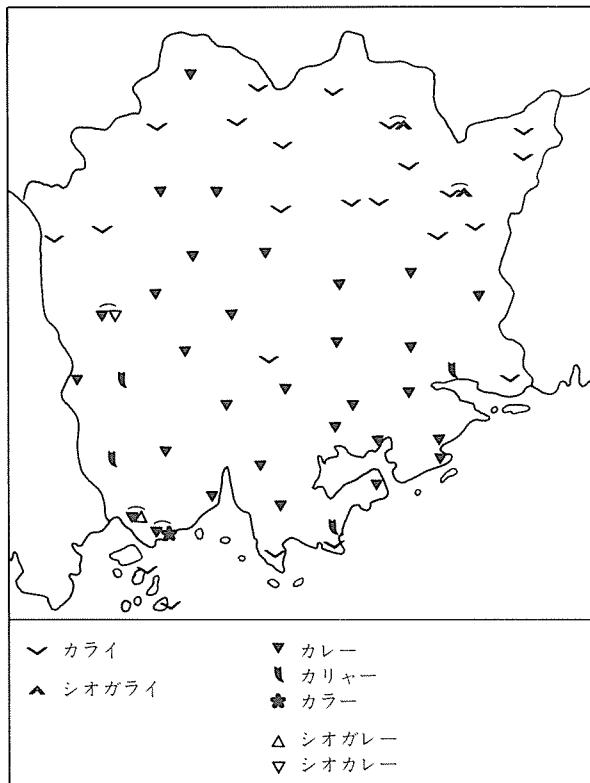


地図21b くすぐったい

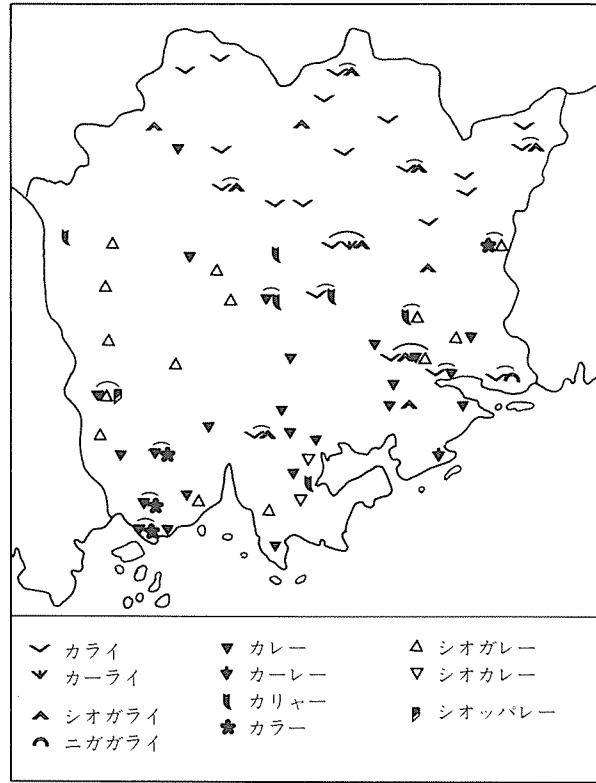
通信調査による



地図22a しおからい LAJ89図より

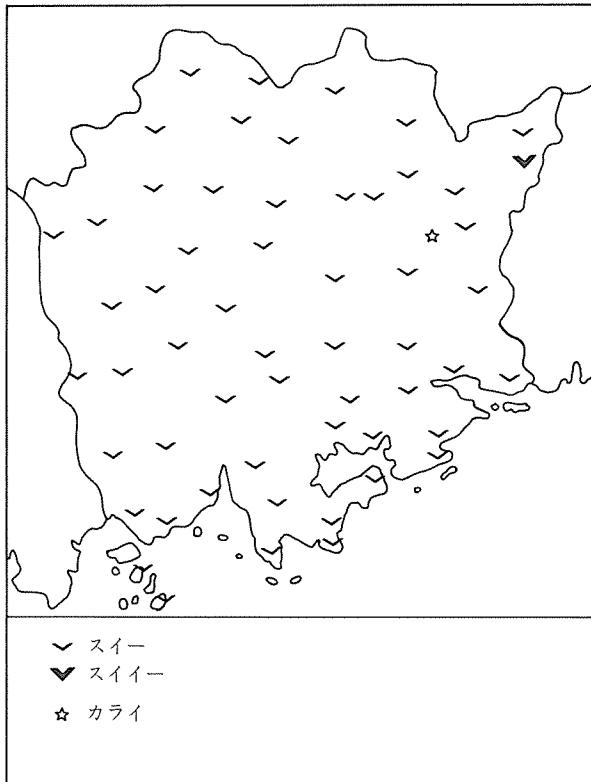


地図22b しおからい 通信調査による



地図23a すっぱい（梅干）

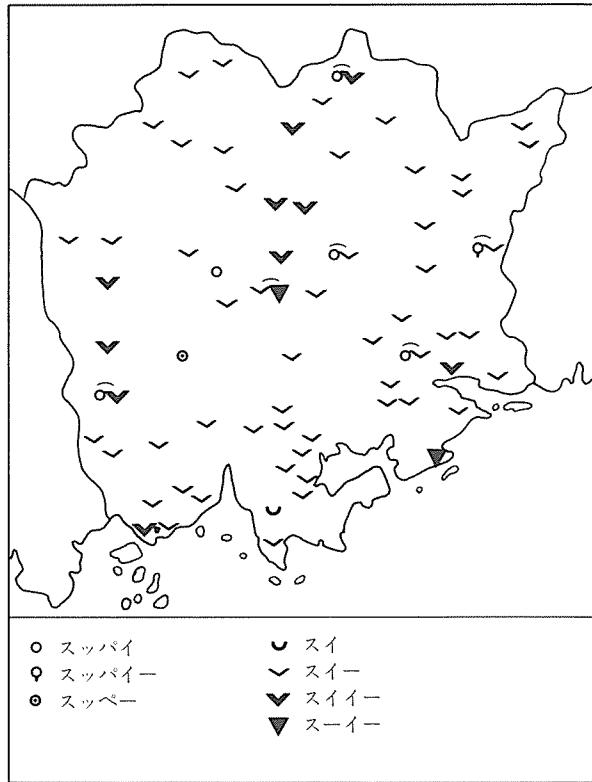
LAJ41図より



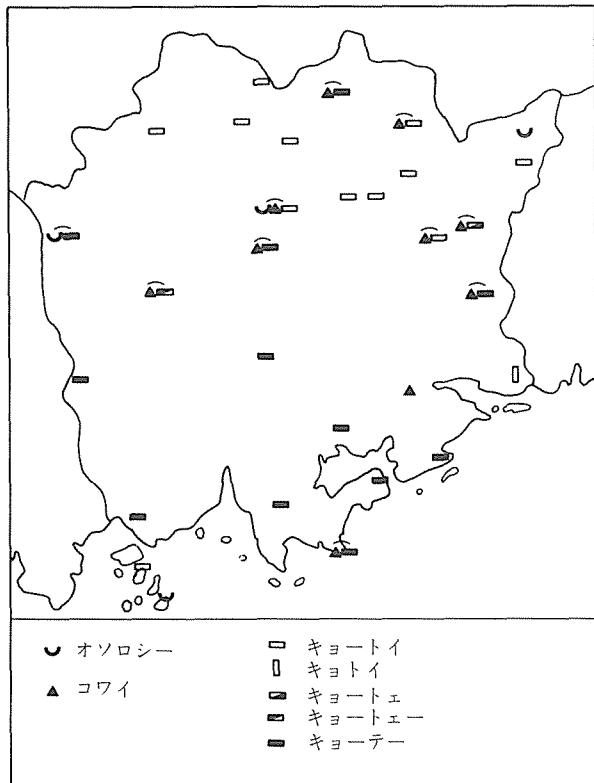
地図23b すっぱい（梅干）

通信調査による

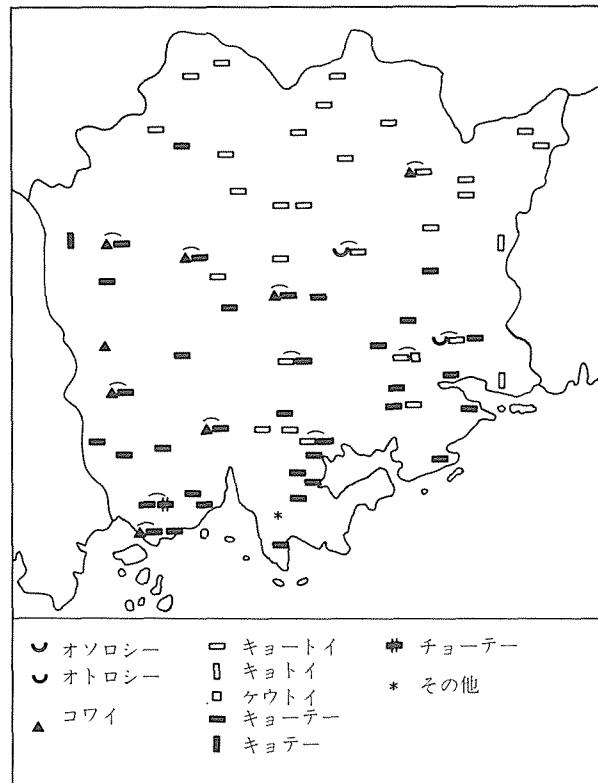
318



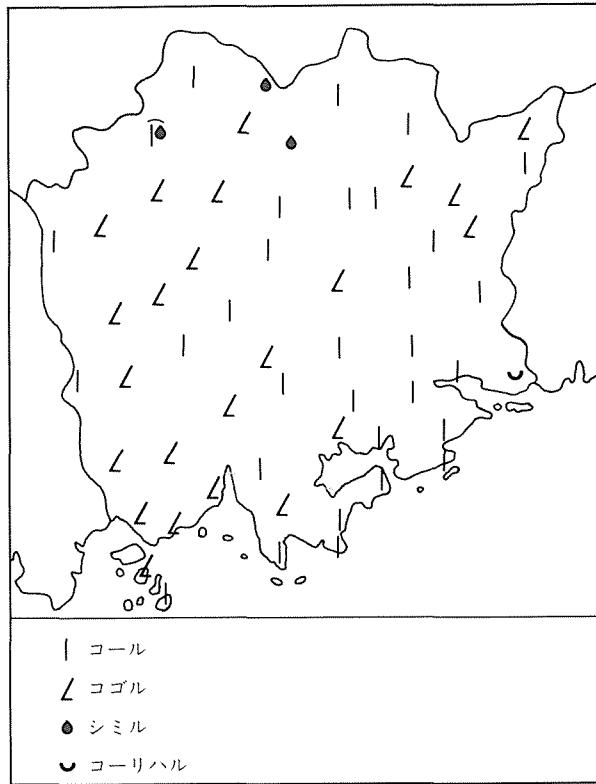
地図24a おそろしい（犬） LAJ42図より



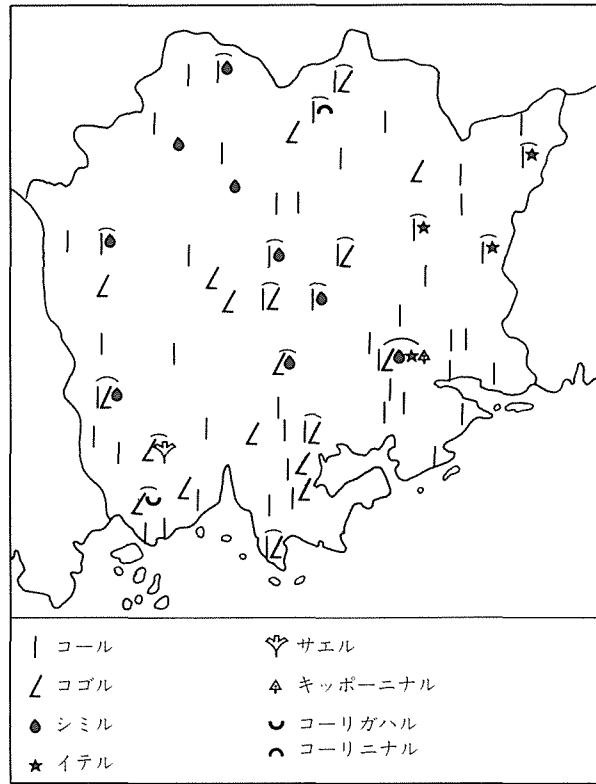
地図24b おそろしい（犬） 通信調査による



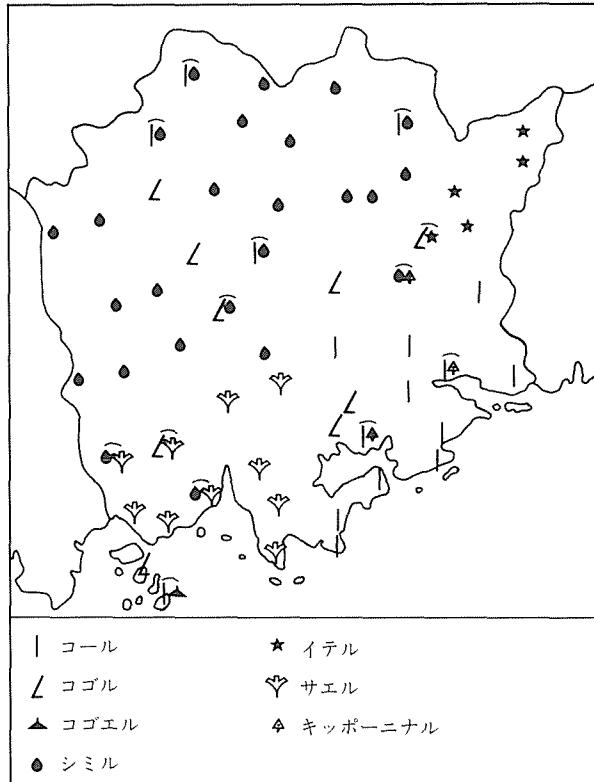
地図25a こおる（水） LAJ96図より



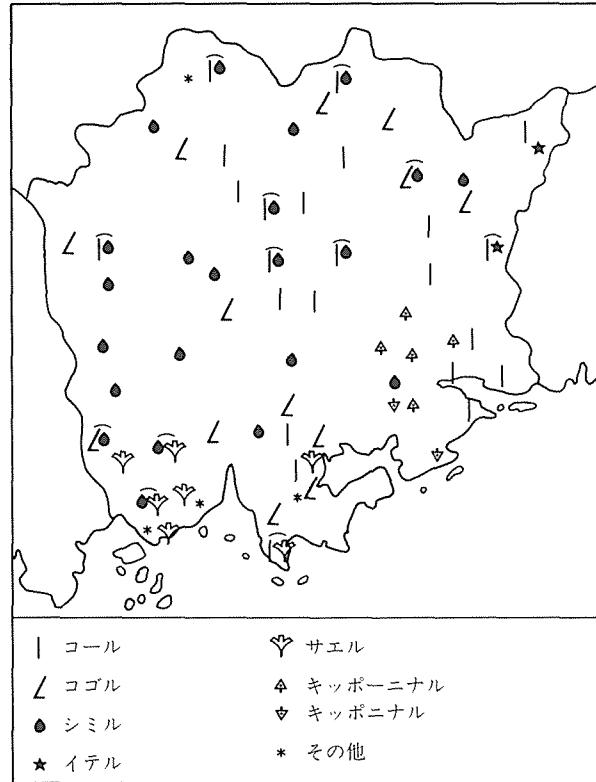
地図25b こおる（水） 通信調査による



地図26a こおる（手拭） LAJ97図より



地図26b こおる（手拭） 通信調査による



--	--	--

方言記入票

●ご協力ありがとうございます。最初に次のことをご記入ください。

お名前	お生れ
-----	-----

明治・大正・昭和 年

ご住所

岡山県

お仕事（現在無職の方は以前のお仕事）	電話番号
--------------------	------

小学校卒業まではどちらで過ごされましたか。

1. 現住所と同じ

2. よそ →

県都
道府

市区
郡

町
村

町
字

小学校卒業後、よその土地で一年以上生活なさったことはありませんか。あつたら、どこで・いくつのときか教えてください。

（いくつのとき）

（どこ）

歳～ 歳

歳～ 歳

歳～ 歳

●それでは、次のページの説明にしたがって方言をお教えください。

記入のしかた

1. これは他の人にたのまことに、ご自分でお答えください。
2. 子供のころご自身が使っていた方言をご記入ください。なお、共通語しかないときは、それを記入してください。
3. 方言は、カタカナで発音通り記入してください。
例. アケー(赤い), デーコン(大根)
4. 参考としてあげた方言は、岡山県内で使われているのではないかと思われるものです。これらを参考にして、ご自身の方言を思い出し、記入してください。
5. 方言が2つ以上あるとき、その違いについて次のようなことがわかれれば書きそえてください。
 - ① 意味が全く同じかどうか
 - ② どちらが古いか新しいか
 - ③ どちらをよく使うか
 - ④ どちらが上品か下品か
 - ⑤ 大人のことばか幼児のことばか

B方式（共通語翻訳式・参考語形無・項目分量多）

例. ジャガイモ

方言記入欄

キンカイモ

1. たこ（遊び道具）



2. おにごっこ



遊び方によって名前がちがえば
教えてください。



3. かくれんぼ



遊び方によって名前がちがえば
教えてください。



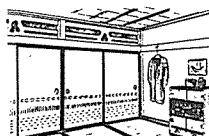
4. せともの



5. かかし



6. ふすま



7. かぼちゃ



8. とうもろこし



9. きのこ



10. すみれ



11. おおばこ



草全体と茎や花の部分とで名前
がちがえば教えてください。



12. 指にささる

竹や木のとげ



13. いばらや、さん

しょうのとげ



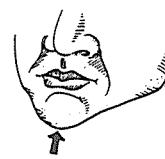
14. よだれ

15. 下あご

(絵の一の
ところ)

16. 下あごの先

(矢印のところ)



17. 下あごの角

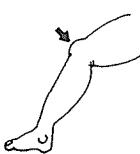
(矢印のところ)



18. 上あご

19. あご全体 (上あごと下あごをあわ
せて)

20. ひざがしら



21. ひざのさら

22. くものす

23. しかえし

24. くすぐったい		32. (水が) こおる	
{		{	}
25. しおからい		33. (ぬれた手拭が) こおる	
{		{	}
26. すっぱい(梅干の味)		34. (大根が) こおる	
{		{	}
27. すっぱい(夏みかんの味)		35. からかっていじめる	
{		{	}
28. (大きな犬が何匹もほえかかって) おそろしい・こわい			
{			
29. (夜、一人で墓場を歩いていると) おそろしい・こわい			
{			
30. (あの先生は) おそろしい・こわ い			
{			
31. (その病気は) おそろしい・こわ い			
{			

●次の共通語の文の線を引いたところを、方言になおしてください。

例. だんだん珍しくなる

方言記入欄 メズラシューナル	44. 雨が <u>降っているから</u> 、行くのはや めろ
36. まだ <u>来ない</u>	45. うちの孫はまだ一人で <u>服を着るこ</u> <u>とができない</u>
37. ここに <u>来い</u>	46. この服は古くなったので、もう <u>着</u> <u>ることができない</u>
38. ここに <u>来よう</u>	47. 早く <u>起きなさい</u> (朝いつまでも寝 ている孫にむかってやさしく言うとき)
39. <u>高い物を買う</u>	48. 早く <u>起きろ</u> (それでも起きないの できびしく言うとき)
40. りんごを <u>買った</u>	49. そこにある本を <u>とってくれ</u> (親し い友だちにむかって言うとき)
41. 酒を <u>飲む</u>	
42. 毎日雨ばかり <u>降っている</u>	
43. みかんを <u>皮ごと食べた</u>	

50. そこにある本をとってください

(近所の知り合いの人にむかって)

(ややていねいに言うとき)



●最後に、発音の高低の調子についておうかがいします。次の語を発音したとき、高く発音するところの上に、線を引いてください。例えば、「夏が」はナが高いから ナツガ、「池が」は ケが高いから イケガ、「鳥が」は リガが高いから トリガとなります。これにならって記入してみてください。

例.	夏が	ナツガ
51.	雨が	アメガ
52.	山が	ヤマガ
53.	風が	カゼガ
54.	海が	ウミガ
55.	石が	イシガ
56.	糸が	イトガ
57.	テレビが	テレビガ
58.	めがねが	メガネガ
59.	男が	オトコガ
60.	うさぎが	ウサギガ

H方式(謎々式・参考語形有・項目分量多)

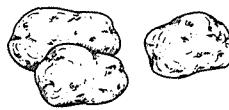
例. 夏のはじめと秋と一年に二度とれるこういう芋を何と言いますか。

参考 サンドイモ・ニドイモ・ナツイモ・

キンカイモ・メクリイモ・コーポーイモ

方言記入欄

キンカイモ



1. 細い竹の骨に紙を張り、糸をつけて空に上げるこういうおもちゃを、ひつくるめて何と言いますか。

参考 イカ・イカノボリ・イカンボーリ・

イカンボー・イカンペー・ヨーカンペー・

トビ・タコ



2. 鬼になった子供がほかの子供を追いかけてつかまえる遊びを何と言いますか。

参考 オニゴト・オニゴク・オニゴ・オニ

コ・オニカ・オニサゴ・オニトリ・オニ・

ツカマエゴ・ツカマエンボ・ニゲコ・オニ

ゴッコ

遊び方によって名前がちがえば教えて
ください。

3. 鬼になった子供が隠れている子供を見つける遊びを何と言いますか。

参考 カクレゴト・カクレゴク・カクレゴ

ッコ・カクレンゴ・カクレゴ・カクレンボ・

オニゴト

遊び方によって名前がちがえば教えて
ください。

4. 土で作ってかまどで焼いたこういう容器を、まとめて何と言いますか。

参考 カラツ・カラツモノ・カラツモン・

ヤキモノ・ヤキモン・セトモノ・セトモン・

シエトモノ・シエトモン



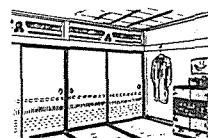
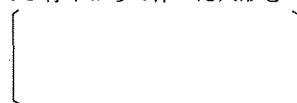
5. 鳥やけものを寄せつけないように、田畑に立てる竹やわらで作った人形を何と言いますか。

参考 オドシ・カカン・カガシ

6. へやとへやとの境にする、こういう紙を張った引き戸を何と言いますか。

しょうじではありません。

参考 カラカミ・フスマ

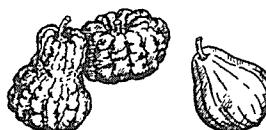


7. 夏とれる、つるになる大きな実を何と言いますか。中味は黄色です。

参考 トーナス・ナンキン・サツマ・ユー

ゴー・トーガン・ボーブラ・カボチャ・カ

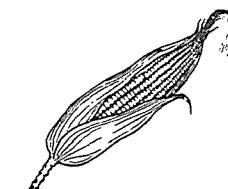
ブチャ



8. うす緑色の皮があって赤い毛のふさがついている、こういう実を何と言いますか。黄色い豆がたくさん並んでいます。

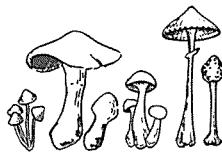
参考 ナンバ・ナンバギビ・ナンバンキビ・

キビ・トーキビ・カシンキビ・コーライ



9. まつたけやしいたけなど、そのほか毒のあるものもありますが、こういうものをひっくるめて何と言いますか。

参考 タケ・ナバ・キノコ



10. 春、紫色の花をつけるこういう小さな草を何と言いますか。

参考 スモートリバナ・スモートリグサ・

スミレ



11. みちばたなどにはえるこういう雑草を何と言いますか。茎をからめて引っぱり合って遊ぶこともあります。

参考 オバコ・スモートリバナ・スモート

リグサ



草全体と茎や花の部分とで名前がちが
えば教えてください。

12. 竹を割っているときや、よくけずってない板をこすったときなどに、手にささる小さくとがった切れはしを何と言いますか。

参考 ソゲ・ソベ・ソベラ・イガ・ノギ・

ササラ・スイバリ・トゲ



13. いばらやさんしょうなどの枝についている、こういうとがった針のようなものを何と言いますか。

参考 グイ・クイ・ソゲ・ソベラ・イガ・

ケン・ケンケン・トゲ



14. 赤ん坊がよく口からたらしている水のようなものを何と言いますか。

参考 ヨーダレ・ヨダレ・ヨーダリ・ユー

ダレ・ユダレ・ツ・コボヅ



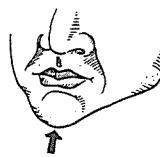
15. 人間の顔でーのところを何と言いますか。

参考 オトガイ・オトゲー・オトンゲ・ア
ギ・アギト・アゲ・アゲト・アゴタ・アゴ・
エラ・ウワアギ・シタアギ・ウワアゲ・シ
タアゲ・ウワアゴ・シタアゴ



16. 特につきでたところ（矢印）を何と言いますか。

（参考方言は 15 を見てください）



17. 特に角ばったところ（矢印）を何と言いますか。

（参考方言は 15 を見てください）



18. 口の中で、上側のかたいところを何と言いますか。餅がくっついたりするところです。

(参考方言は15を見てください)



19. 15と18を合わせて、全体を何と言いますか。

(参考方言は15を見てください)

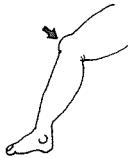


20. 足の関節で、でっぱったところ(矢印)を何と言いますか。

参考 スネボーズ・スネコボーズ・シネコ

バージ・スネボンサン・スネンボーズ・ヒ

ザボーサ



21. そのでっぱったところにある丸い骨を何と言いますか。

参考 スネノサラ・ヒザノサラ・オサラ

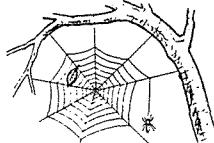


22. 天井のすみなどに、くもが張るこういう網を何と言いますか。

参考 クモイギ・クモノイギ・イギ・クモ

エギ・エギ・クモノアミ・アミ・クモノス・

ス



23. ひどい目にあわされた人が、こんどは逆に相手を同じような目にあわせることを何と言いますか。

参考 アタリガケ・アタリバチ・アタリ・

アテガレ・アテグレ・アテミ・アダ・アダ

ガエシ・カタキウチ・タタリ・アットー・

シカエシ



24. 足の裏とかわきの下などにそっと触れると、妙な笑いたくなるような感じがします。その感じをどんなだと言いますか。

参考 コソパイ・クスパイ・クスワイ
ー・コソワイ・クツパイ・クツパイ・
クツワイ

25. 塩の味はどんなだと言いますか。薬は「にがい」と言いますが、塩はどですか。

参考 カライ・カレー・カリヤー・カラー・
シオガライ・シオガレー

26. 梅干の味はどんなだと言いますか。

参考 スイー・スイイー・カライ・スッパ
イ

27. 夏みかんの味はどんなだと言いますか。

参考 スイー・スイイー・カライ・スッパ
イ

28. 大きな犬が何匹もほえかかってきて、いまにもかみつきそうになる。そんな時の感じをどんなだと言いますか。キヨートイと言いますが、他の言い方をしますか。

参考 キヨートイ・ケウトイ・チョートイ・
イビセー・エベセー・エズイ・オトロシー・
ボイセー

29. 夜一人で、墓場を歩いていると、今にもお化けが出そうな、背筋が寒くなる感じがします。その時の感じをどんなだと言いますか。キヨートイと言いますか、他の言い方をしますか。

(参考方言は 28 を見てください)

30. 学校の先生の中には、生徒をびしひし教え、宿題を忘れたりするとたいへん怒る先生がいます。そういう先生の感じをどんなだと言いますか。キヨトイ先生と言いますか、他の言い方をしますか。

(参考方言は 28 を見てください)



31. 病気の中には、かかったらさいご、ぜったいに治らない病気があります。

そんな病気をどんな病気だと言いますか。キヨートイ病気と言いますか、他の言い方をしますか。

(参考方言は 28 を見てください)



32. 水が氷になることを、水がどうなると言いますか。

参考 コール・コゴル・シミル・イテル・

サエル・キッポーニナル



- 33.ぬれた手拭が寒さのためにかちかちになることを、どうなると言いますか。

(参考方言は 32 を見てください)



34. 大根が寒さのためにだめになってしまうことを、どうなると言いますか。

(参考方言は 32 を見てください)



35. 例えば兄が弟を、上級生が下級生をからかっていじめることを何と言いますか。

参考 イタメル・ヘベス・カマウ・セビラ

カス・セブラカス・ヨゾーカス・ドモーカ

ス・ソビオカウ・アタリアウ・イラマカス・

ナブル・シオラカス・ショーラカス・サラ

カウ・セカセル



●次の共通語の文の線を引いたところを、方言になおしてください。

- | | | |
|--|-------------------|---|
| 例. だんだん <u>珍しくなる</u>
参考 メズラシューナル・メズラ
シーナル | 方言記入欄
メズラシューナル | } |
| 36. まだ <u>来ない</u>
参考 コン | | } |
| 37. ここに <u>来い</u>
参考 ケー・コエ・コエー | | } |
| 38. ここに <u>来よう</u>
参考 コー | | } |
| 39. <u>高い物</u> を買う
参考 タカエモノ・タケーモノ | | } |
| 40. りんごを <u>買った</u>
参考 コータ | | } |
| 41. <u>酒</u> を飲む
参考 サキヨー | | } |
| 42. 每日 <u>雨ばかり</u> 降っている
参考 アメバー | | } |
| 43. みかんを <u>皮ごと</u> 食べた
参考 カワゴメ・カワナリ | | } |
| 44. 雨が <u>降っているから</u> 、行くのは
やめろ
参考 フリョルケー・フリョルケ
ン・フリョルケニ・フリョルカラ | | } |
| 45. うちの孫はまだ一人で服を <u>着る</u>
<u>ことができない</u>
参考 ヨーキン・ヨーキラレン | | } |

46. この服は古くなったので、もう 着ことができない []

参考 キラレン・キレン

47. 早く起きなさい（朝いつまでも
寝ている孫にむかってやさしく言
うとき） []

参考 ハヨー オキンチャイ・ハ
ヨー オキンチャイナ

48. 早く起きろ（それでも起きない
のできびしく言うとき） []

参考 ハヨー オキニヤー・ハヨ
ー オキニヤー オエンゾ・ハヨ
ー オキー

49. そこにある本をとってくれ（親
しい友だちにむかって言うとき） []

参考 トッテクレ・トッテンカ

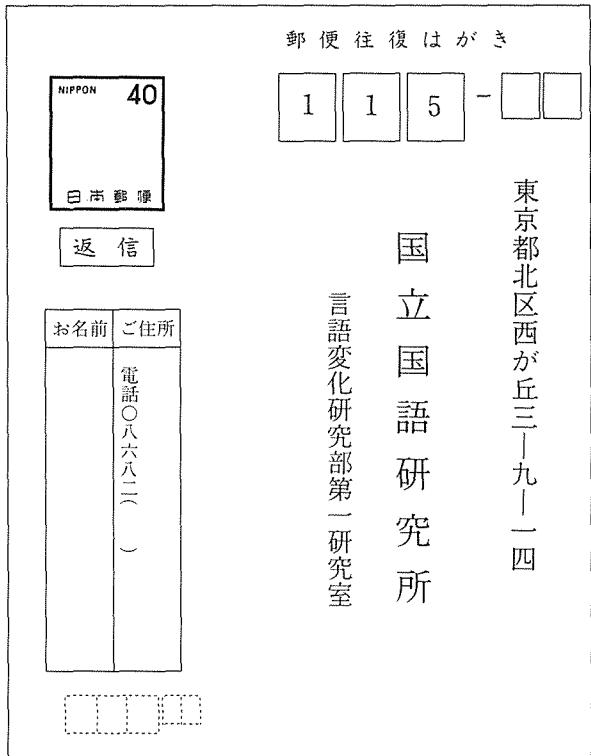
50. そこにある本をとってください []
(近所の知り合いの人にむかって
ややていねいに言うとき)

参考 トッテンカ・トッテツカー
サイ・トッテクダサイ

●最後に、発音の高低の調子についておうかがいします。高く発音するところ
に線を引くとすると、例えば「夏が」は ナ が高いから デツガ、「池が」
は ケ が高いから イケガ、「鳥が」は リガ が高いから トリガ と
なります。それにならって考えると、次の語の高低の調子は、A・Bのどち
らですか。ご自身の発音に近い方を○でかこんでください。

- | | | | |
|-----|------|-----------------|-----------------|
| 51. | 雨が | A. <u>アメガ</u> | B. ア <u>メガ</u> |
| 52. | 山が | A. ヤマガ | B. ヤ <u>マガ</u> |
| 53. | 風が | A. カゼガ | B. カ <u>ゼガ</u> |
| 54. | 海が | A. ウミガ | B. <u>ウミガ</u> |
| 55. | 石が | A. イシガ | B. イ <u>シガ</u> |
| 56. | 糸が | A. イトガ | B. <u>イトガ</u> |
| 57. | テレビが | A. <u>テレビガ</u> | B. テレビ <u>ガ</u> |
| 58. | めがねが | A. メガネ <u>ガ</u> | B. メ <u>ガネガ</u> |
| 59. | 男が | A. オトコガ | B. <u>オトコガ</u> |
| 60. | うさぎが | A. ウサギ <u>ガ</u> | B. <u>ウサギガ</u> |

I 方式（葉書・共通語翻訳式・参考語形無し・項目分量少）



I 方式返信用（おもて、3回共通）

● 卒業された小学校はどちらですか。

都道府県	市町村	小学校
------	-----	-----

● それでは次のことばは、あなたご自身の方言で何と言うか、ご記入ください。

1	たこ（遊び道具）	
2	おにごっこ	
3	かくれんぼ	
4	せともの	
5	かかし	
6	ふすま（襖）	
7	かぼちゃ	
8	とうもろこし	
9	きのこ	
10	すみれ	
11	おおばこ	

I 方式1回目（うら）

●次のことばは、あなたご自身の方言で何と言うか、ご記入ください。

1	(指にささる竹や木の)とげ	
2	(いばらやさんしょうの)とげ	
3	よだれ	
4	下あご	
5	下あごの先	
6	下あごの角	
7	上あご	
8	あご全体 (上あごと下あごをあわせて)	
9	ひざがしら	
10	ひざのさら	
11	くものす	
12	しかえし	

I 方式 2 回目

●次のことばは、あなたご自身の方言で何と言うか、ご記入ください。

1	くすぐったい	
2	しおからい	
3	すっぱい(梅干の味)	
4	すっぱい(夏みかんの味)	
5	(大きな犬が何匹もほえかかって) おそろしい・こわい	
6	(夜、一人で墓場を歩いていると) おそろしい・こわい	
7	(あの先生は) おそろしい・こわい	
8	(その病気は) おそろしい・こわい	
9	(水が) こおる	
10	(ぬれた手拭が) こおる	
11	(大根が) こおる	
12	からかっていじめる	

I 方式 3 回目

Summary

1. The Quantitative Nature of the Forms in the Linguistic Atlas of Japan

The twofold purpose of the study was

1. Is there a quantitative relationship between the number of linguistic forms recorded in many localities and the linguistic forms recorded in a few localities only?
2. What is the distribution of the localities where a great number of unrelated linguistic forms (lone instances) were noted?

In the case of 1, a correlation was apparent.

In the case of 2, a great number of lone instances were found in Okinawa. This is a proof that the Okinawan dialects have dialectal forms with a variety not inferior to that of main island. This furnishes an indication about the local specificity of the lone instances. A main frame computer was used, and, as an experiment also a personal computer.

2. Dialect Changes and Value Judgment : Nagoya City between East and West Japan

Nagoya City is the geographical meeting point of the east Japan (Tokyo) dialect and the west Japan (Kyoto) dialect.

The present survey wanted to ascertain

- 1) how the Nagoya people evaluated both dialects.
- 2) how both influences worked out concretely on the Nagoya dialect.

The main results are :

- a) The Tokyo dialect is highly considered.
- b) The Tokyo dialect has penetrated the center of Nagoya from where it is spreading to the neighboring areas, especially towards the west.
- c) As a result the old East-West boundary is slowly shifting westwards.

3. The Influence of Age and Locality on Dialectal Phonetics (South Yamagata)

The Japan Sea coast of southern Yamagata (Atsumi town) presents among others, one phonetic characteristic: the bilabial Φ-appears where the standard language has ku- : bear (animal), kuma : Φūma : dry grass, karekusa : kareΦūsa ; mulberry tree, kuwanoki : Φanogi ; he gave me, kureta : Φeda.

(This phenomenon appears also further west in the Noto peninsula, Ishikawa prefecture, but in a reduced form).

The present Atsumi town was born from the merger of three villages Nezugaseki, Fukue and Yamado with the original Atsumi ; in the field of administration, economy and culture, the dominant role is played by the Atsumi and the Nezugaseki districts along the coast.

The bilabial Φ-occurred first in these two districts and its origin has followed the following process : kū>kxū>xū>Φū. In these dialects the beginning h- in the phonetic series fa, fe, fo etc. appears as Φa, Φe, Φo etc. ; hence xū was assimilated into Φū.

This bilabial initial is regressing in the two coastal districts, especially among the younger generation, under the influence of the standard language or in the case of new words or foreign loanwords. It is still strong in the area far from the coast, especially in the Tozawa area. The dialect custom is losing its force for some new

words, although the tendency to conform to the dialect is found in some new words.

4. The Accent System of Fukui City and its Suburbs—With Special Reference to the Survey Methods, Age and Individual Differences

Fukui City (150 kms northeast of Kyoto on the Japan Sea coast) with its hinterland, is known for its toneless dialect i. e. without tonal distinctions. However, by experimenting with various survey methods, a different picture emerges.

Using the interview method, we found that the majority of the elderly informants do have a tonal system ; by modifying our survey methods (using standard language sentences) some tone systems appeared but irregularly. In the city of Fukui itself, the middle generation informants and younger generation use mostly a toneless system ; in both categories a few use the tone system of Tokyo, especially the young females have for a large number a Tokyo system.

5. A Re-assessment of the Correspondence Method

The correspondence method has mostly be abandoned for the personal interview method. In a time like ours where the dialects are in danger of disappearing, the correspondence method seems to furnish a cheap technique to gather quickly dialect materials. We discuss here the results of a survey done by the correspondence method done in the Okayama province (on the Inland Sea coast, some 200 kms west of Kyoto).

When compared with the direct interview method, the correspondence method fetches a greater number of standard language

responses. But the distribution maps drawn with this kind of materials do not differ greatly from the maps based on direct surveys.

When the correspondence method uses a multiple choice questionnaire, the results in terms of content and of percentage of responses are quite satisfactory.

図表目次

『日本言語地図』の語形の数量的性質

図 1 ものもらい（麦粒腫）の地図の語形の出現地点数と語形数	24
図 2 ものもらい（麦粒腫）の地図の語形の出現地点数と語形数 （出現地点数をグループ分けにして図示）	24
図 3 出現地点数別に見た異なり語形数（項目別）	26
図 4 同上（続き）	27
図 5 出現地点 1～10 の語形が総異なり語形数のなかで占める割合	28
図 6 孤例数と地点数の関係（本土と琉球を一緒にして図示）	30
図 7 孤例数と地点数の関係（本土と琉球を分離して図示）	30
図 8 孤例数が 3 以上の地点の分布図	31
図 9 孤例数と地点数の関係（琉球）	34
図 10 孤例数と地点数の関係（本土の一部地区）	34
図 11 地点を 1／11 に減らしたときの孤例数と地点数の関係	36
図 12 地点を 1／21 に減らしたときの孤例数と地点数の関係	36
図 13 地点を 1／31 に減らしたときの孤例数と地点数の関係	37
図 14 2 例の出現回数と地点数の関係	38

方言意識と方言使用の動態——中京圏における——

表 1 インフォーマントの属性〈生年・性別〉	42
表 2 方言意識（日本を大きく東と西とに分けるとすれば、この土地 はそのどちらに属していると思いますか）〈老年層・若年層〉	44
表 3 同 〈老年層〉	44
表 4 同 〈あなたは「関西人」ですか〉 〈老年層・若年層〉	44
表 5 同 〈この土地のことばは、関東、関西のどちらに 近いと思いますか〉 〈老年層〉	44

表 6 方言意識（この土地のことばは、関東、関西のどちらに 近いと思いますか）〈若年層〉	44
表 7 同 （この土地のことばは今どこのことばの影響を 受けつつあると思いますか）〈老年層・若年層〉	45
表 8 同 （「関西のことば」の評価）〈老年層・若年層〉	47
表 9 同 （「名古屋のことば」の評価）〈同〉	49
表10 同 （「東京のことば」の評価）〈同〉	50
表11 方言使用（蠅）〈老年層・若年層〉	52
表12 同 （白い）〈同〉	52
表13 同 （寒い）〈同〉	52
表14 同 （お前）〈同〉	54
表15 同 （出した）〈同〉	54
表16 同 （白くなる）〈同〉	54
表17 同 （買った）〈同〉	56
表18 同 （貰った）〈同〉	56
表19 同 （貸す）〈同〉	56
表20 同 （「箸」のアクセント）〈同〉	57
表21 同 （「日（が）」のアクセント）〈同〉	57
表22 同 （「名古屋」のアクセント）〈同〉	57
表23 同 （降っている <u>から</u> ）〈同〉	59
表24 同 （行かなかった）〈同〉	59
表25 同 （～シテミエルという表現を使うか）〈同〉	59
表26 同 （食パン）〈同〉	61
表27 同 （自転車）〈同〉	61
表28 方言使用・方言理解（ケッター〈自転車〉という語を知って いるか、使うか）〈同〉	61
図 1 インフォーマントの属性の分布図〈生年・性別〉	62
図 2 「よだれ」の分布図〈老年層〉	63
表29 方言使用（よだれ）〈老年層・若年層〉	65

表30 方言使用（恐ろしい）〈老年層・若年層〉	65
表31 同 （かかと〈踵〉）〈同〉	65
図3 「恐ろしい」の分布図〈老年層〉	66
図4 「かかと〈踵〉」の分布図〈老年層〉	67
図5 「梅雨期」の分布図〈老年層〉	68
表32 方言使用（梅雨期）〈老年層・若年層〉	70
表33 同 （《大根を》煮る）〈老年層・若年層〉	70
表34 同 （いい《天気だ》）〈老年層・若年層〉	70
図6 「(大根を) 煮る」の分布図〈老年層〉	71
図7 「いい(天気だ)」の分布図〈老年層〉	72
図8 「《いい天気》だ」の分布図〈老年層〉	73
表35 方言使用（《いい天気》だ）〈老年層・若年層〉	75
表36 同 （里芋）〈老年層・若年層〉	75
表37 同 （《塩味が》うすい）〈老年層・若年層〉	75
図9 「里芋」の分布図〈同〉	76
図10 「(塩味が) うすい」の分布図〈老年層〉	77
図11 「まぶしい」の分布図〈老年層〉	78
表38 方言使用（まぶしい）〈老年層・若年層〉	79

特殊方言音の地域差・年齢差

表1 調査結果の一部（新しい語）	93
表2 同 （複合語との関係）	94
表3 同 （方言音が現れやすい語）	96
表4 調査結果の全容〈全地区〉	99
表5 同 〈戸沢地区〉	100
表6 同 〈温海地区〉	101
表7 同 〈鼠が関地区〉	102
表8 方言音残存率・共通語化の率〈全地区〉	103
表9 方言音残存率（地区別・年層別）	104

表10	方言音残存率（地区別・年層別・男女別）	105	
表11	調査結果の全容（話者別）〈戸沢地区〉	110・111	
表12	同	〈温海地区〉	112・113
表13	同	〈鼠が関地区〉	114・115
表14	調査員別集計表（全体）	118	
表15	同	（60・70代）	118
表16	同	（40代）	119
表17	同	（10代）	119

福井市およびその周辺地域における

アクセントの年齢差、個人差、調査法による差

図 1	福井県嶺北方言音調分布図（平山輝男1953）	124
表 1	福井市高年層のアクセント（杉藤美代子1980）	125
表 2	福井市高年層話者 2 f のアクセント（調査方式間の違い）	136
図 2	三国式アクセント度のモデル	137
表 3	福井市若年層話者 19 f のアクセント〈A式、単語および文節〉	143
表 4	同 話者 3 m のアクセント〈 同 〉	144
表 5	東京アクセント度 (t) の計算例	145
表 6	三国町高年層話者 1 f のアクセント〈A式、単語および文節〉	150
表 7	同 話者 2 f のアクセント〈 同 〉	151
表 8	同 話者 3 f のアクセント〈 同 〉	152
表 9	同 話者 1 f のアクセント〈比較発音、文節（文中 および言い切り）〉	153
表10	同 話者 2 f のアクセント〈 同 〉	154
表11	同 話者 3 f のアクセント〈 同 〉	155
表12	松岡町高年層話者 1 m のアクセント〈A式、単語および文節〉	158
表13	同 話者 2 f のアクセント〈 同 〉	159
表14	同 話者 3 m のアクセント〈 同 〉	160
表15	坂井町高年層話者 1 f のアクセント〈 同 〉	164

表16	坂井町高年層話者 1 f のアクセント <比較発音, 文節 (文中 および言い切り)>	165
表17	同 話者 3 f のアクセント <A式, 単語および 文節>	166
表18	同 話者 2 f のアクセント < 同 >	167
表19	福井市高年層話者 8 f のアクセント < 同 >	171
表20	同 話者 17m のアクセント < 同 >	172
表21	同 話者 10 f のアクセント < 同 >	173
表22	同 話者 14 f のアクセント < 同 >	174
表23	三国式アクセント度 <高年層全員・A式, 単語および文節>	175
表24	福井市高年層話者 13m のアクセント <比較発音, 文節 (文中 および言い切り)>	178
表25	同 話者 11 f のアクセント < 同 >	179
表26	同 話者 14 f のアクセント < 同 >	180
表27	同 話者 24 f のアクセント <A式, 単語および文節>	181
表28	三国式アクセント <中年層全員・A式, 単語および文節>	182
表29	福井市中年層話者 20 f のアクセント <A式, 単語および文節>	184
表30	同 話者 22 f のアクセント < 同 >	185
表31	同 話者 14 f のアクセント < 同 >	186
表32	同 話者 14 f のアクセント <比較発音, 文節 (文中 および言い切り)>	187
表33	福井市若年層話者全員の東京アクセント度 <A式, 単語>	189
表34	同 <A式, 文節 (文中)>	190
表35	福井市若年層話者 10 f のアクセント <A式, 単語および文節>	193
表36	同 話者 11 f のアクセント < 同 >	194
表37	同 話者 10 f のアクセント <比較発音, 文節 (文中 および言い切り)>	195
表38	同 話者 11 f のアクセント < 同 >	196
表39	福井市高年層話者全員の東京アクセント度 <A式, 単語>	198

表40 福井市高年層話者全員の東京アクセント度 〈A式, 文節(文中)〉	199
表41 福井市中年層話者全員の東京アクセント度 〈A式, 単語〉	200
表42 同 〈A式, 文節(文中)〉	201
表43 福井市高年層話者全員の三国式アクセント度 〈単語, 各方式の比較〉	207
表44 同 話者5fのアクセント 〈同〉	208
表45 同 話者15fのアクセント 〈同〉	209
表46 福井市高年層話者全員の三国式アクセント度 〈文節, 各方式の比較〉	211
表47 福井市高年層話者25mアクセント 〈文節, Eおよびe式〉	213
表48 同 話者5fのアクセント 〈文節, A・E・e式〉	213
 通信調査法の再評価		
表 1 津山通信調査の方式の種類	223
図 1 同 方式別回収率	238
図 2 同 語彙項目の回答率	241
表 2 同 文法項目の回答率	243
表 3 同 アクセント項目の回答率	243
図 3 同 語彙項目の俚言形の回答率	246
図 4 同 文法項目の俚言形の回答率	249
図 5 同 アクセント項目の津山アクセントの回答率	251
表 4 津山通信調査の項目別回答結果——下あご	254
表 5 同 ——下あごの先	254
表 6 同 ——下あごの角	255
表 7 同 ——上あご	255
表 8 同 ——あご全体	256
表 9 同 ——ひざがしら	259
表10 同 ——ひざのさら	259

表11	同	——すっぱい（うめぼし）……………261
表12	同	——すっぱい（夏みかん）……………261
表13	同	——こおる（水が）……………263
表14	同	——こおる（手拭が）……………263
表15	津山通信調査の項目別回答結果	——こおる（大根が）……………263
表16	同	——おにごっこ……………265
表17	同	——かくれんぼ……………265
表18	同	——指にささる竹や木のとげ……………265
表19	同	——いばらやさんじょうのとげ……………266
表20	同	——しかえし……………268
表21	同	——からかっていじめる……………270
表22	同	——かかし……………272
表23	同	——よだれ……………273
表24	同	——しおからい……………274
表25	同	——せともの……………276
表26	同	——きのこ……………278
表27	同	——たこ……………278
表28	岡山県通信調査の協力機関別回収率	……………284
図 6	同	回答者の年齢分布……………285
表29	同	回答者の在外歴……………287
地図 1	同	回答地点——市町村役場……………298
地図 2	同	回答地点——特定郵便局……………298
地図 3	同	回答地点——中学校（方式 I ）……………299
地図 4	同	回答地点——中学校（方式 II ）……………299
地図 5 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布	——たこ……………300
地図 5 b	通信調査による岡山県の方言分布	——たこ……………300
地図 6 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布	——おにごっこ……………301
地図 6 b	通信調査による岡山県の方言分布	——おにごっこ……………301
地図 7 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布	——かくれんぼ……………302

地図 7 b	通信調査による岡山県の方言分布——かくれんぼ	302
地図 8 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——せともの	303
地図 8 b	通信調査による岡山県方言分布——せともの	303
地図 9 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——かかし	304
地図 9 b	通信調査による岡山県の方言分布——かかし	304
地図10 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——ふすま	305
地図10 b	通信調査による岡山県の方言分布——ふすま	305
地図11 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——かぼちゃ	306
地図11 b	通信調査による岡山県の方言分布——かぼちゃ	306
地図12 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——とうもろ こし	307
地図12 b	通信調査による岡山県の方言分布——とうもろこし	307
地図13 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——きのこ	308
地図13 b	通信調査による岡山県の方言分布——きのこ	308
地図14 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——すみれ	309
地図14 b	通信調査による岡山県の方言分布——すみれ	309
地図15 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——指にささ る竹や木のとげ	310
地図15 b	通信調査による岡山県の方言分布——指にささる竹や 木のとげ	310
地図16 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——いばらや さんしょうのとげ	311
地図16 b	通信調査による岡山県の方言分布——いばらやさんし ょうのとげ	311
地図17 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——よだれ	312
地図17 b	通信調査による岡山県の方言分布——よだれ	312
地図18 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——下あご	313
地図18 b	通信調査による岡山県の方言分布——下あご	313
地図19 a	『日本言語地図』による岡山県の方言分布——下あごの	

先	314
地図19 b 通信調査による岡山県の方言分布——下あごの先	314
地図20 a 『日本言語地図』による岡山県の方言分布——くものす	315
地図20 b 通信調査による岡山県の方言分布——くものす	315
地図21 a 『日本言語地図』による岡山県の方言分布——くすぐつ たい	316
地図21 b 通信調査による岡山県の方言分布——くすぐったい	316
地図22 a 『日本言語地図』による岡山県の方言分布——しおから い	317
地図22 b 通信調査による岡山県の方言分布——しおからい	317
地図23 a 『日本言語地図』による岡山県の方言分布——すっぱい (梅干)	318
地図23 b 通信調査による岡山県の方言分布——すっぱい (梅干)	318
地図24 a 『日本言語地図』による岡山県の方言分布——おそろしい (犬)	319
地図24 b 通信調査による岡山県の方言分布——おそろしい (犬)	319
地図25 a 『日本言語地図』による岡山県の方言分布——こおる(水)	320
地図25 b 通信調査による岡山県の方言分布——こおる (水)	320
地図26 a 『日本言語地図』による岡山県の方言分布——こおる (手拭)	321
地図26 b 通信調査による岡山県の方言分布——こおる (手拭)	321

国立国語研究所報告 93
方言研究法の探索

昭和63年3月

國立國語研究所

東京都北区西が丘3丁目9番14号
電話 (03) 900-3111(代表)

©1988 The National Language Research Institute

UDC 809.56—3:681.3

NDC 810.9

本書の市販品発行所
(〒162) 東京都新宿区納戸町40 (03) 260-5281
株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 —白河市および付近の農村における—	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞—用法と実例—	〃	3,000円
4	婦人雑誌の用語—現代語の語彙調査—	〃	品切れ
5	地域社会の言語生活—鶴岡における実態調査—	〃	〃
6	少年と新聞—小学生・中学生の新聞への接近と理解—	〃	〃
7	入門期の言語能力	〃	〃
8	談話語の実態	〃	〃
9	読みみの実験的研究 —音読にあらわれた読みあやまりの分析—	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語(前編)—現代語の語彙調査—	〃	〃
13	総合雑誌の用語(後編)—現代語の語彙調査—	〃	〃
14	中学年の読み書き能力	〃	〃
15	明治初期の新聞の用語	〃	〃
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	〃
18	話しことばの文型(1)—対話資料による研究—	〃	2,000円
19	総合雑誌の用字	〃	品切れ
20	同音語の研究	〃	〃
21	現代雑誌九十種の用語用字I—総記および語彙表—	〃	3,000円
22	現代雑誌九十種の用語用字II—漢字表—	〃	3,000円
23	話しことばの文型(2)—独話資料による研究—	〃	2,000円
24	横組みの字形に関する研究	〃	品切れ
25	現代雑誌九十種の用語用字III一分析—	〃	3,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	品切れ
27	共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—	秀英出版刊	〃
28	類義語の研究	〃	〃
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1	日本言語地図 (1) 大蔵省印刷局刊	品切れ	

	日本言語地図	(1)<縮刷版>	大蔵省印刷局刊	17,000円
30-2	日本言語地図	(2)	"	品切れ
	日本言語地図	(2)<縮刷版>	"	17,000円
30-3	日本言語地図	(3)	"	品切れ
	日本言語地図	(3)<縮刷版>	"	17,000円
30-4	日本言語地図	(4)	"	品切れ
	日本言語地図	(4)<縮刷版>	"	17,000円
30-5	日本言語地図	(5)	"	品切れ
	日本言語地図	(5)<縮刷版>	"	17,000円
30-6	日本言語地図	(6)	"	品切れ
	日本言語地図	(6)<縮刷版>	"	17,000円
31	電子計算機による国語研究		秀英出版刊	品切れ
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—		"	"
33	家庭における子どものコミュニケーション意識		"	350円
34	電子計算機による国語研究 II —新聞の用語用字調査の処理組織—		"	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) —マキ・マケと親族呼称—		"	"
36	中学生の漢字習得に関する研究		"	"
37	電子計算機による新聞の語彙調査		"	"
38	電子計算機による新聞の語彙調査 II		"	"
39	電子計算機による国語研究 III		"	"
40	送りがな意識の調査		"	1,500円
41	待遇表現の実態—松江24時間調査資料から—		"	品切れ
42	電子計算機による新聞の語彙調査 III		"	"
43	動詞の意味・用法の記述的研究		"	6,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究		"	4,000円
45	幼児の読み書き能力		東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究 IV		秀英出版刊	品切れ
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) —性向語彙と価値観—		"	"
48	電子計算機による新聞の語彙調査 IV		"	"
49	電子計算機による国語研究 V		"	900円
50	幼児の文構造の発達—3歳～6歳児の場合—		"	品切れ
51	電子計算機による国語研究 VI		"	1,000円

52	地域社会の言語生活 一鶴岡における20年前との比較—	秀英出版刊	1,800円
53	言語 使用 の 変遷(1)一福島県北部地域の面接調査—	"	2,500円
54	電子計算機による国語研究 VII	"	1,000円
55	幼児語の形態論的な分析 一動詞・形容詞・述語名詞—	"	品切れ
56	現代新聞の漢字	"	6,000円
57	比喩表現の理論と分類	"	6,000円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,500円
59	電子計算機による国語研究 VIII	秀英出版刊	品切れ
60	X線映画資料による母音の発音の研究 —フォネーム研究序説—	"	"
61	電子計算機による国語研究 IX	"	"
62	研究報告集 (1)	"	1,700円
63	児童の表現力と作文	東京書籍刊	6,000円
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)	秀英出版刊	2,000円
65	研究報告集 (2)	"	3,000円
66	幼児の語彙能力	東京書籍刊	8,000円
67	電子計算機による国語研究 X	秀英出版刊	品切れ
68	専門語の諸問題	"	4,000円
69	幼児・児童の連想語彙表	東京書籍刊	6,800円
70-1	大都市の言語生語〈分析編〉	三省堂刊	7,800円
70-2	大都市の言語生活〈資料編〉	"	12,000円
71	研究報告集 (3)	秀英出版刊	4,800円
72	幼児・児童の概念形成と言語	東京書籍刊	6,800円
73	企業の中の敬語	三省堂刊	9,500円
74	研究報告集 (4)	秀英出版刊	品切れ
75	現代表記のゆれ	"	"
76	高校教科書の語彙調査	"	5,000円
77	敬語と敬言意識	三省堂刊	8,000円
	一鶴岡における20年前との比較—		
78	日本語教育のための基本語彙調査	秀英出版刊	6,000円
79	研究報告集 (5)	"	4,200円
80	言語行動における日独比較	三省堂刊	8,000円
81	高校教科書の語彙調査 II	秀英出版刊	5,000円
82	現代日本語動詞のアスペクトとテンス	"	5,000円
83	研究報告集 (6)	"	4,200円

84	方言の諸相—『日本言語地図』検証調査報告一	三省堂刊	9,800円
85	研究報告集(7)	秀英出版刊	4,000円
86	社会変化と敬語行動の標準	〃	9,000円
87	中学校教科書の語彙調査	〃	5,000円
88	日独仏西基本語彙対照表	〃	8,500円
89	雑誌用語の変遷	〃	7,000円
90	研究報告集(8)	〃	品切れ
91	中学校教科書の語彙調査II	〃	5,000円
92	談話行動の諸相—座談資料の分析一	三省堂刊	2,800円
93	方言研究法の探索	秀英出版刊	7,000円
94	研究報告集(9)	〃	3,500円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)	秀英出版刊	品切れ
2	語彙調査—現代新聞用語の一例一	〃	〃
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	〃	〃
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	4,300円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,800円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	〃	品切れ
9	牛店雑談 安愚樂鍋用語索引	〃	1,500円
10	方言談話資料(1)—山形・群馬・長野一	〃	6,000円
10-2	方言談話資料(2)—奈良・高知・長崎一	〃	6,000円
10-3	方言談話資料(3)—青森・新潟・愛知一	〃	6,000円
10-4	方言談話資料(4)—福井・京都・島根一	〃	6,000円
10-5	方言談話資料(5)—岩手・宮城・千葉・静岡一	〃	6,000円
10-6	方言談話資料(6)—鳥取・愛媛・宮崎・沖縄一	〃	6,000円
10-7	方言談話資料(7)—老年層と若年層との対話一	〃	6,000円
10-8	方言談話資料(8)—老年層と若年層との対話一	〃	6,000円
10-9	方言談話資料(9)—場面設定の対話一	〃	品切れ
10-10	方言談話資料(10)—場面設定の対話 その2一	〃	6,000円
11	日本言語地図語形索引	大蔵省印刷局刊	1,500円

国立国語研究所国語辞典編集資料

1	国定読本用語総覧 1 第1期(あ～ん) —『尋常小学読本』明治37年度以降使用—	三省堂刊	25,000円
2	国定読本用語総覧 2 第2期(あ～て) —『尋常小学読本』明治42年度以降使用—	"	28,000円

言語処理データ集

1	高校教科書—文脈付き用語索引—	日本マイクロ写真	35,000円
---	-----------------	----------	---------

国立国語研究所研究部資料

1	幼児のことば資料(1)—2歳・3歳誕生日のことばの記録—	秀英出版刊	3,800円
1-2	幼児のことば資料(2)—4歳誕生日のことばの記録—	"	3,800円
1-3	幼児のことば資料(3)—1歳児のことばの記録—	"	6,000円
1-4	幼児のことば資料(4)—2歳児のことばの記録—	"	6,000円
1-5	幼児のことば資料(5)—3歳前半のことばの記録—	"	6,000円
1-6	幼児のことば資料(6)—3歳後半のことばの記録—	"	6,000円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
1	ことばの研究 第2集	"	"
1	ことばの研究 第3集	"	"
1	ことばの研究 第4集	"	"
1	ことばの研究 第5集	"	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1 昭和24年度	品切れ	14 昭和37年度	品切れ	27 昭和50年度	700円
2 昭和25年度	"	15 昭和38年度	250円	28 昭和51年度	非売品
3 昭和26年度	"	16 昭和39年度	品切れ	29 昭和52年度	"
4 昭和27年度	160円	17 昭和40年度	"	30 昭和53年度	800円
5 昭和28年度	品切れ	18 昭和41年度	300円	31 昭和54年度	1,200円
6 昭和29年度	"	19 昭和42年度	300円	32 昭和55年度	1,300円
7 昭和30年度	"	20 昭和43年度	品切れ	33 昭和56年度	1,300円
8 昭和31年度	"	21 昭和44年度	"	34 昭和57年度	2,000円
9 昭和32年度	"	22 昭和45年度	"	35 昭和58年度	2,200円
10 昭和33年度	"	23 昭和46年度	450円	36 昭和59年度	2,700円
11 昭和34年度	"	24 昭和47年度	品切れ	37 昭和60年度	2,700円
12 昭和35年度	"	25 昭和48年度	"	38 昭和61年度	2,700円
13 昭和36年度	"	26 昭和49年度	"		

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和41年版	品切れ	昭和53年版	品切れ
昭和30年版	"	昭和42年版	"	昭和54年版	"
昭和31年版	"	昭和43年版	"	昭和55年版	"
昭和32年版	"	昭和44年版	"	昭和56年版	"
昭和33年版	"	昭和45年版	"	昭和57年版	5,500円
昭和34年版	"	昭和46年版	2,000円	昭和58年版	5,500円
昭和35年版	"	昭和47年版	2,200円	昭和59年版	品切れ
昭和36年版	"	昭和48年版	品切れ	昭和60年版	5,800円
昭和37年版	"	昭和49年版	3,800円	昭和61年版	7,800円
昭和38年版	"	昭和50年版	品切れ	昭和62年版	7,800円
昭和39年版	"	昭和51年版	4,000円		
昭和40年版	"	昭和52年版	品切れ		

高 校 生 と 新 聞	國立國語研究所 日本新聞協会共編	秀英出版刊	品切れ
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 國立國語研究所共編	金沢書店刊	"
國立國語研究所三十年のあゆみ —研究業績の紹介—	國立國語研究所 國立國語研究編	秀英出版刊	"

日本語教育教材

日本語と日本語教育 文化化	国立国語研究所共編	大蔵省印刷局刊	700円
—発音・表現編—			
日本語と日本語教育	一文字・表現編—	//	850円
日本語の文法(上)	—日本語教育指導参考書4—	//	450円
日本語の文法(下)	—日本語教育指導参考書5—	//	550円
日本語教育の評価法	—日本語教育指導参考書6—	//	700円
中・上級教授法	—日本語教育指導参考書7—	//	500円
日本語の指示詞	—日本語教育指導参考書8—	//	500円
日本語教育基本語彙七種	比較対照表 —日本語教育指導参考書9—	//	1,000円
日本語教育文献索引	—日本語教育指導参考書10—	//	1,400円
談話の研究と教育1	—日本語教育指導参考書11—	//	550円
語彙の研究と教育(上)	—日本語教育指導参考書12—	//	600円
語彙の研究と教育(下)	—日本語教育指導参考書13—	//	700円

日本語教育映画基礎編(全20巻)

(各16巻ミリカラー、5分、日本シネセル社販売)

卷	題名	制作年度(昭和)
ユニット1		
1*	これは かえるです 一「こそあど」+「は～です」—	49
2*	さいふは どこにありますか 一「こそあど」+「～がある」—	49
3*	やさくないです、たかいです 一形容詞—	49
4*	きりんは どこにいますか 一「いる」「ある」—	51
5*	なにを しましたか 一動詞—	50
ユニット2		
6*	しづかな こうえんで 一形容動詞—	50
7*	さあ、かぞえましょう 一助数詞—	50
8*	どちらが すきですか 一比較・程度の表現—	52
9*	かまくらを あるきます 一移動の表現—	51
10*	もみじが とても きれいでした 一です、でした、でしょう—	52
ユニット3		
11*	きょうは あめが ふっています 一して、している、していた—	52
12*	そうじは してありますか 一してある、しておく、してしまう—	53

13*	おみまいに いきませんか ー依頼・勧誘の表現ー	53
14*	なみのおとが きこえてきます ー「いく」「くる」ー	53
15*	うつくしい さらに なりました ー「なる」「する」ー	50
ユニット 4		
16*	みずうみのえを かいたことが ありますか ー経験・予定の表現ー	54
17*	あのいわまで およげますか ー可能の表現ー	55
18	よみせを みに いきたいです ー意志・希望の表現ー	54
19*	てんきが いいから さんぽを しましょう ー原因・理由の表現ー	55
20*	さくらが きれいだそうです ー伝聞・様態の表現ー	55
ユニット 5		
21	おかげを みに いっても いいですか ー許可・禁止の表現ー	56
22	あそこに のばれば うみがみえます ー条件の表現1ー	56
23	いえが たくさんあるのに とてもしづかです ー条件の表現2ー	56
24	おかげを とられました ー受身の表現1ー	51
25	あめに ふられて こまりました ー受身の表現2ー	55
ユニット 6		
26	このきっぷを あげます ーやり・もらひの表現1ー	57
27	にもつを もって もらいました ーやり・もらひの表現2ー	57
28	てつだいを させました ー使役の表現ー	57
29*	よく いらっしゃいました ー待遇表現1ー	58
30*	せんせいを おたずねします ー待遇表現2ー	56

販 売 価 格

	16mmカラー	VTRカラー(3/4インチ)	VTRカラー(1/2インチ)
全巻セット	¥720,000	¥535,000	¥432,000
各ユニット	¥112,500	¥ 84,000	¥ 67,500
各 卷	¥ 30,000	¥ 22,000	¥ 18,000

第1巻～第3巻は文化庁との共同企画

* については日本語教育映画解説の冊子がある。

日本語教育映画 関連教材（〈株〉ビスコ販売）

日本語教育映画	基礎編 教師用マニュアル	(全6分冊)	各分冊1,000円
日本語教育映画	基礎編 練習帳	(全6分冊)	〃 500円
日本語教育映画	基礎編 シナリオ集	(全1冊)	1,000円
日本語教育映画	基礎編 総合語彙表	(全1冊)	1,500円

日本語教育映画 基礎編 総合文型表	(全 1 冊)	1,500円
映像教材による教育の現状と可能性	(全 1 冊)	
日本語教育映画ワークショップ報告 日本シネセル社刊		2,500円

日本語教育映像教材中級編一覧

(各巻ビデオ及び16ミリカラー、約5分、日本シネセル社販売)

セグメント	題名	制作年度(昭和)
ユニット 1	初めて会う人と ー紹介・あいさつー	
1	自己紹介をする ー会社の歓迎会でー	61
2	人を紹介する ー訪問先の応接室でー	61
3	友人に会う ー喫茶店でー	61
4	面会の約束をする ー電話でー	61
5	道を聞く ー交番でー	61
6	会社を訪問する ー受付と応接室でー	61
ユニット 2	人に何かを頼むとき ー依頼・要求・指示ー	
7	届出をする ー市役所でー	62
8	買物をする ーデパートでー	62
9	打合せをする ー出版社でー	62
10	お願いをする ー大学でー	62
11	手伝いを頼む ー家庭でー	62
12	友達を誘う ー友達の家でー	62

販 売 価 格

16%カラー VTRカラー(3/4インチ) VTRカラー(1/2インチ)

各ユニット	¥157,500	¥95,000	¥74,000
各セグメント	¥ 35,000	¥37,000	¥29,500